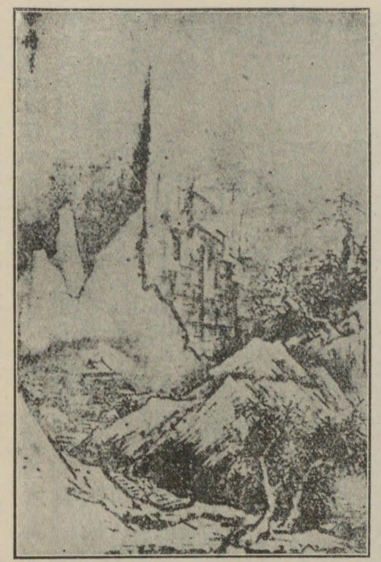
在の線とが互に綜合された時に於て完全に線が意味をもつて來るのであつて。全く線條美は對照的客觀界と。觀照的主觀界の兩者に於けるインスピレーションが完全に調和した時に新らしく創造されるものである。斯樣に兩者が互にもつ所の線的リズムが。形式となつて創造丹出したものであると云ふことが出來る



第十四圖　繪畫に於ける太線の强調と動的表現第一節參照
（僧雪舟筆●夏冬山水の一部足利時代）

而も斯樣な線の創造は。吾々の內的生命を最もよく表現した場合と。對照界のリズムによく統合した場合との二方面に於て極めて美的となる。音樂のリズムの如き兩世界の內的リズムは。形ある線として表出されることによつて最も美的な線の創造が見られる。從つて美的な線より發揮される生命は。吾等が斯る線を有する藝術に面接する度に。內的リズムによるインスピレーションを聽感することが出來る。例へば足利期に於ける雪舟や雪村の繪畫殊に破墨山水によつて充分感受することが出來る。第十四圖はその一例として揭げた雪舟の山水畫である

斯樣に線は內的生命を形式の上に表現するものであるがこれを花道の上から見るならば。自然の草木に於ける線條美と。藝術家の個性に於ける線條美とが。如何に調和し。如何に統合し。如何に强調されるか。而も如何にしたならばこれ等のことは可能であるかと云ふことに就て。一層深く研究の步を進むる必要があらう。それ故に次節に於て。これ等花の材料が有する處の線と。藝術に於ける線の任務とを。節を追ふて研究し樣。その爲めに本節の終りに於て大略以上論じた線の分類をし。讀者に便ならしめるため左に記して置く

- 物象
  - 色
  - 線＝
    - 動的線條
      - 曲線。
        - 單曲線。
        - 複雜曲線。
      - 波線。＝動的動。
      - 太線。＝强線。
      - 點線。＝動的靜。
    - 靜的線條
      - 直線。
        - 立直線。（縱直線。）＝靜的動。
        - 平直線。（橫直線。）＝靜的靜。
      - 細線。＝弱線。
    - 自然界の線。＝對照界の線。＝客觀界の線。
    - 藝術界の線。＝觀照界の線。＝主觀界の線。
    - 美的線條の創造
    - 藝術の美的線條。

（註）

第十圖　は寬政巳未（同十二年光格天皇時代）に出版された遠州流挿花衣の香と云ふ書から借載したものである。東都貞秋齋一見氏の撰に係るもので。氏が最も愛好した形式である。柳と椿を挿したもので。貞秋齋氏の作と云はれてゐる。柳の極度なる曲線の活動的表現である

第十一圖　は現代に於ける池坊生花である。明治時代に於ける池坊大家武藤松庵氏の作で。花心粧所載のもの。花器と梅の線が立直線として何處までも靜的靜の姿をもつて表現されてゐる

第十二圖　は現代に於ける未來派の繪畫にして。有名なるバルラの『動ける犬と人』と題する作である。犬と人との動的傾向が表現されてゐる。その動けるリズムを彼の感能描寫によつて。何處までも深く。且つ遺憾なく表現したものである。線條の動的傾向に於ける極致なる表現と云つてよい。第十三圖と對照して見る時は如何に線條の性質がよく現はれてゐるかを窺知することが出來るであらう

第十三圖　は南都藥師寺東禪院堂の建築であつて。極めて靜的なる線條のみによつて表現されてゐる。橫直線も縱直線も共に靜的線條の權化として扱はれ。觀るものをして何處までも心靜かなる氣分に溢れさす點は。線の効果に外ならない（特別保護建造物）

第十四圖　は雪舟の墨畫山水であつて。唐宋に於ける馬遠や夏珪等の影響あるもので。足利期に於ける墨畫の大傑作であるばかりでなく。實に前後を通じて廣表たる代表的作品である。太線の强調されたる點と。直線の複雜したる動的表現は。如何に線條美の極致であるかを窺ふに足る。其他第七圖。第八圖をも。參照され度い。何れも線條の美的表現に於ては特に注意すべきものである

第二節　自然美に現れたる線條美

花道藝術は他の諸藝術と異つて。その材料が直接自然物である處の草木である。と云ふことは何人もよく識つてゐることであるが。斯樣な自然美をもつ處の草木を再び藝術化すると云ふことは可也藝術の進路を異にしてゐるもので。花道藝術はそれ故に自然物の美をも並べて研究しなくてはならない。本節に於て述べ樣とする處のものも即ちそれであつて。線條美が未だ藝術化しない以前に於て。如何に表現されてゐるかを一通り研究して見樣と思ふ。即ち花道となる前に於て。その線條美が如何なる表出を成してゐるかを窺知するならば。これを花道藝術として再現する場合には。如何にしてその線的美の特性を捕捉することが出來るか。又は如何したなら自然の有する線條美と致一することが出來るか。そして吾々の個性に潜在する線的美は。如何にしてこれ等草木の線的美と徹底的調和を得ることが出來るか。と云ふことを多少なりと知ることが出來るであらうから。斯る方面の研究も決して怠つてはならない

草木に於ける自然の線條美は。多くの場合靜止的であつて。直線に於ける平行線乃至は立直線であつて。幹や枝の複雜したる處に美的形式を見出すことが出來る。例へば茲に一本の樹木があるとする。その樹木は直立的な幹とそれに並行する枝によつて組み立てられてゐる。その線は何處までも靜止の形をもつてゐる。殊に針葉樹の類はこの意味に於て單葉樹より靜止的である。即ち松や杉や檜の類はヨリ多く直立的であるから。從つて線的形式は靜止的と云ふことが出來る。これに對して單葉樹即ち樫や槇や檜の類は幹が直立的であつても。その枝は殆んど平行的であつて。線的形式は靜的動である。尤も樫や槇や檜の類は重苦しいまでに多くの葉が繁茂してゐるから。從つて鎭壓的な感じもあるであらうが。兎も角靜的動の感じをヨリ多く包有してゐる。植物中に於て何が一番動的な線的傾向をもつてゐるかと云ふに。それは云ふまでもなく葛の類であつて。匍匐的なものや纏繞的なものや攀緣的なものは。何れもその有する線が最も活動的である。從つてこの種の有する線條美は同じ活動的とは云へ。一種の積極的なものであり。自發的なものであり。進取的なものであつて。何處までも自動的なものである。單葉樹の如きは如何に動的な傾向をもつものと云つても。他動的な感じ以上には出ない。これは葛の類が有する處の線條美が曲線的であるが爲めであつて。その曲線が而も極度であるが爲めである。これに反して植物中に於て最も靜止的なものは水草類乃至は隱花植物の類であらう。この種の植物には何れも線的活動の姿態は殆んど見受けられない。何んとなればこの種の草花には多く直線的な幹のみが生育して。枝は殆んど線的形式を有しないからである。即ち枝に於ける平行的な活動形式が附隨しないからであつて。河骨。太藺。睡蓮。燕子花。水仙の類は何れもこの形式美を保有してゐる。從つて斯る線的美は何處までも靜肅的であり。沈默的である。

斯樣に自然界の植物が有する線的形式美の中には活動的なものと。それに反した靜止的なものとがある。これ等の形式は何れも植物自身がもつ處の線條美であつて。他のものから强ひられて出來るものでは全然ない。解り易く言へばそれ等の線的美は各々の植物がもつ處の個性美であつて。他から何等の干渉がない範圍に於てその個性美は保安されてゐるのである。けれ共斯る個性は自他的に干渉されて線條美を變化することがある。人間の個性は自他的に變化することもあるが。概して自動的に即ち自發的に變化する場合が多い。然るに植物の有する個性美は全然自發的に變化する樣な場合はないのであつ

て。何時でも自他的に變化するのである。例へば暴風の場合に於ける幹や枝の線條美が活動的である場合や。朝又は夜に於ける幹や枝の靜肅的な線條美はそのよい一例である。これは前に述べた處の植物が有する個性美ではなくて。自然に於ける現象美である。針葉樹の如き靜止的な線條美を有するものと雖も。暴風に會へばその線條美は活動的となつて現れる。即ち曲線的形式として現れるであらう。それ故に植物の個性美は他の現象界の干渉によつて變化するものであることを充分承知して置く必要がある。それは軈て自然の形式美が花道の藝術となる上に於て根本的な要素となるからであつて。線條美の特性が如何に自然界に於て表現されてゐるかを識ることが出來るならば。これを如何にして藝術に再現したならばよいかと云ふ結論に到達することが出來るからである。花道藝術は前にも度々謂つた如く植物が有する個性。又は自然が有する凡ての美的形式を材料に於てそのまゝ用ゐると同時に。他面に於ては斯る植物の個性美も自然美も藝術に同化し還元し統一し調和し再現しなくてはならないからである。從つて花道藝術の上に於ける線條美の研究をする時。必然に起るべき問題が以上の自然美に現れたる線條美であらねばならない

而もこの自然美に現れたる線條美の考察は今一層の探究を要するであらう

嘗て英國の美術史家として識られたるステワード・ヂック氏はその著「日本美術史」の第八章に於て

『造庭と挿花の姉妹美術に於ても。日本の藝術家は趣味もなく卑屈に自然を模倣しようとはしない。只に之等は因襲的であるも而もよく快活的な精巧なる方法で。彼はその精神を暗示しようと努力してやまなかつた。此の制限された典型中にあつて廣大無限なる宇宙自然の宇說的眞理に到達するのである』と

云つてゐる。この意味を單的に解するならば自然美を藝術美に還元する場合の象徵化である。更に換言すれば抽象化である。一層適切に謂へば自然の有する美的特性の氣韻抽象であると云へる。このことは吾々が今線條美を研究する場合に於て大切なる資料であらねばならない。即ち自然美を局限したる處の花道藝術は。その局限したる形式即ち線條の內に。あらゆる自然の美的形式を織り込まなければならない。從つてこの場合に於ける作家は第一何よりも自然の形狀を出來るだけ單的に純化的に觀受する必要がある。即ち自然がもつ處の美的意味を出來るだけ純化的に抽出し觀受することが必要である。花道藝術は自然美の精神を純化的に抽出し表現することによつて立派なものに成るものであるから。從つて自然の形狀美を單純化して感受しなければならないことに成る。故に花道家は自然美に向つてその線條美が有する特性を抽出しなくてはならない。更にその精神的氣韻を象徵し表現しなくてはならない。自然が有する處の線條美を何處までも研究し。最も美的線條をのみ抽出して花道藝術の形式を盛らねばならない。斯くすることは前章に述べた美的觀照が大事な役目を勤めるであらうが。兎も角自然の線的美を感受するに充分敏感であるべき素養を作つて置くことが必要であつて。その感受性が大いに働く作家程偉大なる花道藝術家となることが出來るであらう。自然美を斯くまで花道藝術の上に純化還元し得ることが出來るならば。ステワード・ヂック氏が謂つた如く。『制限された典型中にあつて廣大無限なる宇宙自然の宇說的眞理に到達する』ことが出來るのである

で次には如何にしてこの自然美が藝術美に致一することが出來るであらうか。……と云ふことを研究する必要が起つて來る。然しながらその過程として更に藝術美に於ける線條の任務と云ふことに就て先述を要するであらう。

第三節　藝術美に於けるイリュージョンと線條の關係及任務

藝術美。それは吾々が創造した處の美であつて。自然美を再現すると創現するに係らず。兎も角一種のイリュージョンをもつたものである。如何程まで寫實的なものにしても。又は自然的なものにしても。吾々がそれを觀照する場合には何時までもこのイリュージョンを通じてゐる。藝術の内でこの傾向を一番多く包含し。且つ代表するものは演劇である。卽ち舞臺幻影と云ふものは何處までも演劇の本質的美力であつて。演劇からこのイリュージョンを取り去つたならば。演劇の價値は見られなくなるであらう。次には音樂がその重なるものであり。繪畫。彫刻。花道の順によつてこれに次ぐと思はれる

で今本節に於てはこの藝術美に於けるイリュージョンと。線條美の關係に就て論じ。線條が藝術特に花道の上に。如何なる任務を有すべきか。且つ如何にしてその任務を果し得るかに就て大略述べて見樣

然しながら玆に難解な問題に出合はなくてはならないであらう。難解な問題とは。線條の性質が前節に於ても述べた如く智的分子の統一であり綜合されたものであるに反して。イリュージョンは感情分子の綜合されたものであるからである。換言すれば。線は智的なものであり幻想は感情的なものであるからである。然しながら線條が如何に智的分子であると云つても。その線條が美的に又は藝術的に扱はれゝば扱はれる程。智的傾向から去つて情的分子へと變化して行くのが常である。この意味に於て線條は何處までも美的に又は藝術的に扱はれることを必要條件とするのである。それと共にこの方面に於ける線條のみを吾々は藝術的線條として論ずるのである。例へば線條が幾何學線的であつたり。用器畫線的である場合は。その線は何處までも型式的傾向を帶びてゐて。智的理性的性質をヨリ多く含んでゐる。然るにこれが藝術的に扱はれた場合。例へば舞踊に表はれる線とか。繪畫に於ける線とか。建築に表れる線とか。花道に表れる線とか。彫刻に表れる線とかの如く。一種の優美性や。典雅性や。活動性を帶びる時には。最早智的分子は減少されて。感情的乃至は感覺的なものと成つて行くのである。從つて同じ建築美に於ける場合でも西洋に於けるゴシック式には前者の智的分子が多く現れてゐるし。日本建築特に寺院建築には後者の分子がヨリ多く表されてゐる

第十五圖

感情的線條の表現としての建築の一例（大和法隆寺東院夢殿奈良朝本則のもの）

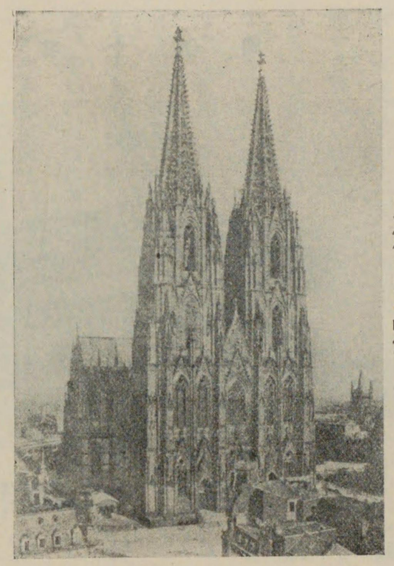
（第十五圖。第十六圖參照）

この意味に於て花道の線條を。他の藝術に於ける線條美と比較し。歸納的に花道の線條美が。藝術美としての任務を何處まで保有し得るかに就て考察の歩を辿つて見樣

然し玆でも多くの問題に衝突することを豫期せねばならぬ。例へば花道の形式と一口に云つても。池坊と。古流と。青山と。源氏と。未生と。遠州と。盛花と。投入とは各々その形式を異にし。且つ又その池坊なり古流なり未生なり遠州なりの中でも。各流派によつて多少づゝ形式を異にしてゐる。從つて形式が異れば自然線條の變化がある。又同じ池坊や古流や未生にしても。時代時代によつて形式が異つてゐる。卽ち室町と桃山と江戸と現代との間には。多少づゝの花形を異にするであらう。それ故に一概にこれを花道の形式と云ふ一括した法則的なものゝ中に入れて。他の藝術と比較することは出來ない。のみならず他の藝術に於てもこれと同一な多くの形式を

もつてゐるものであるから。尙更斯樣な比較は困難と成つて來るであらう。それであるから吾々は斯樣な變化ある形式の上からは絕對に以上の比較考察は出來ないであらうから。玆に見解の方法を新にしなくてはならない

然らば斯樣な研究の方法を他に求めるとすれば。抑々何に依るべきであるかと云ふことが次の問題と成る。次の問題とは



第十六圖　智的線條の表現としての建築の一例（ゴシツク時代）

『花道が如何に多くの形式をもつてゐるとしても。その形式の本質。例へば花道には花道のみの形式がある。花道に於ける形式は絕對に繪畫や彫刻や建築や庭園に用ふることの出來ない形式がある。卽ち人工美の形式と自然美の形式とを統一する處に形式美の極致を見出すことの出來る花道は。繪畫や彫刻や建築やその他小藝術に於ける如き。全然人工美をもつて形式美を構成するものとも。亦は。自然美を基本とする庭園美とも異つたものであつて。其處に花道の形式美に於ける花道各流派に共通した處のものがある。卽ちその共通性の形式美をもつて各異流の花道を綜合し。一つの形式美として研究することが出來る』

で斯樣な意味から花道形式に現れたる線條美に就て考究の歩を進めて見樣

第一に花道の線條が各流派を通じて三段の形式を辿ることである。この形式には種々な方面の原因をもつてゐるが。主として左の各方面に影響されてゐると思ふ

イ。東洋的思想の中心である佛敎と。儒敎と。道敎との三階段は卽ちこの形式を因緣づける一つである

ロ。花道が植物を材料とする處から。その植物の形を幹と枝と根の三段に別けて觀樣とする本能から來てゐる

ハ。天地人と云ふ原始的宇宙觀からも影響されてゐる

ニ。遠中近と云ふ繪畫的（殊に陸朝頃から起つた南北畫）の遠近法に於ける原則から藝術を扱ふ樣に成り花道まで影響してゐると見られる

以上の如きものが現在までの多くの花道形式を支配してゐたのである。此の內玆に必要なものは『ロ』と『ニ』である。（イ及びハの問題は何れ後章に於て論ずる塲合があると思ふから。今玆には一切顧ないことにする）

で『ロ』に於ける問題は花道の自然主義を代表する處の重大なる骨子ともなる形式美である。線條が自然美の形式を出來るだけ單的に表現し樣とした處の有意義な形式である。でこの形式は非常に近代的な性質をも持つてゐるものであつて。形の單縮化があらゆる藝術に於て呼ばれる今日。最も研究に價するものであらう

物體を形の上から見て出來るだけ單縮するには。何うしても三角形による外はない。言葉を換へて謂ふならば三角形程形の單縮化されたものはない。それは幾何學が說明する樣に。三角形はあらゆる形の最縮少角である。その最少角たる三角形を花道の形式の骨子としたに就ては古人も餘程頭を搾つたに相違ない。果してその形式は萬人の認むる處となり且つ餘程長い時間を經過して今日まで保存せられるものと成つた。只後世の作家が獨創的見地に立たなくなつて。何時までも傳統の保守をやつてゐる點は感心されないが。兎も角斯樣な形式を創造した連中に對して相當な讃辭を贈つてもいゝ筈である。余は此の意味に於て從來の花道形式にも相當の注意を怠らない積りでゐる

斯樣な三角形式に於ける單純化は。美學上から觀ても相當に意義のあるものであつて。斯樣な三角形が形式と

して觀られる場合と。その形式を通じて吾々に何物かを語らうとする內容的なものと。而も之れが線條の形式美として花道藝術の形式美一切を物語らうとする藝術的觀照との上からも評價して見る必要があると思ふ

でこれを吾々は左に一層細かく觀察して見樣

一。形の單縮化が吾々日常生活の上に最も必要であること。これを最もよく表してゐるのが茶道の作法である。卽ち茶器の並べ方から茶杓の扱ひ方。茶の飲み方に至るまで皆そうである

一。形の單縮化が藝術の表現的本能であること。例へば山水畫などに於ける遠景。中景。近景の如きもの

一。形の單純化は吾々が物を觀樣とする場合の欲求である。物の形を單純化して見る程美の統一が觀られる

一。形を單純化する程。線の關係が深く成る。畢竟線條の任務は形の單純化にある

一。形の單純化は一面內容の單縮化である。內容は。單純化されるに從つて藝術的意味を增大する。これは最もよく演劇に於て表現される

一。形の單純化は必然に藝術に於ける幻覺（イリユージヨン）を要求する

一。形の單純化は觀照の視點を統一する

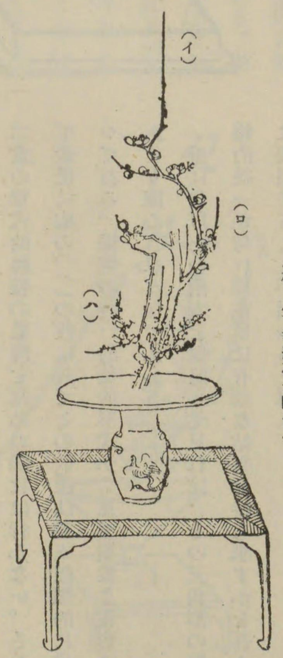
一。形の單純化は一面に於て形のシンボライズを要求する。これは音樂や詩歌に於て最もよく表現さる

以上の如き各方面に於て形の單純化はその意義をもつものであるから。今我々は花道の形式を在來の三角形に於て發見する時。果して以上の何れがよく表現されてゐるであらうか。花道の線條が三角形に於て表されてゐるのはその多くが視點の統一にあり。從つて形式の整頓にあるのである。グラーゼル氏が謂つた樣に。それは正に形式の秩序にあつたのである

で斯樣な見地からして何うしてもこの三角形に於ける線條美を整頓秩序の方面に求めねばならない。演劇に於てはこの形の單純化が第一の必要條件であつて。劇の成功は一重にこの形の單純化にあると謂はれてゐる程である。卽ち時間的に何十年と費してゐるものでも。亦は空間的に何百里と離れてゐる處のものでも。一二時間乃至四五時間で演出し。又は一舞臺で演ずる。而もそれを極めて自然的と感ぜしめるのは一重に單純化の効果に他ならないのである。花道の形式も正に演劇の如くその單純を必要とする。

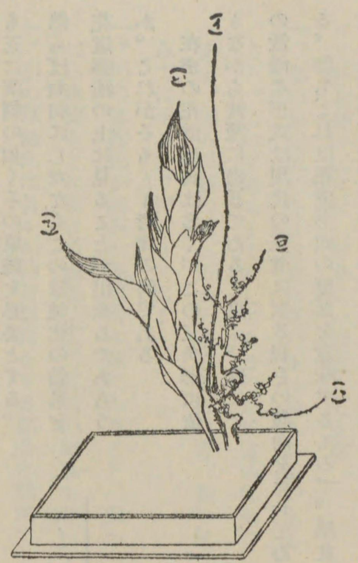
然らば如何にしたならこの單純化の効果を花道藝術の上に見ることが出來るであらうか。これがそも〳〵考究の的である

在來の花道形式は多くがこの三角形に依りながら散漫に過ぎてゐると思ふ。殊にこの散漫な形式は現代の花道に至る程その傾向を見せてゐる。卽ちこれは花道形式の墮落を意味するもので。畢竟花道形式が何故在來の三角形をもつて表現されてゐるかを何等の注意もなく見て來たからである。この形式が比較的完全にその目的を達してゐるものに左の（第拾七圖の）如きものがある。この花は松月堂のもので弘化三年に出版された松月堂百瓶の中に挿入されたものである。この花形を見るに。（ロ）の枝は普通右方に充分長く突出すべきものであるが。（イ）の枝の從屬と成つて極く少しのあしらひで終つてゐる。そしてその代り（ハ）の枝が反對の方面に力强く出てゐる。然しながらこの（ハ）の枝は左方長く出るべくして實は中途から下方に向つて垂れてゐる。その爲めにこの花形は著しく單縮化されて視點の散漫をなからしめてゐる。極めて面白い花形であると思ふ。（ロ）の枝と（ハ）の枝とが（イ）の枝の視點を中心とし



第十七圖　線條美の統一的表現の一例（梅）（松月堂。幸般亭士隱作。）

て何處までも從屬的に纏つてゐる。而も面白い事には中間の幹は中途にして消失し。その代りとして(イ)の枝が突出してゐる。玆には又形式のイリュージョンが見られる

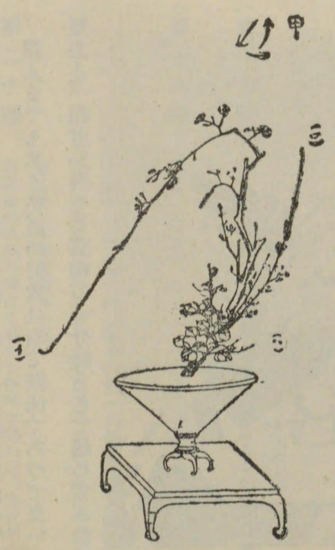


第十八圖　三角的線條の不統一に於ける散漫的表現（馬蘭と白梅）（仁風軒草也作）

であらう。三角形に於ける線條美は此の上もなく統一されて。而も梅の個性を表現してゐる點に於て。吾々は相當の讃辭をも厭はない。これに反して(第拾八圖)は三角形の散漫したものである。この花には二個の形式が同一の視點をもつて表現された爲めに。吾々はこの花に線條の美的統一を見ることが出來ない。それのみならず馬蘭の(ろ)の枝が梅の(イ)又は馬蘭の(い)に對してあまりに別個的に突出してゐる。そして(ろ)の枝が斯くまでに左方に突出せるにもかゝはらず。梅の(ロ)の枝は又右方に多少ながら突出してゐる。それであるから玆にはすでに二重の形式的線條の散漫を認めぬ譯には行かない。そして最後に梅の(ハ)の枝に於てこの散漫は益々破壞的に成つてゐる。線條の統一的美的形式から見て斯樣な花形はあまり感心されないであらう

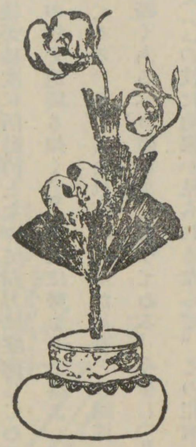
兎に角以上の兩者を對照して見れば。その三角形の線條的統一が何れ程花形に有効な結果を持ち來すかを吾々は觀察することが出來ると思ふ

然しながら玆に一歩を進めてこの花形を今一層研究する必要がある。それは花形の不統一が持ち來す處の美的効果がそれであつて。一つには現代の表現派的形式をも見出すことの出來るものである。在來の花道に於ける三角的線條形式を離れて。新らしき線條の形式を求めるのである。この形式は今までの花形に於ける統一的線條美と云ふよりも。寧ろ形の極りなき變化に求むべきものであつて。變化の美である。そしてこの變化の美には何處までも變化すべき多角的線條美と。その線條が無限に變化する爲めに必要な活動的形式をも求むべきである。從來の花道に於ても斯る形式は多少見られないことはなかつた。極めて斯る表現形式としては初歩なものであるが。兎も角左に挿入する二三の花は充分この形式を暗示するに足る線條美があると思ふ。即ち第十九圖に示すものは(イ)の枝が極度に活動的となつて左方に突進してゐる。而もこの枝を追駈る如く(ロ)の枝は勢よく上空さして延び上つてゐる。そしてこれ等の花形が花器との關係に於ても。斯くあるべき破壞美をもつてゐる。今少し(ロ)の枝及び(ハ)の枝に曲線が見られるならば。この花形をして一層新らしい線條美を見せるに足つたであらう。そしてこの花形がもつ處の線條美は。觀られる如く一種輕快な氣分を表現してゐる。そして不思議に面白いと思ふことには(イ)の線條と。(ハ)の線條と。(ロ)の線條とが上部(甲)に示す如く循環的であること。即ち互に追いつ追はれつゝある如く枝の方向を示してゐる。これは實に線條の活動的表現を辿る第一歩であつて。この方面に於ける表現には大切な條件である。作者は勿論無意識的に挿したものであることは窺はれるが。何れにしても表現派



第十九圖　表現派的初歩の傾向を示せる一例（連珠と椿）（東古流。不驕堂龍水作）

的初歩の傾向を示してゐるものと云つて良からう

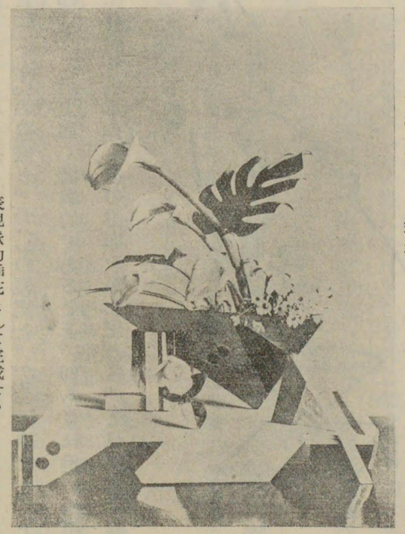


第二十圖　表現派的初歩を示せる一例（ほてい草）（遠州流。中山一仲作）

尚第二十圖は同じ表現派的傾向のものとは云つても。丁度正反對の如き傾向を示した一例である。前者が一種の輕快的であるのに反して。この花形は重々しく且つ不動的である。そしてこの花形の美的形式は茲にあるのであつて非常に創造性に富んだ面白い花形であると思ふ。而も前者には線條美に於ける活動的イリユージョンがあるのに反して。この花形には線條の沈思的イリユージョンがある。のみならずこの花も前者の様に花器との關係が非常に面白く爲されてゐる

以上論じ來つた如く藝術上殊に花道に於ける線條美のイリユージョンに於ける關係と。その任務の大要は盡されたと思ふ。利休がその昔し謂つた如く

『本來は無一物又大極は無極也故に茶花共に無法也』と謂ふまでもなく花道の形式は斯く無法であつて良いのである。花道が尠く共藝術の一分野として認めらる爲めには他の藝術に於けるが如く無法であらねばならないのである。無法とは卽ち後天的な法則のないことで。換言すれば。花形の法則の如きは各作家が自個の個性によつて。各々創意して行かねばならない筈である。花道藝術に於ける線條美が無法であればある程。ヨリ多くの線條美を表現し。無限に花形を創意することが出來ると思ふ



第二十一圖　表現派的挿花として完成せる現代の作品（中山文甫氏作）

現代の花道藝術は尠く共この方面に向つて進むべき運命をもつてゐるものである

尚最後に附言して置かなくてはならないことは。この表現派的線條美に於ける花形は。何處までも作家の主觀に基礎を置くべきことであつて。絕對に客觀の世界を導入してはならない。その線條美は主觀が命ずるまゝに線條を活かさねばならない。自然との關係に就て考へたり。又は草木の個性に就て考へたりすることはかへつてこの線條美を破るものであるから。充分こゝに注意しなくてはならない

挿入畫解說

（第十五圖）奈良法隆寺東院夢殿に於ける線條美の情的感覺の表現
奈良朝本期の建築にして最初のものは聖德太子の講讃などありし寺

（第十六圖）ゴシツク建築に於ける智的線條美の表現。ゴシツク時代ケルン寺院の建築
（以上線條の智的傾向と情的傾向の條參照挿入畫）

（第十七圖）松月堂。幸般亭士隱の作。德川末期の人で弘化三年挿入のもの

（第十八圖）同流。仁風軒草也の作。同じく德川末期の人で。弘化年中の作
（以上線條の形式美に於ける美的統一の條參照挿入畫）

（第十九圖）表現的初歩の傾向を示せる德川末期の花。弘化年中。東古流。不驕堂龍水の作

（第二十圖）表現派的初歩の傾向を示せる德川中期の花。寛政年中江戸の人遠州流。中山一仲の作

（第二十一圖）表現派的挿花として完成せる現代の作品。中山文甫氏作（國風十五年七月號所載）

第四節　花道の色彩に就ての一考察

造形藝術の上からその藝術を分析すれば形體と線條と色彩との區別を見出すことが出來る。そうして線條のことに就ては大略説明したから。今度は色彩のことに就て一考察を試みることゝする。斯くすれば自づと形體なるものも説明されて來るからである。何んとなれば形體は線條と色彩との綜合によつて出來てゐるものであるからである

で今色彩を藝術の上から研究して行くのであるが。茲では特に花道藝術の上からの考察に止めることゝする。色彩なるものが吾が花道藝術の上にどれだけの効果をもつてゐるものであるかは。花道と云ふものが色彩方面にもつてゐる特性と。色彩が花道藝術の方面に應用される二途を考察することによつてその目的は達せられるであらう。それ故に先づ花道藝術がもつ處の色彩的特性と云ふことから觀て行くことにせう

先づ花道藝術が色彩方面にもつ處の特性としては左の諸點を上げることが出來る

(一)花道藝術が他の藝術と異つて自然の草木を扱ふが故に。その色彩は自然性であること

(二)花道は自然の草木を扱ふが故にその色彩はそれ自身で着色又は變化を求めることが出來ない

(三)從つて花道の色彩は繪畫に於けるそれ等と異つて。想像的乃至は理想的な着色を施すことが不可能である

(四)花道藝術は立體的であるが爲めにその色彩は明暗の自然的効果を修めることが出來る

(五)花道藝術はそれ自身が何等の色彩的意味をも以つてゐないけれ共。然しながらその色彩がもつ處の象徴的表現が可能である

(六)花道に扱はれる處の草木は既にその個性に應じてその草木の本質的色彩をもつてゐるが故に。その草木の色彩的特性を捕捉することが必要である

(七)草木の色彩を人工によつて變化させることは。草木の色彩的特性を破るのみならず。その色彩の變化は繪畫に於けるそれと異つて困難である。只其處には光線によつて色彩的變化を得る効果があるだけである

(八)それだけ又花道藝術は純粋な色彩に生きることが出來る。それ故にその色彩が單調に終ることを恐れなくてはならない

(九)花道の色彩は自づから濃淡の調和を得ることが不可能であるから。その背景又は他の補充色によつてそれを支配することが必要である。その爲めには草木の色彩的特性を注意しなくてはならない

(一〇)最後に花道藝術がもつ處の色彩はその多くが靜的傾向のものであるが。時によれば動的傾向に扱ふことも必要である

以上の如き諸點は草木のもつてゐる色彩的特質であると共に又花道藝術の特性でなくてはならない。で吾々はこの諸點に就て今少し細述を必要とするであらう

(一)に示した色彩の自然性は謂ふまでもなく花道藝術の材料が草木そのものである處から來るものであつて。他の藝術に於ける色彩と異つて創造性に乏しく。從つて自由なる表現を辿ることが出來ない。花道藝術の色彩は飽くまでも自然的であらねばならず。自然的であるが爲めにはその草木の本質的色彩を發揮せしむ可く注意する必要がある。でこの場合に於ける自然性とは草木が先天的にもつ處の色彩を指すのみならず後天的にも成された色彩を云ふのである。例へば紅葉の葉は春から夏にかけては青く。秋に至れば紅色を呈するであらう。斯樣な色彩は先天的特質に於ける自然性であるが。この紅葉も太陽の光線を受けない處は何時までも青く。よく光線を受ける處ほど紅色を呈する。之等の色彩も同じく自然性ではあるけれ共然しながら後天的の色である。それである

からこの點も花道の自然主義乃至は寫實主義的挿寫の場合には充分注意すべき點であらう

(二)の場合も同じく自然主義的挿寫乃至は寫實主義的挿寫の場合には相當な注意を拂ふべき點である。草木はそれ自身で既に色彩を所有してゐるのであるから。その上に色彩を施す必要がないのみならず。寧ろ他の色彩を施せば不自然なものと成つて了ふ恐れがある。從つてそれ自身で色彩の變化を求めることが不可能である。例へば松は松の色彩があり。竹は竹の色彩をもつてゐる。松の葉は何處までも青綠色を呈し。多少の光線による變化以外にはその青綠色の外變化を具現することがない。これが繪畫の場合などでは。同じ松の葉でも光線の如何によつて赤色にも黃色にもあらゆる色に變化することが出來る。而も繪畫に於ける斯樣な變化は決して不自然ではないのみならず寧ろ非常に自然の實質に接近してゐるものと云ふことが出來るが。花道に於ては斯樣な變化を求めることが不自然である。そうしてこの場合には自他の色彩で配合なり調和なり混合なりを求める必要があるが。それは色彩が花道の方面に應用される方面であるから拙著藝術色彩學を參照され度い

(三)の場合も前者と同じく他から色彩の支配を受けないのみならず。繪畫の如く理想的乃至は想像的な施色が困難である。繪畫や圖案の類は自由な色彩を施すことによつて自由な表現を辿ることが出來るのであるが。花道に於てはその草木が既に自然そのものなのであるから其處に理想的乃至は想像的施色を不可能としなくてはならない

(四)の問題は花道藝術にとつて可也大切な効果ある問題である。花道藝術が繪畫と異つて立體的であると云ふことは色彩の變化の上に重大な要素である。のみならず色彩のあらゆる自由な表現が可能である。例へば色彩の混合も調和も配合も充分効果を得ることが出來る一體色彩はそれ自身では變化を呈することが出來ないものであつて。色々な光線をまつて始めて色の變化を見ることが出來る。それであるから。この光線の變化は物體の立體的陰影に多く効果を見るのが原則である爲めに。必然的に斯る立體的變化は色彩のあらゆる美的効果を齎らすに必要なものである。そうしてこの立體的色彩が最も可能な藝術はこの花道であるが爲めに。吾々は色彩用法上からも相當注意する必要がある。然もいゝことには花道の色彩はそれが自然色であるが爲めに。その明暗に於ける色彩變化の美的効果はヨリ大なるものがある。(拙著藝術色彩學を參照され度い)現在までの花道藝術があまりにこの色彩的効果と云ふことに不注意であつた爲め。斯樣な特徴は從つて無視されてゐたのであつた。けれ共花道藝術の藝術的使命を思へば。只に線條とか形式とかのみに研究的態度を持してゐられない。尠くとも近代藝術の凡てが色彩方面に覺醒して來た樣に。吾が花道も遲かれ早かれこの色彩的進展を辿らなくてはならない。而も色彩的進展を辿る時に有効な美的表現を見ることが出來るのはこの立體的特質に於てゞある。そして茲に今一つこの方面に於ける特質的効果を見出すことが出來る。それは(第十)にも記した如き立體的特質から必然に得られる動的傾向と云ふことである。色彩が立體的効果を得る場合には。反面に於て動的効果と云ふことが豫想される。色彩が立體的傾向を辿れば辿るほど。そこに動的傾向も伴ふのが原則である。この効果を應用すれば。今まで花道藝術が殆んど靜的効果のみに支配されてゐた範圍から脱することが出來ると共に。現代繪畫に於ける運動の表現派的挿寫が發見される譯である

(五)に記した花道の色彩に於ける象徴的意味は。從來の花道藝術に於ても。極く皮相的ではあるが研究されて來たものである。例へば

イ。和睦の意味を示す爲めには。紫色乃至濃紫が用ゐられる。これは凡ての色が合すれば黑色になると云ふ意味から人が和合する意味を象徴せしめたものである

ロ。婚禮とかその他目出度い席に生ける花の色は白を

一番賞美する。これは白色が純粋な色であると云ふ意味から。色彩的象徴を應用したものである。尤も婚禮の場合には白色が何れの色にも染まり易いと云ふ象徴的意味もある

へ。又陰陽の象徴的意味から次の樣に大體花の色を區別してゐる

陽花――赤。青。黄……松。梅。牡丹。芍藥。椿（赤）。山吹。福壽草。菊。山茶花。金盞花。柳。蘇枋。桃。躑躅。石竹の類

陰花――紫。白……竹。藤。萩。椿（白）。白百合。水仙。茶。蓮。紫蕚の類

以上の如き區別は古來から扱はれたものであるが。然し純粋な色彩學の上からは決して眞理を得た區別でないことは一見明解であらう。例へば青色に屬する花を陽色とすることは全然間違つてゐる。青色は赤色などの丁度正反對であつて。感じの上から謂つても冷たく陰氣である。それに較べて白色などは冷色でありながら用ゐ方によつては反つて陽氣な感じとなつて來る。これ等はほんの一例に過ぎないのであるが。兎も角古來から花色の象徴的特質だけは多少でも見て來たことは事實である。吾々は現代に於ける新らしい立場からして。この色彩の象徴的特質を。花道藝術の上から研究しなくてはならない。花のもつ色彩はそれ自身では何等の象徴的意味をもつてゐないけれ共。それが花道藝術として扱はれる場合。即ち草木の寫實的挿寫乃至自然的挿寫。乃至は想像的挿寫。又は理想的挿寫。象徴的挿寫などに於ける場合。斯樣な場合に於ては。それ〴〵花色の象徴的意味に注意しなくてはならぬ。そうすることによつて。花道は元來もたぬ處の意味まで。藝術的に意味付けることが出來る。そうしてこの象徴的色彩の應用によつて。花道は自然的精神と藝術的精神との具象化が見られるであらう

（六）に示した問題は謂ふまでもなく花道の自然的乃至寫實的挿寫の場合に於て注意すべき特質性であつて。特にその草木の個性的挿寫を必要とする場合に研究すべきものである。然しこの問題は既に花が所有してゐる處の個性的色彩であるから。自他的助力を借りることは困難であらねばならぬ。そうであるから斯樣な場合は。その花の個性的特質に對して敏感なる捕捉的感情を養つて置く必要がある。從つてこれは大なる修養を要する問題に他ならないことが一見明解である

（七）に於ける花色の光線的變化こそ大きな問題であり。花道の色彩的支配は一にこの問題に掛つてゐるとも見られる。何んとなれば。元來花の色彩は前にも謂つた如く自然色そのものであり。且つ挿寫の場合に於ても。自然色そのまゝとして扱ふのであるから。その色彩的變化は他の何れの方法にも求め難いのである。然るにこの光線的變化は花道色彩の支配の上に於て唯一の良法である。自然色を光線によつて變化せしめることは。それ自身に於ても自然なことであるばかりでなく。光線が自然色の變化に對して唯一の支配者であることを遺憾なく應用することにもなる。そして草木がもつ處の光線に對する色彩の特質は。草木が自然に成育する上に於て常に表れてゐるものであつて。例へば陰に生育する草木の葉は青色から黄色に接近し。花の色は薄く白色に接近するのが常である。又これに反して陽地に成育すればする程青色から黑味まで帶びる樣になり。花の色も濃くなるのが常である。色彩が自然性によつて斯樣に變化すれば。其處には草木の自然に於ける特色を發揮してゐることになる

（八）の問題は七の問題に附隨した問題であるから。今茲には別に委しく說く必要はない。只斯る色彩が單調に終ることを恐れると同時に。光線の複雜變化極まりなき技術を應用して。この難關を逃れることを注意すればよい

（九）の問題も掛つて七の問題によつて大體解決が付けられるであらう。挿寫された草木の全體としては色彩の濃淡を自然に任せる他仕方がないのであるが。其處に光線の運用如何によつて如何樣にも色彩の濃淡を自由にす

ることが出る。其の他草木それ自身が所有してゐる處の色彩的濃淡を應用することも必要である。例へば古木の葉と新芽との色は其處に自然的遞次增減があり。一瓣の花の内にも。例へば牡丹なり芍藥なり百合の花には。それぞれ自然的なグラデーションをもつてゐる

（一〇）に示した問題は研究の仕方によつては可也面白い問題であらねばならぬ。即ち草木の色彩は何れかと云へば常に靜的色彩であつて。吾々に靜的美的感情を喚起することが多い。けれ共斯樣な靜的色彩のみが決して吾々に美的感情を起さしむるものでないことは。美的原則が示すまでもなく明解なことである。それであるから吾々は今花道藝術に於てこれ等の靜的色彩より。動的色彩に至る凡ての方面を研究して置く必要がある。勿論靜的色彩も美的要素の重大なものであるから。決して他見に附すべきではないが。然しながら花道藝術に於ける靜的傾向はそのまゝ常に表現されつゝあるものであつて。特殊な研究的方法によらなくともいゝから。今茲には動的表現の色彩に就ての特殊性を研究すべきである。在來の花道藝術は形式の上からもそうであつた如く。常に靜的性質に向つて凡ての美的表現の歸結を求めてゐたのである。花は寂雅的に觀賞すべきものであるとした傳統的見地に立つて。一も二もなく靜物としてのみ扱つた。その結果として花道藝術は男子の手から離れて女子の手に獨專せられまじき勢にさえなつてゐる。これは常に女子の優靜な性質とよく花道藝術の特質とが結合調和すると見た結果に他ならない。兎も角花道藝術の靜的傾向は在來のものには可也重要視された譯であるから。今後の花道藝術に於てはこの反面である處の動的色彩も可也研究の必要があることは云ふまでもない。然らば動的色彩がもつ處の美的感情とは如何なるものであるかと云ふに。動的色彩美は吾々の快樂的感情。溫的感情。又は能動的感情を喚起し。無限な創造美の世界に游ぶことが出來る

第四章　日本華道美術史の考察

第一節　上代大和民族の草木美の觀賞

日本に草木美を觀賞する特殊な藝術の存在してゐることは。何れの國民よりも最大な幸福事でなければならない。大自然を愛し。大自然をそのまゝ藝術として樂しむ人々こそ。他の何れの藝術をもつものよりも幸福である。從つてこの草木を美術となし得る人々は。この惠まれた恩澤を常に大自然に感謝し。藝術への精進によつて報恩の誠を致さねばならぬ。從來華道藝術が。常に他の藝術よりも自から卑下し。他から低級視されて來たけれ共。實は右の意味に於て。ヨリ高級な。ヨリ自然性をもつ藝術として。大いなる自覺をもたねばならない。草木の美を認識すると云ふことこそ。全く人と神との合一境地であり。これほど藝術的な理想の極致にして而も大實在はないであらう。吾々はこの境地と。この藝術とを持つことをこの上もなく誇り得るであらう。今この誇る可き日本の華道美術に於ける内面史を考察することにより。多少でもこの自覺の爲めに何ものかを投ずる處あらんとするのである

先づその爲めに。元來大和民族は。上古よりこの大自然に對して。如何なる美的態度をもち得たであらうかを考へる必要がある。從つて更に。この草木美に對する愛着が。何處まで深かつたかを考へて見る必要がある。そうすることによつて。草木美を藝術美として價値づけ得る過程が理解されることになるであらう。草木の美が理解される樣になれば。自からこの草木の美を再現して樂しまふとする傾向は。殊に日本民族には著しいのである。この自然を再現して樂しまふとする努力が。やがては華道美術としての出現を見るに至るのである

一體花（ハナ）とは。ものゝ最高な美を意味するのであ

る。從つて花は。端。鼻。纒頭。話。放。等と共通な語義をもつてゐる。端はものゝ先端であり。鼻は顏の最も高く突出した部分であり。同時に美的である。纒頭は。祝儀の意味で。各人が祝儀する頭を集める意であるから最高にして而も美的な行爲である。話は最高の意志表示であつて。美的な音を綴つた高級な表現である。放は手の先端からものを離すことで。これも同じ意味があるのである。これを要するに。高く美くしいもので同時にものゝ先端に附着してゐるものを指すのである。それ故に華とは草木の先端に附着する美くしいものを云ふのであつて。後世は草木の全體を指して華と云ふ樣になつたのである。花と云ふ言葉は可也古い上代の言葉であるが。上代に於て。草木の先端に咲くものを稱して花と云つたのは。明かにものゝ最高な美を觀賞した結果であることが知られる。上代人と雖も。美くしきものは美くしきものとして見てゐたのであつて。充分美を見る眼はあつたのである。例へば伊邪那岐命と伊邪那美命とが八尋殿に御夫婦を契り給ふ時。

『約意以廻時。伊邪那美命先言阿那邇夜志愛袁登古袁』云々（古事記）

と申されてゐる。即ち二神がお初に御覽に成つた時。先づ女神の方から男神に。なんと云ふお美くしい男かなと言ひ給ふたのである。これを見ても慥に美くしいものは美くしいと見られてゐたことが知られるであらう。これは勿論男女の關係に於てゞあるけれ共。大自然に對しても同じく美しいものは美くしいと認められ觀賞されてゐたのである。それ故に天照大神が天石屋戸に刺籠り給ふ時。天兒屋命と布刀玉命とは天香山の五百津眞賢木をとつて上の枝へ八尺勾珠を。中の枝へ八咫鏡を。下の枝に白丹寸手青丹寸手を掛け給ひて奉つたことを左の如く記してゐる

『召天兒屋命布刀玉命而。（中畧）天香山之五百津眞賢木矣。根許士爾許士而於上枝取著八尺勾璁之五百津之御須麻流之玉。於中枝取繫八咫鏡。於下枝取垂白丹寸手青丹寸手而。』云々（古事記）

自然の草木をぬきとつて。その上の枝に玉を。中の枝に鏡を。下の枝に布帛をつけて神の祭をなしたことは。云ふまでもなく草木美を認めてゐればこそ草木を飾りとして用ゐたのである。勿論現今の挿花の如き意味は見出せないが。それにしても上代人が草木を飾ることを忘れなかつたことは嬉しい。それのみでなく天の眞榊を鬘とし。天香山の小竹葉を手草に結ふて舞ふたとあるから。草木を愛し。その美を觀賞することは。上古から行はれてゐたことを窺知することが出來るであらう。從つて上代人は草木の枝の形を考へて。各々好む處のものをこの枝に掛けたのであつて。草木の形式美を念頭に置いてゐたことが立證される。そうして又。之等の草木を比較的に長く保たせる爲めの水揚げを知らなかつたが爲めに。彼等は常に草木を手折ることをしないで。根から掘りとつたのである。これは一面上代人が草木に對する非常なる愛をもつてゐた證左であつて。この愛があればこそ手折ることをしなかつたのである。而も恁うしたやり方は。草木を神聖視したものであつて。やがては天津神籬となつて表れるのである。つまり神を象徴する草木であつて。草木が如何に重視され。神と同格視されてゐたかを窺知することが出來る。以上のことは勿論一木一草の場合であるけれ共。上代人と雖も春は花に遊び。秋は紅葉に心をひかれてゐたのであつて。常に季節の草木を如何に賞しつゝあつたかを知れば。思ひ半に過ぐるものがある

『冬夏不絶。自阪以東國男女。春花開時。秋葉黃節相携駢闐。飲食齋。騎步登臨。遊樂栖遲。』云々（常陸風土記）

これは常陸の筑波山へ登つて。春は花に醉ひ。秋は紅葉に歌ふ樣を記したものである。上代人と雖も。自然を愛すること現代人と變りはないと云ふことが出來る。それのみでなく。この時代に於ても早く種々な觀賞植物を認めてゐたのであつて。今日吾々が考へると不思議なほど。種々の觀賞用草木のあつたことを語つてゐる

『今山。郡家正西一十里廿歩。周七里。凡諸山野所レ在草木。白朮。獨活。女青。苦參。貝母。牡丹。連翹。伏苓。藍。漆。女委。細辛。蜀椒。薯蕷。白歛。芍藥。百部根。薇蕨。薺頭蒿。藤。李。赤桐。椎。椿。楠。松。柏。槐。』云々（出雲風土記）

右は出雲風土記に見えたものであるが。これをもつて見ても。上代の人々が可也多くの觀賞用植物を山野に見出してゐたことが知られるのである。從つて之等の草木を知つてゐる彼等は。必らずこれを掘り取つて自家へ持ち歸り。一室の内外に飾つたことは想像に難くないであらう。それは上代の人々がよく草木の花に自個の生を比較などして。歌を讀んだ例があるのを見ても。彼等は常に花と云ふものゝ美にどれほど憧れをもつてゐたであらうかを想像することが出來る

『久佐迦延能。伊理延能波知須。波那波知須。微能佐加理毘登。登母志岐呂加母』（古事記）

と即ち。河内國の日下江の入江の蓮の花盛りを見て。自分も年老いざらましかば。婚れましものをと。年若い人を羨望して讀んだ歌である。彼等は常に花の中に人生を見出し。花の中に詩を見出してゐる。花に對する愛が如何に深かつたかは。之等の例を見ても首肯することが出來るであらう。上代の人々は花を日々の生活にも斯くの如く樂しんで來たのであるが。同時に又冠婚葬祭にも草木及び草木の花を用ゐて祝ぎ。且つ奉納して心の美を表象したのである。それは

『伊弉冊尊生二火神一時破レ灼而神退去故葬二於紀伊國熊野三有馬村一焉土俗祭二此神之魂一者花時以レ花祭又用二鼓吹幡旗一歌舞而祭焉』（日本書紀神代卷）

とある。これを見れば上代から花をもつて神を祭り。神の魂を和げ奉つたことが窺知される。このことは

『那智三卷書に曰く。有馬村有二產田宮一伊弉冊尊退之地。其東有二隱窟一又名二產立窟一又名二花窟一伊弉冊尊所レ葬毎歲暮春繩二作花及幡旗一歌舞而祭レ之神世遺俗』云々（古史通）

と云つて一層このことを裏書してゐる。神を祭るに。花時花をもつてすると云ふことは。花の美を深く愛してゐたからである。純なる清らかな美の表現をもつ花をもつて。神を祭る至情は上代民族に於ても當然な行き方であつたであらう。花なき草木を飾ることは男々しき清らかさであり。花そのものを飾ることは優美な清らかさであり。共に大自然美としての飾りであつて。人工の美をもつて見ることの出來ぬ偉大なものがある。從つて神の心を宿す意味からは草木そのまゝのものが用ゐられ。神の心を慰め奉る祭典には主として草木の花をもつて飾られた樣である。前者は神社に於ける神籬としての表現であり。後者は宮殿の諸裝飾に表現された。「大日本史」によれば。神武天皇が神祇を丹生川上に祭り給ふ時。丹生川上の眞坂樹をぬきてこれに神々の降臨を迎へ給ひしことが記され。天皇の元年橿原宮に卽位あらせられ。神籬を建てゝ八神を祭られたことは「舊事記」「古語拾遺」等に記されてゐる。ヒモロギとは卽ち神の宿り給ふ木のことである。この神籬のことは更に

『高皇靈尊因勅曰。吾則起樹天津神籬』云々（日本書紀）

と見え。更に又

『故以天照大神。託豐鍬入姫命。祭於倭笠縫邑。仍立磯城神籬。以日大國魂神託渟名城入姫命令祭。』云々（日本書紀）

第二十二圖　上代の神籬　吉川八幡宮神事用

とあり。これを見ても神社に不可離のものとして考へることが出來る。この神離は古來種々な說が行はれてゐるとは雖も。「古事記傳」には榮樹を立てゝ神の御室としたことを立證し。「鐘の響」には生諸木の意だと云ひ。共に青葉なす榮ゆる木をもつて神の心を休むる場所としたことを語つてゐる。これを考へれば上代に於て樹木が斯樣に重要視されたことを語るものである。又神木と稱するものもあつて。樹木を神聖視した傾向もあり。就中

1 榊は榮木の意として一般の常綠樹を云ひ。廣く神事に用ひられてゐる。「新選字鏡」には『杜毛利又佐加木。又龍眼佐加木。又榊椐椎三字佐加木』と云ひ。「箋注名抄」にも。『古所謂佐加岐。是常葉樹之總稱。非一木之名』と云つてこのことを主張してゐる

2 楠は『蓋當祠無神詞唯用古楠一株即爲神。周設神籬當前建殿』(長州府志)と見えて熱田や日前國懸の諸大社には最も關係深く古來神木として有名なものである

3 銀杏は。これも各神社に大木が存し熱田秩父の諸社には傳說が多く。古社には極めて相應しいものである。

4 杉は三輪の大社の神木として古來有名であり。萬葉などにはよく歌はれたものである。杉は三輪神社のみでなく各大社の森には必らず生古されてゐる。備中吉川八幡は椙原の宮と云ふのも。實はこの杉木の崇拜から來てゐる。又有名なのは石上神宮の杉は「日本書紀」に『石上振之神椙』と見え。萬葉などにも二三の歌が見られる

5 檜も古來大社には必らずその森に繁つてゐて。杉と共に榮えてゐる。檜は火の木として神事に用ゐられ。發火の具として古來出雲大社。八坂神社。府中の大國魂神社。諏訪神社。攝社。御座石神社等に用ゐられてゐることは有名である。檜は最も清淨な木として考へられる處から。社殿の建築等には特にこの木が用ゐられる

6 松は又常綠樹としての主なるもので。必らず神社に存在する。住吉。多峰。平野。筥崎等の松は特に名がある

7 檀も『是以倭姫命。以天照大神鎭坐於磯城嚴檀之本而祠之』云々と書紀に見えてゐるのを始めとして。諸大社の森には必らずあるものである

8 椎も神木としては必要な木である。延喜式神名帳能登國羽咋郡の部に。椎葉圓比咩神社と云ふのがあり。その他諸社に繁れる木として用ゐられてゐる

9 櫻も諸大社に植えられてゐて。神木となつてゐるものは尠なくない。上古と雖も。櫻の花が日本民族に賞せられたことは。日本民族の心持とピッタリ合ふ處が多いからであると思ふ

10 椋はあまり多くはないけれ共。古社にはよく見られる處の木である。「延喜式神名帳」には山城紀伊郡に大椋神社があり。同じく。太和國宇陀郡に椋下神社があり。同じく近江に小椋神社がある。その他全國の諸社に見えてゐる

11 椿も亦神木とされ。神名帳には『近江伊香郡に椿神社があり。伊勢鈴鹿郡にも椿大神がある』

之等は要するに草木と云ふものを神聖化し神格化として見た實證である。上代民族は斯樣に草木をして神聖なものとして見て行くと云ふことは。彼等が如何に草木を大自然の崇高なものとしてゐたかを窺知することが出來る。それのみでなく。彼等が草木をこゝまで認識して行くと云ふことは。大和民族が古來より。他國民族に比較して。大自然を自個の生活內にとり入れる態度の大きかつたことを物語るのである。やがて草木の藝術たる花道藝術の生れるのは。當然なことであつて。日本にのみ花道藝術と云ふ特殊な存在が許されるのは之等によつて首肯することが出來る。余は先づ日本の花道美術史の一頁をこの上代民族の草木に對する態度によつて飾り得ることが出來ると主張するのである。このことは更に

『花ぐはし櫻のめでことめでは
　　はやくはめでずわがめづる子ら』允恭天皇

これは允恭天皇が衣通姫に愛の早きに過ぎなかつたこ

とを仰せ賜ひての御製である。そうしたお心持を花に寄せ給ふたことは。當時すでに花が美的對照とされてゐたことを一層有力に物語るものである

第二節　飛鳥。奈良。平安期に於ける花卉觀賞

日本の上代民族が華道と云ふ藝術をもつまでに至らなかつたけれ共。草木に對する自然の愛は。決して他國民に讓るものでないことは前述の通りである。然るにこの飛鳥時代に入るに及んで佛教の傳來があり。廣く印度。支那。朝鮮の諸文化が入ると共に。草木に對する態度も自づと變化を見るに至つたことは云ふまでもない。つまり日本民族が在來の草木に對する態度と。新來の佛教的態度による草木愛とが折衷されて。そこに新らしい草木觀賞の態度が表れるに至つたのである

吾々は先づ斯る理由のもとに。飛鳥奈良平安期の花卉觀賞の態度を通覽するに先つて。印度。支那。朝鮮に於て行はれつゝある草木の美的觀賞の態度を略述することゝせう。そうして然る後に之等の態度が日本に於て如何に展開したかを見ることゝせう。先づ印度のものから考へるならば。印度文化の中心をなす佛教上から考察することを得策とするであらう

印度が大自然に惠まれた地方であり。從つて背景の大自然には。彼等が常に心をひきつけられてゐた。佛教と雖もよくこの大自然を基礎とすることによつてよりよき發展をなしたものである。從つて印度の原始佛教に於ては常にこの大自然を自己のものとし。又大自然の中に自個を見出して。そこに生活の新路を見出してゐたのである。例へば

1. 公園を造ること
2. 林樹を植へること　（阿含經）

これは釋尊が大衆に向つて眞の布施を五個條に分けて說明されたものゝ中の二つである。大自然をそのまゝ公園として保存すること程大自然を愛する心の發露はないが故に。釋尊はこれを第一に布施として主張された。現今云ふ處の自然公園。森林公園。天然公園の類がそれである。これは云ふまでもなく印度上古の人々が如何に自然を愛してゐたかを物語る一證左である。加ふるに林樹を植へることに至つては。當時相當の原始林を有しながらもこれを奬勵されてゐることは。一層右の感を深ふするものがある。これは要するに大自然を愛した一例であるが。更に吾々が美的對照として之等の山野を求める時。そこに草木の美を見出すのである。それは一つには宗教的對照としてゞあり。この宗教的對照がつひに佛教に於ける供華の形式を求めるに至るのである。先づ之等の實例を左の二三によつて考察することゝせう。勿論この供華の形式に至つては。古來諸經典に散見する處であるが。就中大梵天王問佛決疑經中に見ゆる拈華微笑の傳說は有名ではあるが。これは後世の僞經と說く學者が多い。拈華微笑とは。世尊が大衆中にあつた時。梵天の捧げた蓮華を受けて拈り給ふた處。大衆はその何んたる意を理解することが出來なかつた。然るに一人大迦葉尊者が微笑してこれを受けられた爲め。世尊は彼に正法眼藏涅槃妙

第二十三圖

奈良時代　（東大寺大佛蓮瓣彫刻）

心を授けられたと云ふのである。この說は別に梵王が世尊へ金波羅華を供養したとも。迦葉が多羅葉三本を世尊に供養したとも云はれてゐる。然し大體に於て佛在世時代に於て花を觀賞してゐたことだけは想像し得るであらう。尙又法華經の十種供養の說も。用ゐて當時の草木花愛賞のことが想像される

『或ひは彼の書物に華と。香と。香末と。花環と。線香と。粉と。衣服と。傘と。幢と。神の幢と。音樂の聲と。禮拜と。合掌とによりて供養するか』…(妙法白蓮華經說法師章第十)

とあり。又同じ法華經中に

『莊嚴は美麗にして花を以て飾りたる……神の蔓陀羅華と。大蔓羅華とを以て。かの寶塔に散ぜり。明かに最もよく散ぜり……』(同上寶塔示現章第十一)

とある。之等は何れも佛敎々理を說く爲めの方便として書かれたことで。確實にその風習を書き上げたものとは云ひ難いが。大體に於て上古のことに想到することが出來る。次に玄奘三藏の印度紀行を見ると

『數千萬衆。不召而集。香水香乳。以漑以洗。於是奏音樂。列香花燈炬繼日。兢修供養。如來寂滅之後。無優王之初嗣位也』云々(大唐西域記卷第八摩揭陀國上)

『百千萬衆。七日七夜。持香花。鼓音樂。遍遊林中。禮拜供養。』(同上)

『有二婢使一。各捧金盤。盛滿花香。而來迎候』云々(同上卷第九摩伽陀國下)

之等の實例は何れも佛の供養であるが。前者は花を佛に奉つて供養する樣を述べたものであり。後者は名士の送迎に花をもつて敬意を表したことを述べたものである。三藏法師の印度へ行つたのは。大宗の貞觀七年と云ふから。佛滅後千百五十年前後と云ふことが出來るから。或ひは佛在世時代の供華の法式がそのまゝ傳つてゐたとは考へられないけれ共。之等の型式は當時存在してゐたと云ふことが出來る。又經典中の二三を引いて考へるならば

『天香天花(中略)をもて供養し恭敬し。尊重し。讚歎せば。』云々(摩訶般若波羅密經卷第九大明品)

と見えてゐる。もとより佛の道を說く方便として說かれたものではあるが。花をもつて供養する型式のあつたことは云ふまでもない。同じ玄奘三藏の譯になるものゝ中に

『各持種々無量天花　香鬘塗香燒香末香衣服瓔珞寶幢幡蓋伎樂諸珍及無量天青蓮華天赤蓮華天白蓮華天香蓮華天黃蓮華天紅蓮華天金錢樹花及天香葉弃餘無量水陸生花持皆佛所奉敬佛上以神力諸花鬘等施轉上踊合成臺量等三千大千世界垂天花蓋寶鐸珠幡綺飾綸其可愛樂……卽以千莖金色蓮華其花千葉衆寶莊嚴授普光菩薩而海之言汝持此花至釋迦牟尼佛……云々』(大般若經卷第一初分緣起品第一)

斯樣に花と云ふものが佛と關係づけられること深く成つてゐることを思えば。佛敎上から如何に草木の花を重く視てゐたかを窺知することが出來るであらう。花が常に自然美の表象であるが故に。彼等と雖もこの花を佛に供養することが何よりも純美の信仰的態度であると考へたのは當然なことである。之等の經典は。それ故に只單なる經典上の一理想であつたのみでなく。事實の上に於て表現された。卽ち佛に供華の德が說かれると共に。直接山野の花を手折つて佛に供へたのであつた。それはそのまゝの實例に於て說明することは甚だ困難であるけれ共。當時から流行した佛像彫刻を見れば。之等のことが首肯出來るであらう。先づ我國へ傳來した佛像乃至は我國に於て製作された平安期までの諸佛像中にこれを見出すならば(年代順)

1　普賢菩薩持華蓮華立像　法隆寺藏
2　十一面觀世音菩薩持華寶草華像　聖林寺藏
3　不空羂索觀音持華蓮華立像　法華堂藏
4　千手觀世音菩薩持華蓮華立像　唐招提寺藏
5　大佛蓮瓣彫刻持華蓮華彫刻　東大寺藏
6　十一面觀世音菩薩持華寶瓶草花　新藥師寺藏

7　聖觀世音菩薩持華蓮華立像　法隆寺藏
8　夢殿觀世音菩薩持華蓮華立像　法隆寺藏
9　十一面觀世音菩薩持寶瓶蓮華立像　藥師寺藏
10　虛空藏菩薩持華蓮華立像　高野山藏
11　如意輪觀世音菩薩持華寶草華座像　觀心寺藏
12　十一面觀世音菩薩持華寶瓶草華立像　須磨寺藏
13　普賢延命菩薩持華蓮華立像　高野山藏
14　十一面觀世音菩薩持華寶瓶蓮華立像　溫泉寺藏
15　同上　弘明寺藏

之等の諸佛像は何れも蓮華及寶草華を手にしてゐる。その瓶に挿したると否とを問はず。そのすべては自由な形式の一枝である。その一。三。四。五。七。八。十。十三の諸像は蓮華の花及蕾のついたものを枝のまゝ持つたものであり。九。十四。十五は蓮華を瓶に挿したものを持つてゐる。又二。六。十一。十二は瓶に寶草華又は他の草花を挿したものを持つてゐるのである。飛鳥朝から奈良朝を經て平安朝に至るまでに於て。之等の代表的佛像が花を手にしてゐることは。正しく佛教と草木の花と云ふものが相當の關係にあつたことを物語るものである。之等の佛像持花の形式は。やがて飛鳥奈良平安の諸期に於ける挿花の形式を想像することが出來て。實に面白いものである。これによつて考へるならば。當時の挿花は。未だ藝術としての形式美をもつに至つてゐないことは勿論であるが。一木一草の全部を眺めるよりも。その一木一草の一枝を愛したのである。一つの蓮華や寶草華の花に。佛性を見出し。信仰の對照としてこれを扱つたのである。從つて上代の大和民族が全體の草木美を愛したのとはその思想が全然異つて來たのである。それは神祇の思想が國家中心であり。全國民中心であり。鄕土中心であるのに比して。佛教の思想が自個中心であることから考へて。極めて當然な結果であつたと云ふことが出來る。從つて當時の挿花は主として自個を中心とした表現上の自由さを。その花の形式上に見出すことが出來る。之等の形式は尙觀心寺花瓶に於ける金銅蓮華三莖一對に於ても窺知することが出來るであらう

佛教が印度に興起して千數百年の間に於て。漸やく支那化され。その間に於て上記の華卉藝術を佛教上に保存されてゐたが。吾々はこの挿花の術が日本化するまでに。今少し支那固有のものも見て置かねばならぬ。勿論佛教傳來後の支那に於ける形式と雖も。そこには多少の面白味は存するであらう。例へば大谷光瑞師が支那新疆省に發掘された壁畫に現れた衆僧圖に於ては。何れの僧侶も華や葉の附いた寶草華を捧げてゐる。又同じ草花の一枝をもつた貴族の群の圖がある。之等は何れも敬虔の念にみちた面持で華を捧げてゐる。之等の樣は當時の風俗をそのまゝ寫實的に描寫したものであつて。それは各人物の顏などが寫實そのまゝであることから推しても窺知することが出來るであらう。持華の形式は。衆僧も貴族も同樣であつて。別に形式化された花ではなく。一枝の花をそのまゝ手折つたものをもつてゐるのである。之等の圖から考察すれば。當時までの草木花觀賞の態度は。決して只單なる美的觀賞としてのそれではなく。何れも信仰による奉仕の心持であつて。一枝と雖も充分敬虔の念をもつて大自然に捧げることを忘れてゐなかつたと云ふことが出來る。これは前述の各佛像が日本に傳來してからも。充分奉花の態度を示してゐることを見ても首肯出來ることである。從つて之等の態度が日本に入つて來てゐることは何れの點からも考へ得ることである

次に日本に於ける花卉觀賞乃至は藝術を。詩歌その他の文獻によつて見て行くことゝせう。日本的に。花を神に捧げることに就ては。前節に述べたが。そうした傳統は奈良朝へも續いてゐた。「大伴坂上郎女祭レ神歌幷短歌」

『久堅之。天原從。生來。神之命。奥山乃。賢木之枝爾。白香付。木緜取付而。齋戸乎。忌穿居。竹玉乎。繁爾貫垂。十六自物。膝折伏。手弱女之。押目取懸。如此谷裳。吾者祈奈牟。君爾不相可聞』（萬葉集卷二）

と歌つて神に詣でる時の捧げ花のことを立證してゐる。云ふまでもなく。榊に白紙と麻皮をとりつけて神を

齋つたのである。又

『和我勢故我。夜度乃也麻夫伎。佐吉豆安良婆。也麻受可欲波牟。伊夜登之能波爾』

右一首。長谷攀ㇾ花提ㇾ壺到來。因ㇾ是大伴宿禰家持作ㇾ此歌一和ㇾ之。（萬葉集卷二十上）

とあつて。これは正しく花を長谷に探ねて。瓶に盛つたものとも思われる。壺と云ふのは勿論酒壺のことではあるが。當時の人々が風情を愛してはよく酒壺に花を入れたこともあれば。花を瓶に挿したと見られぬこともないであらう。然し確實に花を瓶に挿したと云ふことを。余は萬葉集の次の歌によつて主張したいのである。從來萬葉集には挿花の藝術を歌つたものは一つもないと多くの學者が主張してゐるけれ共。左の歌は確に花を三體の花に造つて瓶に挿し。これを觀賞したことを立證するものである

『同月九日諸僚會ㇾ少目秦伊美吉石竹之館一飲宴於時主人造ㇾ百合花縵三枚一疊ㇾ置豆器一捧ㇾ贈賓客一各賦ㇾ此縵作三首』

安夫良火能。此可里爾見由流。和我可豆良佐由利能波奈能。惠麻波之伎香母

右一首守大伴宿禰家持

等毛之火能。比可里爾見由流。佐由利婆奈由利毛安波牟等。於母比曾米豆伎

右一首介內藏伊美吉繩麻呂

左由理波奈。由利毛安波牟等。於毛倍許會伊未能麻左可母。宇流波之美須禮

右一首大伴宿禰家持和

之等の諸花は。云ふまでもなく。百合の花の盛れる枝を三本造り。これを瓶に盛つたのであるから。從つてこれをもつて立派に挿花であると云ふことが出來る。三枚造るとは三本をもつて美的な形式を作つたことである。挿花として立派なものが宴會の席に出來上りたればこそ賓客をしてこれを歌はしめたのである。それ故。この挿花を眺めて何れもその美を嘆賞してゐるではないか。花を瓶に挿して樂しむ樣になつたことは種々な文献に徵することが出來るが。就中

第二十四圖　貴族捧花（支那新疆省發掘壁畫）

『從華山院。右近中將公信朝臣來云。仰言。可花御覽參者。只今申參由。卽參入』

『洲濱上立籬。其上置銀透苞。折敷。唐草花葉盛物。洲濱作茶花』（御堂關白記上卷）

とあるのは面白いものである。花を瓶に盛り。これを貴族は觀賞すべく。常に種々な催をしてゐたらしいのである。又

『染殿后の御前に花瓶に櫻の花をさゝせ給へるを見てよめる。前大政大臣良房

年ふればよはひは老いぬしかはあれと
花をし見れは物思もなし』（古今集春上）

これも櫻を花瓶に挿したものを讀んだものであつて。當時の貴族などは。挿花に見出せる大自然。天地の偉力等に心を忘れることが出來たことを物語つてゐて。この歌により挿花が確實に藝術としての力をもちかけたことを語つてゐるであらうことを想到することが出來る。又

『かうらんのもとに。あさきかめの大なるすへて。さくらのいみじくおもしろきえだの五尺ばかりなるをいとおほくさしたれば』云々（枕草子）

『櫻の花のかめにさせけるが散るを見て中務につかわしける。紀貫之

ひさしかれあだにちるなとさくらばな
　かめにさせれどうつろひにけり』

同返歌

『ちよふべきかめにさせれとさくらばな
　とまむやことはつねにやあらぬ』

とて。瓶に櫻を挿したことを語つてゐる

尙更に

『櫻をかめにさして見るに。とりもあへず散りければ。桃の花を見やりて

折りて見ば近まさりせよ桃の花
　思ひぐまなき櫻惜まじ』（紫式部集）

『……櫻を長く折りて。大きなる花瓶に挿したるこそ。わざとまことの花瓶。ふさなどしたるよりもおかしけれ。……』（清少納言枕草子）

等と。花を如何にも自由に入れて樂しんでゐたかは。この一文でも明かであらう。實にこれを見れば歌に文にそれぞれ當時の挿花藝術を語つてゐることが知られる。

飛鳥時代に於ては。聖德太子を中心として。支那文化を盛んに入れ給ふたが爲めに。支那に於て行はれつゝあつた草木花觀賞の程度を受け入れ給ひ。これを上代日本に見られつゝあつた花の觀賞と比較研究され。日本美術の發展に資し給ふたのであるが。然しその程度や形式は更に古文書の散逸と共に。今これを文献に徵することが出來ぬ。佛教上に供華のことが盛んに說かれつゝあつた當時のことだから。供華の挿花はあつたであらうが。これも決して今日考へる如き完成したる形式的のものではない。寧ろ一華一葉を瓶に入れて。天地自然の理を究明されたと云ふ傳說は受け入れるに躊躇しないものがある

然し大體に於て飛鳥朝の諸美術の中に挿花のことはあまり見出せないのを遺憾とする。これが奈良朝に成つては。前述の如く。挿花のことが諸文献に徵することが出來。更に平安期に至つては。一層多くの資料を得ることが出來るのである。平安期に於ては。草木の花をそのまゝ美的觀賞の對照とするのみでなく。草木の花を詩歌に歌ひ。挿花とし。これによつて人を送仰し。神佛をまつり。諸方面に發展したことは云ふまでもない

當期の挿花藝術は。前述の諸文献に徵する外。更に

『九月九日於神泉苑宴群臣。各賦一物得秋菊。……摘入金杯辨色難。……』（凌雲集）

『……瓶口挿時花。……』（同上）

の句が見えて居り。更に

『さくはなのしたにかくるひとあをみ
　ありしにまさるふぢのかげかも』（伊勢物語）

とて。之等は何れも當時の人々が來客を招待せる場合に。その宴席又は客間に草木の花を挿し飾りて。相手を遇することを忘れなかつた證左である。殊に右の歌は

『……むかし左兵衞督の婿なりける在原行平といふありけり。その人の家によきけさ有と聞て。うへに有りける。左中辨藤原のまさちかと云なん。まろうどさねにて。その日はあるじまうけしたりける。情ある人にて。かめに花をさせり。その花の中にあやしきふじの花しなび。三尺六寸ばかりなん有けり。それを題にてよむ』（伊勢物語下卷）

第二十五圖　持華如意輪觀音像
平安時代（河内觀心寺藏）

とて挿花したる意を語つてゐる。この外に池坊家の系圖には。この頃專慶と云へる人があつて。池坊華道の中興の祖だと云ふことが記されてあるが。之等のことは平

安末期までの古文書に散見しないので。今急にこれを判ずることが出來ぬ。殊に專慶と云へる人は。諸書を按ずるに室町期の人と云ふことが出來るので。このことは何れ室町期の處で論ずることゝせう。然し兎も角平安期には。花を花瓶に盛つて。これを花臺の上に置く樣にまで發達してゐることは。左記の史料でも見ることが出來るから。花を生けることを專門とする人も全然なかつたとは考へられない。今日これを古文書に徵し難いとは云へ。多少そうした專門家もあつたであらうことは充分考へ得るであらう。次に又

『延長四年九月九日裝束如=正月七日一但當御帳前之母屋左右挂レ囊盛=茱萸一向外着レ之以=金瓶一挿=菊花一置=黑塗臺机一』云々（吏部記）

『佛に供花し給ふ。鳥蝶にさうぞきわけたる童八人。鳥には白銀の瓶に櫻を挿し。蝶には黃金の瓶に山吹いかめしう』云々（源氏物語宮中御讀經）

『……以=金瓶一挿=菊花一。……御前南廂中央間東西。各立=金銅花瓶一樹=菊花一』（西宮記）

尙この挿花を繪畫の上に求むるならば二條天皇長寬年中。平家一族によつて納められたる嚴島經卷安樂行品裝禎中には。三姿の自由な花形が見られて面白い

以上によつて先づ大略ながら。飛鳥。奈良。平安の諸期に於ける草木及び草木花觀賞の態度や。これを瓶に挿して一つの藝術として樂しみ得たことを。之等の諸書によりて朦朧ながら推考し得たと思ふ。これを要するに。當時までの挿花のことは

一。草木を神佛に供へたこと
二。草木を美的對照として觀賞したこと
三。草木を飾つて人の送迎にまで用ゐたこと
四。草木をもつて宴。客席等の裝飾としたこと
五。草木を金銀銅その他瓶器に挿して樂しんだこと
六。草木を瓶に挿したものを花臺の上に置いたこと
七。草木の挿したものは。更に美的觀賞としての外に詩歌の對照として求められたこと
八。挿花が何處までも形式的に完成しないで。その時その場所に從つて自由な形をとつてゐたこと
九。挿花の藝術が貴族間に主として行はれ。まだ一般化。大衆化しなかつたこと
十。草木を愛し。花を特に愛する精神に於ては極めて純な氣持であつたこと

の諸點を見出すことが出來るであらう。先づ之等の大樣を窺知すると共に。進んで次期の花道美術を見て行くことゝせう

第三節　鎌倉。室町。桃山期に於ける花道藝術の發達

花道が藝術的にその端を示す樣になつたのは。先づ鎌倉期であり。これが室町期から形式的な端を開き。更に桃山期に至つて完成したと見ることが出來る。それ故に先づこの三期を便宜上一節に纏めて見ることゝする。然し時代の風潮から考へれば。鎌倉室町の二期は戰亂と戰亂後を享けた點に於て。何れも佗しい時代であり。沈める時代であつた。然るに桃山期はそれとは全く反對に華美艶麗な時代であつたと云ふことが出來る。然るに一方室町時代から流行しかけた茶道は。室町期と桃山期とに亘つて隆盛を極めたが爲め。この茶道の支配下にあつた挿花の術は。又この二期に共通な時代色をもつてゐたのであつた。けれ共大體に於ては。當時の花道藝術が佛敎。特に禪的背景に支配せられる處極めて多く。そうした潮流から考へれば又この三期は花道藝術上に共通の時代でもあつたと云ふことが出來るであらう。これ等のことを。先づ鎌倉時代から探究して行くことゝせう

鎌倉初期なる歌人としての藤原俊成（永久二年――元久元年）の歌集を見れば

『法住寺殿にて。院の供花の時の會に兩方聞=郭公一ト云ふことを……』（長秋詠藻）

とて歌をものしてあるが。これは佛に花を供養した實例である。又

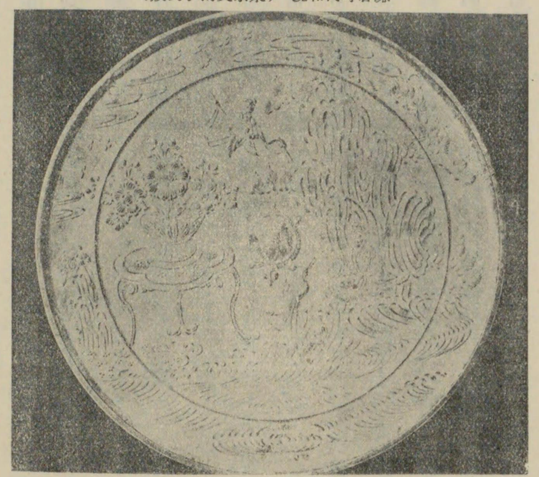
『……例の五月の供華。……云々……九月の供華には。新院さへわたりものし給へば。いよ〳〵女房の袖に心ことに用意くはへ給ふ。御花はつれば。兩院ひとつ御車にて伏見殿へ御幸なる……』云々（弘安頃の記事。增鏡）

とて供華のことは度々行はれたらしい。只それ等供華の樣式に至つては。今これを窺知し難いけれ共。勿論樣式と云ふほどの確然たるものがあつた譯ではなかつたと云ふことが出來るであらう。只當時の人々は。草木を觀賞するに。未だその內的美を捉へることをしなかつたと見えて。兼好法師の如きも。隨筆の上で當時の人々が花月を觀賞することあまりに無趣味であることを咎め。すべてのものゝ觀賞はその始めと終りにあつて。決して完成せるものゝ中にはないことを主張して『よろづのことも。はじめ終こそをかしけれ』と云つてゐる。卽ち

『花はさかりに。月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ。たれこめて春のゆくへ知らぬも。なほ。あはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢。散りしをれたる庭などこそ。見どころ多けれ。歌のことばがきにも。『花見にまかりけるに。はやく散り過ぎてければ』とも。『さはることありてまからで』なども書けるは。『花を見て』といへるにおとれることかは。花の散り。月の傾くをしたふならひは。さることなれど。ことにかたくなゝる人ぞ『この枝。かの枝。散りにけり。今は見どころなし……』云々（徒然草）

戰國の世にあつては。ものゝ內的觀賞と云ふことが。あまりにも皮相的。現實的な時代であるが爲めに不可能である。兼好の如き特殊な詩人でなければこれだけの觀賞も出來なかつたと云ふことが出來る。然しそこには常に佛教思想の影響する處尠くないことは勿論であらう。この頃の挿花は未だ徵すべき多くの古文書を有しないが。東京美術學校藏にかゝる鎌倉期の和鏡『蓬萊盛花圖』に表れたものを見ても。その形式が如何に自由であるかゞ理解される。同圖には三脚花形花臺に花器を置き。これに牡丹三本を盛つてある。當時は前期についで花臺を盛んに用ゐられてゐたから。その花臺も花形のものまで用ゐられるに至つたのである。そのすべてのものゝ釣合が非常によく。これを事實の上に確め得ることは。極めて得難い資料と云わねばならない

第二十六圖　蓬萊盛花摸樣
鎌倉時代和鏡（東京美術學校藏）



これを又

『元仁二年。嘉祿元年三月十四日。十二日夕。幕下被レ參二安女院一。女房聊日來經營事。被レ出二見掩一事云々。花瓶立二色々花一。立二地盤一。其下入二扇五十薄樣等一。』云々（明月記）

と記してゐる。元仁二年卽ち嘉祿元年と云へば。後堀河帝の時代であつて。この時すでに今日考へる處の立華に近いものがあつたとも考へられるであらう

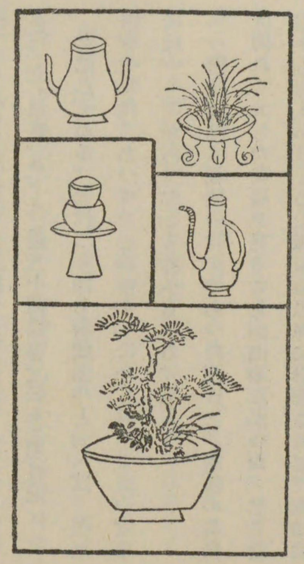
一體鎌倉期は戰國の時代であつただけに。諸他の美術は何れも大した發展を見ることが出來なかつた。然し當期から起りかけてゐた禪家の思想に影響されて。次第に內的生命の藝術を求める樣になり。次期室町に至つてこれが顯著となつた。花道藝術の如きも。その形式內容共にやゝ見る可きものが出來たのは。卽ち室町からのことである。實に室町時代は。日本藝術の特殊性を發見した時代として。當然重要視されねばならぬ時代だと云ふこ

とが出來る

室町時代に成つてからは。先づこれに關する專門の書及び花道のことを何かに附けて發表し得る樣な時代となつた。先づ挿花のことを記載した專門の書として。主なるものを擧げるならば

1 仙傳抄。（後花園天皇文安二年紀元二一〇五）
2 二水記。（後柏原天皇大永年中紀元二一八餘）
3 池坊專應口傳。（後奈良天皇天文十一年紀元二二〇三）
4 池坊古法傳卷。（同上天文二十年紀元二二一二）

等がある。仙傳抄は寛永二十年に版本として殘されてゐるが。文安二年の記述であることが記されてある。この書はその文章と挿圖との二方面から考へても。慥に室町期のものであらう。この書は先づ花道に於ての專門の書としては最古に屬するものであつて。元服の花。法師なりの花の事。少人など申時の花の事。出陣の花の事。わたましの花の事。きたうの花の事。藤をしんにたてべからず。竹をたつるやう。三ぐそくの花のこと。さしきのすみに花をいくること。はしらの花瓶のこと。なげしの花のこと。等と種々な生け方のことを記し。更に。ざしきの花の見よう。等のことを記して。挿花の觀賞に就ても述べてある。又同書中に挿入されてある圖を見れば。



第二十七圖　室町期の挿花　仙傳抄

何れも自由な投入。盛花。生花の類である。之等のものには何れも形式らしいものを見出すことが出來ぬけれ共。その裝飾のやり方は慥に形式づけられて來た最初のものとして見ることが出來る。先づその內容の中の一部を引用して參考とするならば

『……下草は何にても當きのしうげんなるものをもとめて用ゆべし。たとひ當季の花なりともきらう草木をば立べからず。……枝のおうしぐちをきらひ候。むかひへおろしぐちみえ候にはすみをぬるべし。……ふじの枝は花おほくしてさしあひ出來候ゆへにしんにもちひず下ぐさにたつべし。……少し風をもたせ木末に草葉をさしきの中へなびかせすみよりすみへむかふ心に立べし。……草花びんに木をたつる時は庭に木をうゆる心に先しんをたて其後可然下ぐさをさすべし。……たゞくわひんをよく〳〵見てこの花びんにはいかやうにたてべきやらんと自由自在にあんじてたてべし。百瓶かはりてたつるとも目のあり所には目をつけ。はなの有ところにははなをつくるやうにたてていづくやらん面白きやうたつるが上手なり。』云々（仙傳抄）

とあつて。自由なる中にも種々な約束が出來て。形式の規定が出來つゝあることを知ると共に。挿花の術が愈々本舞臺に上りつゝあることを窺知することが出來るであらう。只この當時は足利義政の時代であつたから。こうした藝術には可也力を入れられてゐたのである。この仙傳抄が出來た當時からこの書の版本になる前までの諸家を見れば

『此仙傳抄書一作者三條殿御秘本賴義政公依御所望

文安二年三月廿五日　富阿彌相傳
寛正六年二月八日　武部三位法印
文明四年九月十三日　住友藏人實嗣
文明八年九月廿日　道筒齋
文明九年正月廿六日　宣感院榮得
文明十七年九月十八日　禪喜庵壽亭
永正元年四月八日　山岡至田翁
大永七年五月二日　讃首座
天文五年正月十七日　池房專慈
有相傳次第如此』

とあつて。相傳する度にこの奥書に記入されてゐたの

である。天文五年の最後の分には池坊專慈の名が見えてゐるが。專慈師が當時在世してゐたであらうことは。更に

『坊舍五坊の內池坊の事出たり立華相傳の事は東山御時同明專慈最も善」之天文五年正月十七日著二花傳抄一池坊繼二其家系一善」之累世二專字一爲」名中興有二專好者一堪能定式法式家小卷物大卷物及秘傳抄撰』云々（源氏活花記）

と記してゐる。この源氏活花記は勿論千葉龍卜と云ふ人の著で德川末期の出版であるから確實なことは云へないが。兎も角仙傳抄の奧書からこれを判斷して記してゐるのである。只考へねばならぬことは。中興の祖と見られる專好が定法式家小卷物大卷物等を撰述したか何うかであり。假りに撰述したとしても現存するそれがそのまゝのものであるか何うかは研究の餘地があるであらう。然し。兎も角この時代になつて。專門家が續出し。秘傳書の如きも一二出る樣になつたことは疑ふ餘地がないから。仙傳抄程度のものが出たのであらう。兎も角何れにしても。この頃に池坊專慈の名が見えてゐる。この專慈と云ふ人の名は。同家の系圖には見當らぬ人であるが。同家の系圖には專意と云ふ人が廿五代と三十七代にあるので。この廿五代は殊に義政時代に接近する處から考へれば。專慈のことではないかと思われる。慈と意とが書きあやまられてゐるとすれば。その反對に專慈でなくて專意の方かも知れぬ。又一說には慈と應とは草書きにしてよく似てゐる處から專應が專慈と書き誤まられたのではないかと云ふ人もある。兎も角この頃になつて池坊家は可也盛んに華道家として立つ樣になつてゐるのである。今これを按ずるに。これより先頃。池坊には。第十二世專慶と云ふ人が。同家の系圖には華道中興の祖として見えてゐるが。小野妹子以來十世專誓と云ふ人までは。古文書に散見してゐないで。今これを判じ難いが。兎も角平安末期には前述の如く花を瓶に挿して樂しむことが盛んに行はれつゝあつた時代であるから。從つてこの道を專門とする人もあつたことは考へ得るのである

『世々立花の家とはなれり。その始めは專慶法師といふよりおこりて傳へしを後に專好といへるが當時の風にあらためんといへり。今も世々專字を通字として名の上につくることとなり』云々（類聚名物考人物十五）池坊

とあつて。池坊では專慶が流祖だと云つてゐる。池坊家では勿論小野妹子（入道專務）をもつて始祖とし十一世中興の祖として專慶をあげてゐるのであるが。この書には專慶が始祖だと云つてゐる。勿論之等のことは急に判斷を下すことが出來ぬけれ共。當期に至つて花を立華に組み立てる位の技術は充分行はれたと云つても。諸他の文化から云つて當然なことゝ思ふ。このことは更に

『寬正巳四月

十六日申戊。長法寺の專慶と與に。春公の宅に相會す。慶久しく其事務を司る。仍ち聖德太子の事迹を問ふて。共に其傳の詳略を論ず

寬正午年二月

二十五日庚寅。宿雨晴れず。春公專慶を招く。花草を金瓶に挿すもの數十枝。洛中の好事なる者競ひ來りて之を觀る』云々（碧山日錄）

更に又

『累代瓶裡に華を立つるを以て家業と爲す。其元祖を專慶といふ。專慶より今の池坊專好法印に至る。累十三葉。法印華を以て名を馳す』云々（專好百瓶華序）

又次に

『參青蓮院門跡。今日花御會也。池坊六角堂執行花上手也祇候了。十瓶有之。』（二水記）

とあつて。池坊家に花の名家があつたことを記してゐる。この執行と云ふのは。時代から云つて多分專應のことであらう。更に又

『梨門へ參。竹門御同道庭田へ渡御。池坊花被御覽。市同見之。』云々（言繼卿記）『永錄十一年八月十日の候に』

と記して池坊家の花を天覽に供してゐる。更に

『池坊の立花〔割註〕當坊住職の中專慶法師立花を愛し。木立興あるをば食をわすれてもとめ。深山幽谷のさかし

をもいとはず尋あるき。其心切なるを當寺の本尊感じ給ひ。立花の秘密を靈夢に授給ふ。是より代々其傳をつぎ。中興又專好といひしより其風を改め家本とす。毎年七月二日二星の手向として。都鄙の門人方丈に集り立花の工をあらはすなり。見物の諸人群をなせり』(都名所圖繪卷一)

とある。この圖繪は安永九年のもので。圖には現存六角堂及池坊家の位置がそのまゝ記されてある。これを見てもこの圖繪は確實なものであるが。これにも專慶が立華の祖なることを記してゐる。この後享保年中に出版された『山城名所寺社物語』にも。右の文章から暗示を受けたものを書き上げてある。何れにしても。專慶師が花道の天才家であり。立花の開祖として考へられるに至つたのは當然である。彼の後を。前述した專好や專慈によつて繼續されて行つたのである。これを思ふに。池坊家に於ては古來妹子から傳來されたものとして累代の人々をあげるけれ共。それは六角堂の住職ではあつても。華道の

專門家ではなかつたとも解される。華道家としてはこの專慶師が祖と見られるのは。或ひは正しいのかも知れぬ。只不合理なのは。專慶を同家の系圖の如く判ずれば十二世であり。平安期の人と云ふことになる。然るに諸書には東山時代の人としてゐるが爲めに。この點は充分研究する必要があるであらう。兎も角この東山時代を中心として。華道は次第に勢力をもつ樣になり

『草花禁裏樣へ御進上也。此草花は五ヶ番より參を御花瓶に被ㇾ爲ㇾ立。御盆に被ㇾ居候而。以傳奏御進上なり御藏籾幷被官ども草花をもたせ候而。傳奏に相隨而。內裏へ參也。花は代々立阿彌立申也』(長祿二年以來申次記。同七月七日)

とあつて。內裏へ挿花を献上してゐるし。文明十一年七月七夕祭を期して『大日本華道家元』の稱號を將軍家より專鎭師に給はつたと云ひ。又。青山流に於てもその開祖園基氏の七世基秀が。後花園天皇より『日本華道家元』の勅許を賜つたと云ふことである。然しこれは。『尊卑分脈』を見ると基家の三男が基氏で。彼は白拍子阿古女の腹に出來建保二年正月五日に叙爵せられてゐる。それから累進して公卿補佐になつてゐるけれ共。左大臣にはなつてゐない。又

『りつくわ立花と書く。二水記に。大永二年。池の坊立花の事あり。中世よりの業か』(倭訓栞中編二十八利)

と云ひ又

『爰に天文年中京都池の坊專應といへる人立花にくわしく生花に心を寄せ。書院向。あるひは折。(折恐投誤)入花迄も妙なる手段を生なす。是世にしる處なり』(生花評判)當世垣のぞき)花賞翫の大意

と云つてゐる。之等の記事を綜合すれば。最早當時に於ては。立華。生花。投入等の形式が出てゐたらしく。且つこれを池坊家に於て專業とするに至つてゐることは想像に難くないであらう。東山時代が恁うした花道の全盛を極むる時代となつたが故に。當期に於ては。上御一人より。下萬民に至るまで。この華道が流行して。つひに大衆的藝術としての端を開くに至つたのである。卽ち『人皇百三代後花園院は。松月堂古流に入り給ひ。花術に妙を得給ひて。專ら花道を玩び給ひ。東山相公へ奧義を傳へ給ふに。全く禮を用ゐ給はず。』(挿花故實集上)諸流區々の論

斯樣に流派も次第に區々に別れて行き。各自獨特のものを案出する樣に成つたのである。右の如く。義政自からも花道の奧義を極めんとして苦心してゐる位であるから。彼も上達して一派を開くに至つた。卽ち後に云ふ處の『東山慈照院流』である。又。當時繪畫に。造庭に。花道に。行く處として可ならざるはなかつた天才相阿彌の流派をも見ることが出來る。この時代に於て早くも斯く諸流を見出すことの出來るのは。如何に東山時代が。自然美を藝術美の上に求め樣としたかゞ窺れて面白いものがある。然し當時の花道に於ては。何んと云つても池坊家と。相阿彌の一派が盛んであつたものゝ如くである。卽ち彼等は常に。詩に歌に花に繪に。朋友として親しい

交りをしてゐた人々であつて。彼等のグループが斯道の達人をもつて自他共に任じてゐた形であつた

『洛陽六角堂の池坊專順は。此伎をよくし。連歌を好みて新撰筑波は本にも入たり。打つゞきて其法を傳へ。今に立花を業とす。中略そのかみより此を專業とするは。池坊の外に開元なるものなし。仙傳抄は。立花の古法をしるし、物にて□□に谷川流といふが有。然らば古くも異流ありと見ゆ。それらも池坊につたへて集成したるにや』（嬉遊笑覽十二　草木）

池坊は斯樣に。立花をもつて知られてゐるけれ共。その立花の形式か決して今日の如きものでなかつたことを想像することが出來る

例へば

『瓶に花をさす事いにしへよりあるとはきゝ侍れど。それはうつくしき花のみ賞して。草木の風興をわきまへず。只さし生たる計りなり』云々（專應口傳）

などゝ云つたのは。前述のことを證明するものである。

花とは草木の花のことで。美くしい花をのみこの時代までは觀賞してゐたと云ふのである。從つてこの頃から次第に草木自體の風趣ある枝を愛し。その雅味氣韻を何處までも重視して行つたことは。當然なことゝ云はねばならぬ。花道が藝術的に進展して。草木自體の上に雅味を見出す樣になるのは。その趣味が非常に高級化して來てからのことである。尙最後にこの時代に於ても。右に述べた如き花道の發達が見られるから。從つて花器の如きも。この頃からぼつ〳〵見られるに至つたことは云ふまでもない

『花瓶。土拍子。鏑無。丸花瓶。壺花瓶。細口。結龍。雙花瓶。』（君臺觀左右帳記）一本

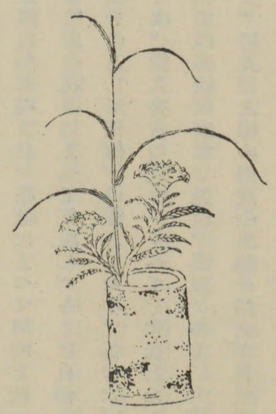
とある。花器の種類は未だ充分これで盡されてゐるのではないから。まだこの外にも幾種類かのものがあつたことゝ思われる。挿花の術と共に。花器の形も勿論自由なものであつた

又この頃花道家としての名手もかなりあつたらしく

『予答曰。源氏活花と云ふ事は往昔室町將軍源義政公政事の暇。月花に御心を委ね給ひ康正二年丙子初冬に江洲蘆浦寺。堺文阿彌。筑紫朱阿彌。京珠慶坊。德大寺義門。大江廣末の六人に命じて五十四帖の花論を極め。花傳抄となし。深く秘して寶藏に納め給ひぬ。源氏の花法は尤も生花の古流なり』云々（源氏活花記）

右は。六人の名家があつたことを證明するのみでなく。彼等が相會して花道論をなし。これを一篇の傳書に書き上げたと云ふのであるから。恐らくこの室町期に於て。一種の花道藝術論が戰はされたものと云ふことが出來て面白い。殊に之等の人々は。僧呂あり。文人あり。學者あり。公卿あり。而して將軍ありだから。その草木の美的觀賞の態度も自づと異り。これを挿花として趣味性の上に求むることは更に面白いものがあるであらう。何れにしても室町期に於て。以上の如き發達が見られたのは。花道美術史上に特記されねばならぬことである。次に

桃山期の花道美術を見て行くことゝせう。この時代になれば。一層茶道は發達し。前記室町時代に於て。義政の時南都稱名寺の僧珠光が。京都大德寺の一休に就て茶道を研究したのがその端であると云われてゐるが。その頃すでに一休や能阿彌や專慶は。すべてに通じた藝術家であつた。之等の藝術家は。何れも禪と云ふ佛敎的背景によつて。各自の藝術を開拓して行つたことは云ふまでもなく。茶道も。香道も。造庭も。花道も。皆佛敎的色彩に濃厚なものとして發達して行つたのである。花道が正しく佛敎的藝術としてのそれであるのは云ふまでもなく。禪と云ふ道をこの上に示したからであつた。室町期



第二十八圖　桃山時代活花　道安作

に於ては。早くも佛教が諸藝術の上に輝く時代となり。佛教が佛教だけとしては獨自の力を失ひかけてゐたのである。獨自の力を失ふことを自覺した人々によつて。實はこれを藝術の力でとり返さうとしたのである。例へば

第二十九圖　桃山時代立華　池坊專好作

繪畫に於ても。從來釋迦や彌陀を本尊とした繪が中心であつたが。室町期からは。自宗派の開祖。又は偉僧の像が中心となつた。何處までも人間的に佛教の接近を見出さうと努力した時代と云ふことが出來る。これが當桃山期になつて。更に顯著となり。當期の人々が人間萬能を自覺するやうに成つて。自個を最高の境地に。從つて人間を超宗教的領域にまで進めて行つたのである。百姓や町人が天下を統一し。諸大名にまで累進する時代であるから。何處までも自個の力を信じて。この自個の力で一切を征服して行かうとしたのである。藝術に於ても當然こうした傾向が表現され。茶道によつて精神を統一し。大自然を築庭や花道によつて征服し。そこに自個を更に偉大なるものとして價値づけ樣としたのであつた。この期に於ては。偉人秀吉の氣分がすべてを代表したが爲めに。すべての藝術は宏壯。艶麗。濃厚。華美。大膽。自由。奔放。超人。之等の態度や思想や傾向が樣式手法の上に表現されて行つたのである。從つてそこには。室町期まで比較的表現されなかつた技術と云ふものが急に表れて來たことを觀過してはならない。この期の挿花を見るに。先づ何よりも花器に一大革命を齎らしてゐる。明和頃の版本『千筋の麓』によれば。利休。道安。遠州。宗佐等の名家の花形が圖せられてゐる。同書は古書をそのまゝ寫したと云ふことも主張してゐるから。やゝ眞を置くことが出來るであらう。先づ花器には。陶瓷器として。水盤。行基燒瓶。雷盆(スリハチ)。細口壺。筒壺。置壺。信樂瓶等があり。竹器乃至は籠器としては。獅子口竹筒。手籠。二重竹筒。登龜二重竹筒。百度切竹筒。一重竹筒。舟形道安切竹筒。鶴首竹筒。宗全籠。置筒。鮟鱇切竹筒。掛籠。手桶形竹筒。置籠等があり。更に銅器には。細口。平口。四方口。盃形。菱細口等があり。更に又塗器としては。馬盥。船形。釣瓶等のものが見られる。花器に於て之等の諸形式が出來たことは。桃山期としては當然なことであつて。一木一草を挿すにも可也の技巧を用ゐ樣とした時代には。先づその花器から苦心を必要としたのであつた。花器に先づその形式美の變化を求め。更に草木の枝葉に變化美を求め樣としたのは當然な行き方である。この頃のことを

『千宗易の頃生入花の吟味專ら行はる。其後古田織部作意に茶道はいろ〳〵むつかしき習ひ事多く。中々花の業までは下根の輩。老人の翫びには屆くまじと除かれたる品々も多し。また寛永年中小堀遠州公作意として。細口の物までに花配りを入て生始め賜ひしを。今の例と成たり。』云々(挿花千筋の麓流行變化の說)

といふ記事がある。この說を信ずるならば利休時代に。彼の主張によつて生花の研究と批判とを行つてゐたらしい。すでに茶道も中々の發達を示してゐたが爲め。一般の民衆は生花の諸法則までは習得しかねたことは當然なことであつたであらう。特に遠州は。利休や宗旦や織部等と比較して。最も技巧家の一人であつたから。こゝに云ふ如く細口にまで花配りを入れて形を整へたであらうことは面白いことである。又

『東山慈照院殿香によろしく。又花に風流を好み賜ひ。珠光より紹鷗と傳はり。千宗易其業妙德に富みて世に知る所なり。相つゞいて道安花に委しく。其形物相のこるものすくなからん。又世に抛入といふは茶人無造作に其枝葉花の形なす事にや。客に對して粗末の詞家門の徒抛

入とは呼べからず。花を折入れ花と稱しては茶室に座敷の飾となす。亦書院座補向は生入生花と稱して專用ゆ往古より今に至るまで其愛する所に二つなしよく〳〵古人の去嫌ふ所を辨へ覺へて家意新作を求めず。其草の心を知り出生を第一に用ひて曲節地の三つと。陰陽の體をわすれず變化自在を盡さば何ぞ古人の趣意に背くべけんや。千草萬花造化微妙の姿必ず出生をたがふる事なかれ。爰に古によつてその術を日々新に行ふべし』（同上不易の說）

この書が明和年中に東都入江玉蟾によつて撰ばれてゐるが。彼が古史を涉獵して書いたものらしい。從つて室町期に於ける東山公の花術などが珠光に傳はり。更に紹鷗に傳り。又利休に傳はり。道安に至つてゐて。この間形式美も祖述され。案出されて。抛入花。生花等の區別を見るに至つたことを記したのは當を得た正しい記事と云ふことが出來る。又。抛入花は無造作な茶人の好む花として。無形の中に大自然の自由な形を求め。座敷客間の裝飾には折入花（今日云ふ處の投入花の一種）を用ゐ。眞の室卽ち書院等には生花を用ゐるなど。次第に整つて來たことを見ることが出來るのである。それは。この書に入れられてゐる。利休や宗旦や道安や遠州の花形を見れば。自づとその味が首肯出來るものがあつて面白い。尙この桃山期に於ては池坊專好と云ふ人もゐて。花道に達してゐたのである。それは

『立花は池坊を以て宗とす。池坊は京都六角堂の執行なり。故に之を池坊流と云ふ。此流は專慶に起る。寬正年間の人なり。師資相傳し。專好に至る。專好は慶長年間の人にして。其技前人に超越すと云ふ。立花には池坊の外に。大受院及び周玉の派あり』云々（古事類苑遊戲部）

等と云つてゐる。卽ち專好と云ふ池坊家の名人をあげてある。專好と云ふ人は慶長四年秋に。洛東大雲院で有名な百瓶華會を開催してゐる。この華會は門人中の傑出せるもの百人を選んで。百瓶の銅器に花を生けさせたと云ふから。この時代としては全く大華會であつた譯である。これは一つには大雲院が織田信長の子信忠の建立せる寺院で。眞安上人の開基であり。この眞安上人が專好の門人であつた關係で。恁うした一大華會が開かれたと云ふことである。この華會の人名を書きとつて。翌年東福寺の月溪に序文をものさせたのが有名な百瓶花序である。本文は隨分長文の爲めにこれを略すが。その一節によると

『夫洛陽繁華之地。有所名六角。眞市中隱也。由是有寺號頂法。當其乾之有深居。名曰池坊。累代以立華於瓶裡爲家業。其元祖曰專慶。自專慶。至于今之池坊專好法印。累十三葉。法印以華馳名。大過先人。夫是謂之後生可畏歟。是故有志於華者。致韓之願。而如草尙之風必偃。天下靡然皆從而師之。其爲任亦重矣。（中略）華旣畢後。法印卒一百人。開瓊筵以坐花。（中略）法印名之曰百瓶華。固當矣。上人兒催此紅會合之意。唯法印具識華眼。而立華以殊絕於人。所以欲便其名益鳴天下也。世人聞此紅會。無貴無賤。無長無少。或膏吾車。或秣吾馬。或策扶老。或鞋垂獵。遠者來近者喜。云々

于時慶長第五曆。龍集庚子。春之仲花朝日。』云々（百瓶華序）

この百瓶華序には大分大袈裟なことが書かれてあるから。急に全部を信用する譯には行かないが。兎も角當時としては前古未聞の大華會であつたには相違なく。且つ又專好が當時傑出した華道の大家であつたことも相違ない。專好が大家としての面目の裏面には。彼は何處までも藝術家的態度をとつて。常に創造的努力を忘れなかつたことによるのである。桃山期に於て。特に立華の如きものが創造されたのは當然なことであつて。立華が立華としての面目を發輝する樣になつたのは。この專好の努力であると余は主張するのである。實は桃山期に於て。桃山城や西本願寺や北野神社の建築が現れ。山樂や永德によつてあの雄大な繪畫が三寶院その他に現れ。行く處として雄大。華美。自由。奔放ならざる藝術はない。華道美術に於ても。從來の板押。床の間。書院。客間の小

建築に從屬した時代は。茶人向きの寂しい小瓶に。內的な自然を求めて足つてゐたであらうが。この時代になつて。大建築の裝飾としての華道藝術は。當底それを許さなかつた。それは桃山期の時代が然らしめた當然な歸結である。そこに表れたものが立華の藝術でなければならぬ。專好がこの時代に出たことは。桃山期の欲求した天才家として許されるに充分なものであり。桃山期の裝飾美術は。これで兎も角完成の域に達したと云ふことが出來る

『此花形池の坊祖父專好。勅に依て加茂の山の赤白のつゝじの咲つらねたる體をうつしたるよし古さの傳へし』云々（池の坊家傳百ヶ條聞書）

とあるのは當然なことである。專好が加茂山の赤白躑躅を一瓶の中にたゝみ。艶麗華美を極めてこそ。始めて桃山期の大建築に申分ない花となつたことは。想像するだに痛快である。今家元に版として殘されてゐる圖を見ても。當時この位までは進展してゐたであらうことを想像するに難くない。然し當時の美術にあつては。他面人間の生く可き大自然を愛そうとする精神から。その美術が如何に華美艶麗を極むると雖も。決してその自然が有する內容を切り捨て樣とはしなかつた。利休にしても。宗旦や道安にしても。亦は專好や遠州にしても。草木自然の味を表現する爲めには非常な苦心を用ゐてゐたのである。そこには決して自然を一つの型に入れ樣とする如き。非藝術的態度をとらなかつた。ある時利休の弟子が二重花器に花を入れる場合。その上と下との何れに入る可きかを尋ねた時。彼は。その何れに入れるもよく。只その時々の風情に從ひ。都合のよい樣に入れることが必要であると說いてゐる等。單なる一言の內にも大自然の決して規定さる可きでないことを示してゐる。又

『出レ自二池坊泉光一。（專好）凡催二立花一前自登二山岳一擇二其枝幹之堪一用者上手伐レ之泉涌寺山清閑寺山所レ生爲レ宜。凡一瓶之中一條高挺出者謂レ眞其次稱二小眞一。自二眞木並小眞一。合有二七種枝名一。雜二挿小枝及草花於其間一。凡眞雖レ用二諸木或竹莖一。多以レ松爲レ本。此兩山松多屈曲而葉短色青爲レ堪レ用。』（雍州府志）

と云つて。專好が立花をなす時は。必らず山岳に登つて自然を親しみ。その風雅な枝を求め。一瓶中に大自然を寫すことを忘れず。裝飾藝術としての立花の中にも。よくこの大自然を生かしてゐたことが明かに窺知されるであらう。又遠州が洛西桂川のほとりに庭を作つた時も。實によくあれほどの技巧をこらしながらも。京洛の地方色を庭中に疊んでゐることは。先年これを拜觀して感じたことである。兎も角桃山期に至つて。斯くまで藝術は新らしい生命を宿し。新運動に向つて發展しつゝあつたのである。而も當時は。揃ひも揃つて大天才家の續出により。一層この使命をして達成せしめた感があると云ふ可きであらう

『豐臣大閤ある時大なる金の鉢に水を入れ。床に置き。傍に紅梅一枝置かせられ。利休に花つかうまつれと仰せらる。其時利休枝を逆手に取り。水鉢にさらりとこき入れたれば。開きたるとつぼみたるとうちまぜり水上に浮みたるが。ことの外風情面白かりけりと。みな〳〵感じけると云傳ふ。』（本朝瓶花史）

この圖は同書及び『千筋の麓』にも揭載されてあるが。これは正しい生花ではないけれ共。自然を斯くの如く表象し樣とする處に。又利休の天才が輝いてゐる。當時の天才家は。何れも挿花の中に大自然の全體と。大自然のもつ部分とに特殊な藝術眼を有してゐた樣である。そこには大自然をそのまゝ生かす自由奔放さと。局部を生かす內的技巧とを。常に思ふがまゝに表現してゐるのを見るのである

要するに桃山期に至つて。花道美術は先づ大成されたと云ふことが出來る。それ故に。次期からは。桃山期の祖述や摸倣や。或ひは又整形や細部の技巧によつて進んだと見ることが出來る

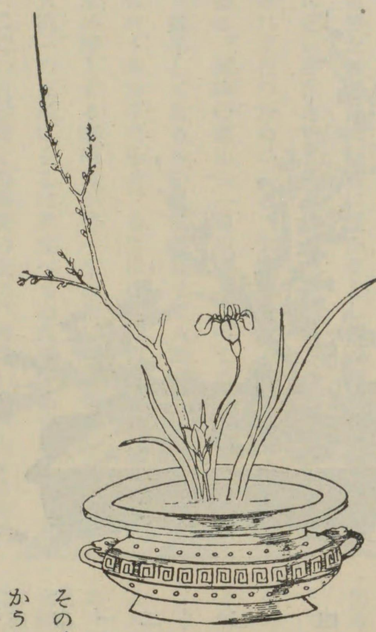
第四節　江戸時代に於ける花道美術の完成

日本美術史の大系的考察をなす場合。先づこれを左の如く分類し。その中の花道美術のみがこの江戸時代になつて漸やく完成したのは。尠なからぬ考察の興味がなければならないであらう。即ち他の諸美術が。早くも飛鳥。奈良に於て世界に誇る可き傑作を出し。續いて平安鎌倉室町桃山と。その時代時代に於て相當の完成を見せてゐるが。華道美術に至つては。之等の各時代に發展的境地なく。漸やく江戸時代に至つて。完成を見たに過ぎぬ。勿論前期桃山期からそうした完成的曙光は見えてゐたけれ共。花道が美術的に眞の完成を見せたのはこの江戸時代である。尠なくとも一千年前後も他の美術よりおくれたのは。一體何故であらうか?。この究明をしない限り。江戸期の花道美術史は意味をなさないであらう。先づ日本美術史の分類を示すならば。その大系的組織に於て下の如くである

日本美術史の大系的分類
- 日本建築美術史
- 日本繪畫美術史
- 日本彫刻美術史
- 日本工藝美術史
- 日本華道美術史
- 日本造園美術史

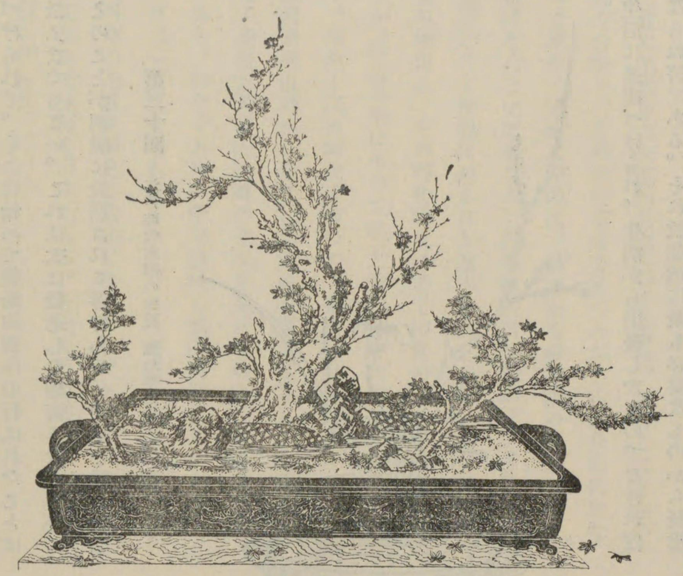
右の分類に從つて先づこれを考察するならば。建築は人類の生存と共に存在しなければならぬが故に。何れの美術史よりも。その史的領域が長いと云ふ可きである。即ち上代人類の間に於ても。他の何れの美術よりも早く存在してゐたと云ふ可きである。この建築の發達につれて先づ工藝及彫刻美術が起つたと見る可きである。勿論この工藝中に於ける銅鐵器及石器の如きは。考古學が證明する如く。或いは建築よりも古い存在であつたかも知れぬ。然しそれが美術的に達成される樣に成つたのは建築の發達につれて。その建築を裝飾し。その建築に基礎

づけられて。そこに始めて美術的製作の行はれたことは云ふまでもない。これは次に發達した繪畫に於て。特にこのことが明瞭に說明される譯である。美術と雖も勿論である。從つて生活に最も關係厚きものから。美術的發達があり。その生活の度に從つて美的要求が異るのである。原始時代に於ては。その生活が自然に卽せられてゐるから。自然を別に美的態度に求むる必要なく。自然と人間とは極めて接近した處の存在として許されてゐたのである。それが次第に文化の度が高潮すると共に。人間は自然から別個の存在となつて行く。自然から分離された別個の存在となるに從つて。人の心は常に自然への還元を要求する樣になる。それは實に人間本能である。人間の存在が自然の中の一存在であるが爲めには。人間は自然と全然分離されては一切の生活がなくなる譯である。その爲めには人は常に自然の內包的存在として生きて行からと努力する。この努力こそ卽ち自然還元の本能である。斯樣な意味に於て。その生活が。次第に自然から切り離されゝばさるゝほど。そこに自然を求むる必要な要求が生れて來るのである。それ故上古より近代に至るに



第三十圖　江戸時代末期の生花　池坊專定作

生活に基礎づけられ。生活から出發したものでなければならぬ筈である。それ故生活に最も必要なものから發達し。生活の內面を飾る努力によつて美術は生れて行くの



第三十一圖　江戸時代末期生花　未生流紅葉散景色

從つて。自然の草木を愛し求むる美的要求が熾烈となり。この美的要求をして。藝術の上に表現しやうとすることは。當然なことである。江戸期に於て華道美術が。完成の域に到達したのは。斯る原則から導き出された必然事でなければならぬ。このことを左に細別するならば

一。自然を求むる心の強烈になりたること

二。自然美を藝術美の上に再現しやうとする美的再現の強調されたこと

三。住宅建築の完成につれて。室内裝飾の要求が盛んになりたること

四。鎖國により外國文物の輸入なき爲め。自國文化發見に努力せしこと

五。平民主義。平等主義の思潮旺盛なるにつれて藝術の大衆化せしこと。特に婦女子の藝術として愛されたこと

大體に於て右の五原則が。江戸期に於ける華道美術發展の基礎をなしてゐると考へることが出來る。今少しこれを細論するならば

（一）の自然を求むる心の強烈になりたる點は。前期桃山期までは。何れかと云へばあまりに人間自身を強調しすぎてゐた。人間が萬物の靈長であると云ふ思想は。自然の上にも君臨するものゝ如く考へるに至り。あまりに自然を無關係の領域に置かうとした。自然は人間と別個に近い存在として考へてゐた。然しそうした夢はついに破れて行つたのである。大閣が築き上げた伏見の武力萬能は。何時の間にか一種の夢となつてゐた。人間は自然と握手してゐるものほど最後まで人間らしく強いことが知れて來たのである。そこには遠州以後の自然を強烈に求め樣とする藝術家が控へてゐた。華道美術の完成すべき第一の原則はそこに芽生へてゐたのであつた

（二）の自然美を藝術美の上に。再現しやうとする美的再現の強調は。右の如き理由のもとに。草木の花を愛し。そこに一層美くしい人間愛を通した草木美を見樣とするデリケートな要求である。大和民族は。その國民性から云つて。自然を愛し。自然をそのまゝ美的觀賞したのでは物足りない國民である。その自然を再び藝術の力を借りて表現しなければ止まぬ特徴をもつてゐる。單なる所有欲によつて草木の枝を折りとるのではなく。草木の枝を折りとつて。更に今一度自然を創造しやうとするのである。そうした努力の強調が花道藝術の完成にまで展化して行つたのである。この美的再現が生活の上に要求される樣になつたのは。實に江戸時代からであると云ふことが出來る

（三）の住宅建築の完成につれて。室内裝飾の要求が盛んになり。その結果花道藝術の完成を見たのも當然である。桃山期から書院建築の流行と。住宅建築の上にこの書院造りの要求され。これが大衆の中に求められゝ樣になつて。住宅建築は江戸期になつて面目を一新したのである。從つてそこには書院の間。床の間等が盛んに表れる樣になり。これを飾るものとして。從來書畫幅。卷物。武器。茶道具等があつたが。更にこの上へ自然のまゝの

ものを要求するに至り。そこに草木を美的に飾ることを必要とする樣になつた。從つて大建築。大廣間には立華を。小住宅。小書院等には生花。投入。盛花を飾る樣になつた。そこには從來までの供華や。献花や。そうした種類のものよりも。人間本位の活花として。又は。裝飾本位の活花として。草木を藝術的に扱ふ樣になつたのである。そこには花道藝術が必然に完成せられずにはゐなかつた

（四）の鎖國方針が。自國文物の發展を促進せしめたことに就ては。特に寛永年間。その七年には洋書の舶載を禁じ。同十五年商船以外五百石以上の大船を禁じ。同年耶蘇教を嚴禁し。同十六年外國貿易を嚴禁した。この鎖國によつて外國文物は一切中斷されてしまつたので。そこには當然自國文物の進展を。國民性に立脚して計る樣になり。日本獨特の藝術が爲めに現れる樣になつたのである。斯る機運によつて花道藝術はこの意味からも。當然完成へと急がねばならなかつた。その證左として花道に關する專門の書が出版される樣になつたのは。主として寛永以後のことである。例へば

仙傳抄	寛永二十年	版本
御飾書	萬治三年	同
替花傳秘書	寛文元年	同
立花百瓶	同　十三年	同
立花初心抄	延寶三年	同
古今立花大全	天和三年	同
立華正道集	天和四年	同
抛入花傳書	貞享元年	同
立花時勢粧	同　五年	同
古今或問	元祿五年	同
立華訓蒙圖彙	同　八年	同
當流茶之湯評林大成卷二	同　十年	同
瓶花圖彙	同　十一年	同
生花秘傳集	同　十五年	同
花道全書	享保二年	同
池坊新編立華百瓶圖彙	同　九年	版本
立花全書	享保十四年	同
立華指要大成	同　十八年	同

（いけはな古今書籍一覽）

寛永から享保に至る約一百年間の版本だけを見ても。以上の如き多くのものが出てゐる。そうして之等の版本が時代の進むに從つて出版數を增してゐることも。如何に自國文化發展と云ふことが寛永以後急激であつたかを知るに足るものがあると思ふ。鎖國もこの意味に於て花道藝術の上には。決して不利なものではなかつたと云ふことが出來る

（五）の平民主義。平等主義と云ふことが。又江戸期に於ける花道藝術の助長となつたことは特筆しなければならぬ。時代が恁うして平民主義。平等主義となれば。當然藝術も貴族階級から下層階級に向つて普遍化する樣になり。殊に女性の藝術欲求が加つて。花道藝術が女性の藝術として强く民衆化した。花道藝術がこの女性のものとなる爲めには。一つの型を要求した爲め。一面にはそこに墮落も見出せたのである。然し兎も角そうした要求によつて眞に自然の味をもつ藝術として。花道が完成したのである

大體に於て之等の諸點は花道藝術を完成せしめた最大原因として考へることが出來る。從つてこの頃から諸流の花道が起り。池坊。青山流。松月堂古流。遠州流。美笑流。古流。石州流。未生流。東山慈照院流。千家古流。嵯源流。靖流。相阿彌流。竹心流。松光流。その他數十流の流派が起るに及んだ。卽ち池坊では。專朝。專存。降つては專定。專明等の大家が續出した。寛永の頃には將軍家光の召によつて專朝自から江戸の地に下つたと云ひ。又は專朝の僕。岡西八兵衞と云ふ人が招聘に應じたとも云つてゐる。何れにしてもこの頃から江戸に花道藝術の流行したことは勿論で。將に江戸の婦女子は貴賤の別なくその技術を習らつたのであつた。その當時どの位流行したかは不明であるが。當時の狂歌や川柳に

『池の坊の投入の花を見侍りて
江戸に出て都の花をいけの坊みる人舌をふるふ獅子口』（紀遇江戸枝折）
と云ひ。又
『品川で投入にする目黒花』
と云つてゐるし。又
『七月七日。立花會。東本願寺（淺草）西本願寺（築地）〔各數瓶の立花。砂の物あり。諸人の見物をゆるす。〕〔京都西本願寺又六角堂池の坊の立花も。牛女に手向る心なり。江戸もこれにならふ。〕（東都歳事記秋之部）
『又立花活花狂歌俳諧圍碁將棋等の集會音曲家女伶（おさりと）の浚會等あり。』（同上春之部）
とある。勿論これは時代が餘程經つてゐるから當然なことではあるが。兎も角種々な挿花が江戸で流行してゐたことは事實である
次に青山流はこの頃十六世基秀の門人に桂月園泰雅があつて。江戸青山流の祖となり。これも江戸の挿花を盛んにしてゐる。更に又。小堀遠州から出た遠州流も盛んになり。五世春秋軒一葉の門人春草庵一枝が江戸にゐて。日本橋遠州を開き。その門人里松庵一壽は。庵號遠州を開いた。又同じ門人の本松齋一得ほ。これも江戸にゐて淺草遠州の祖となつた。又。一枝の同門なる貞松齋一馬は正風遠州を開いた。その外櫻遠州。一甫流遠州。軒號遠州。新遠州。都遠州。遠州古流。遠州眞流などゝ實に無數の流派が出來て居り。そうして主として之等の流派は江戸を中心として發展して行つたのである。遠州流に就ては
『江戸に近ごろ專ら行はるゝは。遠州流。石州流。宏道流などゝて。何くれといへども。大方遠州流といふものと異らず。遠州とは小堀宗甫の名を假たるにて。もとよりあらぬことなり。』（嬉遊笑覽卷十二）
とあつて。遠州が江戸期に江戸を中心として盛んであつたことを記し。二三の諸流も遠州と大差ないことを記してゐる。又
『殊さら遠州流には。夜話と呼ぶ夜の茶の湯は極秘にして。中々其流儀の人たりといふも。未熟の人は知らず。是に夜の花の生形ありて。すべて傳となす。先づ茶道を知らずして。夜の花の生方覺束なし。』云々（生花評判當世垣のぞき）
こんな秘傳などゝ稱するものもあつたのである。その外
『流祖遠州公の三股配は寛永年中に工夫あらせたまふ木の三股を切て細口物に至るまで用ふる所なり。』（意匠再編）
こんなこともやつてゐたらしく。この外に五世一葉は丸木の配を用ゐたと云ふ。正風遠州の貞松齋一馬がものした「挿花衣の香」には。極めて曲線の多い挿花で飾られてゐる。尙遠州流に就ては
『本松齋一得是東都遠州花道の元祖也。則ち元祖七代の續本松齋淺草に任す。呼んで淺草遠州と云ふ。本松齋同門に一枝と云有り。是は日本橋平松町住一葉上京後自ら春艸庵と號す。是庵號遠州の祖也』（挿花濫觴記）
と云つて前述のことを物語つてゐる。この淺草遠州の一派は。その場所柄だけに。遠州中でも特に技巧的であり。曲線的である。この江戸期に於ては。すべての花道が完成したが。その反面には又隨分墮落もしたのであつた。流派の斯くの如き數多のものが起ることによつて。常にその口論多く。枝葉末節のことに就て爭つたのである
『頃日瓶花流或門者數十百家互爭論未議其是非』云々（衣の香）
と云つたのは事實であつた。次にこの時代に於ける松月堂古流も發達した。松月堂は明惠上人から起つたと云ふが。その正否は充分研究の餘地があるであらう。最初上人が松月堂叡尊に就て茶道を修得されたと云ふことに成つてゐる。義政。利休。庸軒等を經て中流軒宣流に至り。更に是心軒一露に至つて古流となつたと云ふのであ

る。このことは

『爰に是心軒一露翁先師宜抑叟より松月堂の傳を受けて古流と名つけ世に流布し給ふ也』（東向雪月花）

と語つてゐる。一如庵百華は

『往昔栂の尾の明惠上人は花と茶の祖たりといふ事世の人のみな知る所なり。然れば此上人は何事も天性に背かず。自然の理花にかざらず其私なく。有べきやうと教訓し給ひ。其後花茶とも十流百家に分るといへども。中興茶道の高名は千の利休宗易なり。是等の人はみな此古流の奥儀を渡りて。本來無一物又大極は無極なりと悟道に及びて茶花に宗易も無法と稱せり』云々（松月堂百瓶）

と主張してゐるが。實に本書に圖せられてゐる多くの花は何れも自然に近く生け上げてある。茶花に宗易は無法と稱せりと云つたあたりは味ふ可きことである。そこまで行かねば實は眞の花道藝術は完成しないであらう。又この時代に美笑流と云ふのもあつた。美笑軒道覺によつて起されたこの流派は。後。赤阪美笑流。名古屋美笑流。美笑古流等に分派して行つた。そうして安永九年には「美笑流四季百瓶圖」なる本まで出版される樣になつた。從つて文化四年淺草觀音堂で二十四流の花道大會のあつた記錄の中へも。美笑流は掲載されてゐるから。充分江戸で發展してゐたものであらう。この目錄の中へ。古流。千宗古流の二つが古流として見へてゐるが。古流も隨分澤山に分派したものである。江戸時代にあつては。少し先人又は師と意見の相違を生ずれば。早速別派となつて爭つたことは前にも云つた如くである。斯る傾向は

『近頃學問藝術世話有て度々藝術見分に立合て見るに昔よりは新流甚だ多く出來たり。可笑嘆息すべき事なり』云々（賤のをだ卷）

と云つてその間の消息を語つてゐる。從つて古流に於てはこの傾向を恐れて次の如く云つた

『古流の元祖は皆血臭きめに逢て化おふせて然も自分流儀を立師を立んとしたるにもなく其人の名人なるを諸人慕ひて衆人より押あがめて師と立流名も師を尊んで關口流疋田流などと世間より付たる流名なり夫を今の人精力も學力も劣りたる疊の上の工夫にて我と流名を立ると云は途方もなき事なり』云々（同書）

この說明によれば古流は後世行はれた如き意味で流派を立てたのではないと云つて辯明してゐるけれ共。然し古流と雖も時代の潮流には適し難かつた。古流が應雲法師から出發して。篠井全及。石崎松庵。相阿彌を經て江戸期に入つたと云つても。古流が古流として立つ樣になつたのは勿論江戸時代からのことであらう。この時代松應齋凉宇に至つて江戸古流が出來。松月堂と共に多くの分派を生ずるに至つた。利休を祖とする一樹齋宗祐は。千家古流を主張し。義政を鼻祖として主張するものは東山古流と云ひ。この外に天眞古流。大和古流等があつて江戸時代の古流を基礎づけたのであつた。次に又前の美笑流を學んで起つた未生流も盛んであつた。その祖は未生齋廣甫で。このことは

『此技傳來已久流派各別近世浪華未生齋廣甫翁尤工=此術-集大=成之-以成=一家-建-號曰=未生流-』云々（挿花錦乃幣序）

と云つてゐる。又一說に未生齋一甫の義子が廣甫で。廣甫は二代だとも云ふ。然し彼は一大天才家であつた。嵯峨帝からも本朝花道中興の六字を賜つたと云ふ。未生流は彼によつて大成してゐるから。彼を流祖と見るも差支ないであらう。その後彼の門人一圓齋一甫は一圓流を起し。一々庵政甫は眞道流を。凉觀齋露玉は慈照院流を。千秋庵鶴翁は千秋流を。又政甫の門人なる淸風齋枕石は條風順天流を。露玉の門人なる竹流齋淸風は淸風流を。同門寸園居章甫は嵯峨御院流を起した。然し之等の流派は何れも大同小異。種々な外的關係で別派したものが多く。決して藝術的立場から分派されてゐるもののみではない。錦の幣の中には後の一甫や源甫等と云ふ人の花も見えてゐて。その自由にして大膽な風情のあるものが見られる。次に源氏流の花を江戸期に於て考へるならば

『源氏流――安永中千葉龍卜より始まる』（大日本人名辭

書）

とある。又

『先生姓は平族千葉名胤綱字龍卜。松翁齋と號す。播磨赤穗の人なり。嘗て大和攝津の間を遊行し以て其傳を廣む。後東都に來て其業僻らす。』云々（源氏活花記）

又

『我幼時より花を好て諸流の傳を聞て花を翫ぶ事多年なり。千家流石州流遠州流などゝいふも皆中頃の事にして。只茶席の花ばかりありて書院の活花法式花別がたし。』云々（同上）

從來傳統的な家ばかりから出てゐた花道家は。江戸期になつて自由な民間藝術となり。前述の未生流やこの源氏流の如く。その天才と研究的努力とによつて起るものが尠なくなかつたのである。浮世繪が從來の一切の傳統から離れて。獨自な世界を見出した如く。江戸期の花道にも獨自い世界が濃厚に見出せるのである。これ等の例は嵯源流に於ても認められる。嵯源流は嵯源齋政康によつて起された。然しその後天才家なく。一時沒落の形であつたが。白圭齋に至つて東公流を。好文舍花兒に至つて同仁流を。花明軒亀玉に至つて村雲流を。一龍齋花山によつて敷島流を開き。各々世に出た。之等の流派の外に古書に散見するものとしては。常磐井流。故實古眞流。日吉流。竹心流。松光流。天眞流。相阿彌流。靖流。宏道流。二條靖流。東山慈照院流。八代流。東山流。天山流。無雙眞古流。天聖流。石州流。利休流。操石州流。布葉流。珠光流。千宗流。宗全流。古田流。高野流。素性流。風草流。田澤流。庸軒流。道玄流。銀鴎流。道和流。近衛流。雲洲流。遠宗流。袁中郎流。遠萩原流。千秋流。伏陽館御流等の四十幾流の外無數に流派はあつたことゝ思ふ。之等の流派はその多くが。師との關係上面白からぬ點から分派したものが多く。流名も從つて自己の號によつたものが多い。從つて花形も比較的に接近してゐて。大體の形は眞行草の區別に從つて天地人。眞副躰。序破急。日月花。上中下等の名稱を異にするも。三角形から全然離れたものは尠ない。然しこれとても明治以後の花道に見る如き整然とした三角形ではなく。自然の味を充分に見せる程度に於ての三角形であり。自由なものであつた。これは實に德川期の花道に於て特に誇る可きことであつた。一體に氣韻生動を尊び。花の上に人格の表出することを唯一の奥儀と考へてゐたことは嬉しい。大自然を愛し。大自然の再現をもつて人間生活を飾ることを。この草木の上に求めた花道藝術は。單なる裝飾としてのみの存在ではならぬ。江戸時代に於ける花道家はそれを充分味つてゐた。一瓶の草花を生けるにも深山高岳にその自然性即ち出生を究明し。床にこれを生ける場合も自から詩人となり。自然人となつてこれを樂しみ。無我の境地に入つてこれを生けた。時にはあまり附會の論議をした人々もあつた樣であるが。それも實は研究が深淵に成つた結果に外ならぬ。然し之等の諸流派も從つて內的にその人格趣味の表現を强調した點に於て。池坊や古流は比較的に自然を自然として味ひ。出生を强調して草木本位であつた。遠州はこれに反して自然を詩的に味ひ。草木の中に詩を求めてゐる。未生流は自然の風情を出すことに努力した。又古流が印象的であれば。青山流は寫實的であつた。勿論各人各樣。その各々の行く處を異にしてゐるが爲めに。今は大體の見當に過ぎぬ

更にこの時代に於ては。急に花器が發展し。各流派の家元乃至は一般花道家は。その好む處に從つて花器を製作した。花器が流派の花形によつて考察される樣になつたが爲めに。江戸期に於ける花器は全く無數の形式を創造した。竹器。木器。銅器。鐵器。銀器。陶瓷器。漆器。之等の材料を異にするものが。全く無數の形となつて表現されて行つたのである。（花器に就ては拙著日本花器類考に細論してゐるからこれを略述する。從つて同書を參考されたい）こうして。花器花臺の發達は。後には花道とは別に發展して行つた。それ故花器の如きも。江戸期になつて完成したと云ふことが出來る。花器が完成したのみでなく。花配。花留。又は諸道具に至るまで便利な

ものが出來た。更に又特筆しなければならぬものは。この江戸時代に於て。各流の家元なるものは。何れも傳書なるものを作製し。各流派の極意。虎の卷として貴重視し。門弟にこれを授けて嚴守せしめた。從つて門弟に對しては。各流各々自流の尊嚴の爲めに職役なる制度を設け。入門。初傳。中傳。奥傳に從つて肩書を附した。その制度は主として家元を中心とするもので。家元。職役。各國郡職役。普通職役に區別してゐる。之等の職役は家元へ對する功勞者としての表象が主であつたが爲め。後には藝術的立場からこれを得ることに努力するものなく。各流派ともその爲めに墮落に墮落を重ねて明治時代に入つてゐる。傳書にしても。藝術的立場からこれを纏めたものは比較的尠なく。その多くは草木の出生に就て斷片的な研究を書き上げ。一つの草木が何時頃葉を出し花を咲かせ實を結ぶかと云ふことを極めたり。紅葉する時は何れから紅葉し。又は水草の葉の向き方だの。水陸の生け合せ等のことを述べ盡してある。それには陰陽のことや和合のこと。又は特別の場合の裝飾法等に就て各流派の考へ方を述べてある。從つて流派別には。比較的個性が表現されるけれ共。各個人的には多く個性が無視され。典型的に規範的に表現されて行つたのである。江戸時代に於て完成された花道が。何故明治時代に入つてそれほど發展しなかつたかは。幾多の理由もあることながら。その主なるものは前述の職役制度と傳花の秘密であつたと云わねばならぬ。そこには藝術的獨創性を認めず。流派的特色を發輝さす爲めに。個性を否定した。自然の出生を表現することを主張しながら。それすら自流の支配下にあつたから。結極草木の出生とは各流派の形式的則定に外ならなかつたのである。只然し。江戸期に於ける花道美術は。その初期より中期。即ち元和から元祿前後に至るものは極めて自由であつて。流派的特色が尠なかつた。それが中期から末期に進むに從つて流派的特色が濃厚となり。型式的に統一され。枝葉末節の論議が盛んになつた樣である。從つて花道が美術的に傑出してゐるのは中期までのことである。例へば

『いま挿花家諸家有といへども昔の人の名をかりて其流を汲といふも漸やく百年そこらのことなり。其以前は何流といふこともなく前にいへる一書の禁忌等そこゝとり用それに他に用なき其家々にのみ要することを秘傳として加たるおもむきなり』云々（允中挿花鑑）

と云つてゐる。この書が天保年中に出來てゐるから。元祿以後の花道になつて諸流派の多く生じたことゝ。その流派の大した價値のないことを喝破してゐる。諸流派が斯樣に無意味な存在であつた位だから。當時の花會の如きも。末期になるに從つて墮落し。藝術的な花體を觀賞するよりも。その花器花臺に金をかけてこれを自慢するに至つた。この傾向を笑つて

『當世生花會をみるに器物に善盡し美つくし金銀にてちりばめ』云々

又

『花も器に奪はれ見る人も道具に目をとられ。けふの花は何れがおもしろくかなたなるとり合風情ともによしあしなどはいわずさて〳〵しか〳〵の瓶は結構なるものにてありしこなたにありし釣瓶は銀環にて緒も眞紅也紫也など花の好惡は譽ず。當時は華生の見物事にぞ成たり。或は珍花を詮義し牡丹一輪に金何片出したりそれの花を銀何十匁に調たりなど高金を出したるを自慢する豪家のむすこ有。』云々（生花評判當世垣のぞき）

とまで言つてゐる。江戸末期と雖も。心ある藝術家は何れも右の有樣を心痛してゐたことであらう。これ等のことは各流派に出してゐる古版本の挿圖を見ても明瞭に窺知されることである。末期に近いものほど殆んど風流の味なく。何處までも花器花臺に心を用ゐてゐることを一見首肯することが出來る

然しながら。兎も角日本の諸美術が。おそくも桃山期までには大成されてゐながら。花道美術のみがその大成を見るに至らなかつたのであるから。この江戸期に於て斯くも發展したと云ふことは。實は驚く可き世界的藝術

の創造と同時に完成時代として。限りなき敬意を表し得る時代であつたと云ふことが出來る。それは即ち花道美術が。日本にのみ創造された藝術であり。而も草木と云ふ大自然を藝術の中に巧みに織り込んだものであることから考へて。吾々は斯る世界に冠絶する偉大な美術を。よくこの江戸期の人々によつて大成されたことを思ふ時。あの浮世繪が世界的大藝術として迎へらるゝと同じく。何れも江戸期の藝術家の誇りとして禮讃し度いのである。否吾々の禮讃は當然すぎる程當然なことで。英國の一美術評論家ステワード・ヂック氏でさえ

『日本で生花が數百年間一種の美術として認められたことが吾人の驚愕に價することであるが。その流派。その規則。その口傳。そうしてその代表者の中に相阿彌。小栗宗丹。尾形光琳の如き大美術家を數へ得ることは。ヨリ多く歡喜する處である

日本の生花に關して纖細にして且つ美麗なものは。その極めて靜的にして且つ人工的なる形體に於て魅力に滿ちてゐることである。何故ならば形式の下に横る精神と。生命を表現することは實に彼等の天才である。自然美に對して敬虔の愛を持つからである。それは千利休に就て述べられねばならない。彼は有名なる花道家にして且つ哲人。茶人であつた。或時彼は綺麗に咲き誇つてゐる朝顏の垣根を。傍にあつて暫く夢中になつて觀賞した後。彼は一つの花及び一つの葉を拷りとつた。そうして彼はそれを一つの花瓶の中に生けた。それ故彼の友人及び門人が凡ての草木が自己の我儘勝手に其處にある時。何故それが見惡いかを尋ねた。利休の答に否々そうではない。構想の魅力によつて自然を再現する事は不可能であるけれ共。如何なる人工的構成も溫雅と單純とを目標としなければならぬ。そうすれば一葉一輪にても觀賞を要求するに充分である

日本の生花に於ては花のみならず。又多くの無花の草木をも取扱ふ。それは美くしい成長といふ習慣的特色である。目標とされてゐるものは明瞭に線と均等と色彩と

である。そうして色は多少之等の性質に從屬されてゐる。

（中略）

それは日本の技術家は自然の單なる模倣者でなかつたからである。そうして又各部が或物を意味しなければならぬ。或る理想を傳達しなければならぬ。第二は自然に對して忠實なる表示の意味に於て。草木の出生の樣式を正しく用ゐねばならぬ。第三は嚴格なる觀察に於て自然に對しての眞理。理性と地方色の法則を主とするその組織の異りたる部分は各々特別な名稱を附する。又多くの缺點をもつて而も其缺點に初心者は陷り易い

（中略）

この溫和なる藝術の。極めて僅少ながらに有する快活な特性は。其魅力の次第に消え行くやうな性質ではない。繪畫彫刻漆器に於ける技術家。及び金屬技術家は後世に殘し得る作を爲す。其後數百年を經て彼の名聲はそれが今日あるよりもヨリ偉大となり得る。然し乍ら花に於ける技術家は彼の作に於て。斯る永久的の生命を保持することは出來ない。置物を作る創造は何うしても只「一日の百合」瞬間的藝術を造るに過ぎない。彼の最もよき企は只過ぎ行く時に對して甘味と美とを與へるのみである。』（舊日本の美術工藝第八章造園と挿花）

と云つてゐるではないか。利休以後に於て草木をそのまゝ用ゐて眞の藝術となし得る努力は。斯くして江戸期の人々の誇りに歸せねばならぬ。草木を美的に再現し構成して。そこに限りなき大自然の愛に抱きゞられ樣とする氣持は。日本民族に特色づけられた天惠でなければならぬ。斯る日本の國民性は。第一節から述べ來つた如く。その神代から自然の內包としての人類生活がすでにその端を發してゐる。大和民族は常に大自然の內に抱かれなければ生存し得られない詩人であつた。貴族も平民も共に一大詩人として。一大藝術家として生活して來た。特にそれが自然の惠みに感謝しつゝ生きて行く詩人として。又は藝術家としての本能をもつてゐる。決して自然と別個な詩人や藝術家としてのそれではない。そこに限

りなき美くしい人生を見出すことが出來るのである。この意味に於て。花道美術は日本にのみ眞の發展を見ることが出來。外國文物の輸入多かりし明治時代に入つて。それの墮落したのは當然であつた。それ故に予は日本華道美術史は先づこの江戸期をもつて一段落を告げ。更に明治期の不振から大正昭和の二期に亘つてこれが復興しつゝあることを言明し得る。本稿はそれ故この江戸期をもつて一先づ擱筆することゝせう

× × × ×

尙明治以後の日本花道美術史に就ては。現在の諸流派も細論しなければならず。そうする爲めには數百の流派に亘つての考察がこの書に於て不可能であり。且つ本名鑑に現存諸家の傳記等が明細に掲載されるが爲めに。自づと明治以後の花道美術史は明白になる事であるからそれ等の性質上。明治期以後のものは他日に讓る事とせう

昭和三年十一月三日明治節の佳日にこの稿を終る。
備中吉川の草庵に於て。

日本花道美術史挿圖說明

（第二十二圖）　上代　神籬　岡山縣上房郡吉川村八幡宮

上代人が自然の草木を愛敬しこれを神として祭ることは第一節に論じた如くである。神木へ白帛を附して祭る神事は現在にそのまゝ傳つてゐる。この神籬はハツケと稱してゐる。當社が一名椙原の宮と云ふのも。杉の木を神格化した處から來てゐるのであらう

（第二十三圖）　奈良時代　持華諸尊　東大寺

飛鳥時代から盛んになつた佛教はその教理の一つとして供華のことがある。この圖は東大寺大佛の蓮瓣臺に彫刻されてある諸尊の供華圖である。佛教に於ても自然の草木を敬愛したことは神社と變りがない

（第二十四圖）　六朝時代　貴族持華　支那新疆省發掘

佛教傳來までに。支那に於ても自然を愛し草木を認めてゐた。三人の貴族が華を手にして歩んでゐるのは極めて面白い

（第二十五圖）　平安時代　持華如意輪　河内觀心寺

平安朝になつても。諸尊の持つてゐる花の形式にはあまり變化がなかつた。然し華も葉も實も共に愛した當時の人情として考へればそこに面白い自然愛の精神に接することが出來る。河内觀心寺藏の如意輪觀音はこの氣持に出來てゐるのであらう

（第二十六圖）　鎌倉時代　蓬萊盛花和鏡　東京美術學校藏

この時代花臺と花器とを用ゐ。それに花を盛つたことを。この圖で見るのは面白い。挿されたのは牡丹であらう。一時的な挿花もこうした銅鏡などに殘れば永遠の生命を持つことになる

（第二十七圖）　室町時代　仙傳抄挿花圖

この圖は仙傳抄中に出てゐるものであつて。何れも挿花である。自由と云ふよりも無造作である

（第二十八圖）　桃山時代　道安作活花

桃山時代にはこうした作意が利休以來流行してゐたらしい。まだ約束も何もないので自由に大膽に生けられてゐる

（第二十九圖）　桃山時代　池坊專好立華

華美艷麗を極め。壯大勇健を好んだ桃山期に立華と云ふ特殊な華道美術の出現を見たことは當然であつた。池坊專好特にこれをよくし當時の繪畫。建築と共に一世を風靡した

（第三十圖）　江戸時代　池坊專定生花

池坊家の生花も。まだ專定時代にはこの樣に自然の味がよく出てゐた。自然をこの如く見て行くことは。天才でなければ駄目な事ではあるが。その自由な天地が無限に表出されてゐる

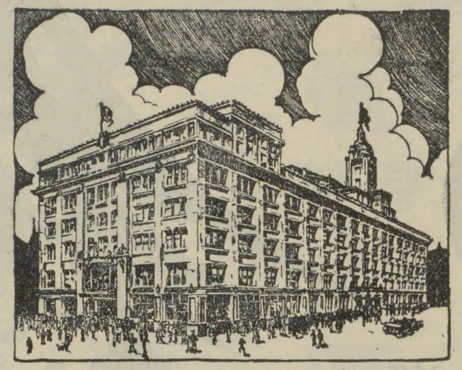
（第三十一圖）　江戸時代末期　未生流合作生花

江戸期に於ては多くの流派が出來て何れもその自流獨特の世界を誇つた。これは未生流の翠雲齋松甫と笠井良甫との合作で龍田川の景色を表現した大作である。自然の味が充分見られて面白い

年化文。るあでのもたつとらか本繪譜畫體三の齋北たれは云と家才天的界世浮世で繪は圖のこ
さまの花』。し張主とる來出がとこるけ分き畫に體三の草行眞はてべすの畫繪が彼。で品作の代
あぢり逃るゐてし序が人山獨と『りな草は籍狼花落。りな行はるゝかり散つか。りな眞はく開に
。うらあで點き可ふ味に術藝道花の期戸江。る

お買物は三越

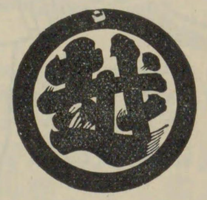
……三越の品は品質が良く値段が低廉です



◆三越は百貨店で御座いますから季節向の品々が充實して、日常生活に必要な品は大抵取揃へて御座います

◆流行と實用の良い品は、東京から御求め遊ばすに限ります

◆東京でも、三越の品ならば、一番安心で、一番低廉で御座います



三越

東京市日本橋

清新な百貨

『良品廉賣』を標語とする松坂屋が、新館落成と共に一層營業を堅實に、商品を豊富に取揃へて、皆様方をお待ち致して居ります。

銀座▽上野

松坂屋

御園白粉

御料

畏くも御料に召させ給ふ御園白粉及び御園化粧品の各種は尊き經驗と最新の科學に依り原料を精選して優雅なる芳香を配し美容と衛生の目的を以て謹製したる本邦唯一の優良御化粧料でございます

御園白粉は純無鉛白粉の嚆矢として名聲愈々高く安心して美しきお化粧の出來る模範的御化粧料でございます。新しく生れたる御園化粧品もまた美しき人氣の中に夫々の特色を發揮して居ります

煉製 御園白粉
煉製 御園固煉白粉
水白粉 御園の月
淡化粧用 御園水白粉
こな白粉 御園の花
打白粉 御園撫子
懐中用 御園紙白粉
あれ止め化粧水 御園四季の花
脂肪さり化粧水 御園の露
白粉下 御園の蕾
洋風化粧料 御園クレーム
化粧香水 御園の橘
頭髪水油 御園香油
粉製 御園齒磨
日焼どめ化粧料 御園ルチゲン
携帯白粉 御園コンパクト
美容料 御園ほゝ紅
美容料 御園口紅
美容料 御園まゆ墨

本舗 東京 伊東胡蝶園

現代華道家列傳

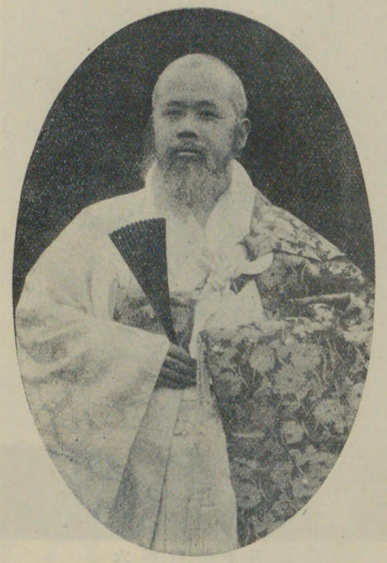
美しく健やかになる

カテイ石鹸

美しい皮膚輝く健康美
カテイ石鹸の御愛用者

最新最良の
クラブ煉歯磨

遠州流華道教授
遠久會々長
松久齋 柴田一山氏



松久齋一山氏

氏は栃木縣上都賀郡落合村大字長畑字岩花に生れ、本名を顕忠といふ。氏の祖先柴田利右衛門は常陸國に生れ、中年にして舊長畑村に居を定め、其親友福島某、大房某と共に同村を開墾創立したる人にして、今日においてもこの三家系は存續連綿村の祖として尊敬せらる。柴田利右衛門の墓石に永正八年八月十九日とあり、今を距る二十餘代四百廿年前の人である。

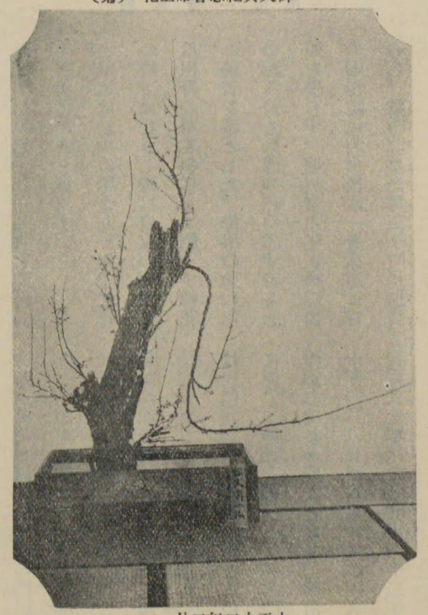
氏は明治二十二年三月郷里にて普通學卒業後、上京し小石川區關口町蓮光寺住職故栗木日猛師について出家得道し、同廿三年三月甲州身延山學林に入りて修學、爾來卅六年九月迄蓮光寺執事を勤務し其間漢籍佛典を專攻す。

華道は幼少の頃より好み、父母の膝下に在りし時は自家の庭園又は田野の草木を採りて絶えず挿花の練習を事とした。修學の途に出でたる後も風流挿花の志寸時も念頭を去らず、明治卅六年板橋町山寺本壽院に入山後は一層斯道に專心し、當時北豊島郡王子町に居住せる遠州流松國齋一香師の門に入り、華道を研究すること多年其さにその奥儀を極めたのである。其後師が都合により郷里茨城に歸り幾何もなく其地に歿してより、氏は同門諸氏及び近隣の淑女等の需に應じて挿花を教授し、逐次門人增加して益々盛大となり、明治四十年一月八日稽古始め並に遠久會發會式を擧げた。明治四十二年四

明治四十年一月八日
遠久會發會式席上花（松）

大正四年十月
御大典紀念會席上花（菊）

明治四十三年三月
遠久會大會席上花（櫻）



大正十二年二月
研究會席上花（白梅）

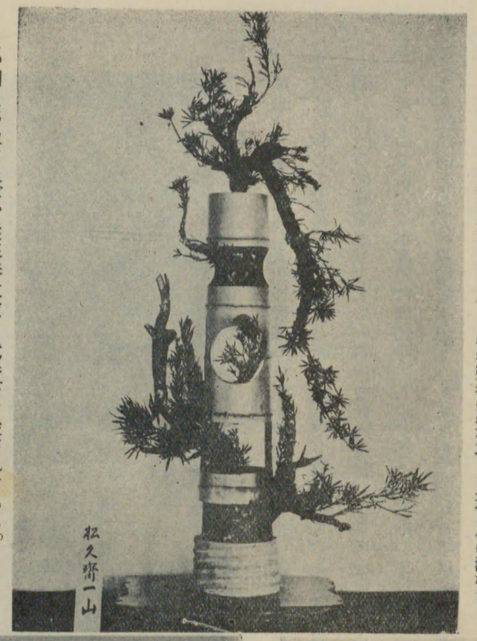
大正七年五月
（芍藥）

月遠州流家元幹事に推選せらる。

大正四年四月以來板橋町立尋常高等小學校女子訓導及び補習科女學部に挿花の教授をなし、內外男女の門人多數に及び、從來春秋定期大會並に臨時大會等百數十回を主催指導し來つた。

氏が得意とせる花は、松、梅、櫻等ボク物の大作である。又好んで花器を蒐集し古銅器、水盤、蓼器竹器等數百點に及ぶ。餘技として圍碁、書畫、骨董、手工、特に武器等を愛好してゐる。

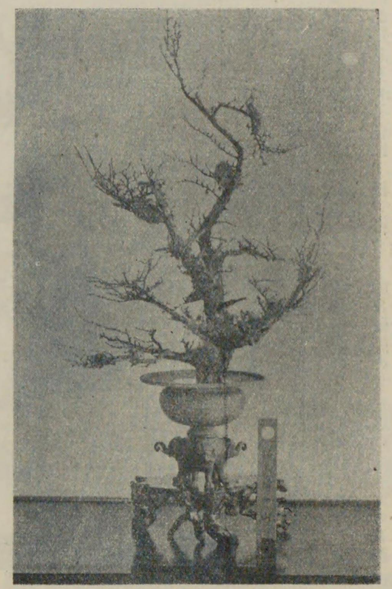
因に氏が現住の本壽院は先住石原日透師の代、明治十七年十二月四日祝融の災に遭ひ、本堂の再建



大正十五年六月六日重物珍器變器研究大會席上花（羅漢槲）

昭和二年九月重物會席上花（禪馴）

大正十二年六月
本堂落成式式場花（松）



昭和三年五月挿（唐松）

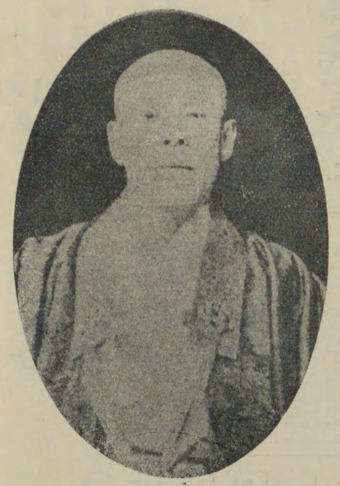
に止りて遷化、氏が入山後幾多の辛酸を嘗めて本堂の改築庫裡の新築、山門の修築等を完了して一新したものである。本壽院には往時より護法神として妙壽稻荷尊神し其堂宇も再建奉安してある。此尊神の例祭は例年四月三日執行し、兒童を集め武裝武器を帶して武者行列をなし、町内を練るのである。武器は鎧兜五具及び長刀鎗等數十本を秘藏し、例祭の當日堂内に陳列し、一般に觀覽せしめる。而して此武者行列は唯に寺のみに止まらず、今や同町内の年中行事の觀ありといふ。此行事は武者行列の古事に則り、天下泰平武運長久を祈念するの祭典であると。（東京府北豐島郡板橋町大字下板橋二一〇三、本壽院、電話板橋五二八番）

大正五年四月三日武者行列の一部

家元池坊第四十三世

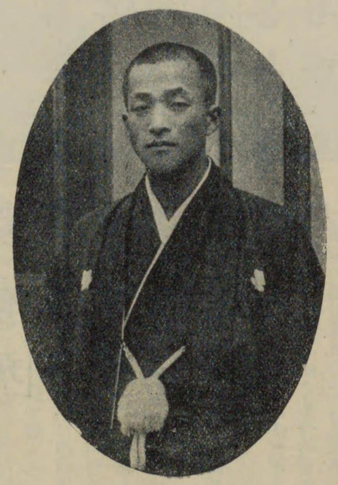
小野專啓氏

池坊は我國華道の起祖ともいふべきで、現今多數の流派中、最も古い歴史をもつてをり、從つてわが華道史の上には重要の地位を占めてゐるのである。即ち池坊は、その祖を、今より一千三百餘年前京都六角堂守護の祖小野妹子に發し、初代專務以來、累世華道の家元として一系連綿今日に及んでゐるのである。



小野專啓氏

故に池坊における華道は、佛前の供華よりその家に發達し來つたもので、十二世專慶に至つて、佛前の供華に加ふるに觀賞の花事を弘めて、後の立華、生花の基礎を定めた。後二十六代專順は、當時巧みなる立華を案出してその法式を定めた。後世、池坊を以て立華の家と稱するはこれが爲めである。其の後三十二世專朝は大に名をあらはし、つひに立華以外に獨立の方式を定むるに至つたのである。

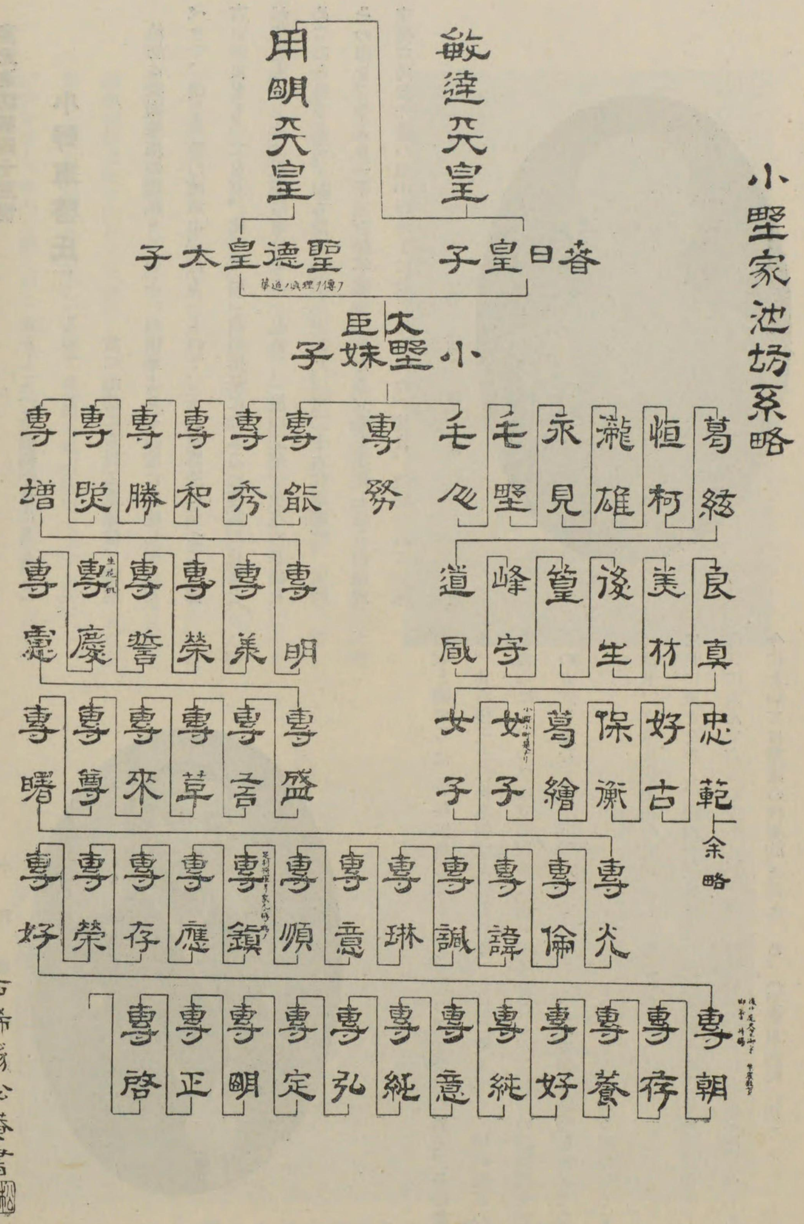


小野專威氏

爾來、立華及び生花の家元として世に重きをなし、現四十三世專啓氏に及んでゐるのであるが、現今においては斯道の代表的流派としてその門葉全國に普く、その數幾万を以て數ふべく、現に數百の團體を有し、これらの諸團體を統轄して、流運頗る隆盛を極めてゐること、周く人の知る處の如くである。

氏の後嗣專威氏年齒尚ほ少くして、俊敏、大に前途を嘱望せられる。（京都東洞院六角）

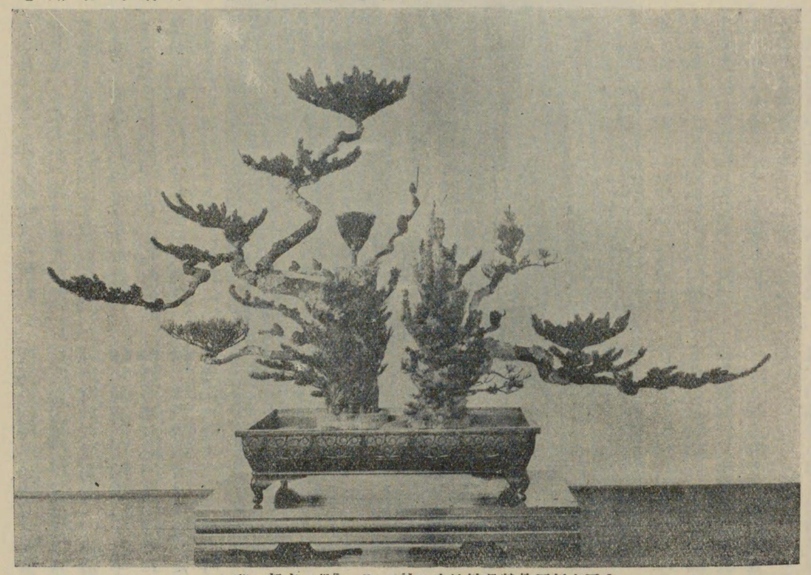
小堅家池坊系略



法眼 岩田美捷氏

翁は安政三年七月十二日を以つて、北海道福山町に生る。俗名を榮藏といふ。父は安藏母はつね女、代々產物の賣買並に漁業を營み、豪家を以つて知られてゐた。氏は明治十一年嚴父安藏氏隱退と共に家督を相續して、家業に從ふことゝなつた。しかし當時北海道は、交通不便物價高く、爲めに同地の產業の發展を阻害すること夥しきものがあつた。翁はこの事態を深く憂慮し、如何にしても此障碍を除去しやうと志して、先づ汽船業を經營すべく決意したのである。

かくて、明治十七年翁は獨力を以つて、汽船相川丸を購入し、函館福山、江差間の航路を開始したのであるが、實に北海道に於る沿岸航路の嚆矢であつた。しかも、業況順潮に進み、翌十八年には石川島造船所において、汽船江差丸を新造し、壽都、岩內、函館の航路に充て、更らに同年汽船玉浦丸を



大正六年四月鶴見總持寺に於て「ラマ」僧正來朝に際し
岩田美捷氏立調（松）

購入するまでに擴大され、翁の事業は、漸く世人の注目を惹き、この事業に加盟しやうといふ有志が續出して來たので、同十九年この希望を容れて合資組織とし、官許を得て商船組合を設立、翁はその組長に就任した。

同二十年十一月、松前養蠶會社の設立されるやその社長に推され更に汽船事業は益々順潮に發展して、所有汽船も宇賀丸、松前丸、惠比須丸、後志丸等を續々として新造し、旭日の如き勢ひを以つて、發展の一路を辿つたのである。こゝにおいて、二十四年十一月商船組は組織を擴張、松前商船株式會社となり、翁はその事務取締役となつた。

次いで、翁は廿六年に、松前銀行の設立されるや取締役となり、金融事業の方面にも、雄飛するに至る。又同二十七年松前商船會社の事業を、再び翁個人に引續いで經營することになつたが、同年所有の小菅丸が戰時御用船に徵發中難船したので、外國汽船を購入して扶桑丸と命名し、內地航路を閉

始した。翌二十八年十二月、室蘭丸を購入、いよいよ翁の海運業は發展したのである。

かくて、翁は三十三年松前水産奬勵會を設立して理事となり、翌三十四年松前政友倶樂部を有志と共に發起し、これが主幹となる。

岩田美捷氏

更らに三十五年政友會函館支部評議員に推されて、政界の方面にも漸次驥足を伸ばすに至つた。

以上は翁の事業の方面を概觀したのであるが、この外、翁の關與せる公共事業、名譽職等は、枚擧に遑ない程である。卽ち學校世話掛、町總代人、收稅委員、衞生組長、破産管財人、郡總代人、函館大隊區徵兵參事員、學務委員、農商務省統計調査委員、所得稅調査委員、福山町會議員、松前水産組合長、松前教育會副會長等に就任し、公共のために盡す處頗る多かつた。されば福山町政施行二十周年祝典に際し、福山町長は翁多年に亘る功勞を表彰したのであるが、その表彰狀には左の如き文言がある。

夙に海運業に從事し、本町運輸交通の利便を企圖し、衆望を荷ひて、町會議員に當選せる以來、多年町政に參劃して、自治の進運に鋭意し、明治二十七年町立熊野小學校を改築し、これを寄附して教育の普及に資したる等勞効洵に欽すべし。茲に町政施行二十年紀念式を擧げるに當り其功勞を表彰し、紀念の爲め銀杯を贈り併て感謝の意を表す。

福山町長　金田彌太郎

又、前述せる如く、翁所有の小管丸が御用船として徵發中難破したのに對し、政府は戰後代船二隻を賠償すべしといふのを財政窮乏の際、これを受くるは本意に非ずとて、翁は固辭して受けなかつた。そして、獨力を以つてこれが代船を補つたが、これ翁が尋常商賈の人に非らざるを物語る好話柄であらう。後に至つて、當局よりその奇特の行爲に對し、懇篤なる褒狀を受くる處があつた。されば翁のかゝる篤志の行ひは、萬人の欽仰する處となり、四十二年陸軍大演習の際、畏くも明治天皇宇都宮へ行幸の際は、御陪食を仰せつけられる光榮を得たのであつた。が、その後、感ずる處あつて、家業を廢し、一路華道に盡瘁するに至つたのである。

わが、法眼美捷翁は、以上の如く華道家として稀に見る花々しき事業家としての閲歴、地位、名望を有してゐた。

さて、今度は翁が華道家としての閲歴をたづねて見なければならない。

翁が華道に入つたのは、幼少十三歳の時であつた。爾來花々しくも多忙なる公私の生活の餘暇を以つて、斯道に精進し來つたのである。卽ち十三の少年時において、斯道の大家鶴間法眼の門に入り、明治六年十一月福山において、大日本總會頭松原美濃法眼に學び、更らに、同八年十二月京都六角堂に入門したのである。

かくて、十二年五月立花生花蘊奥相傳、二十九年大日本總司目代職に昇進、簾間免許、三十二年七月京都御室仁和寺より、非寺法服着用を許され、三十三年一月大日本總會頭職に累進、法眼に任ぜられた。而して三十九年居を東京に移し、四十年一月東池坊を創始したのである。翁の東池坊創始の理由は、當時、發表された『東池坊緣起』なる一書に詳かである。云々

× ×

東池坊は法眼美捷翁の創立せる華道の一派なり。其新に派を建てたるは、全く時勢に餘儀なくせられたる者こそあるなれ。

抑も我邦華道の淵源は遠く、且つ古く、之を史に討ぬるに、今を去る事約一千三百餘年、聖德太子の肇めさせ給ふ所にして、敏達帝の後胤小野專務に傳はり、茲に初めて京都池の坊現はるゝに至れりとかや。然れども當時技尙ほ幼稚にして、全く觀るに足らず、漸く二十七世專好に至り其面目を改めたり。專好は質に池の坊中興の祖、其道に熱心なる餘り、親しく山野水邊を遊歷して、花卉草木自然の風姿は勿論、其特性をも究め、更らに之を花形の方式に應用して、從來花形の生命とせる立華中の三大幹を取捨し、新に簡易なるものを作りて、之を生花と名付けぬ。是に於て華道漸く世人の賞翫する所となり、次第に廣く世に行はれ、流派は又流派を生じて、互に其技を磨き其特色を發揮せん事を努めしかば、遂に時勢に促がされ、四十一世專明、四十二世專正等の如き名匠を輩出せしめ、池の坊は一時天下を風靡したりき。

されど滿れば虧くる理りを洩れず、諸流派の中新奇なる花形を造りて時好に投ずる者あり、之が爲め專正の晩年、うたてや已に池の坊も對抗策に腐心せる結果、却つて花形紊亂の兆を現はしぬ。時に美捷法眼池の坊大日本總花督の最高職に在り、深く同派の紊亂を憂へ、いかでか之を回復せん者と家業を廢して京に登り、宗家に對して花形の改善す可き點を指示すると同時に其研究を促し、親からも亦進むで指導の任に當れり。而も積弊容易に除去し難く、徒らに身の火中に投じたる悔を遺したりき。此際翁窃かに思へらく、華道は本邦固有の美術にして、單に室内裝飾の技たる而已ならず恐れ多くも往昔、天皇卽位式に於ける床飾として一定の樣式を定められたる程の者なり。今日漫りに之が形を紊し、又は古來の掬す可き美點を湮滅せしむる如きは、斯道を樂しむ者の面目にも關すとて、再び大に決する所あり、獨力之が改善を敢行せむと思ひ立ち、先づ情實の纏はれるを排して、京都池の坊を退き、別に一派を成したり。是れ卽ち東池の坊なりける。

猶ほ此名稱を附するに附け、茶道の宗家今日庵五世宗知宗匠より、京都東谷池坊凉池院の什板額を贈られたるまゝ、取つて同派に名付けたるなりと。

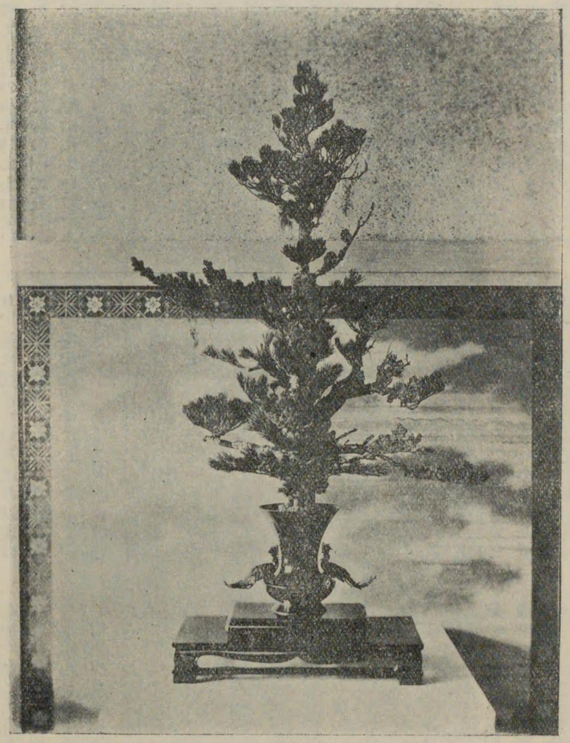
斯くて、法眼は舊花形の長は之を存し短は之を捨て、華道の神髓を發揮せん事に努めしかば、今や門下も次第に增加し、翁が理想も將に成らむとするに近きは、洵に嬉しき極みと云ふ可し。

明治四十三年七月　東池坊

× ×

なほ、翁は明治二十八年中京都府の囑によつて、京式古式展覽會へ立華を陳列して、謝辭を得て以來、同三十九年九月には、上野美術館に、皇后陛下臨幸の際、玉座に生花を献じ、四十一年三月東京博覽會美術學校參考室へ、開會中立華を陳列して、鑑賞に供し、更らに同年十月米國大西洋艦隊並に實業家來朝の際、その夫人連の所

望によつて、帝國ホテルに生花を活け、大に賞讃を博した。又、同四十三年七月日英博覽會の開催されるや、農商務省の依頼によつて市の囑託によつて式殿皇族各室へ、立華生花を献納し、東京市制五十年祝賀會御行幸の際、便殿に立華を献ずる等、幾度か光榮に浴



昭和三年十二月天皇陛下御即位御大典東京市奉祝會式場便殿に謹挿
（松一式立華）　作　岩田美捷氏

俳諧をよくし、巽きに俳號を可昇といひ、後華翁と改めて、幾多の銘吟を遺してゐる。即ちその數句を摘記すれば、

花道實習寫眞および緣起書を提出して、日本花道の聲價を宣揚する處があつた。又大正四年十一月御即位大典、東京奉祝會の際、東京するに至つた。

なほ、翁はその經歷が語る如く、頗る多能多藝である。されば、別に

初東風や二の足きめる二日酔
蟬啼くや世は之よりも姦しき
夕立の晴れ間を行くや鳥の影
ぬれ色は何處の時雨ぞ檜笠
侮りて山葵にこぼす涙かな

その格調高朗、且つ寓意の豊富にして洒脫なる尋常餘技の域にあらずして一家をなせるを知ることが出來る。同時に翁の豪放洒磊なる風丰を想見するに足るものがあらう。蓋し翁の如きは、我が華道界にあつて、希罕の偉材といふべきである。

家庭は嗣子仲藏氏（花號鶴園）同夫人龍子（花號好鶴園）長女みや子（花號芝鶴園）次男桑藏氏等の外、多數の令孫ありて、今や春秋高きも、矍鑠として壯者を凌ぎ、悠々自適以て風月を樂しみとす。

（東京府荏原郡北品川町御殿山七一八番地）

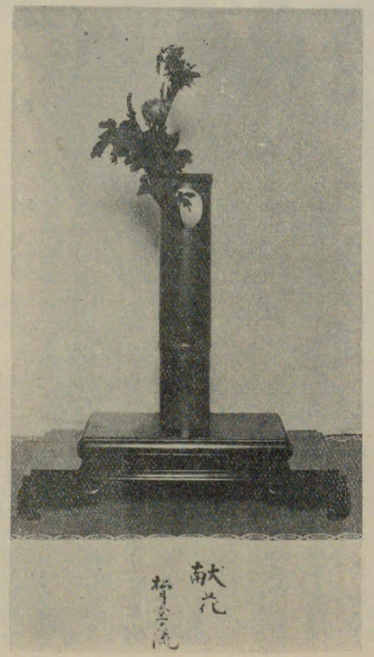
◎

飲みあけて花活にせん二升樽　芭蕉
額に似ぬ發句も出でよ初櫻　同
櫻へとりえてじんじん端折哉　一茶
我まゝをいはする花の主哉　路通
花の山何鹿捉まへて歌よまむ　晨風
花の山常折くぶる枝もなし　一井
花に來て美しくなる心哉　たつ
蕩曇り氣高く花の林かな　信德
花の中下戸引て來るかいな哉　龜洞

日本生花司
松月堂古流家元十世
子爵　植松雅道氏

子爵植松雅道氏

松月堂古流華道の道祖は今より千九十七年前天福年中南都元興寺の開基護命僧正が花を佛に供ふるに主令補佐と名づけ天地陰陽四體の規矩を定めしに始まるといふ。而して同流に傳ふる文獻に依れば是本朝生花の花體に規矩の定まれる最初であると云ふ。其後栂尾山開基明惠上人護命僧正の遺志を繼ぎ四體の花形を仁義禮智信（假稱、正令通體留）の五體とし、次で六百三十八年前南都西大寺の中興山城宇治橋寺開基松月堂叡尊が護命明惠の意を體し一圓相圓滿の花體及び眞行走の花體を



子爵植松雅道氏作

案出し花書を著し、時の帝に奉献し、齡九十にして遷化したりしかば、後伏見天皇正安二年閏七月三日に勅して興正菩薩と謚し日本生花司と稱讃せらる、是日本生花司稱號の初なりと。

其後下總國葛飾郡の產法眼是心軒一露が京師沙門宣柳居士より此傳を受け、更に一花一葉より五五二十五體全備の花體を案し、並に小篠の卷を著し、先師の號により松月堂古流と命名して諸國に流布したり。當時堂上植松中納言黃門賞雅卿は頗る華道に熱心なりしかば、一露翁悉く其奥儀を傳授し五大坊の花號を差上げ、自分は雲水の身なればとて植松家を家元に願出で安永八年十月二日永眠せり次で賞雅卿は更に同流の道統を和光庵卜友に讓りて五大坊二世とし

隱居して賞月齋と號す、是を五大坊職の初とすと。

家元　賞雅—幸雅—雅陳—文雅—
　　雅諸—雅恭—雅言—雅德—
　　雅平—雅道（現代）

同流の行事として特筆すべきは初世家元黃門賞雅卿以來春秋の二季宮中に參內し、春季は芍藥、秋季は菊花の生花を奉獻するのが恒例であつて、今日に至るも每春秋家元は五大坊を帶同して參內、天皇陛下には白花、皇后陛下には紅花を奉獻する事である。

なほ昭和三年十月聖上陛下御卽位御大禮を京都に行はせらるゝに際しては大禮使としての重任を帶び、傍ら同流全國に於ける幹部を隨從して御大禮式場及び泉山桃山御陵等の御座所に生花を奉獻し斯道家としてもまた無上の光榮を荷はれた。（住所京都市御苑內）

日本生花司 松月堂古流

五大坊十二世 臥雲軒 白木教堂氏

五大坊は松月堂古流の最高花務職にして、古來諸國を行脚し全國同流の師家を統轄するの重職である。氏は明治五年愛知縣中島郡奥町に生る、八歲にして同郡木曾川寶光寺に入り、八星霜を經て妙心寺派中學林の學徒となり、四年の後業を終へ岐阜縣加茂郡伊深村の僧堂正眼寺に入りて專念佛學を攻究す。居ること三年、京都花園妙心寺に行を修し、次で建仁寺に三年を過ぐ。現住臥雲院に入りしは明治廿九年にして同三十一年其住職となり、宗教界に一地位を劃したのである。

白木教堂氏

昭和三年今上陛下御卽位大典に際しては京都御所に獻花し、又每年春秋二季に畏くも九重に雲深き宮中に獻花する等斯道家としての榮譽を荷いたることは數ふるに遑ない程である。

人格高潔大本山妙心寺派の主管として宗教界の重位にあると同時に、名實共に斯道界の權威である。（岐阜市寺町臥雲院）

明治三十年頃より花道に志し、臥雲院の先住たりし斯道の達人臥雲軒に就いて松月堂古流を學び、專念その奥儀を究めんと寢食を忘れて苦心の効空しからず技著しく進み、累進して大正二年日本總會頭に昇つた、次で臥雲軒を襲號し同流の重鎭として花道議會議長となり、且五大坊の榮職にある。

眞成流華道家元補佐 表千家流茶道教授

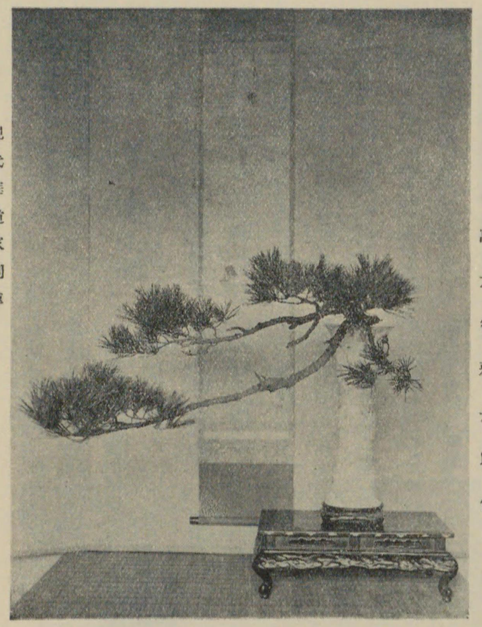
眞麗齋 萬力谷雅舟氏

氏は明治十六年十一月二十九日大阪市北區中之島四丁目に生る。本名を金次郎といひ、華道界の奇傑眞成流先代家元故萬力谷逸堂翁の二男である。

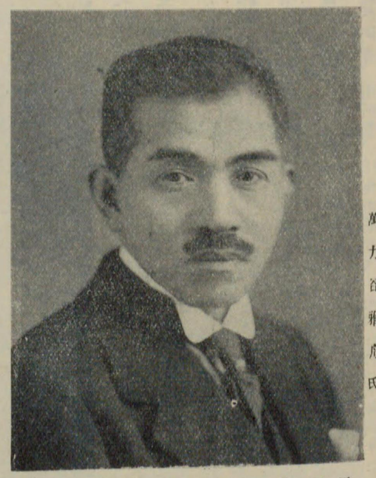
萬力谷家は代々山口藩士で、連綿相繼ぐ名家であつた。父君逸堂翁は名を源槌といひ、同藩主吉川元春の重臣として、人格高潔忠誠格勤、上下の信賴を得ること多大、後吉川家大阪屋敷に仕へ、中之島に居を卜す。後、維新の變革に際しては、君國のことに奔走し、伊藤博文等と親交あり、しばしば往來する處があつた。

又、翁はその一面において風流の道を愛し、特に花道に對する造詣は最も深かつた。而して、後に眞成流なる一派を樹立するに至つたのであるが、その生涯を通じて花道界に印した足跡は、實に偉大なものがあつたのである。その著『華道眞美學』の如き力作がある。

氏はこの父君の下に人と爲り、その薫陶を受けて、早くから華道茶道の研究に入つた。しかし、父君は他門に學ぶの要ありとし、同流の高足出口眞了齋先生の門に入つて具さに修道の功を積み、家庭にあつては、父翁の指道を受けて、二十七歲まで十有餘年間に及んだ。



現代華道家列傳　萬力谷雅舟氏作



萬力谷雅舟氏

現に同流家元補佐の最高要職にあつて當流のため將又斯道一般のために盡してゐるのである卽ち諸流團體花友會の幹事たるの外、自ら發起人の一員として設立せる諸流團體日本華道協會理事、同華道奬勵會幹事等の樞要に居つて盡瘁すると共に、柏榮會を設立し、又明照會等を發起す。

又、數年來淀川區十三西之町會副總代、町會評議員等に推され、最近同町會々長の任にあり、自治公共の事にも盡す處大である。

餘技としては寫眞、繪畫（文人畫風のもの）俳句等多趣味である。

クニ子夫人（明治三十三年生）との間に、長女まさ子孃、二女二三子孃の二女がある。（大阪市東淀川區十三西之町三二七番地）

無双眞古流家元
臨濟宗銀閣寺管長
第廿二世　菅　憲宗師

そもそも、無双眞古流華道の濫觴は、銀閣寺慈照寺の開基、足利八代將軍慈照院殿准三宮義政公を以つて流祖とするのである。初め義政公、時の政務を子義尙君に讓り、細川、山名の兩官領これを補佐し、以つて京都をはじめ、天下を統一せしめ、自らは、東山々麓綠林翠滴の幽邃閑雅の地を卜して、銀閣寺を建設したのである。時に文明十二年庚子のことであつた。

後、義政公は文明十四年乙巳の年龜山三會院（嵯峨天龍寺内）において、薙髮歸戒を受け、入道となつた。そして、横川、景徐の二禪師について、專ら禪學を修めると共に、風流韻事を嗜み、別して生花の道は、淸雅篤實の娯樂として、朝夕その近臣東江廣末、德大寺義門等を召して、諸種の傳花および花道の掟等を定めた。當無双眞古流はこの時に起つたのである。

かくて義政公には、延德二年庚戌の年、他界したのであるが、爾來、今日（昭和四年）に至るまで四百三十六年間、流統連綿として絶えず、宗匠を出すこと、全國にその數を知らぬ程である。而して、當流は常に超然として敢て世に媚びず、その眞を硏し、誠を究はむるの士、若しくは當流を慕ふの士にのみ傳授し、徒らに傳花を許さない。只管當流祖師の眞意に悖らないことを期してゐる。從つて、當流が質において赫々たる光彩あるのも、偶然でないことが、分るのである。

菅憲宗師

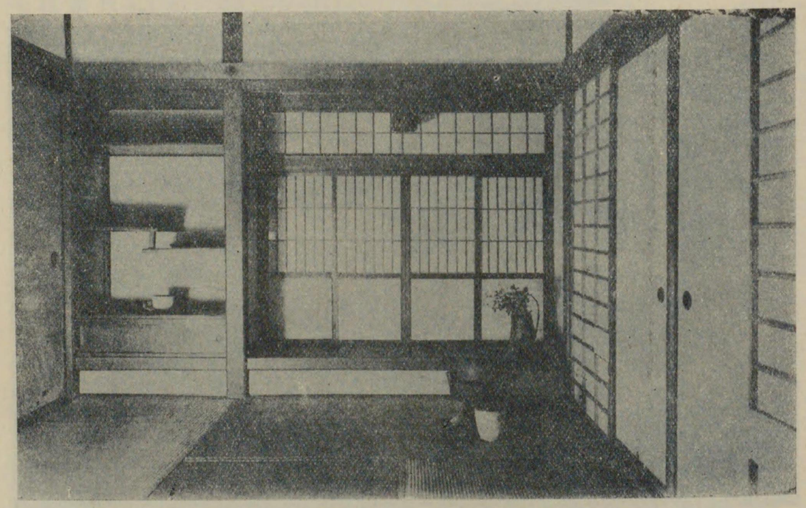
銀閣寺

さて、光榮ある當流の現宗家を繼承する臨濟宗銀閣寺第二十二世管長菅憲宗師は、明治九年一月を以つて、尾州名古屋藩に生れた。現在の中山公爵先代の從兄弟に當る名門の出である。

師は八歳にして當銀閣寺に入り先代二十一世管長について、具さに修道を積み、更らに長じて各地に修業すること二十餘年に及んだ。かくて、今より十二年前前管長の入寂と共に、その跡を繼承し、大僧正管長に就任した。人格高朗、學識一世に秀で、當代稀に見る善知識として、渴仰されてゐる。

當流は明治四十四年九州小倉において、大本營御座所に、生花を謹挿して、明治天皇の天覽を忝ふしたのをはじめ、同四十年五月大正天皇東宮に在せし頃、京都離宮御靜養中、御座所に生花および立華を献上し、又、昭和二年十一月名古屋における、陸軍大演習の際、今上陛下の御座所の花を献上するの光榮に浴す。

而して更らに昭和三年十一月、京都における御卽位の御大典に際しては、京都賢所御座所に奉花の



銀閣寺東求堂内四疊半權輿の茶室

大命を拜するに至つた。即ち憲宗師は、この大命を拜するや、十一月二十五日午後三時より、齋戒沐浴の上、當流代官鈎月齋松本耕雲、野原櫻州、蓮月堂夢水の三氏を從へて、驛内便殿に到り、御座所には八方正面の黄菊、白菊大輪の盛花と、御廊下には老苔松に各種色とりどりの菊花をあしらつたものを活け奉つた。且つ、師は聖諱を祈る古式に則り、畏くも後水尾天皇勅銘の香をたき、退出したのであつたが、菊は大和産、老苔松は信州産で、何れも美事なものであつたといふ。

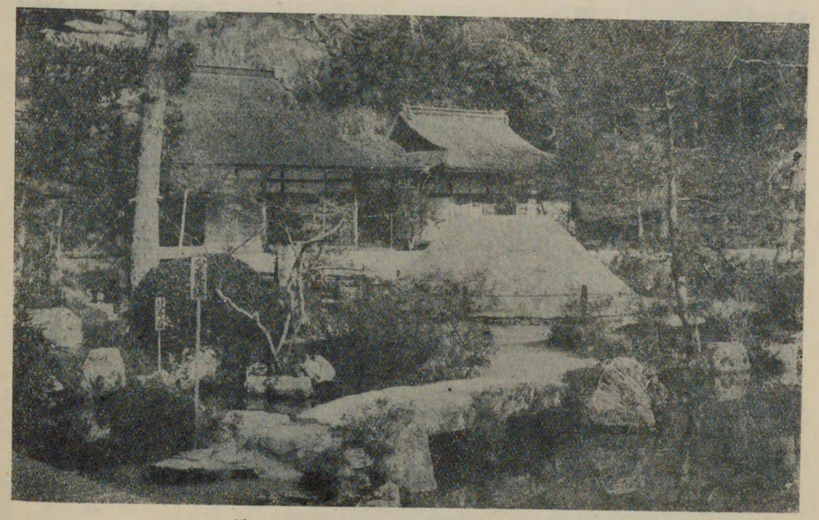
當時、師はその光榮の挿花について、

『今回大嘗宮の中柱は、銀閣寺山よりくぬぎを出し、今又御座所に奉花の光榮を得たことは、たゞに無双眞古流のみならず、我邦花道の絶大なる光榮として喜んでゐます。香は後水尾天皇勅銘の香で、當流において奉花の時は、毎時もこれをたくことになつてゐます。殊に銀閣寺へは、陛下や殿下の御來幸を辱ふしたこともあり、又奉献した歴史もあります。が、何れにしても光榮あることです。』云々と語つてゐる。

兎に角、この歴史あり由緒深き當流が、今に厳然として我が華道界に存在してゐることは、斯界の共通せる喜悦であり、矜恃でなければならない。(京都市上京區淨土寺銀閣寺町)

色よりも香こそあはれと思ほゆれ誰が袖觸れし宿の梅ぞも　(讀人不知)

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る　(紀友則)



銀閣寺東求堂及び分界橋

家元池坊流專正直派花道
日本禮道宗家
帝國盛花瓶花宗家侍局長
法眼 上野啓純氏

老大なるわが池坊花道界における一大惑星たる氏は明治三年十一月五日、京都市下京區醒ケ井通六角南入に生る。幼名を康繼といひ樂水庵如柳又は蝸牛庵と號す。元池坊家元華務課長上野可肇齋翁の男である。

上野家は、累代膳所藩士として、十四代相繼ぐの名家、維新當時は代官役を勤む。氏の厳父可肇齋翁は、名を康年といひ、廢藩置縣後京都に出でたが、元來風流の道に詳しく、特に華道の巨匠として知られ、後京都六角堂池坊家元華務課長に就任、幾多の功績を殘して、今より約二十七年前に長逝した。享年七十有五。又、氏の母堂は房子といひ、同じく七十五歳を以つて歿した。

氏は小學校を卒へて後、私塾において漢學數學等を修むるの傍ら父君の薫陶を受けて幼少より華道に親しみ、長じて池坊家元第四十二世專正宗匠の直門となつて、修道に專念しつひにその高弟となつた。後更らに家元華務課長となり、大正十四年病氣の故を以つて隱退するまで、約十餘年間の久しきその任に當り、その間積極政策を執つて、池坊花道をして今日見る如き盛大なる域にまで進出せしめたのである。

上野啓純氏作

氏のかゝる大功績に對しては、氏を非議せんとする人々と雖も、眼を掩ひ耳を塞ぐことの出來ない程顯著なものである。正しく池坊華道の全國的進出は、大半氏の力に負ふものであるといふも過言でないのである。

華務課長隱退後の氏は、直ちに京都市上京區下鴨上川原町に日本禮道宗家、帝國盛花瓶華宗家を創始し、別に雜誌『道』を發刊すると共に前池坊華務課長諸泉祐道氏その帷幕に參し、堂々たる陣容を整へ、今や屹然斯界に覇を稱するに至る。

氏資性豪放にして氣宇濶達、風手堂々として識見高邁、自ら人を威服せしめるものがある。まさに、斯界稀に見る巨星といふべきであらう。

又、氏は漢學に長じ、餘技として尺八を好くす。

なほ、氏は昭和三年十月二十日、梅園子爵と共に、京都皇宮に參内

上野啓純氏

し、生花一瓶を献上し、御嘉納の光榮に浴した。右生花は鳳凰と龍の模樣付角青銅直徑二尺のものに白髪苔付五葉松と長春とを生けたもので、朱塗面金の花臺に置き、花瓶には嘉祥の銘あるものである。即ち挿入の花形寫眞がこの光榮あるそれである。

因に氏は別に兵庫縣氷上郡幸世村天臺宗觀音寺の住職として一寺を持つ。法眼の稱ある所以である。

又、京都堀川高等女學校、市立專修夜學校等の華道教授をも兼てゐる

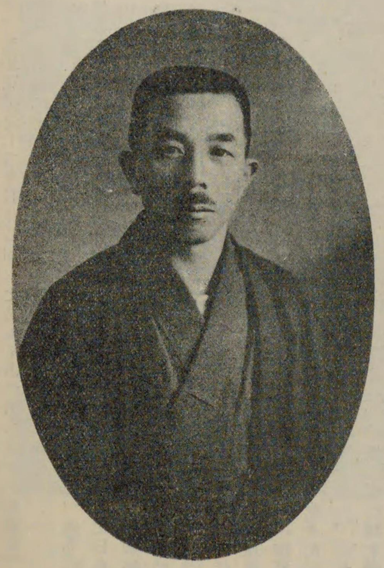
なほ、從來、氏の養成せる門下の高足逸材は、今や全國に普く、隱然たる一大潜勢力を斯界に有するは勿論、現に多數の直門を養成して、聲望いよいよ高し。

（本宅京都上京區吉田神楽岡町八、電話本局二六七一番、別宅同下鴨川原町一五、電話上局五八七一番、宗家同所電話五八七一番）

家元池坊華道師範
日本禮道宗家
帝國投入盛花宗家總務局長
諸泉祐道氏

氏は明治十三年六月十三日、佐賀縣小城郡小城町に生る。本名を五郎といひ、石橋德右衞門氏の男である。

嚴父德右衞門氏は、舊鍋島藩士であつて、元司法大臣松田正久男、元宮内大臣波多野敬直子等とは、親交があつた。現在は八十の高齢を以つて、會津若松市に隱棲、和歌その他の風流を友として、悠々自適の境地にある。母堂松子刀自また古稀を超ゆるも、矍鑠たるものがあるといふ。



諸泉祐道氏

氏は父君が池坊華道に通じてゐたので、幼少の頃からその感化を受け、十八歳當時から斯道の門に入つて研修する處があり、天稟の花才は年と共に進んで、家元においても、特に嘱目する處があつた。

しかし、當時の九州華道界は、他流の鞏固な地盤で、一體に幼稚な狀態にあり、特に池坊の如きは、殆んど影を認めぬ有樣であつた。氏はこの狀況を見て如何にしても池坊を流布したいと考へ、或は講演に實演に、東奔西走して、これが宣傳と普及に努力したのである。果然、氏の努力は空しからずして、次第に池坊の流布は九州全道を浸潤して、數年の後には社中數千を算するに至り、つひに今日見る如き目覺しい發展を遂げるに至つたのである。

かくて、大正八年には、福岡縣に九州華務課を組織することになり、同十一年同課長濱崎氏の歿するや、その跡を襲ふて同課長に就任した。氏の就任後は、當流の發展いよいよその高潮に達し、同十三年頃になつては、九州全土は池坊にあらずんば、華道にあらずといふ盛觀を呈するに至つた。

大正十五年十一月、京都六角堂家元華務課長上野啓純氏が、病氣隱退を餘儀なくされるや、氏は拔擢されてその後任となり、昭和二年四月まで、その樞要の地位を占めてゐたのである。この間氏幾多の新企劃を樹立したが、現在の機關雜誌『國風』發刊の如きは、氏の積極的方針の表現であつた。

諸泉祐道氏作

昭和三年四月、上野啓純先生が、日本禮道宗家および帝國投入盛花宗家を樹てるに及び、その總務局長として就任、以つて今日に及んだ。今や氏は兩宗家の機關雜誌『道』を發刊して主宰し、駸々たる發展を示しつゝありといふ。

思ふに、上に華道界一代の巨星上野啓純氏を戴き、これを補佐するに氏を以つてするは、その陳容において正に完璧無比といふべきであつて、今や兩宗家の事業が、巨大なる足跡を印して、斯界を濶歩せんとするのも、偶然ならざるを知ることが出來るであらう。

なほ、氏は九州各地方における橘會の顧問として、現に池坊華道のためにも、依然たる盡瘁を怠らず、鬱然たる勢力を斯流の上に有してゐるのである。

氏や人と爲り頭腦明敏にして覇氣滿々、人に接して城府を設けず、まことに、斯界稀に見る快男子といふべきである。（京都市上京區下鴨上河原町一番地）

古流華道七世家元
松盛齋 廣岡理興氏

そもそも古流と唱へ來たりしは、自ら求めたる流名にあらず。（中略）近世物の師たるものを見るに、我產業のため、自ら流名を求め、何流角流とて、流を弘めんものいと多し。かたはらいたきことならんや。惣じて流名といふものは。自ら求めつくべきものにあらず。（中略）流名といふものは、その元祖の德を慕ひ、閑雅優玄なる妙所を賞して、後世大師樣、嵯峨樣、栗田樣、定家樣など、皆段々に賞したる流名なり。これこそ流名といふべけれ。當時は、少し道を學び、漸く一人立ち出來るや否や、自ら流名をつけて、我れ一家の師と思ふは、いとはかなし。（古流四世家元關本理恩先生著『櫻の雫』より）

我が古流花道の起源、系譜および自稱古流家元については、本書『花道要綱』中のその項に詳記してあるので、ここに反複して重複を避けることにする。が、古流の起源は、初代家元と仰がれる一志軒今井宗普なる人が、その著に『古流百の枝折』と題したのを後世の人が、この名を取り古流といつたのに初まるのである。この宗普の使つた古流なる意義は、宗普の出た元祿時代の華道界が滔々として天正時代の風を模したものであつて、華道の基礎が發見された文明時代の風は、全く沒却されてゐた。

廣岡理興氏作（鶯宿梅）

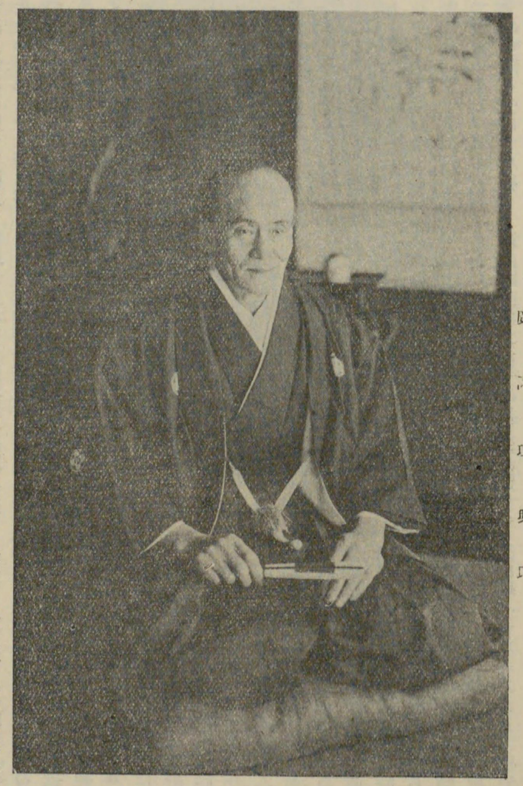
ここにおいて、宗普は、文明時代を鑽仰する意味において『古』の字を冠したのであるが、この『古』といふ字は單に『ふるい』といふ意味の外に、『もと』といふ意味を含んでゐる。そして宗普の表現せんとした意味は『花道の根元』『花道の眞髓』といふにあつたのである。たゞ『ふるい』といふことになれば、池坊は遙に『ふるい』のである。從つて、古流を文字通りに古い流儀と解釋しては、その意味をなさない。又、宗普の意圖も決して左樣なものでなく、前述の根元、眞髓といふ意味であつたのである。

しかし、斯樣な『古流』の意味を世人の多くは知らない。否、多くの古流家元と名乘る人達すらこれを知らないのである。

かくて、當流の二代は松廼齋安藤涼宇、三代松盛齋關本理遊、四代が松盛齋近藤理清、六代が松盛齋廣岡理德、七代が現家元松盛齋廣岡理興その人である。この間三代理遊、四代理恩の兩先生が、當流の基礎を固めた人であつて、その詳しい事蹟は、本書『花道要綱』に詳述してあるから省く。

現家元理興氏は、慶應三年七月十七日、石川縣金澤市大工町に生れた。本名を亥作といひ、先代理德先生の養嗣子である。

夙に先代の嚴格なる薫陶を受け、具さに修道の功を積み、明治三十三年十二月二十二日、先代理德先生歿するや、翌三十四年春、第七世家元を襲ふて今日に至つた。爾來、眞の古流の傳統を遵守して、門葉を養つたが、何れもその技術の秀拔と德風の旺んなるを慕ふて、その門に集るもの頗る多く、現に家元師範代および師範の數百七十餘名に達し、皆傳以下の門弟に至つては、直弟子二千人、孫弟子六千を算するに至つた。



廣岡理興氏

こゝにおいて、大正の初頭會頭職十五名を以つて古流家元會頭會を組織した。その氏名は次の如くである。

金澤市	家元男	松務齋廣岡理創	金澤市 家元補佐 松逸齋北 理賴
金澤市	會頭	松優齋壽美田理僊	同 同 松湖齋古津谷理得
同	同	松蟬齋吉田理雲	同 會頭 松仲齋中林理淋
同	同	松蘇齋松本理華	同 同 松秀齋角谷理博
東京市	同	松禹齋吉岡理賢	
金澤市	同	松喜齋小島理樂	

金澤市　會　頭　松閑齋角谷理公
石川縣石川郡會頭　松曦齋川端理仙
同　同　松林齋林　理修
金澤市　同　松恕齋今村理詵
富山縣　同　二世　松得齋齋藤理啓

以上の諸氏が會頭會を組織してゐるのであるが、會頭會は一、會頭を免許せられたるものは必ず入會すべきこと。一、會員は協力一致して家元達書の趣旨に從ひ、花道取締を補佐し、流儀の發揚につとめ、且つ樞要事につき家元の諮問に答ふること等を司り、毎月一回家元花庵において、常例會を開いてゐる。

なほ現家元理興氏は人と爲り謹嚴人格高潔一世の師表として缺くる處なき人物である。氏の對花道觀を要約すれば、大要次の如くである。

『現今のすべての華道は、その眞義を失ひ、迷妄の底に陷つてゐはしまいか。或者は舊來の規矩に盲從して、技術と目的とを混同し、改革論者も主として淺薄なる科學的知識を弄し、それに禍ひされて材料と目的とを混同することによつて、足利義政以前の時代へ退歩してゐる。風景が箱庭と區別出來なかつたり、又は牽强附會のコヂツケになつたりし、一般に現今は單なる裝飾品と遊戯に向つて墮落してはゐないか。現在の急務は靜かに古人の教へを研究して、そこに深遠な花道の眞諦を捉へることであらうと思ふ。それには正しい古流を世に紹介することにある。』

なほ氏は明治四十二年九月、先帝陛下が未だ皇太子殿下の時代、金澤地方へ御行啓の際、御旅館内に挿花を奉り、又、大正十三年十一月三日、今上陛下が攝政宮に在した頃、北陸地方特別大演習御統監に行啓の砌、嗣子理創氏と共に、御献備の生花謹挿の光榮に浴した。

嗣子理創氏は、前途春秋に富み、好學にして文章に長じ、且つ技術も夙に嚴父の薫陶を受けて卓拔、稀に見る花才の所有者として、同門の敬仰を得てゐる。當流の前途まことに祝福されたりといふべきである。(石川縣金澤市大工町九番地)

古流生花傳書の解釋について

當流の傳書は、四代の家元法眼理恩先生が、先師理遊先生の七回忌の年、改訂增補を加へたるものなり。當時、傳書の說明書として師範者の參考とし根據とするために『口傳秘錄』と題する初、中、奥秘訣の各傳のものを作られたり。

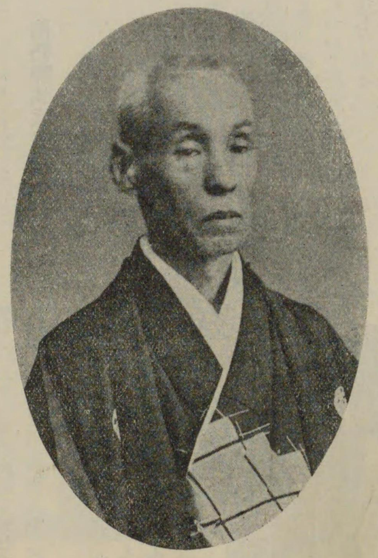
然るに、この秘錄たるや實に簡潔にして、その眞義を解するためには、他の多くの別著に渡らざるべからず。されば、(中略)紙背に徹するの明なく、全く傳書の意味を知れるもの皆無なるは、吾人の知り得て驚きつゝある處なり。一例を擧ぐれば、舟の生方に出船(朝の客の折)入船(午后の客の折)泊り船(晩の客の折)の生方あり。有名なる某花道家の言を聞くに、『これは時間による舟の扱ひ方にて、別に大した意味のなき事なるも、玆に古人の定められたる事を論議するは、よろしくなき故、古來の規矩を逃べん』とて、小賢しくも不徹底の事を述べたるを讀みしとあり。或はこの人のつもりにては、午后でも出帆の船はあり、夜でも出入の船はあるに拘はらず、古人はをかしなことを定めたるものなりとのことならん。即ちこの人は花道と現實自然とを混同しゐるものにして、かくの如き船の扱ひ方が、吾人の上において、主觀の必然なる要求によることを知り能はざるなり。斯樣の方法にては、決して古流はもとより花道を解する事、不可能にして、誠に憐れむべき者といふべし。

又、ある門弟その師に問ふて曰く『中傳の新宅移轉の花に、赤き花は火による故禁ず、水に緣あるものに活けよとあるは、會得し難し。火のみを忌みたる處が、何時洪水や地震に見舞はれぬとも限らず、この傳の眞義如何』と。その師行詰りて答ふる處、誠に珍妙至極、噴飯に堪へざるものあり。他流のことはいざ知らず、古流の師家といふもの多くは斯樣ならん。かゝる處に古流の眞義など宿るとは思ひもよらぬ處なるべし。(古流家元男松務齋廣岡理創氏)

池坊龍生派華道家元
龍松齋　吉村華芸氏

現代わが華道界における一方の雄、華芸吉村卓次郎翁は、安政六年二月三日、三河國岡崎に生まる。父は有章、母はふさ、岡崎藩の書家であつた。

翁は初め藩校において、漢學を修め、後、三河國における華道の名手、山田眞弓先生について、池坊華道の門に入つたが、この時僅かに十歲であつた。業大に成り明治九年志を立てゝ上京したが、當時、東都におけろ花道界は、殆んど遠州流のみが流行し、池坊の如きは全く片影だもないといふ時代であつた。この間において、翁は專ら池坊の普及宣傳に努力する十年、漸次その効を收めんとするに至つた。處が、當時池坊東京出張所主任は羽生鎭翁氏であつたが、たまたま流儀の普及宣傳上において、華芸翁と出張所側との間に、意見の衝突を來した。そして翁は羽生氏等と大に爭つたものである。が、結局、家元は兩者の間に立つて、翁に對し一時的破門を以つてしたので、翁はこれに不服でならなかつた。そこで、華道界から引退しやうとしたのであるが、門弟等の切なる慫慂に思ひ止まり、更らに進んで一分派を樹立することになつた。明治十九年の事で、池坊龍生派即ちこれである。


吉村華芸氏

さて、この龍生派といふ流名の起源であるが、これは、翁の出身地に因んだのである。元來、岡崎藩は龍ケ城といはれ、更らに龍藩とも呼ばれてゐた。現に、翁の初めて師事した、山田眞弓先生の如きも、龍髯齋と號してゐたのであつた。斯樣な理由から、翁が一派を樹つるや、これに池坊『龍生派』なる名稱を與へたのである。なほ、翁が新分派を樹立するの以前、種々調停者も現はれたが、自己の信念に篤い翁は、全部これを峻拒して、敢然獨往邁進することになつたのだといはれる。

爾來、四十餘年、今や池坊龍生派の花道は、全國に普く行き亘り、翁の門弟にして教授となつてゐるものも、數千人に及ぶの盛況を見るに至つた。翁はその花道觀において、頗る嚴正な立場に立つてゐる。即ち、

『花道は眞の藝術であつて、これを行ふには自らその心掛けがなければならない。古へにおいて、聖德太子は佛教と花道とを併せて重要視され、佛教は未來、花道は現在を意味するものであると說かれ、後水尾天皇も「花道は鏡なり」と仰せられた程である。從つて、花道を以つて裝飾物の一つであるといふやうな考へは、大へんな間違ひであつて、花道こそ自他を教育する眞の道でなければならない。であるから、華道はその創始の形である立華を以つて、眞の花道であるといはなければならず、彼の近時大流行を見つゝある投入れ盛花の如きは、全く體をなさず無作法千萬なもので、決して花道といふことは出來ぬ。もとより古來から投入れといふものはあつたが、これは、眞に花道に徹した人が、一二輪の花を茶椀などに入れた時、初めて、その眞

の意味を持つものである。又、盛花の如きは、元來が食堂の飾り物であつて、わが日本の床に活けて眺めべきものではない。從つて斯様なものは「花道の内に非ず」といつて差し支へがない。』

といふ意見を持つてゐる。だから、翁の最も愛するものは、立華であつて、昭和三年四月古稀の祝ひには、その希望で立華會を催した。そして五十餘瓶の出瓶を見たのである。千三百年の歴史ある池坊花道にあつても、未だ立華のみの會は、曾てなかつたといふ程である。翁は、今後も毎年一回立華のみの會を催したいといふ希望を持つてゐる。そして、近時六角堂において、立華の漸く衰へんとするを慨して、この立華の形を永遠に傳へたいと理想してゐる。又以上の如き翁の對花道の態度から、當然花道は佛道と同じく、その師範たるものには、内務省において、免許を與へるやうにしなければならぬといふ意見も懷抱してゐる。

なほ、翁は京都空也堂葛原上人から、御歴代御尊牌華務職を許されて、既に十餘年になる。この榮職は東京において唯一人であると。

夫人すみ子（大正六年物故）との間に四子あり、何れも早世して、長子有美氏一人が健在してゐる。（東京市淺草區新福井町三番地）

池坊龍生派家元嗣
吉村有美氏

氏は池坊龍生派家元吉村翁の長子、明治二十七年四月を以つて生れた。

明治四十五年東京商工中學を卒業、大正五年明治大學商科を卒業した。華道は少年の頃より、父君について研究、夙に斯流の秘奥に達してゐる。

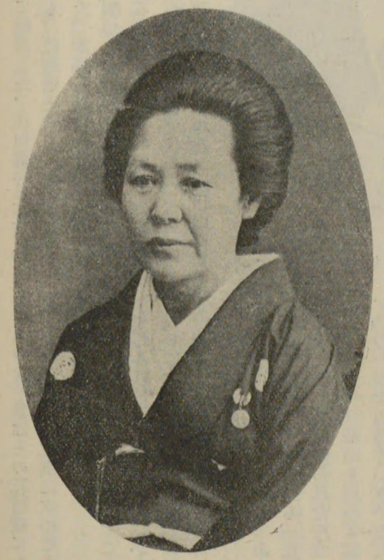
夫人益美子は明治三十七年の生れ、長野縣立松本高等女學校の出身であつて、當流の大家落合紫山女史の門弟として、技倆抜群である。長男虎麿（五歳）龍麿（三歳）の二子がある。（東京市淺草區新福井町三番地）

池坊龍生派華道教授
無耳庵 熊澤仙遊女史

女史は明治元年八月八日、千葉縣鹿取郡良文村に生る。本名やす子、高木和左衛門氏の女である。嚴父は九十一歳の高齢で歿し、母堂いの子刀自は、現に九十二歳の高齢で健在す。

高木家は千葉縣下の豪家、女史は二十歳にして、熊澤家に嫁した。熊澤氏は芝警察署に十五ケ年間勤續、二女をあげ明治三十八年物故した。爾來幼兒二人を手一つに愛育し來たが、その間女史は、裁縫の教授をなし、晝夜の別なく精勵刻苦して、子女の教養に專念し、傍ら華道の研究に從ひ、斯道を以つて身を樹てるの計を樹てた。この女史の努力――慈母としての使命を果すための努力に對しては、何れも婦人の龜鑑として、感ぜざるはなかつたといふ。

尤も、女史が華道に初めて入つたのは、その幼少の頃のことであつたが、池坊龍生派に入つたのは、女史が寡婦となつてからである。



熊澤仙遊女史

そして、明治四十年教授職を許され、爾來子弟を教導し、現在までに教授を出すこと、實に五百人に達するといはれる。斯くの如く多數の師範者を出したものは、婦人にあつては、同派には勿論、斯界において未だその例がない處といはれる。以つて女史の努力と斯界に寄與せる功勞の大なるを窺ふことが出來るであらう。

現に池坊龍生派の辯事であり、同派の重鎮であると共に、亦斯界の三人、しかも二嬢共に龍生派の教授である。一家を擧げて斯界の

熊澤仙遊女史作

望を以つて、その努力を忘らない。

家庭は長女靜江子、二女照江と

一方の雄である。

なほ、女史は今後主として立華の研究に專心し、池坊の本領である立華を世に廣布したいといふ希ために盡す、また稀なる盛事といふべきである。（東京市牛込區若松町十三番地）

◎

袖ひぢてむすびし水の氷れるを春たつ今日の風やとくらん　（紀貫之）

◎

春やとき花や遲きと聞き分かむ鶯だにも鳴かずもあるかな　（藤原言直）

◎

解たえずなけや鶯ひととせに二たびとだに來べき春かは　（藤原興風）

◎

鶯の谷より出づる聲なくば來來ることを誰か知らまし　（大江千里）

◎

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる　（紀友則）

◎

野べちかく家居しせれば鶯のなくなる こゑは朝なゝ聞く　（讀人不知）

◎

をりつれば袖こそにほへ梅の花ありとやこゝにうぐひすのなく　（讀人不知）

◎

鶯のなく野邊ごとに來て見ればうつろふ花に風ぞ吹きける　（讀人不知）

◎

しるしなき音を鳴くかな鶯の今年のみ散る花ならなくに　（凡河内躬恒）

◎

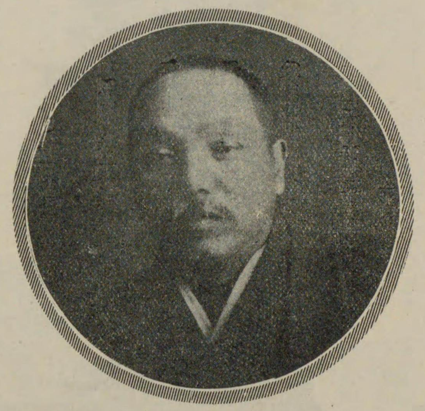
梅の花にほふ春べはくらぶ山闇に越ゆれどしるくぞありける　（紀貫之）

池坊華道研究會長
春濤庵 兒島晩翠氏

氏は茨城縣筑波郡安食村の人、文久三年十月二十日を以て生る。父は兒島雲齋、母を小梅といふ。氏の本名文茂、東都池坊流の重鎭である。

氏は明治十年栃木縣立師範學校を卒業し、十餘年間地方小學校に教鞭を執り、同二十二年上京して、小學校および女學校に職を奉ずるの傍ら、物理學校に學び、研學大に努むる處があつた。蓋し、氏は數學を最も特意としたからである。

然るに、たまたま二竪の犯す處となつたので、翻然として悟る處あり、當時坊門の名手として知られてゐた永井清閑齋先生について華道に參することになつた。後更らに、羽生鎭翁、武藤松庵の諸先生に教を受け斯道の蘊奥を極む。

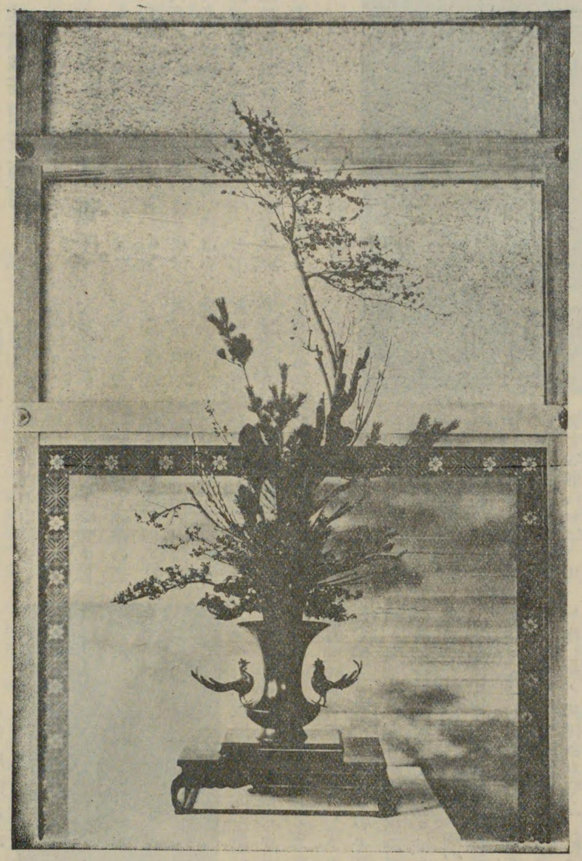


兒島晩翠氏

かくて、明治四十二年總華督制の創設と同時にこれに就任、女子大學設立と共に、花道および數學物理の教師として就任し、爾來廿有餘年間在任してゐる。又、大正二年池坊東京出張所長に就任し、十五年間餘在任し、東都坊門の總元締めとして、威望斯界を壓するものがあつた。大正末年の分裂に際して、自ら池坊華道研究會を創立し、依然として東都斯界に重きをなしてゐること、人の普く知る如くである。現在まで手がけた子弟一萬人に及び、謂ゆる教授職となつたもの數千を算すといふ。以つて氏が斯道のために盡せる功の尋常ならざるを、推知することが出來やうではないか。

又茶道は鎭直派を學び、石州流を家元松浦子爵に就いて研究する

多年に及ぶ。一面趣味として書畫の鑑賞を好み、一隻眼を有す。資性淡として水の如く、自ら子君子の風格を具へてゐる。夫人せき子との間に一男一女あり、長男茂氏（明治卅二年生）は、帝大工科出身の秀才、卒業後同校助教授となり、現に獨乙に留學中である。茂氏の夫人千代子は、佛英和の出身、仲に治代（六歳）昭子（三歳）の二孃あり、鬻然たる家庭である。（東京市外澁谷町八幡通一ノ二十一番地）



兒島晩翠氏作

◎

梅が香にくもらば霞め夕月夜　宗祇
霞さへ梅さく山の匂ひ哉　同
梅柳匂ふが上のかすみ哉　宗長
梅が香の霞に思ふ花もなし　周桂
あれ見よや梅が香こもる一霞　吟江
梅がかや朧月にも霞にも　きくと
空に梅匂ふかいづこ夕月夜　宗碩
とへば梅月に桂の匂ひ哉　同
月や猶闇の匂ひの梅の花　昌叶
春は月梅の匂をひかり哉　同
梅が香の入わたりてや朧月　露川
梅咲いて月さへ匂ふ夜頃哉　吟江
此梅をはるかに月の匂ひ哉　嵐雪
和らかに梅匂ふ夜や月に暈　素外
梅の花空に咲きいづる匂哉　宗牧
霜の葉も香をやは染し梅の花　宗因
大空を仰けば梅の匂ひ哉　同
空にみつ梅が香うつす袂哉　紹巴
猶もけさ梅かく軒の春日哉　長吉
梅寒く愛宕の星の匂哉　其角

小池之坊流 御室容眞流 華道教授 和洲遠山流盆石教授 茶道抹茶煎茶師範
春紅會々長 春紅庵 吉田法香氏

氏は明治二十六年十一月、明治大帝天長の佳節に孤々の聲を擧げた名は新作。和州奈良朝の遺蹟都跡の舊家、吉田兵佐久氏の二男に生れしも家督相續すべき運命に培れた。小學卒業後、農林校に入りて園藝の科目を專攻し、更に狹城漢學院に於て漢文學を修め、其後考古學を研究して社會に貢獻せしもの尠からず。

しかも氏は柳生武門の由緒ある家系に育てられし關係上、初より太刀の道を教えらるゝに至りしが、生來多藝の才を有し諸藝の道に志し其修むるもの六道、即ち武道、花道、茶道、盆石道、畵道、琵琶樂道之れなり。何れも一流の奥儀を極め、門生を教養する事既に一千餘人に達し、其間高貴の人に接し無上の光榮を荷ふ事枚擧に暇あらず、特に花道界に於ける効績は蓋諸藝中の顯著たるものならん。

吉田法香氏作

氏は年齡僅に十歲にして花道の門に入り、故御室容眞流の重鎭一秀齋先生に師事する事八ケ年、其技能を認められて師範代の重位に就しも更に家元に直屬して御流の蘊奥を極め、花道容眞流の爲に盡す事多年、其功勞に依り進司數回に及び、大正十年終に諸國總會司に昇ぜられた

吉田法香氏

大正七年以降亦他の門に遊び、春成外三流に入り盛瓶花の眞髓を極むる傍、自由花の生命たる草木固性美の研究に努力しつゝありしが、偶々祖父以來伺候の光榮を荷へる南都法華寺御殿花道御再興の儀に付門跡猊下より辱き御命を拜し、王政維新の際書庫炎燒の砌、散失せし小池之坊御流關係遺稿を蒐集すべく當山と御因緣深き華族諸公を歷訪して、二年有餘の星霜を費し漸く其使命を完ふし得、茲に中絶せんとせし由緒ある小池之坊御流の基礎固まり、第四十六世家元として門跡高尊猊下を仰ぎ奉るに至れり。氏は其功勞に依り同流顧問に推任せられ、家元總花揚職を命ぜらる。

抑も小池之坊御流の源は、天平の昔、光明皇后法華滅罪寺を建立あらせられ、比丘尼佛法修業の道場となし國家鎭護を祈り給ふ傍、宮中女官を始め尼僧精神修養の爲佛堂の池邊に生花堂を建設遊ばされ、之を小池之坊と稱へ、自ら草木瓶挿の技を授け給ひぬ。之れ當流第一世の開祖と仰ぎまつれるものにして、其後累世の門主其の御高德を慕ひて家元を繼承遊ばされ、代々總花務職を撰任し花務を執らしめらる。畏も御流累世の家元は、皇室と御緣故深く渡らせられ九重の御覺え目出度きは難有き極みにして、氏の榮譽も亦餘ありといふべし。

氏は目下恩賜財團濟生會救療事業の公職に缺堂しつゝ、斯道の啓發に寧日なく尙詩歌俳の道にも趣味深く、號を春浪と稱すまた社中研究機關春紅會を主宰し會誌「春紅」を發刊し、藝識斯道に精進して居る。(奈良市外都跡村字佐紀二五九八番地)

池坊東京中央橘會々長
第三世 殘雪庵 金子霞翁氏

翁は東都坊門の長老であると共に、わが華道界の元老である。文久元年九月、愛知縣碧海郡刈谷町に生る。本名を惣十郎といひ、濱島籃鳳氏の次男である。

父君籃鳳氏は、正清軒と號し、防門の一偉材であつて、總會頭職の最高位にゐた人である。當時の總會頭職は、眞に名實共に最高職であつて、籃鳳氏は日本に二人しかないその一人であつた。

翁はこの人の子として生れたのであるから、幼少にしてその訓化を受け、斯道の人となり、一面藩塾文禮館に漢字を學んだ。

爾來、古稀に近き現在まで、翁の長き華道生活には、頗る記すべき多くのものがある。特に、知名の大家をその門下より輩出すること鞏しいものがある。家元へ取り次いだ教授者のみでも、千五百人に達し、その他翁の手を執つて教へた子弟は、約一萬人に達するであらうといふ。以つて、その斯界に寄與した功績の大なるを思ふべきである。

又、その間高貴の御前に、献花の如きも頗る多く、ほとんど枚擧に遑がない。

翁は花道の蘊蓄の該博、技術の至高なるは勿論、花道に對しても頗る進歩的意見を持つてゐる。

『華道は日本の華道であつて、ある一派若しくは家元の華道であつてはならない。從つて、華道家は今後は何に流といふ舊慣を墨守するのみでなく、眞に完璧なる日本の華道を創造する心掛けを以つて進むことが必要である。しかし、徒らに新らしきを競ふて、花格を無視するやうなことも、勿論、嚴に戒しめなければならない。雜木の根締に菊を用ゐたり、盛花の根に日蔭のかつらをあしらふやうな無作法な盛花の盛行は、困りものである。又、床の間の花は床の間の花で、盛花は食堂のものである。これ等を混同してゐる現在の斯界は反省する必要がある。』

と、いつて、その該博なる蘊蓄を披瀝し、老來意氣いよいよます軒昂たるものがある。

餘技としては松尾流の茶道、實生流の謠曲および盆栽等に、深い造詣がある。

翁は先年同志と共に、東京中央橘會を組織し、その會長に推されてゐるが、嗣子秋棗氏に第四世殘雪庵を讓つて、現在は隱師となつてゐる。又、長女美枝子嬢は不雪庵梅溪と號し、東京府會頭職、鶴岡氏に嫁す。(東京府荏原郡入新井町不入斗四三五番地)

家元池坊華道教授
第四世 殘雪庵 金子霞璋氏

氏は明治三十六年八月、東京に生る。本名を秋棗といひ、金子霞翁先生の嗣子である。

氏は東京府立荏原中學に學び、更らに中央大學に入學、在學二年にして健康を害し退學、その後寫眞技術家として、現に斯業に從事してゐる。

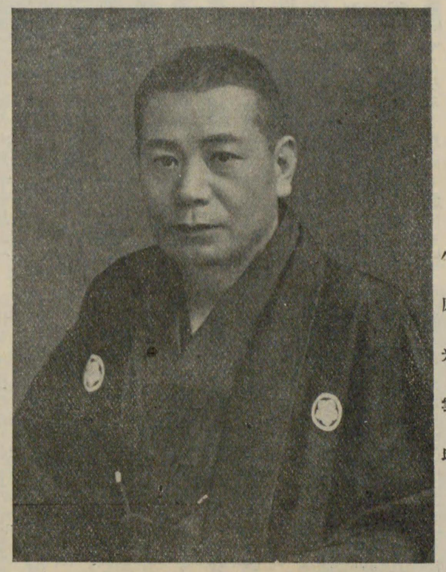
華道は大正七年より嚴父について學び、累進して、現に池坊最高職大日本總華督の地位にあり、大正十二年父君還曆祝賀の際、第四世殘雪庵を襲名し、現に池坊中央橘會幹々社々長の職にある。

夫人たま子(明治三十八年生)は東京高等女學校出身の才媛、大正十年家元入門、現に脇教授職に在り、號を玉流庵華香といふ。長男雅雄君(大正十五年生)がある。(東京府荏原郡入新井町不入斗四三五番地)

小原流盛花瓶華家元
小原流國風會長
六合軒 小原光雲氏

氏名は光一郎、明治十三年十二月十九日、島根縣松江市灘町に生る。先代小原六合軒宗匠の嗣子であり、現代日本盛花界の第一人者である。

氏は先代の遺鉢を承け、幼少より花技を愛したのはもとよりであるが、氏は當時茶華道師範の風に嫌厭たるものがあつたのも事實である。從つて、氏は初め華道家たるを欲せず、別に志を立てゝ大阪本町筋に呉服太物卸業に從事し、後、更らに名古屋市に店舗を開き、大に將來の飛躍を所期する處あつたのであるが、父君六合軒翁の歿するに及ぶや、親戚知己の勸說慫慂頗る切なるものあり、遂に氏も初志を翻して、父翁の跡を繼承することとなつた。これ氏が二十餘歲の父である。


小原光雲氏

爾來、氏はその懷抱する花道界革新の意氣を以つて、父翁の創始せる盛花を大成し、遂に小原流今日の盛名を擅にするの域に達したのである。が、又、その反面において謂ゆる彫心鏤骨の努力の存したことも、察するに難くあるまい。

氏はその盛名天下に籍甚する當然の結果、高貴の御前に獻花するの機會頗る多く、曩きに昭憲皇太后未だ皇后陛下に在すの頃、獻花の命を拜したるを初めとし、爾來、兩度の御大典に際し、挿花の大命を拜するに及んだ。而して前回は饗宴場に、今回は兩陛下御居間、謁見所の二個所に奉仕するの光榮に浴したのである。更らに昭和四年聖上陛下、大阪行幸に際しても、市廳舍便殿に獻花の命に浴した。

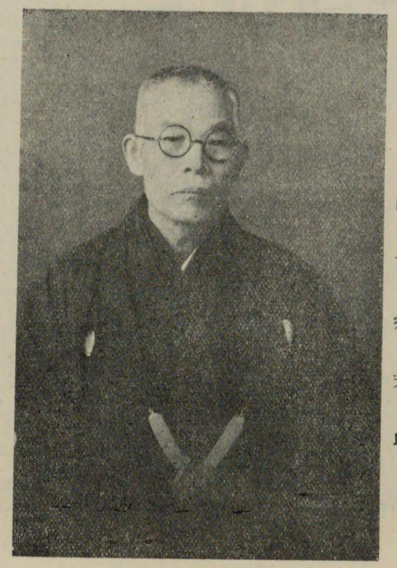
尙ほこの外各皇族殿下に獻花したる數は、全く枚擧に遑ない程の多數に達す。

趣味としては、旅行、陶器細工、硝子器蒐集等である。就中、硝子器の蒐集は、最も氏の得意とする處にして、現在世界各國の硝子器約三百點を所藏し、稀覯の珍品頗る多しといふ。(大阪市東區瓦町一丁目八番地、電話本局二六八七番)

池坊東京研究會々長
麓々園 山下秀芳氏

東都池坊門における最高權威の一人である麓々園山下秀芳氏は、慶應元年十二月二十五日、岡山縣下に生れ、名を寅吉といふ。父君吉五郎氏は、晴錦亭一蝶と號し、華道の名手であつた。氏はこの父の子として、先天的に華道に趣味を持ち、十五六歲にしてその道につくことになつた。

最初の流儀は、孤峰遠州流であつたが、氏の天禀と精進の功は、その進境著しきものあり、明治十八年頃既に皆傳を得るに至つた。次いで專敬流を學び同じく皆傳を得、明治二十九年關東會頭職に任ぜられた。更らに池坊の門に入り、現に一華一席奥蘊相傳、大日本總華督の最高職役にをり、池坊東京研究會の會長、池坊昭和會幹部等の要職にあり、隱然として重きを斯界に成してゐる。


山下秀芳氏

氏の花道觀に曰く『何流にもせよ、華道に從ふ程のものは、大宇宙を達觀するの域に達する心得を以つて、精進しなければならない。そして大宇宙を達觀するに至れば、自ら皇室中心主義に到達するの意氣と信念とを持つて、これを發露保持すべきは勿論、亦かくて自から道義觀念の完備することは更に疑なかるべしと信ず。』云々。

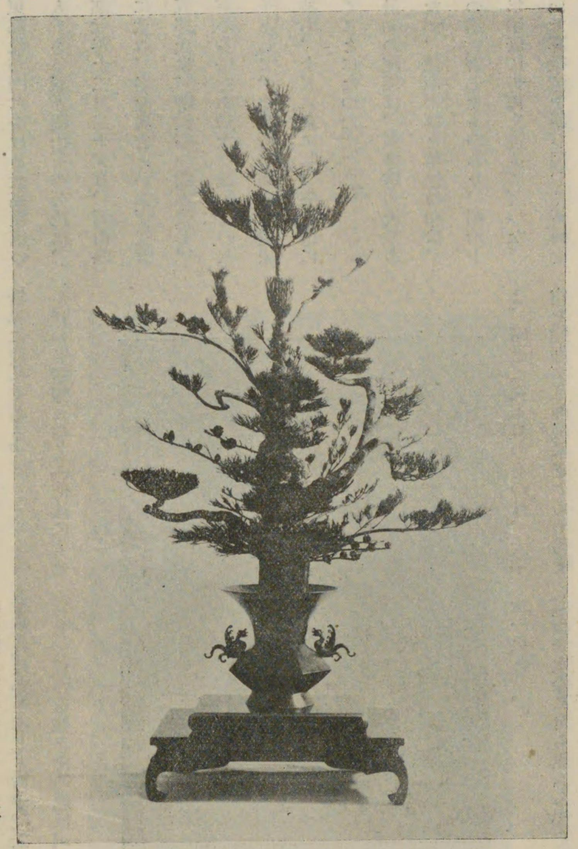
又、氏の信條とする處は、『大卷傳』中に、

『草のいほりのさびしさも、忘れやすると手すさびに、破甕に古枝を拾ひ立て、これに向ひつら〳〵思へば、蘆山湘湖の風景も到らざれば望み難し』云々。

とあるその心境に尊重するためであるといふ。

なほ、氏は、明治三十七年七月、帝國婦人協會實踐女學校の教授を拜命して以來、現在まで二十餘年を奉職してゐる外、明治三十九年九月華族女學校教師並に、東洋英和女學校教師を拜命し、更らに同四十年四月より共立女子職業學校教師として、何れも現在に及び、『山野水邊に自ら生ふる姿を居上に表はし、花葉をかざり宜しき面影を本とし・先祖挿し始めし一道世に廣まりて都鄙の賞となれるなり』を奉ずるにある。更らに謂ゆる材料を撰はないといふことも、氏の特に力說する處であつて、その理由は同じく『大卷傳』中に、

子弟を養成指導すること、夥しき多數に達するのである。從つて、氏が永き且つ熱心なる華道生活における功勞の多大なるは、敢々を要せざる處であると共に昭和三年十二月廿五日御大禮に付畏くも天皇皇后兩陛下より菊花御紋章入り銀盃御下賜の恩典に浴した。各種の獻花、受賞等の數も枚擧に遑ない程であるといふ。吝性恭謙重厚、德行の人として思慕さること頗る深い。(東京市赤坂區氷川町二四)



山下旁芳氏作

◎よそにのみあはれとぞ見し梅の花あかぬ色香は折りてなりけり　(素性法師)

◎春ごとに流るゝ川を花と見て折られぬ志深くそめてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらん　(讀人不知)

◎青柳の糸よりかくる春しもそみだれて花の綻びにける　(紀貫之)

◎今年より春しりそむる櫻花散るといふことは習はざらなむ　(同　人)

◎山たかみ人もすさめぬ櫻花いたくなわびそわれ見はやさむ　(讀人不知)

◎年ふれば齡は老ひぬ然はあれど花をし見れば物思ひもなし　(藤原良房)

◎世の中にたえて櫻のなかりせば春の心ののどけからまし　(在原業平)

◎石ばしる瀧なくもがな櫻花たをりても來む見ぬ人のため　(讀人不知)

◎折り取らばをしげにもあるか櫻花いざ宿かりて散るまでは見む　(讀人不知)

◎誰しかもとめて折りつる春霞たちかくすらむ山の櫻を　(紀貫之)

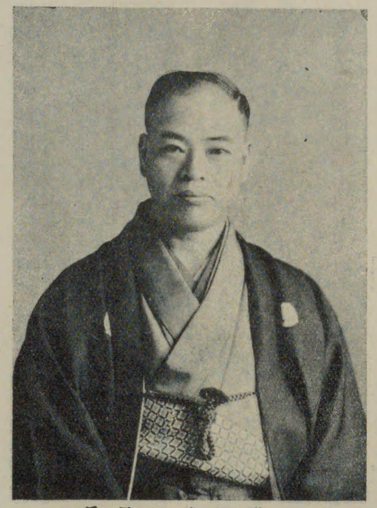
◎櫻ちる花のところは春ながら雪ぞふりつゝ消えがてにする　(承均法師)

正風遠州流宗家第六世
貞松齋　蘆田米一馬氏

氏は明治十一年八月十六日、群馬縣前橋市に生る。本名を春壽、櫻井傳三氏の男、關西華道界一方の雄である。

櫻井家は德川初期より、連綿二十餘代を相繼ぎ、代々醫家として素封家として、近鄕に聞えた名家であつた。氏は幼にして東京日暮里に住した祖父櫻井一翁氏の許において養はれた。祖父は柳貞齋と號し、華道の一權威であつたと共に、醫を業とし、且つ武藝の達人であつて、お玉ケ池の天神眞揚流柔術の祖、磯又右衞門の高弟であつた。又、當時勤王の志士として知られた武田耕雲齋、梁川星巖、渡邊華山等と親交あり、維新の風雲に乘じ、國事に奔走する處多く、九十一歲の高齡を以つて歿した。祖母筆子刀自亦八十一歲の長壽を保ち、何れも東京なる靑山墓地に葬る。

氏の嚴父傳三翁も、先代の跡を承けて醫家として立ち、群馬縣前橋市において開業、杏林の名手として知られた。昭和三年七月、八十一歲にて歿したが、母堂サワ子刀自は、八十歲の高齡を以つて健在してゐる。



蘆田米一馬氏

氏は群馬縣立中學校を卒業、濟生學舍に入りて醫學を修めたが、祖父の許に、幼少より二十九歲まであつて、その薫化を受けたので、武道を初め風雅の道にも親しむの機會多く、特に祖父の家には、當時知名の俳諧師、歌人、華茶道の大家等が、日常出入してゐたので、その影響を受ける處が、頗る大であつた。

卽ち華道は祖父に學ぶの外、三世貞松齋の高弟貞照齋および同第二世貞草齋等に師事、明治二十九年十月、正風遠州流挿花雅號晟照齋杲一壽を免許された。同三十一年三月同流宗家第四世直門となり、貞晟齋杲一英を免許され、同年四月貞號免許の披露を行つた。かくて、同三十三年十一月、京都の蘆田家を繼承したのである。

大正十年十一月正風月號鷹の家元第六世窓月齋一由を襲號、同十一年二月正風宗家嗣五世貞陽齋石一春を襲號したのである。然るに第五世家元貞松齋宗匠は、大正十二年の關東大震災に際し、不幸橫死を遂げるに至つた。そこで、翌十三年七月一日、東京麻布菩提寺善學寺において、一週年の追弔會を營んだ折、參集せる各府縣總代等が東京ホテルに會合、宗家第六世擁立協議會を開催した結果、故宗匠の遺志もあつて、氏は正風宗家第六世貞松齋米一馬を襲名することになつた。

そもそも當流の初世貞松齋米一馬は、本名を米澤寬篤といひ、寬

政より文化、文政、天保に亙つて、江戸に住したが、居を替ふること三十六回、最後は柳原に卜居した。この人は書を松川染龍に學び、乾龍と號し、俳諧は谷口鷄口の門人で、二世木犀庵樓川と號した。生花圖式『衣の香』『口傳書及ひとり稽古秘傳書』等の著をなし、天保九年十月七十六歳で歿した。二世はその子米澤貞太郎であつたが、早世し、三世を初代の門人園田正寛が繼いだ。四世は山岡林平、五世園田清吉、六世は卽ち氏であつて、代々貞松齋米一馬と號す。

現宗家たる氏は多大の資力を擁して、風流三昧の生活を樂しみとし、夙に、華道協會、京都華道溫知會等々を組織して、斯道のために力をいたす。資性豪放にして仁俠、學識教養に富み、且つ花道の沿革故實について研究する處頗る深い。氏の名聲今や隆々として高きものある亦宜なるかなと云はねばならない。

氏は伏見宮御別邸、賀陽宮御殿に、しばしばお召しを受け、その御居間に挿花を奉るの光榮に浴してゐる。又、各種博覽會、展覽會等に際して、感謝狀賞狀等を贈られたことは、枚擧に遑がない。

なほ、氏が繼承した蘆田家は、頗る由緒ある名家である。明治四十年一月、同家において擧行した祖先祭典に發表した、累代遺物家什陳列目錄のはしがきを見ると左の如き一文がある。

蘆田米一馬氏作

我が家の初代より、物かはり星移りて、三百數十年、その間幾たびの浮沈にあひつらんも、こゝに十三代、初代の事蹟については、目錄の物品によりほゞ推し量られ得べく(中略)代々京の洛中に住居して、この下鴨には別宅を構へ置きしが、京なる家の天明の大火にかゝりてより後は、この地に永住することとなりぬ。この火災にて數多もなき家の重寶、大方烏有に歸し、今はたゞ、僅かばかりの燒け殘りものなり。この燒殘りたる物品も、その附屬の品を燒失し居るもあり、或は附屬の品は燒け殘りたるも、その主要の品の燒失したるなどあり。かの宗入が茶碗再來といふは、則ちその一なり。また代々の中にて鈍永ばかりは、些か世に名を現はしたる行跡ありしと見え、『本朝古今書畫便覽』並に『永代節用無盡藏』の狂歌三十六人撰に出でたり。就中、著名なる松岡怡顏齋が『櫻品』といふ書の編者なり。近年は『大日本人名辭書』に左の記事あり。『鈍永は京都の俳人なり。蘆田九如館と號す。點者にあらず興歌を發して世に鳴る。嘗て中川貞佐に隨つて俳諧を學ぶ。(中略)一日貞佐永に謂つて曰く汝が句意全く別るゝ所あり、狂歌を學ばゞ其道に堪へんと。永師命に感じ謝して乃ち自然軒に謁し、專ら志を夷曲に止む。追日佳詠を以つて衆情を感ぜしむ。而して後雅席を開いて、その風流日々に盛んに、その徒月々に加はる。(中略)永は多才にして觀世臨池の流を汲んで、傳へて他に及ぼす。且つ剞劂に巧みあり、一歳官命に應じて額を彫る。賞を蒙つて名を讃岐と賜る。後筆流を換へて專ら雅なり。明和四年八月九日歿す。行年四十五。』かくの如けれど、命短き樣に思はれて口惜し。墓所は出水本西入長遠寺にして、當家の菩提寺なり。それより下りて先代の永量は、格別の事しなければ、先帝の御車舍人頭を勤め奉り、又、梶井の宮家の御用を務め、遊樂には舊嵯峨御所花務未生齋廣甫を師として、花技を學び、誠靜齋啓甫と號し、秘傳書の外に、師が規矩せられし七種飾の花器等を授りぬ。この外累代の內には交際家もあるべく蓄財家もあるべけれども、ここには略すこととせり。云々。

而して、『初代に由來する物品』として、

一、大閤秀吉公御朱印一通
一、豊公御自作の舟形竹花器
一、鴨長明詠草の一片一幅
一、初代長次郎作黑筒茶碗
一、慶首座作茶杓一筒
一、豊公時代諸名將等の書翰約一百通
一、一休禪師の法語一幅

等々が上げられてゐる。以つて同家の如何に由緒深くして正しきかを推すことが出來やう。

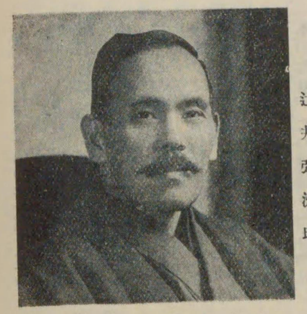
玉嶺夫人(明治十七年生)との間に二男萬壽夫(明治三十七年生)三男俊永(明治四十一年生)四男千壽夫(明治四十四年生)五男尙永(大正二年生)の四君がある。萬壽夫氏は明大商科に在學、その他三子は何れも中學に在學中である。

因に氏の社中は、今や一千餘名に達すといふ。また旺んなりといふべし。(京都市下鴨膳部町六番地)

◎

色かへぬ葉の秋深し宿の松　宗牧
姫松のかはらぬ色や常盤御前　立圓
相生のもみちぬ蔭や宿の松　昌察
色かへぬ松あり君が立委　蓼太
思ふまゝに松のみ染ず龍田姫　三蔵
松どもの心强さよ秋の山　花朗
染ぬ松に拏や敎へて龍田姫　也有
色かへぬ松はくれ行秋もなし　宗長
靡やいかに秋に變らぬ松の色　紹巴
松は秋もよたれそ常の色葉哉　弘永
七十や色かへぬ松の若盛　也有
色かへぬ姫松の木は貞女哉　重頼
色かへぬさか木や豊の宮柱　宗春

弘洲風盛瓶華家元
舊嵯峨御所未生御流常任評議員
法橋總目代
隆和齋 辻井弘洲氏



辻井弘洲氏

氏は現在大阪華道會の大立物であり、名實共に第一人者としての盛名を有する人である。名を兵造といひ、明治十六年十一月五日を以つて、現住地大阪市東區兩替町に生る。

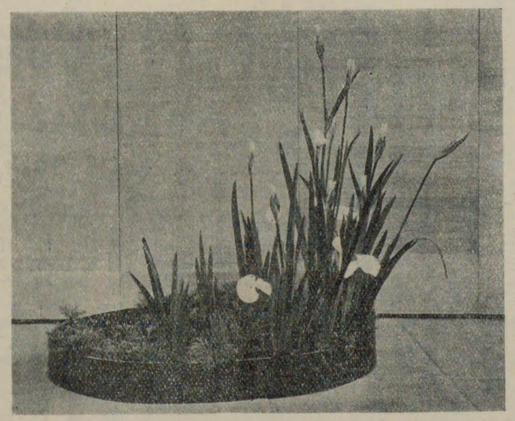
氏は若冠十二歳の頃より、初代六合軒小原雲心宗匠の門に入り、池坊華道を修める處あり、後、嵯峨未生流の門に入つて、同流の精を究めたのである。

しかし、氏は在來の花道以外、夙に自由花の心要なるを感じ、卒先これが研究に入り、謂ゆる非凡の花才に加ふるに、切瑳琢磨の功を積んで、大正三年の交、これを大成して弘洲風なる盛花瓶花を創始して世に發表するに至つた。

爾來、氏の卓拔なる技風は、その高朗なる人格と相俟つて、よく華城の斯界を風靡し、その風を望んで來るもの日に多きを加へ、今やその流風は、全土に普からんとするの勢ひである。蓋し、その將來における發展は、まことに駭目に價するものがあるのである。

氏は大正十四年五月十九日、聖上陛下東宮に在すの當時、大阪行啓のことあるや、選ばれて、市廳舍御休憩室に、裝花を奉仕する光榮に浴したる外、幾多の光榮を荷ひ、又、昭和四年五月聖上大阪行幸に際しても、同じくその技を天覽に供するの榮譽に浴したのであつた。

なほ、氏はかつて軍隊に入り、日露戰爭には、親しく戎衣を纏つて滿州の野に奮戰したのであるが、梨本宮殿下が奉天入城に際し、第四師團より選ばれて、裝花員となつた。しかるに、同地は漠々たる曠野、挿花の材料とすべきものなきにより、城外數里の地點に於いてこれを求め、以つて其大任を完ふし、宮殿下より御賞讃の御言葉を賜はり、一代の面目を施したのである。又、この時、氏は一兵卒の身に過ぎなかつたが、騎兵數騎を從へてその材料を求めに赴いたのであつた。蓋し、藝術に遊ぶものゝみの味ふ會心事でなければならない。



辻井弘洲氏作

なほ氏は、嵯峨未生流の最高幹部の一人であるの外、大阪諸流團體花友會の幹事として、設立以來斯界のために盡瘁するところが頗る多い。

爲人寛厚にして超俗、關西斯道界の重鎭といはんよりは、我が國斯界の有する希罕の大器なりといふの一層適切なるを思ふ。

夫人は裏千家茶道に達し、相携へて清雅の道に從ふ。快事といふべし。(大阪市東區兩替町一丁目一二番地、電話東四四二四番)

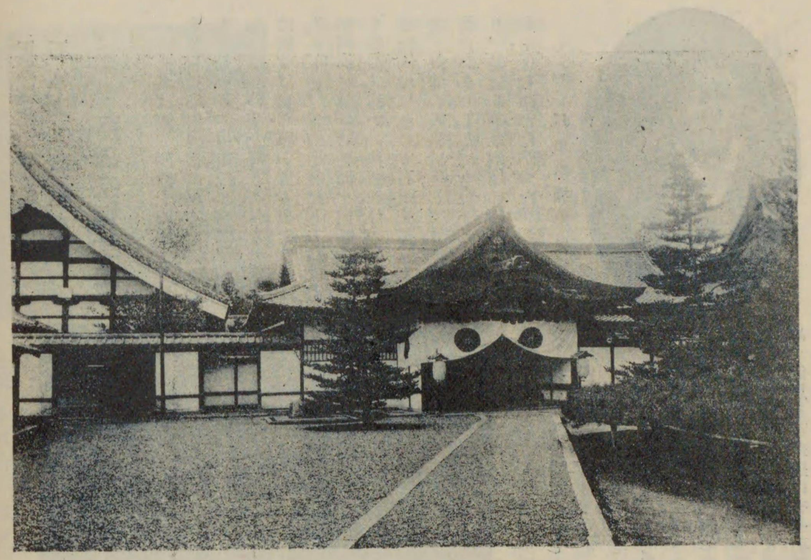
正風遠州流華道教授
石州流茶道教授
清泉庵 戸田宗掬女史

戸田宗掬女史

女史名は繁、明治十四年生を鳥取縣岩見郡田後村に享く、家は泉本氏三十五年戸田氏に嫁す。幼にして風雅の道を好む事切なりしかば嚴父は自ら導いて女史を華道に入らしめ、年十七歳にして鳥取市稻岡一雲師を師と仰ぎ正風遠州流を學ばしめた。其頃如月庵小川宗宙師同地にありて石州流茶道を教授し高邁の人格者として其德望遐邇に高かりしかば女史亦其門に入り、是より茶華兩道に精進して寸刻も倦む事がなかつた。かくて明治三十六年早くも華道の奥傳を得た。身を軍籍に置きたりし夫君は時に任を姫路に受け、女史も共に同地にありしが、東亞の空に低迷せし暗雲の遂に明治三十七年劍電彈雨に變ずるに及び、召されて滿蒙の野に轉戰する事二個年に亙つた。女史は此間鳥取に歸り能く內助の實を擧げて後顧の憂を絶たしめ、尙思を茶華道に寄せ研鑽怠らず此處にて兩道の蘊奥を究め、傍ら後進の爲に教授の事に當つた。戰雲全く收まりて夫君の無事凱旋せられてより後數年、居を姫路より更に福知山に轉じ、常に力を後進誘掖に盡せしが、女史の眞技德風を慕ひ師事するもの多く、其師弟の情に於ける慈母を慕ふが如くなりしと。夫君又大正四年京都に轉任するに隨ひ、爾後京都に居し、常に思を斯道向上に致して倦む所を知らず。先年正風遠州流宗家蘆田貞松齋師が華神堂を創立するに當りて參趨研究し、大正十二年三月貞篁齋一德の號を授與され宗家華神堂相談役教導副監に列せられ現今に及び、門葉益々茂し。

戸田宗掬女史作

女史は單に其技能の衆に範たるのみならず、其人格亦仰慕すべきものがある、女史又禪門の名智識として知らるゝ相國寺管長獨山大禪師の門を叩き法話を聽問し精神の修養に勤む等、以て女史の爲人が知られる。世上斯道に志す者技能の練達を誇て能事了れりとするが如きは此の道を知らざるの甚だしきものと云ふべし、內に崇高なる精神を養ふを第一とし手頭の技巧は抑も末の末なるものなればなり、近時斯道の隆昌と共に賣名の徒續出する少なからざるに當り、修養能く努めて怠ざる女史あるが如きは、唯に教を其門に受くるもののみの幸に非ず、延いては斯道全般の欣とすべきである。(京都市外伏見稻荷境內町開土六、稽古日金土曜日)



舊嵯峨御所大本山大覺寺大玄關

御流華道家元
舊嵯峨御所 華道總司所

舊嵯峨御所華道總司所は、洛西嵯峨大本山大覺寺内にある家元であつて、同寺は元嵯峨天皇の離宮であつたのを、淳和太后の令旨に依つて、佛寺と改めて大覺寺と稱する樣になつた。後、後嵯峨天皇、龜山天皇、後宇多天皇等、御歷代の天皇が御落飾の上、同寺の御一代として法務を統べさせ給ひ、中にも、後宇多法皇の如きは、御中興第一世の祖に在し、尙且つ同寺に於て、後醍醐天皇御即位の當初、四ヶ年間、院政を爲はせ給ふたこともあり、又、南北朝時代の南朝大覺寺統の本源として、兩朝御媾和の御儀を、擧げさせられた等の御事蹟は、國史上重大な出來事であつて、實に大切な史蹟である。斯樣の關係から、古來嵯峨御所と稱し、代々皇族の方々が、法脈を御繼ぎになる慣例であつたと云ふ權威ある門跡寺院である。

其大覺寺の現在も境内となり、更に古名園として、文部省の名勝指定地になつてゐる大澤の池は、元の離宮當時の林泉の一部であつて、中に天神島、菊の島の二島があり、又、巨勢金岡が配したと云ふ庭湖石もある。此菊の島に野生の菊が生えて、嵯峨天皇は、一日此の菊を手折つて、殿上の瓶裡に挿入遊したが、枝葉目ら三才の格を備ふるを以つて、叡感斜ならず『後世花を賞するもの、宜敷之を以て範とすべし』と宣せ給ふた。之實に我邦生花の淵源にして、斯樣の御由緒と御中興後宇多法皇の永宣旨とに基いて、古來から生花の宗家として、許狀を出して居つたが、何分上述の如き貴い御由緒と類例のない歷史を背景とするが故に、嵯峨御所から許を受ける流儀を、御流と稱したのであつた。

而して、文化文政頃に至つて、未生流なるものが勃興し來り、其の集大成者未生齋廣甫なる人が、嵯峨御所花務職に任ぜられ、法橋に叙せられ進んで法眼に昇る等の事があつてから、急速に未生流の普及を見るに至つた。

舊嵯峨御所大本山大覺寺門跡華道總司所
勅封心經奉安殿前殿●屋根は正寢殿(特別保護建造物)
後宇多法皇の院政南北朝御講和の史蹟

所が明治維新大變動の影響は、やはり免れず、爲めに一時全國的に華道の頽廢を來した時に、大覺寺門跡の華道も、殆んど中絶の姿と迄衰頽した。が明治初期頃から又未生流に關係の深い人々が中心となつて、大覺寺華道の復興を企圖し、我邦華道の淵源地なる御由緒に基いて、諸流を抱擁するに至つて、即ち華道總司所を設置し、大に發展するに至つた。併し、前述の關係から現在同所に屬する師範家は、やはり未生流が殆ど大半已上である。

更に華道總司所は、一方眞言宗の大本山であると云ふ關係上からも、此華道を以て教化事業なりとの信條の下に、種々の施設を講じ、總司所内に華道會館並に同附屬館等を建設して、毎年春四月中旬には、全國生花大會を開催し、又、春秋二回に、生花講習會を主催してゐる。更に各地方に於て、出張講習會等も開くと共に、特に選拔生制度を設けて、優秀なる師範の養成を計り、種々花道上必要なる圖書の出版並に傳書の研究植物の調査等にも手を染め、他方には『精華』なる月刊の機關誌を發行して、普及發展にも努力しつゝある。

終りに、同所の組織概要を一言するならば、大本山大覺寺門跡を總裁に推戴し事務長をして執綱を兼任せしめて、一切の責に任じてゐる。其下に寺の執事二名を亦花道執事に任じて、諸般の事務を分掌せしめ、更に幹事數名書記若干名を常任せしめることゝして常務を處理し、更に重要事項に就ては總司所顧問、評議員若干名を選任してあつて、協議する樣になつてゐるのである。

又各都會地並に地方で、在住師範の相當ある所には、地方司所又は會の組織を公認して、地方的に統轄し、總司所と互に連絡をとる樣になつてゐる。

已上は總司所沿革組織の概觀であるが、皆が生き〳〵してゐるから、同所の將來は、相當刮目に價する者があるであらふと思はれる。

(京都嵯峨)

正風華道盆石盆畫家元
松影軒 小島小洲氏

氏は明治八年九月十三日愛知縣愛知郡鳴海町に呱々の聲を擧げた。父は長左衛門、母はシヤウ子、家世々酒造を業とし有名な素封家である。氏天資聰明にして快濶、幼より雅道に趣味を持ち、華道は池坊、八代流、松月堂古流等、盆石は細川流、遠山流を研修し各其の堂奥を極むるに至つた。氏は中學校を卒へ中年にして或は銀行に就職し或は官公吏の職を奉ぜしが孰も其適所では無かつた、一日孰思らく寧ろ天稟の才の趣くところに從ひて世を益する所あらんにはと遂に斷乎として意を決し爾來專ら雅道を以て世に立つに至つたのである。

小島小洲氏

かくて、先見の明ある氏は室内裝飾としての生花盆石畫に時代に相應しき一新機軸を發案して之を世に問ふた、果せる哉舊來の單調にして變化少き生花に慊焉たるの士は翕然として氏の足下に集つた鼓に於て明治四十一年正風華道盆石畫家元として新流を樹立し、其基礎を築いたのである。而して益研究の歩を進め或は著書に出版に其の抱負と新手法を宣傳した、從つて名聲遠近に籍甚にして門葉日を追うて益多きを加へ、全國數十個所に支部及び分教所を設置し、之が巡教に東奔西走席溫まるの暇がない程であつた。この多忙を極むる中にも、明治四十五年より愛知縣立第一高等女學校の囑託を受け、七年間の久しき華道盆石教授の任にあつた。

氏が華道家としての一家の榮譽は言はずもがな、一般斯道の恩人として如何に光輝ある歷史を有するかは一々枚擧に遑が無いが其顯著なるものを摘記すれば。

大正五年四月一日、名古屋離宮に於て、明治天皇陛下天覽の上、盛花御用品として御買上の恩命に接せり。

大正五年四月五日同所に於て同上

大正八年十一月十八日、同所に於て同上

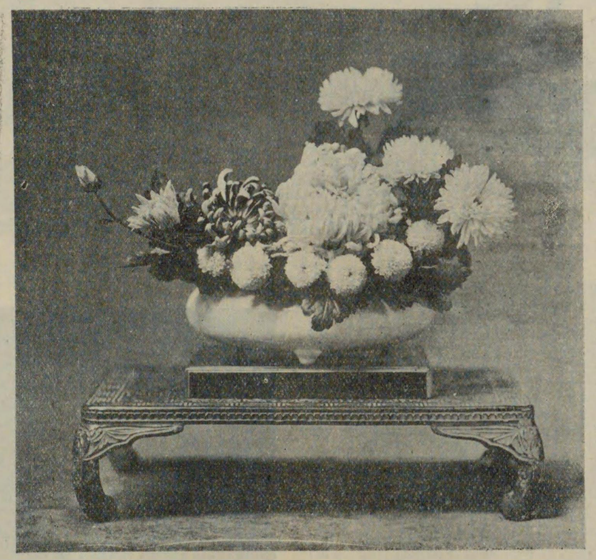
大正年間、明治天皇陛下、同皇后陛下盛花盆畫盆石生花を、天覽台覽の光榮に浴したること數度

大正五年四月九日、名古屋離宮に於て、明治天皇、同皇后陛下、盛花台覽の上、御用品として御買上の恩命に接せり。

大正十一年四月十六日、內閣總理大臣官邸に於て、同年四月二十一日三井男爵家に於て攝政宮殿下（天皇陛下攝政宮に在せし頃）英國皇儲殿下の、盛花挿花盆石畫を台覽の光榮を得たり。

昭和三年十月、名古屋離宮に於て、今上陛下、盛花挿花天覽の光榮を賜ふ。

皇太子殿下（今上天皇陛下皇太子に在せし時）淳宮殿下、高松宮殿下、伏見宮殿下、久邇宮殿下、梨本宮殿下、朝香宮殿下、東久邇宮殿下、北白川宮殿下、閑院宮殿下、有栖川宮妃殿下、久邇宮妃殿下、梨本宮妃殿下、東久邇宮妃殿下、北白川宮妃殿下、閑院宮妃殿下、東伏見宮妃殿下、李王垠殿下、李王世子玖殿下、羅國皇儲殿下、暹羅國皇弟殿下、アーサーオフコンノート殿下、各台覽の光榮を賜ふ。


小島小洲氏作

この外、多方面に亙りて金銀盃、受賞、褒狀、感謝狀を受けたる、光彩陸離たる事歷が頗る多い。

當流普及部より出版したる氏の著書中主なるは、正風盛花教授書、止砂盆畫教授書、細川流盆石教授書、生花教授書、投入教授書、同寫眞圖解集は、畏くも天覽台覽の光榮を荷い、其の他花留器、花臺は氏一家の考案になり、新案特許を得て廣く用ゐられて居る。

氏の如きは實に斯道界の至寶といふも決して溢美ではない。（本部名古屋市東區久屋町五ノ四、東京普及部東京市小石川區水道町十四）

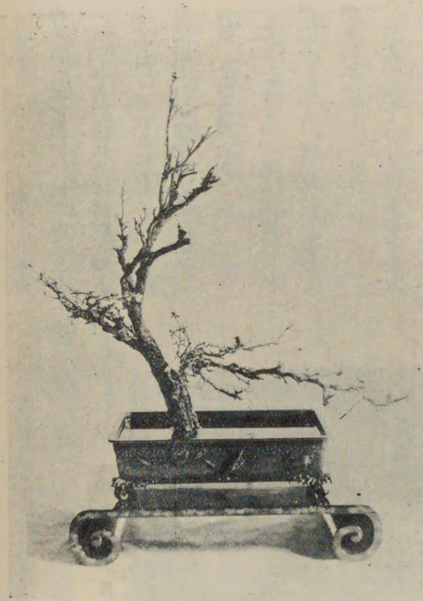
◎

降こぼす秋の時雨や菊の上　希言
雨の菊かくれ兼たるけしき哉　青蘿
月に出てならと難波は宵月夜　芭蕉
月も咲日もさく菊の山路哉　司鱸
背戸の月紫苑五尺の背をなしぬ　李投
見ぬ人に申桔梗ぞ花盛り　爲琢
神砂に秋海棠の咲きにけり　凉英
色にそまで心强しな松ぶくり　定之
色かへぬ松と云こと忘るゝな　蔵舌

古流華道八世家元
古流清和會々長
一志軒 柿谷理閑氏

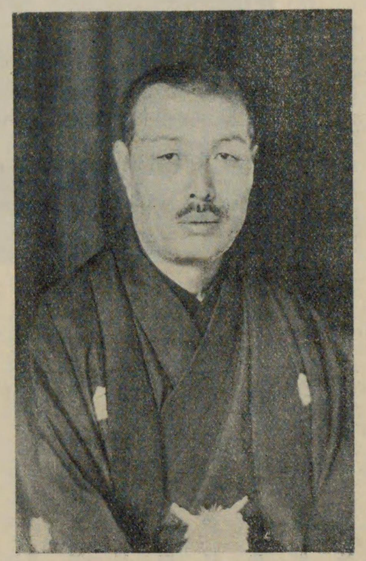
氏は明治元年九月十五日を以つて生る。名を多吉郎といふ。初め金澤市において、華道古流五世家元近藤理清先生の門に入つて、研修を重ね、明治十八年若冠にして、早くも師範免許を得るに至る。

爾來、修道のため彫心鏤骨の精進を續け、同四十年七世家元藤井理清先生の跡を繼いで、八世家元となり、越えて四十三年上京、淺草松田樓において、家元披露の會を催した。同時に古流清和會を設立し、現にこれが會長である。



柿谷理閑氏作

氏は久しく松盛齋と號し來たつたが、近時、正統の家元ならざるものが、徒らに松盛齋を名乘り、古流家元と自稱するもの、續出せるの傾向に鑑み、昭和四年四月、松盛齋を門下の高足、熊井理總氏に讓り、自らは流祖の稱號一志軒を襲名するに至つた。(東京市小石川區久堅町二十七番地)



柿谷理閑氏

望潟湖　李太白

剪落青梧枝。　潟湖坐可窺。
雨洗秋山淨。　林光澹碧滋。
水閑明境轉。　雲繞畫屏移。
千古風流事。　名賢共此時。

遊羅敷潭　同人

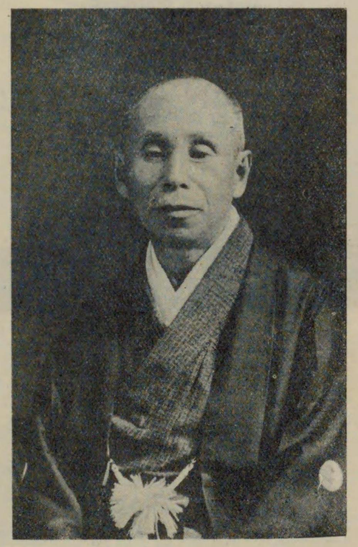
行歌入谷口。　路盡無人蹤。
攀崖度絶壁。　弄水尋廻溪。
雲從石上起。　客到花間迷。
淹留未盡興。　日落群峯西。

正風流華道家元
正風軒 役 花庵氏

氏は慶應三年四月十五日名古屋市に生まる。本名を森之助と云ふ。役小角の末孫であるといふ。役小角行者は人皇三十六代孝德天皇の大化五年に生れ、四十二代文武天皇の大寶三年三月唐に行く、實に昭和四年より一千五百二十八年前である。氏の父君は經永と稱し、眞言宗古義派一乘院住職にして權大僧都であつた。

役花庵氏作

氏は明治十五年高等小學校卒業後、眞言宗務學部に入學し、同十八年宗務部を卒業して訓導となつた。華道は明治十八年六月、靖流家元八尾滋德園師の門に入りて學び、同二十二年一流皆傳の免許を受け、同年悟友禪師に從つて草木百科の眞理を學ぶ所あつた。その翌年二十三年横濱に來り。自園を開き、草木を栽培して實地に研究し、古來家に傳はる傳記などをたづね、玆に正風流華道の一派を樹立したのである。爾來今日に至るまで、華道教授に從事し、養成したる社中八千有餘人、教授職たるもの二百餘人に及ぶといふ。現に氏は神奈川縣立高等女學校及び神奈川高等女學校華道教授を囑託されてゐる。



役花庵氏

氏は曾て、明治三十九年十一月、日本赤十字社神奈川支部總會に際し、貴賓室に瓶花を出陳して總裁宮殿下の台覽を蒙り、謝狀及び記念品を賜り、同四十年七月東京博覽會に於て兩陛下御座所に謹挿の榮を荷ひ、千家知事より記念狀を賜はつた。又明治四十五年五月東京美術工藝博覽會貴賓席に挿花を

出陳して、大正天皇が當時皇太子殿下にておはせし頃台覽の榮を荷ひ記念狀を賜はつた尙昭和四年四月聖上陛下横濱市の復興狀態御視察の爲横濱へ行幸在らせらるゝに際し、縣立高等女學校御休憩所御座所に生花を奉獻し天覽の光榮を荷つた等多くの光榮を荷つてゐる。

氏は現今華道が『中流以上の家庭における樂しみの如く一般に考へられてゐるのを慊らずとし、今一歩進んでこれを一般各家庭に普及せしめ、一花一葉を以て心身修養の資料たらしめたきものである』と云つてゐる。

氏の得意は梅、椿、柳等にして、餘技として千家流茶道及び俳句にも達してゐる。

家庭は夫人との間に一男二女あり、至極平和である。(横濱市中區日出町二ノ一四八)

池坊龍生派華道教授
松翠庵 石井壽詠女史

女史は明治二十三年十二月福島縣石城郡泉村大字泉に於て石井鶴松氏の長女として生る。本名をこと子といふ。

石井壽詠女史作

華道は鄕里に於て池坊流を習得し、後東京に出でゝ龍生派池坊教授柏木巧詠先生に師事して研修を續け次で家元吉村華芸先生に就き蘊奥を極め累進して駿河國會頭職を許され多數の門弟を敎養しつゝ今日に至つた。

女史は數年前より東京府下亀井戸東洋モスリン會社内の學校及び同會社靜岡工場内學校生花科の敎授を囑託され、多數の生徒を短時間に一齊に敎授して大に信望がある。蓋し技能練達の人に非ざれば能はざる所であらう。

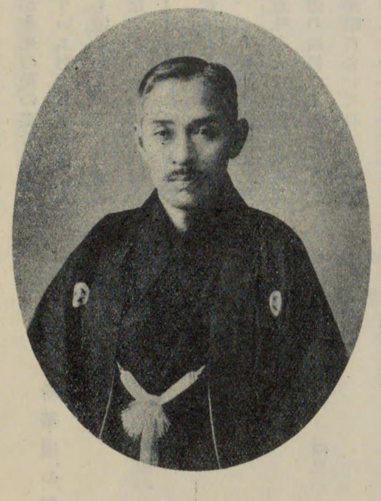
茶道は裏千家流にして造詣深し、夫君重吉氏は同會社電氣係長の要職にある。(靜岡市外豊田村小黒東洋モスリン靜岡工場社宅)

日本新花道創始者
小林鷺洲氏

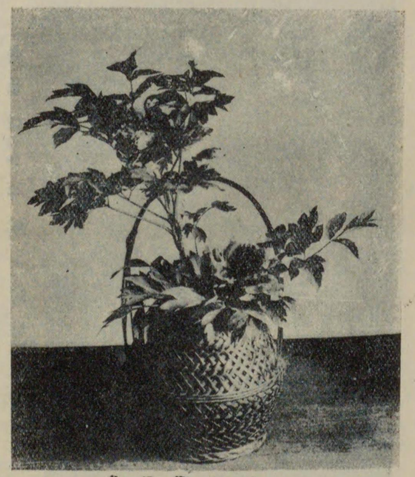
氏は明治十一年九月二十一日、大阪市西區江戸堀南通五丁目二十一番地に生まる。本名を治兵衛といふ。幼少の頃より花技を愛好し、明治二十六年十六歳の時、遠山流故松岡里遙齋師の門に入りて研究すること數年にして同流の奥儀を究め里活齋と號して同流の師範となつたが、後ち眞成流家元故万力谷蘆舟氏の斯道に對する技倆に感じて、その門に入り、指導を受くること數年、眞旭齋と號して同流の重鎭であつたが、而かも氏は決して之を以て安んぜず、斯道の新生面を開くべく常に研究を怠らなかつた。

明治四十一年三十一歳の時、華道に對する新研究の希望にかゞやける氏は、研究の便宜上華道研究團體たる和合會、十日會、青翠會等に加入してゐたが、得る所少なくして、後いづれも脫退して獨自の研究に入るに至つた。斯くて數年間種々の研究を費した結果、遂に斯道の大眞髓を體得したるも、飽くまで周到なる氏は、自己の創見を匆卒の間に發表することをなさず、古人にして其見を同じうせしものなきやを確むるため、全國の圖書館を一々歴訪して、斯道に關する文獻を悉く涉獵し、こゝに氏の創見が全く獨自のものであることが明らかとなつたので、大正十年一月、多年の蘊蓄の成果たる氏が獨特の創見を發表し、これを新華道と命名したのである。大正十年一月一日發行の東京の『花道』同年一月發行の大阪の『國風』及び『明照』に掲載發表したイブキの森林式は卽ちそれである。

新華道とは『花は他の森羅萬象と同じく瞬間に一種の氣分を現は

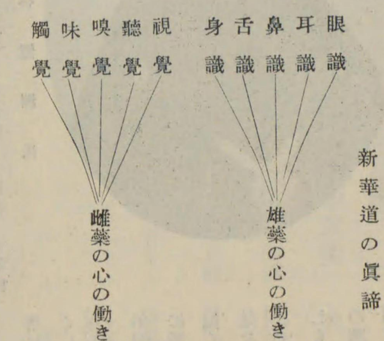


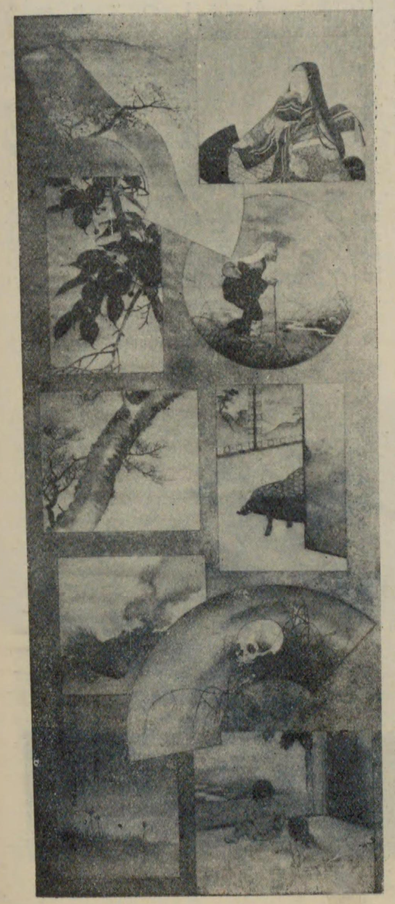
現代華道家列傳　小林鷺洲氏



小林鷺洲氏作

す、それが本來の花の姿である。それがどういふ形であるかは、人によつても違ふから、一寸言葉には現はせないが、その作品にはおのづから、見る人をして過去の經驗を喚び起させる或るものが現はれてゐる。これが即ち花の形の備へてゐる意味を人に感得させるといふ新華道の面目である』といふ。故に、新華道においては、豫じめ或る型といふものがない。然し乍ら、出來上つた花には、格花式のもあれば、投入式のもの、盛花式のもすべてある。而して、(一)植物と光線との關係、(二)各植物の形態に關すること、(三)組上つた形の風情に關することを新華道の三原則となし、挿者自身の意識が花の形を規定するのであつて、從來の華道の如く、型に囚はれない處に、華新道の新面目があるのである。そこで新華道の意義を圖解すれば左の如くなる。





新華道『人花歸一圖解』

要するに新華道は、氏が畢生の大業であつて、何人の模倣追隨をも許さぬ所のものである。近時雜誌などによつて、新華道の名が喧傳さるゝや、各地において同樣の名稱を附するものあるも、それらは、新華道の形式のみを窃んで、その精神を忘れたるものである。蓋し、一二の形式は模倣し得るも、含蓄ある其の精神は、親しく氏の敎へを乞ふ者でなければ、斷じて

全國巡遊中の小林蒼洲氏

其の眞髓に觸れることは出來ないのである。今や氏の盛名を慕うて敎へを乞ふもの多く、現に毎月一回宛大阪に出張敎授をなしつゝある。

氏は亦、著書多く、『挿花水揚法』『盛花と投入花』『いけはな古今書籍一覽』等最も知られてゐる。水揚法において夙に獨特の研究を發表し、華道界の爲めに貢獻してゐる。餘技として書を故湯川梧窓氏に學び、隷書に堪能である。氏は牧子夫人との間に令嗣治一郎氏あり、さきに東大工學部電氣科を出でて、現に三菱に勤務しつゝあり。治一郎氏夫人千代子女史は才能淑德兼備の美しき人である。(東京市本郷區神明町七五)

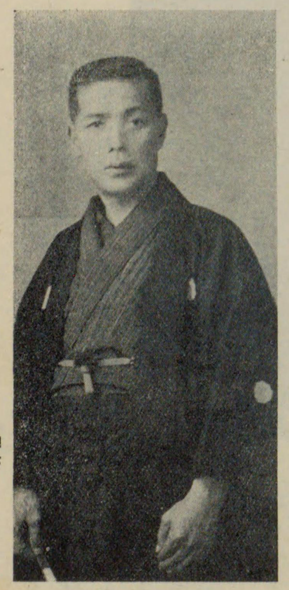
松月堂古流華道敎授
表千家茶道敎授
孤松庵 岩田秀嶺氏

氏は日本橋四日市に生れ植木店で育つた本名を吉五郎と稱す。家は茶器に關する指物を業とす、氏は業務柄必要に驅られ茶道の研修に志し齡十七歳にして當時本郷眞砂町に在りし表千家正系越前福井の人林宗喜先生の門に入り修道多年、元より雅道に志深く熱心に研究其蘊奥を極め遂に皆傳を許された、而も其師林氏は非常な嚴格な人で多くの門弟中皆傳の允可を授與したのは氏と福井の人廣部喜白氏の唯二名であつたといふ。以て氏の人格と技能が窺はれる。

華道は松月堂古流家元總理六代是心軒和光師の高弟にて明治四十年四月師範の免許を得た。是心軒翁が關西に隱棲の後をうけて關東一圓に於ける同派の牛耳をとり華務を總攬して今日に至つた。

氏は大正十一年都新聞主催の全國華道十傑投票に當選し名聲頓に高く、同當選者の花團都木和會の設立に盡瘁し、同會幹部として斯道の向上發展に精進して居る。

氏資性恬淡にして磊落、而も着實にして親切、人と交りて墻壁を設けず眞に雅人の風格がある。氏は茶道花道の外に貫輪秋香氏に師事して書を好くする。(東京市日本橋區濱町二丁目八番地)



岩田秀嶺氏

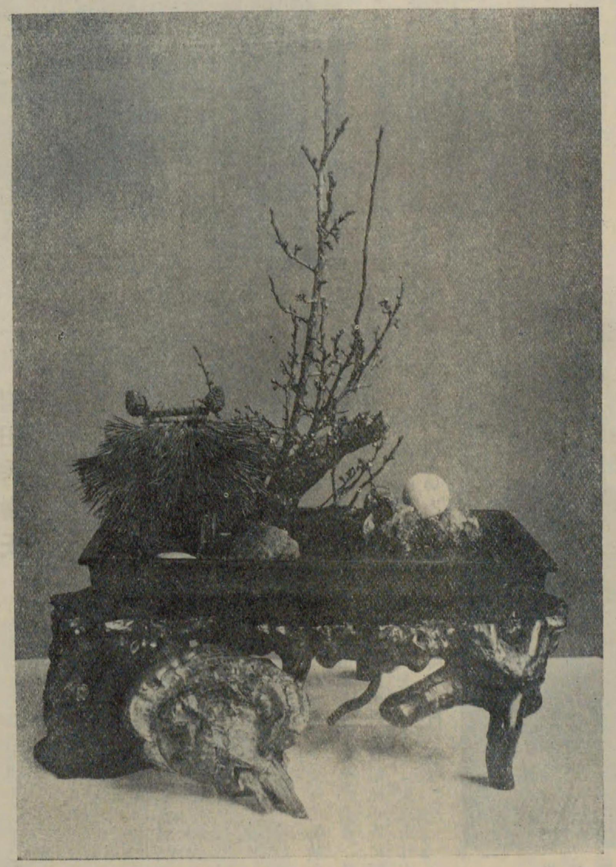
天眞古流華道家元
知足庵 **手島如螻氏**

氏は文久二年九月十四日愛知縣幡豆郡新渡場村に生る。手島御造氏の三男にして本名を增太郎といふ。父は隣藩西尾藩へ物資を集中して供給する問屋業を營む、齡十九歲にして陸軍教導團入團を志して出京せしも果さず、淺草田町に於ける信州上田藩士榎本武保先生につきて漢學を學び、また御成街道に道場を有する磯政右衞門につき天眞々陽流柔道を研鑽し免許を得た、傍ら風流に志し明治十九年正風遠州流四代家元貞松齋米一馬先生に師事して花道を習修した、華道は氏の趣味性と最も適合し將來華道教授を以て身を立つべく決心し切磋琢磨の功を積み十年にして教授を允許された、氏は尙研究の氣を緩めず諸流に涉り苦心研鑽し明治二十七年素志を貫徹し花容を新案發明して天眞古流の一流を樹立したのである。流名は天然の眞を愛する意義と柔道に於ける天眞々陽流の天眞に因みて命名したのであると。

氏が華道教授として立つや當時下町の大名と呼ばれたる伊勢町の半田屋、新川の加島屋を始め一流所の紳士淑女の入門絕えず眞に門前市を成すの盛況を呈したと云ふ。今や全國各地に氏の流派を擴むる師範者あり、氏は是を總轄して直接入門者は謝絕して居る。

氏の茶道は宗偏流にて向島長命寺內中村宗知先生の門人である。盆石盆畵は加島乃婦女史の流を汲み獨特の光彩を放つて居る。

氏は明治四十年內國勸業博覽會に生花を出陳し、且明治天皇及皇



勅題『田家朝』に因みたる作（松竹梅行之体）

手島如螻氏

后陛下の行幸啓に際し、御便殿御座所に古銅水盤に鹿島苔付老松と菊を、又五尺の大籠に百華の盛花を謹挿して奉獻し、時の東京府知事男爵千家尊福氏より感謝狀を受けられた。

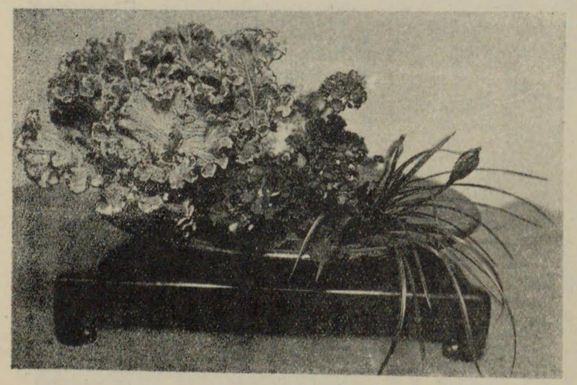
氏はいふ『花道は花技の練習に止まらず坐作進退に於ける禮儀作法も併せ教授するを要す、人は禮があつて始めて美しい、禮なくしては眞も善も美もないのである。私が貞松齋先生から教授を許された當時の試驗は花技の外に學術の試驗に大學中庸の講義などもあつた、禮儀も正しく師弟間の情誼も厚く美くしいものであつた』と。

氏は造庭、釣魚等の餘技あり家庭は玉子夫人との間に一男一女あり令息增次氏は手島寫眞館を經營し、技術優秀の聞高く繁盛である。（府下荏原郡入新井町新井宿長田四十番地）

家元池坊華道教授
小原流盛花瓶華教授
春廼舍 **井上素梅女史**

女史實名は八倉。愛媛縣喜多郡新谷町に生る。

華道は明治四十年池坊松風社分社長後に國粹社長菅井先生の門に入り、研修大に努めその蘊奧を極むるに至り、大正三年教授を許され、七ケ年間正教授の職に在つたが、大正十年軍籍にあつた夫君が逝去されたので家事の都合にて退職し、翌十一年小原流盛花瓶華に志し、研美會長工藤光洲先生に師事して研鑽を續け、現に國風會幹事及び研美會理事として令名がある。



井上素梅女史作

家庭は養子晃氏との二人で極めて圓滿平和、專念斯道に精進して居る。（東京市外代々幡町代々木中山谷三一九番地）

宏道流華道十世家元
青雲齋 渡邊溪淦氏

氏は明治三年四月三日、山梨縣南都留郡吉田町に生る。本名綱吉、渡邊傳兵衛氏の長男である。

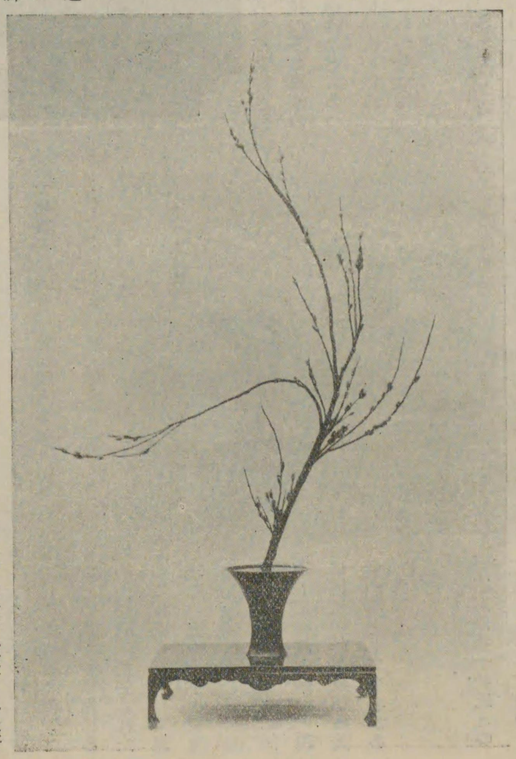
渡邊家は累代山梨縣吉田町下淺間神社々家を繼承する名家であり、家祖は同神社初代官主渡邊佐渡守で、渡邊姓は渡邊綱から賜られたものである。而して渡邊佐渡守は、元武人の出であつて、武田信玄に仕へ、川中島の合戰には、しばしば拔群の軍功を樹て、その功を賞せられた。現に同家には『川中島合戰の軍功により、銀二十五貫匁を差し進じ候事』といふ信玄公よりの記錄が殘されてある。

父君傳兵衛氏は馬を好み進んで獸醫となつたが、可惜壯齡四十一歲で長逝した。

わが溪淦氏は夙に神道教授職となり、明治十九年上京、專ら神道の研究普及に努力し、同三十二年現銀杏八幡神社々掌となつた。同神社は康平五年即ち千百六十七年前、源義家朝臣の創設にかゝり、村民の尊信最も篤く、その歸依を集めてゐた。が、氏が社掌に就任するや、一層その隆盛を來し、境內の如きも四五倍に擴張されるに至つた。その間氏は、神道の研修に一層精進し、明治四十一年三月、國學院大學を卒業し、斯道の蘊奧を極め、現に扶桑教の最高顧問たるの外、島越神社々掌を兼ね斯界の權威として衆望を荷つてゐるのである。

氏は又、二十六歲の交より、宏道流紫雲齋少休氏について、華道の研究に着手し、爾來公私の忙中を割いて、切磋琢磨の功を積み、明治三十六年六月、輿望を負ふてその家元十世を襲ふに至つた。又、大日本華道國風會の創立には、大なる盡力をなし、同會幹事として多年斯界に寄與する處があつた。

氏は現代の華道に對して、『現在の華道家は、研究の結果を兎角隱蔽する傾向があるが、これは斯界百年の長計のために、採らぬ處で、宜しく研究の結果は公會の席上で、發表するやうにしなければならない。いつまでけ研究して他人に眞似が出來ないといふやうな誇りを持つことは、甚だ狹い考へであつて、斯道を眞に隆盛ならしむ所以の道ではない。勿論、發表された研究事項は權威ある記錄として、永久にその人の名譽たらしめるやうにしなければならない。また、時勢の趨向に順ひ、洋花の研究を盛んにし、その名も原名を用ゐるやうにしなければならないと思ふ。』云々といふ進歩的主張を懷抱してゐる。

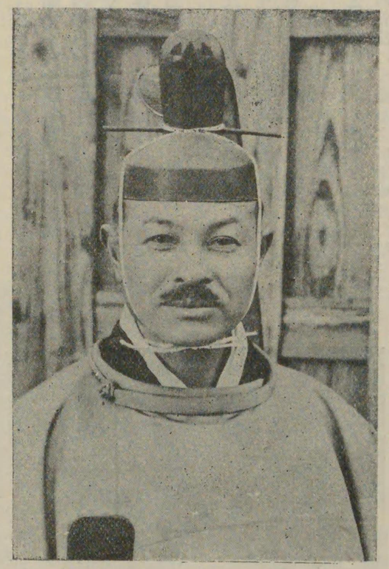


渡邊溪淦氏作

氏は表千家茶道、陶宮術、書畫の鑑賞等に通じ、何れも一方のオーソリチーである。

更らに公共の方面にも忠厚く、東京市社會局第一方面委員、同第三十二地區劃整理委員等の外、福井小學校後援會幹事として、教育方面の施設完備に努力する處多く、町民の信賴を受くること甚大である。

家庭は幸子夫人、嗣子源一郎氏及び同夫人重子あり、源一郎氏は陸軍一等主計である。久しく麻布三聯隊、第一師團司令部、横須賀重砲兵聯隊等に勤務し、退役後は淺草壽町三島神社々掌として在任信用頗る厚い。(東京市淺草區福井町一ノ一八番地、電話淺草三二二四番)



渡邊溪淦氏

未生流華道師範代
未生清和會幹事
光竹齋 竹馬牧圃女史

女史は明治三十四年十月三十日東京市深川區靈岸町に生まる。本名を滿喜子といふ。大正五年高等小學校を出でて、神田の共立女子職業學校受驗科に入り、大正七年三月卒業す。

華道は大正十年二月より、和田宗淑師の門に入り未生流の初中傳を受け、すでに奧傳を受くるまでになりし時、大震災のため、和田師が歸鄕されたので、同流の坂誠甫師をたづね、その門に入り、更に研究を積み奧傳、郡會司、准國會司と順次進み、昭和二年秋國會司を許され、同時に家元より師範代として、免許を授けられ、現に未生清和會幹事として、斯道のため努力しつゝある。女史は、華道の外、又宗偏流茶道皆傳を得てゐる。(東京市深川區靈岸町三四)

竹馬牧圃女史

遠山流花道家元十一世
盆石盆花家元玉泉流元祖
大日本花道
諸流同盟花友會幹事長

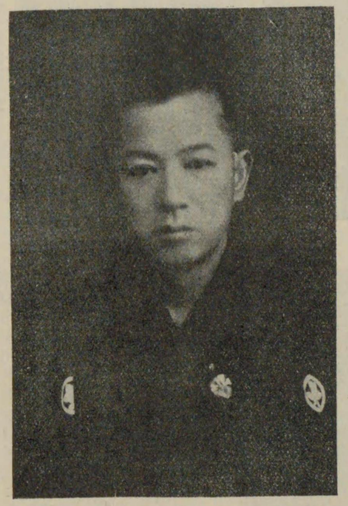
九峰堂 安井玉泉氏

氏は明治十五年四月七日、大阪船場南久太郎町商家澁川安兵衛氏の次男として生れ、後安井家を繼ぐ。名を卯三郎といふ。關西華道界における名實共に第一人者である。

氏は明治二十四年より斯道界に入り、遠山流花道および盆石道を七世家元田原正甫先生に學び、初名を星龍齋盛甫と號した。

大正二年九世家元藤井昌鳳先生と共に、當流の内務を革新し、花形骨法の改整および諸傳書の新制定に參與し、功績著大なものがあつた。かくて、翌三年盆石玉泉流を樹立し、同八年十一世遠山流家元を繼承、昭和元年一月五日より、當流の新花法則を制定して、盛花、瓶、抛入花形の創作および實施を行つた。又、氏は家元繼承と同時に、從來、當流傳襲の齋號を當事者の自由選名となし、久しきに亘る因襲を解放して、一生面を打開するに至つたのである。

そもそも、當流の元祖は、丹波國桑田郡河原尻村の人、國古亭一清、姓は遠山氏であつて、嘉永三年九月二十六日、行年六十歳で歿した。鼻祖は元祖の令弟里曉齋梅甫、坂田氏で、浪花に住して當流を樹立した人である。弘化三年二月二十七日歿す。二世は井阪氏同じく里曉齋梅甫と號した。浪花の人鼻祖の門人、安政二年三月二十日、六十一歳を以つて物故す。



安井玉泉氏

三世は里曉齋秀甫、姓を秦氏といひ、浪花の住、二世の門人、初名を里松齋と號し、明治十二年七月三十日歿、行年六十六。四世は里曉齋一甫、正田氏であつて、浪花の住、二世の門人初名を里照齋といふ。明治二十二年七月二日歿、行年七十。五世は里曉齋德女、四世の女であり、初名を里壽齋といひ、大正五年十一月二十二日歿す。六世は里曉齋梅甫、五世の聟である。昭和二年十月二十九日歿、享年六十四。七世は里曉齋正甫、浪花の人田原氏である。里友齋正甫の門人、明治四十二年十月二十五日、七十三歳にて歿した。この人は初名を里誠齋、大正二年九月十日、生前の功勞を追慕して、家元七世に列し、里曉齋を縊つたのである。

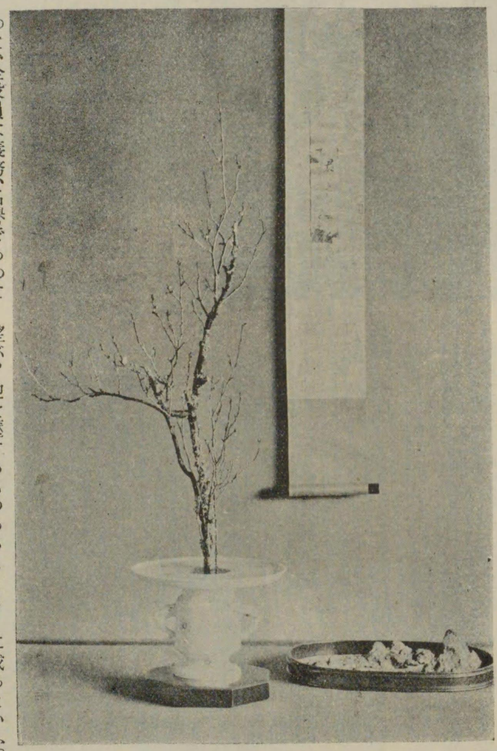
八世は多田氏、浪花の住里友齋正甫の門人、里曉齋嘯鳳である。明治四十四年三月十九日、七十八歳で歿す。初名を里豹齋、七世同様大正二年九月十五日、生前の功勞を追慕し、家元八世に列した。九世は里曉齋昌鳳、浪花の人藤井氏で八世の門人である。初名を里凌齋といひ、大正五年四月三十日に歿した。行年五十であつた。十世は里曉齋箕鳳、浪花の住八世の門人初名を里容齋と號し、大正八年十月十五日隱退、爾後現家元たる安井氏が十一世家元となつた。

かくの如く當流の流原は、その高弟がこれを承繼して來たのであるが、四世家元歿後は、周圍の事情によつて、その女これを繼承するに至り、一時正田家に移つた。而して、維新當時までは、當流の皆傳者には、齋號の頭に里の字を冠するのみであつて、雅號は適宜に任せてあつたが、その後各師の系統を明かにするため、雅號の下の一字は、その師のものを用ゆるに至つた。例へば家元里曉齋一甫の門人およびその系統の者には、雅名の下一字に甫を用ゐ、又、里豹齋嘯鳳の門人およびその系統者には、鳳の字を用ゐたのである。

なほ、當流は里鳳齋雪甫（二世門人青木氏）遠山含里齋と稱し一派を樹立したので、爾來遠山は二派に分派した。が、後この派から正風遠山が起り、又別に遠山古流、東山新流二派が起つた。

さて、現家元安井氏は、藤井八世家元と共に當流の刷新について、大に努力する處あつたことは、前述の如くであるが、現在の流内組織は、家元一、總務一、參務十、參事二十名より成り、花務と庶務との二部に分ち、花務中には別に寫眞部、庶務中には機關雜誌月刊『遠山』の發行部を有し、整然たる組織形態を持つてゐる。

又、全教師によつて成る教師會、全流儀者中に遠山會があり、各役職は選擧、推薦、檢定に據つてゐる。しかも、最も大なる當流の特色は、家元以下現在約三百餘名の役員、教師者の殆んど全部が、好事家であることで、專門教師は二三者に止るといふことである。從つて、全役員は義務、名譽であつて總て無報酬を以つてこれに當り、たゞ、傳書等の授與だけが實費を要するのみである。蓋し、當流の内容組織は、眞の意味の風流者の集團であつて、今や、當流が欝然として、斯界に蟠居し、屹然としてその最高峰を示してゐるのも決して偶然でないと云はねばならぬ。而して、その中軸を成す安井氏の勢望が、他を壓するものあることも當然の歸結であらう。



安井玉泉氏作

なほ、安井氏は明治三十七八年の日露戰役に、第四師團歩兵八聯隊に所屬して出征、各地に轉戰して武功を樹て、戰後功によつて勳七等功七級陸軍歩兵曹長に任ぜられた。

氏は巨富を擁して、風流道に參するもの、趣味頗る廣くその重なるものだけを敎へても夥しい多方面に亘つてゐる。即ち五江流書、漫畫、運隊流の柔劍道、大藏流狂言、菊本流舞踊、喜壽軒の手品、文樂流の義太夫等々を數へられ、雅號として夢の家、五靈、四福、半澁軒等の稱があり、機關雜誌『遠山』の編輯の如きも、皆氏自身の手に成るといふ。その多趣多能眞に驚くべきものがある。

雪子夫人との間に五男三女あり清福を謳はる。（大阪市東區八尾町六八四番地）

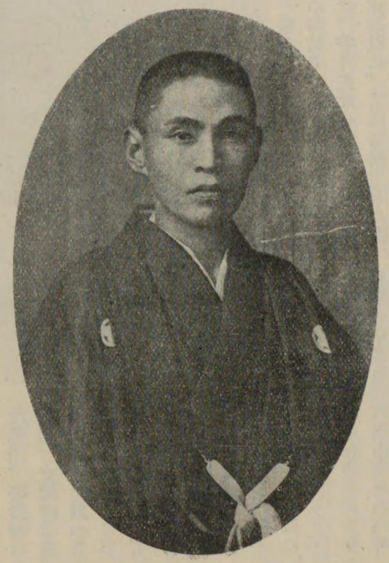
家元池坊華道教授
投入盛花盛物盆石教授
大日本總華督
池坊昭和會理事
五十嵐瑞峰氏

氏は新潟市寄居町に生まる。本名を茂八といふ。父君半木居士は同地有名の華道家であつた。

氏は初め父君に從つて池坊華道を學び、後家元代見岩田立山先生に師事して立華生花を研修し、其の蘊奥を極め累進して同流最高職役たる大日本總華督の地位にある。大正十年父君半木翁逝去するや、氏は其の跡を襲ぎて斯道家として立つに至つた。現に縣立新潟高等女學校、新潟女子工藝學校、新潟醫科大學内八千代會、新潟郵便局電話課、新潟湊處女會、新潟入舟處女會等の囑託教授として勤務し、池坊昭和會理事として名聲が高い。

なほ氏は立華生花の外に投入花盛花、盛物、盆石の技に達し、是等一般裝飾法を進んで研究せんが爲めに精華會なる研究機關を組織し、書畫、圖案等の藝術家を顧問として、種々の試練を爲し、製作品は是等藝術家の批判を得て、其の成績の佳良なるものは寫眞に撮影して會員に頒布する等、絶えず熱烈なる研究心に燃えて居る。北越に於ける斯道の麒麟兒として將來の大成を囑目されて居る。（新潟市東堀前通九番町）

五十嵐瑞峰氏作



五十嵐瑞峰氏

池坊東京紫雲會々長
廣山流投入盛花家元
池坊昭和會理事
春海堂
岡田廣山氏

東都における池坊華道界は、謂ゆる雲の如く人材を抱擁し、正に斯界空前の偉觀を呈してゐる。我が春海堂岡田廣山氏は、この雲集せる人材中にあり、池坊東京紫雲會の統帥として、斯流に屹然覇を唱へてゐるのは勿論、その識見において、その人格において、將又その技術において、眞に一世の師表として仰がるべき人である。

岡田廣山氏

氏は靜岡縣濱松市の人、永田勘次郎氏を父とし、同まき子を母とし、明治九年七月二十八日を以つて生る。本名を與平と云ひ、後岡田家を繼ぐ。父母は商賈に從事したるも、風流の道に暗からず、謂ゆる營々錙銖の利を爭ふの徒ではなかつた。氏は小學を卒へて後、濱松の小野塾に、國漢の學を修む。小野塾は當時著名な私塾であつて、現代各方面に人材を輩出してゐる。彼の現慶大教授氣賀勘十博士の如きもその一人であつて、博士は氏の先輩に當る。

氏は明治二十四年、年僅かに十五にして、濱松の池坊花道教授河合專助翁の門に入り、初めて花道に志す。後河合翁頽齡するに及び、その門人にして先輩たる織田利三郎、岩田立山兩先生に就き、共に研究に專念した。織田先生は、號を長閑窟立露といひ、靜岡縣華道社の創立者であつて、同流派のために、盡瘁する處、頗る大であつた。のみならず實業家としても、著名であつて、彼の五二會前田正名氏の殊遇を受け、米國、佛國等に、博覽會の用務を帶びて出張すること數次、日本産業のために盡

天皇陛下攝政宮にあらせられる時模濱大演習に際し大本營御座所に奉りたる花（松・靈芝）

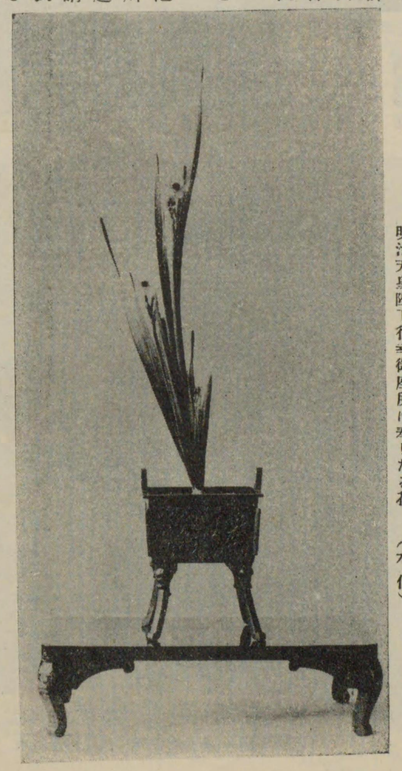
す處、尠からぬものがあつた。又、明治二十四年以來、宮內省東宮職へ、獻花約二百餘回に及ぶの光榮を荷ふた人である。大正十三年、六十餘歳を以つて歿した。岩田先生は、織田先生の後を襲ふて、現華進社長である。

岡田氏は後更らに先代專正、當代專啓の二宗匠に敎へを乞ひ、更らに池坊の恩人たる翠雲軒武藤松庵先生の晩年には、その寵兒として、具さに修道の功を積んだ。現に氏は松庵先生の五色幕を讓られてこれを藏してゐる。氏はその間、年少にして前記華進社常置委員、濱松支部副部長等の要職にあり、同二十九年東上、翌三十年現岡田家を繼いだのである。

今、氏が職役累進の跡を見るに、明治二十七年早くも皆傳を得、二十九年床構、紫幕となる。斯くて、薄盤、華盤、家元華方役、生花敎授と累進し、三十七年十一月文部大臣より、鎌倉女學校挿花敎授を認可され、三十八年家元より最職總正面席、別席家元華鑑を許さる。次いで、同四十一年別席家元執事職、翌四十二年家元目代職、四十四年家元華道敎授となり、大正二年大日本總幹事、同三年大日本總執事となり、家元より簾間を許さる。更らに同五年大日本准總會頭職、翌六年同總會頭職、同七年同華督となり、家元より一華一席および溫奧相傳を免許された。次いで同年大日本准總華督を經て、最高職役同總華督となり、家元代華職を許されるに至る。

これより先、池坊には東京出張所があり、兎角、越權のこと多く、謂ゆる東都在住の敎授員は、何れもその手を經由せずば何事も爲す能はざるに至り、そのまゝに放任してをくにおいては、相當識見ある敎授員は、餘儀なく別派を立てざるを得ない狀態となり、心ある人々は、深く同流派の爲めに、憂へてゐたのである。氏もまた夙にこの弊害の及ぶ處を憂へてゐたが、適々、恩師武藤松庵翁の內意を受けるに及び、敢然起つて、これが弊習打破の烽火を揚げるに至つた。

かくて、氏等の正論は、遂に勝を制し、大正七年に至り、家元においても、東京出張所を經由せずとも可なりといふ通達を發するに及び、尨然として大を誇つた出張所も、氏等の主張に屈服する結果となり、氏に凱歌は揚つたのである。こゝにおいて、廣山氏は、同年氏の總華督披露と出張所解放の報告を兼ね、池坊全國大會を築地本願寺に開催、六角堂よりは家元代理が臨席した。蓋し未曾有のことで、同流派史上特記さるべき出來事であつた。何故なれば、從來、東京における出張所以外の花會にして、家元代理の臨席したことは、この大會が初めてであつたからである。



明治三十九年十一月十五日軍艦薩摩進水式當日明治天皇陛下行幸御座所に奉りたる花（水仙）

勿論、その間に幾多の迂餘曲折

はあつたが、昭和二年七月に至るや、東京出張所は、全部解放され、同時に東京在住敎授員は、八團體に分裂した。卽ち氏も自ら池坊東京紫雲會を設立し、氏傘下の敎授員を集め、その統帥として今日に及んでゐる。又、その後池坊昭和會の設立されるや、理事として就任す。

又、氏は明治四十年頃より、現代式投入盛花の研究に着手し、遂に自らの創意を以つて、一派を開き、大正式廣山流と名命して、瓶花盛花に一新機を出し、專らその普及に努め、雜誌『婦女界』誌上には、數年間に亘つて、これが解說を揭載し、以つて同流の眞價を世に問ふ處があつた。かくて氏の投入盛花は、漸く世の視聽を集め、大に流布するに至り、大正元年には、畏くも、先帝の御座所に、獻花を命ぜられるの光榮に浴した。その後廣山流投入盛花と改め、今日に至つたのである。

なほ、氏は東京、名古屋、札幌各放送局の委託により、ラヂオを以つて、斯道の皷吹普及に努ること、二十餘回に及んでゐる。

氏の花道に對する抱負は、『花道の効果は先師武藤松庵翁の「華道十德」に、盡されてゐるから、別に述べる必要はないが、自分が痛切に感することは、現在の華道は他の美術、藝術に比し、技術が低劣である。三味線で云へば謂ゆる調子の合はないといふ、花が餘りに多過ぎる。しかも世間は一向これに對し、無批判であり、無頓着である。これは何故か、要するに、世間一般が、花を見る鑑識眼に缺けてゐる爲めである。それで、花道をもつと正道に引き戻すには、世人の斯術に對する鑑識眼を養ふことである。幸ひ、女學校あたりでも、花道を隨意科として認めてゐる以上、百尺竿頭一步を進めて、これを正科とし、單に技術を敎へるだけでなく、見る眼を養ふやうに努力することが、最も緊要であると信ずる。そして、技術を養成するのは、第二義的に、特殊な希望者だけに行ふやうにするのがよいと思ふ。かうして、第一義的に、鑑識力を養ふことにすれば、遠からず、現在の如き調子外れの花術は、存在の餘地がなく、非常な斯道の進步を促すと信ずる』といふにある。至言といはざるを得まい。

又、氏の薫陶を受けたる社中は、その數頗る多きに達し、特に名門書顯の子女にして、氏の敎を受けたもの夥しい數に達する。卽ち島津公爵夫人、鍋島侯夫人、龜井伯夫人および令孃、本野子爵母堂並に夫人、西鄕侯令孃、柳澤伯爵嗣子夫人、伊東元帥令孃、牧野、松平、川上操一、岩倉、大久保各子爵夫人及び令孃、柴山、竹下、上村各大將夫人令孃、眞木、本田、辻、大鳥、菊池、高橋、前田、松平、西、神田、安川各男爵夫人令孃、その他政治家實業家にあつては、水野練太郎、三原、三浦、松平、鹽原、伊丹、嶋川、池貝、森村、新山、牧田、梶原、米山、岡崎國臣、廣岡、原敬嗣子原貢、有吉橫濱市長、同公使、淺井、木下等の夫人令孃、文學者美術家としては、巖谷小波、高濱虛子、北澤樂天、山口逢春諸氏の夫人令孃は何れも、氏の敎へを受け、外人としても前獨乙大使ゾルフ夫人、浮世繪研究家ハツパ夫人等、その數實に枚擧に遑ない程である。又、大正三年より聖心女學院生花敎授として今日に及ぶ。

なほ、從來氏が高貴の御前に、獻花した經歷は、これまた頗る多きに達す。今その大體を年代順に示せば、左の如し。

◇明治三十年八月二十二日、靜岡縣廳行在所において、織田利三郎氏に隨行、天皇、皇后兩陛下玉座に、池坊生花數瓶を獻ず。

◇同三十六年十一月二日、菅羽艦進水式の際、橫須賀鎭守府において、天皇陛下玉座に、挿花數瓶を獻上、賜謝辭。

◇同三十九年十一月十五日、薩摩艦進水式の際、橫須賀鎭守府において、天皇陛下、東宮殿下、各宮殿下に、挿花數瓶を獻上、同府より賜謝辭目錄。

◇同四十年九月四日、相州鎌倉島津公別邸において、久邇宮妃殿下に挿花數瓶を獻じ、拜謁の上目錄を賜ふ。

◇同四十年十月二十一日、鞍馬艦進水式の當日、横須賀鎭守府において、皇后陛下並に内親王、各宮殿下に挿花數瓶を献じ、同府より賜謝辭目錄。

◇同四十一年八月三日、横須賀鎭守府へ、韓國皇太子殿下行啓の際、薩摩、相模兩艦へ各數瓶を献花、同府より謝辭目錄を賜ふ。

◇同四十二年三月、横須賀市龍本寺において、村雲尼公殿下に挿花生花數瓶を献納。

◇同四十二年五月二十九日、皇太子同妃殿下軍艦敷島に行啓の際生花數瓶を献じ、謝辭並に目錄を賜ふ。

◇同四十三年九月三日、清國載洵殿下横須賀鎭守府行啓の際、献花數瓶、同府より賜謝辭及目錄。

◇同年十月十五日、横須賀鎭守府において、天皇陛下玉座、各宮殿下に献花數瓶、同府より賜謝辭目錄。

◇大正元年十一月二十一日、比叡艦進水式の當日、横須賀鎭守府において、池坊生花の外、廣山流投入數瓶を献じ、同府より賜謝辭及び目錄。

◇同二年十一月二日、神奈川縣愛國婦人會支部大會の際、神奈川縣廳貴賓室において、閑院宮殿下の御前に池坊立華生花數瓶を献納、同府より賜謝辭及び紀念品。

◇同年十一月十日第一次恒例觀艦式の際、天皇陛下および各宮殿下お召艦香取において、大正式廣山流投入數瓶を献花、艦長より賜謝辭。

◇同四年六月五日、天皇陛下榛名艦御親閲の際、お召艦玉座において、池坊生花、大正式廣山流投入數瓶を献上、本艦より目錄およびお召艦玉座の寫眞を賜ふ。

◇同年十一月三日、御名代宮博恭王殿下、山城艦進水式に行啓の際、横須賀鎭守府において、池坊生花、大正式廣山流投入數瓶を献花、同府より賜謝辭及陶製華瓶。

◇同六年五月八日、天皇、皇后兩陛下、東京府袖ヶ崎島津公爵御本邸行幸啓の際、大正式廣山流投入數瓶を献花、公爵より謝辭及び目錄を賜ふ。

◇同七年六月二十四日、同邸に英國コンノート殿下行啓の際、池坊立華及び生花、大正式廣山流投入を献上、公爵より謝辭及び目錄を賜ふ。

◇同八年十月二十八日、觀艦式の際、閑院宮同妃殿下に、神奈川縣鶴見市嶋家別邸において、廣山流投入盛花池坊生花を献じ、市島家より、謝辭及び目錄を賜ふ。

◇同十一年十一月十八日、大演習の際、神奈川縣廳大本營において、攝政宮殿下玉座並に各宮殿下に挿花並に廣山流投入數瓶を献納、同廳より賜謝辭。

◇同年四月十三日、麴町永田町鍋島侯爵本邸に、英國皇太子殿下御成りの際、池坊立華生花、廣山流投入花數瓶を献上、侯爵家より、謝辭及び目錄を賜ふ。

◇同十二年十一月、水道橋松平邸跡において、華族女學校常磐會主催震災後最初の慈善バザーに久邇宮良子女王殿下外各宮殿下御成の際、貴賓室において、廣山流投入華數瓶を献上、會長より謝辭を賜ふ。

◇震災後華族會館において、德川公主催ルーズベルト夫人招待會の際、廣山流投入花數瓶を献じ、賜謝辭目錄。

◇大正十四年、學習院女學部へ、皇后陛下行啓の際、同學部出身者にして廣山流修得者一同の手により、御座所に献花。

◇昭和二年一月、李王兩殿下熱海大倉別邸御成の際、廣山流投入花献上。

同年同殿下鍋島侯邸御成りの際同上、謝辭目錄を賜ふ。

◇同三年五月、梨本宮殿下、松平胖邸お成りの際、池坊並に廣山流投入盛花數瓶を献上、同家より賜謝辭及目錄。

◇同年六月、松平節子姫歸朝の際、松平大使新邸において、池坊生花並に廣山流投入盛花數瓶を献じ、鍋島侯爵家より賜謝辭及び目錄。

◇同年七月、梨本宮殿下、鍋島侯邸行啓の際、廣山流投入盛花數瓶を献じ、侯爵家より謝辭および目錄を賜ふ。

なほ、氏の繼承したる岡田家の先代は、某藩の落人として東京に出で、手習師匠となり、文久三年嵯峨御所より、春海堂の呼名を許され、別に廣山と號して、粟田口御殿に出仕し、多くの子弟を養成、當時世に高名であつた。特にその嚴格なる指導振りは、雷師匠の名を以つて呼ばれ、父兄の手に合はざる子弟は、みな爭つてその門に入れ、訓化を乞ふた程で、現在に至るも古老はよくその名を知つてゐるといふ。明治初年岡田學校を創設、明治十四年七月歿した。谷中修性院に葬る。

現在の家庭は、夫人さき子（明治八年生）長女幸子（明治三十五年十一月生）の三人、幸子嬢は、府立第三高等女學校出身の才媛である。

和氣靄然たる家庭、親子の如き師弟の情懷、一たび氏の門を訪へば、春風堂に滿つるの感がある。

（東京市芝區車町八二番地）

池坊花道教授
廣山流投入盛花教授
榮樹軒　砂田春水女史

女史は明治二十八年十月二十日山形縣西田川郡榮村播磨に生る。本名を榮子といふ。

砂田春水女史

十七歳の時、山形縣立鶴岡高等女學校を卒業し、更らに同校補修科を經て、臨時教員養成所に入り、二十歳にして卒業。直ちに同縣東田川郡余目小學校に奉職し、在職六年の後、同郡横山小學校に轉任、大正十二年東京聾唖學校師範科に入學、翌十三年卒業す。その後、北海道旭川盲唖學校教員として赴任、翌十四年東京聾唖學校教員として、奉職現在に及んでゐる。

女史は、生來花を愛し、女學校時代遠州流を學び、後、書物等によつて、斯道を研究してゐたが、昭和二年六月、岡田廣山先生の名聲と池坊の自然な流風を慕ふて、同先生に師事した。女史はたゞ花を愛することによつて、斯道を研究してゐるので、如何なる時でも花に對してゐると一切の俗事を忘却するところに、無上の悦樂を感ずるのであると。

從つて、技術の進境著しく、二年七月橘紫幕、華盤、薄盤席目付と昇進した。將來投入に向つて精進すべく、大に努力してゐる。

家郷には母堂吉代刀自、令妹がある。（東京市小石川區指ヶ谷町七七番地東京聾唖學校内）

春

◎
照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月
夜にしくものぞなき　（大江千里）

◎
あさみどり野邊の霞はつゝめどもこぼ
れてにほふ花ざくらかな　（藤原公任）

◎
百敷の大宮人は暇あれやさくらかざし
て今日もくらしつ　（山邊赤人）

◎
春はなほわれにて知りぬ花さかりこゝ
ろのどけき人はあらじな　（壬生忠岑）

◎
見てのみや人にかたらん山ざくら手ど
とに折りていへづとにせん（素性法師）

美笑流華道家元 茶道千家今日庵 名譽教授

美笑齋 戸田一樂氏

戸田一樂氏

美笑流の起源は、元和年間、當時斯道の妙手であつた、後藤大學美笑軒道覺居士が、創始したに始まる。この人より幾代を經て、天保の頃に至りては、松平源十郎美笑軒一水、宗家をなし、當時、斯道は特に同藩内及びその近國に、勢威を有するに至つた。

美笑軒一水は江戸市ケ谷の尾州藩邸に在りて斯道の爲に精進する處極めて深く、一水の死後は、川澄美笑翁及び日比野林阿彌の斡旋に依り同藩士にして斯流の名手荒川藏主をして美笑流を繼承せしめ、以て宗家たらしめた。爾後、美笑流は、尾州を中心として、恰も旭日の如き勢を示したのである。

戸田一樂氏作（金雀花・日々草）

その後、藏主の一子小次郎、美笑軒宗家を繼ぎ、流名いよいよ籍甚するに至つた。恰も、この時代に、花遊軒戸田一樂が、この門に來り學んだのであるが、この花遊軒一樂こそ、現、美笑流家元戸田一樂氏の嚴父であつたのである。戸田家は、由緒頗る深く、家祖は三州俵の城主戸田彈正である。後、戸田家の子孫は、野州宇都宮と、尾州名古屋とに分離し、野州宇都宮が本家となつた。

先代一樂翁は、俗名を正寛といひ、華道研修する處極めて深奧、後、維新の變革に遇ふや、江戸に出でゝ全く華道三昧に入り、大いに美笑流の名を重からしめるに、盡大の寄與をなした。

現家元戸田一樂翁は、文久二年九月二十五日を以て、先代花遊軒の生地なる名古屋市縱代官町に生れた。本名を孫吉といひ、夙に、尾州家元、即ち荒川小次郎の歿後、家元の後見をなしてゐた花鳳軒の薰化を受け、斯道に遊び造詣する處、頗る深く、明治二十五年上京し、次いで、明治二十七年、先代花遊軒一樂翁の沒するや、その後を繼ぎて今日に至つたのである。養成する處の門下、約二千の多きに達し、教授たるに至りしもの、數百名を算すといふ。明治四十五年、諸氏のすゝめにより齋派の家元として、美笑齋一樂と改名した。

又、氏は茶道に通づる事深く、今日庵名譽教授として、東都における第一人者である。餘技としては別に無く、たゞ華道茶道に專念するのみである。

氏は、現代華道家の多くが徒らに新らしきを求め、漸く古の風格を失へるを慨し、自らは、斯る時弊に超越して、專ら斯道正風を傳へるに、努力精進してゐる。蓋し、翁の如きは、現代、華道界における至寶として、永く欽仰さるべき人物であらう。

長男正治氏は、號を宗寛といひ、明治三十六年一月七日、帝都日本橋に孤々の聲をあげた。幼少より、父一樂氏につき熱心に花道を修め既に一家をなし、茶道は目下千家茶道家元今日庵宗匠に就いて、その秘奥を修業中である。

（東京市日本橋區南茅場町二九番地）

鶯も笠きて出よ花の雨　利休
雨はれて花に色そふ夕日哉　宗祇
雫して散る思ひあり雨の花　甫尺
月花もなくて酒呑む一人哉　芭蕉

美笑流華道教授

美榮齋 岡本一照女史

女史は明治十年二月十八日、徳島市出來島町本丁に生る。徳島縣士族林保衞氏の長女である。明治三十九年十一月徳島縣板野郡川内村大字平石村岡本喜太郎氏に嫁す。喜太郎氏は同三十八年二月以來、警視廳に職を奉じ、大正八年二月職を辭し、直ちに日本橋區役所に奉職以つて今日に至つた。

女史は大正元年より、美笑流家元戸田一樂先生の門に入り、華道並びに茶道を學び、今や同門中の逸材として、師の最も囑望する處である。（東京市日本橋區箱崎町四丁目一番地）

岡本一照女史とその作品

遠州流華道家元 大日本華道遠州會長 東京華道協和會々長

十四世本松齋 福井一甫女史

女史は本名作子、明治七年八月十二日、東京牛込甲良町に生る。父は増田方朝と云ひ、代々德川家直參の家柄である。父方朝氏は、戊辰後長崎造船所に一等屬として勤務し、祖父は、陸軍奉行並に御本丸御普請方を勤めた。又、母堂よふ女は、同じく德川家直參の家より、入嫁した人である。

女史は、七八歳の頃、備前侯お抱へ御祐筆係武藤繁田に從ひ、書道、茶の湯、一般女藝等を習得し、十五六歳より精神修養の目的を以つて、陶宮術を學んだ。

福井一甫女史

花道に入つたのは、明治二十三年であつて、當時の師は遠州流九世本松齋福村一甫先生である。同二十五年松直齋一止と號し、大正二年五月、松綠齋一貞を襲名した。更らに大正十一年十一月、十四世松養齋一伯を襲名し同十三年十一月、現在の十四世本松齋一甫となり、家元を繼承するに至つた。

この間、明治四十三年、內國勸業大博覽會に出陳して、好評を博し、その後、印度の詩聖タゴール翁來朝の際、その旅宿上野凌雲院に、遠州流活花飾付を命ぜられ、一代の面目を施した。又、大正十年十一月、都新聞社が、全國花道十傑募集の砌り、一代の名譽を荷ふて、第一席に當選し、金杯その他を授與され、續いて同新聞社主催生花十傑投票當選披露のため、日本橋白木屋呉服店において、盛大なる生花大會を開催し、當流の眞價を大に宣揚する處があつた。續いて十一年平和紀念東京博覽會に際しては、生花特設館に出瓶、又昭和三年の大典紀念博にも、社中を率ゐて出陳し、會場內に多大の光彩を放つた。

女史は、世人が遠州流の花道について、よく活けるのに時間がかゝるとか、餘りに嬌め過ぎるので、水揚げが困難ではないかといふ、初歩的疑念を抱くのに對して、『水揚げの點では、少しも他流と變りはなく、却つて、よく揚る位ねであります。又、時間の點でも同樣であつて、これは諸流大會の席上などで、諸流と同樣、若しくはそれ以上に早く、活け上げるのによつて、十分理解されるのであります』と、その豪を啓いてゐる。これは同流が、畢竟するに技術的に最高の水準に達してゐることを示すものであらう。

女史は、資性重厚にして溫和、一流の總帥として、技術人格を兼ね具ふると共に、亦、多大の財力を擁して、斯道のために盡す處、頗る大である。現在までに免許皆傳の社中を出す約五百餘人、現に大日本華道遠州會々長、東京華道協和會會長、華道都木和會同人の要職にある。

餘技としては、表千家茶道、その他盆石、謠曲等である。

得意の花は、燕子花、柳、等。

家業は貿易商であるが、既に長子菊三郎氏に一切を讓り、女史は駒澤上馬の邸に、悠々自適の生を送り、子弟の教養を唯一の樂しみとしてゐる。（東京府荏原郡駒澤町上馬二三〇番地）

眞誠古流華道家元 柏生軒 馬塲壽翠女史

女史は明治十七年二月七日、東京本所に生る。馬塲安次郎同ゑいの一女である。俗名浪子といふ。

父君は大商人、母堂は藤原家の出で、德川の直參であつた。母方の祖父は伊藤益友と稱し、御小人目付役、大祖母は祐筆を勤め、維新の際、三方原に歿す。母堂は表千家茶道の大家であり、父は遠州流の趣味家であつた。

女史は九才にして古流の門に入り、同時に表千家茶道をも學ぶ。十七才にして早くも教授となり、十九歳にして眞誠古流の一派を樹立した。茶號を水月庵光浪といふ。

女史特意の花はハラン、棕梠、万年青、および葉物類。

趣味としては長唄。社中を出すこと頗る多く、千人に達するといふ。

家庭は主人とたゞ二人。（東京市本郷區駒込動坂町二五番地）

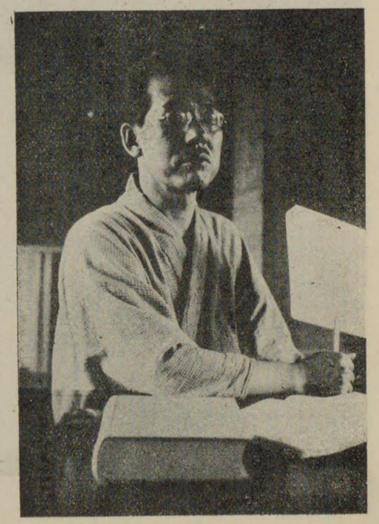
馬塲壽翠女史作

相阿彌正流華道家元
春秋庵　横地宗庭氏

氏は明治十四年九月二十八日岐阜に生る。本名を光雄といふ。父は光信、母は辰子共に故人となつたが、代々德川の幕臣として由緒あり、光信翁は初め官吏となり、後實業界に雄飛す。

横地宗庭氏作（行李柳・茶の花）

氏は明治三十一年美濃中學を卒業し、直ちに東京慈惠醫院醫學專門學校（現慈惠會醫科大學）に入學同三十六年卒業、同三十八年醫術開業試驗に登第し、同四十一年東京帝國大學醫學部教授弘田博士について、小兒科を專攻し更らに大正六年帝國大學において小兒科學を講究修了し、爾來小兒科專門醫院を開業するに至つた。



横地宗庭氏

氏は幼時より花道を好み、明治二十六年早くも千秋流岡田廣江齋氏の門に入り、三十年師の病歿するや、學業の傍ら諸流を見學すること數年、大に得る處があつた。後たまたま相阿彌正流十七世家元鈴木今月庵先生に會するや、深くこれに傾倒し、その流儀を究むるに至つた。當時壽笑庵と號し、今月庵先生の嘱望を集め、且つその殊寵を得る最も深かつた。かくて、研究多年その蘊奥を極め、出藍の譽高きに至つた。

大正四年大正天皇御卽位大禮に際しては、恩師今月庵先生が京都皇宮生花裝典の命に浴するや、師に隨從して御座所および御學問所の生花を謹挿し奉り、又同年十二月東京市御大禮奉祝に際し、陛下行幸の御座所に、師今月庵の命によつて生花を奉獻し天覽に供した。當時氏の活けたのは、八朔梅に裏菊であつて、美事なものであつたといふ。

かくて、大正五年同流を退いて、

自由なる境地に立ち、專ら斯道を研究したが、十二年再び同流派に歸り、春秋庵と改號するに至つた。同十二年斯道の明星と仰がれた今月庵先生が物故するや、先生の遺志によつて家元代理となり、昭和三年二月相阿彌正流十八世家元を繼承するに至つた。而して昭和三年十一月、今上陛下御卽位の大典を擧げさせ給ふや、再び京都皇宮の生花裝典の御下命が、當流に降下し、氏は一門の俊秀を率ひて、御座所、表謁見所および內謁見所に、生花を謹挿し奉るの光榮に浴したのであつた。

今回のこの光榮ある御沙汰に、隨行した一門の人々は、家元春秋庵氏を初めとして、吉田大樂園、森惟園齋、田村楳月庵、横地無双庵、水野松靄堂、飯田眞相庵、安原晴晃齋、相山明光、上田如眞庵の十氏であつた。

なほ、當流の技風は、夙に斯界第一を以つて目せられ、他流の士にして猶且つその幽雅秀拔の技を推賞して措かぬ位なるである。そもそも、當流の起源は、人皇百一代後花園天皇の御宇、八代將軍足利義政公の侍臣相阿彌眞相が、康正二年四月、義政公の命によつて、本流を創始し、義政公から『生花の祖たるべし』といふ台命を受けたのであつた。爾來、流統連綿とし現在十八世に及んだ。また當流は流祖相阿彌が、後土御門天皇に生花を叡覽に供して以來、歷代皇室生花裝典の榮譽を荷ふ光榮類なき流派である。

氏の花道界に對する意見としては、無意義なる新流派の濫造を匡正すべしといふにある。卽ち『獨特の一新機軸を出し、斯界を裨益せしむる底の新派の出現は大に喜ぶべきであるけれども、何等特色もなく徒らに先人の糟粕を嘗め、賣名を主眼とする新派の濫出は、斯道の墮落であつて、眞の向上進步を妨げるものである。これが匡正策として、各流の有力なる聯合會を組織しこれに認定權を屬せしめて、斯界の弊習を除去する必要がある』といふにある。

なほ、先代相阿彌家元今月庵鈴木宗甫先生は、斯道界の至寶と謳はれた花才の天禀であつたが、氏は――現家元は先代が二十有餘年間において、心血を瀝げる業蹟を蒐集し、『今月庵遺業相阿彌華集』と題して編纂發行、斯道の篤學研究者に、絕好資料を提供し、斯界のために貢獻する處が多かつた。

氏の得意の花は、靡き物特に野生の一重山吹、秋草の寄せ生け等である。技風高雅にして天眞流露する處、流風なりといひながら、また一面よく氏の性格風丰を反映するものといふべきであらう。餘技としては音曲。

家庭は照子夫人との間に四男二女あり、長子は醫科大學、次男は浦和高校、三男海城中學（卒業）長女は成女高女（卒業）次女櫻蔭高女、四男豐日小學等に在學し、何れも俊秀、才媛の譽が高い。

因に、氏は昭和四年三月二十一日上野公園韻松亭において、第十八世家元繼承披露の生花會を催した。超凡の技、高雅の風、斯界に大なるセンセーションを與へる處があつた。（東京市牛込區矢來町七十五番地）

春の曲　藤村

うてや鼓の春の音
雪に埋るゝ冬の日の
悲しき夢はとざされて
世は春の日とかはりけり。

ひけばこぞめの春霞
霞の幕をひきとぢて
花と花とを縫ふ絲は
今朝崩え出でし青柳。

霞の幕をひきあけて
春を覗ふことなかれ
花咲きにほふかげをこそ
春の臺といふべけれ。

小蝶よ花にたはぶれて
優しき夢を見ては舞ひ
醉ふて羽袖もひら〳〵と
春の袖を舞ひねかし。

絲のはねのうぐひすよ
梅の花笠ぬひそへて
夢しづかなる春の日の
しらべを高くうたへかし。

『藤村詩集』より――

日本古流華道家元
松梅齋 角田一忠氏

氏は明治七年一月二十八日、群馬縣勢多郡新里村字山上に生る。俗名忠三郎、別に樂犀庵と號し、理州の名あり。父は政界に知られた角田萬作翁である。

氏は幼少にして花技を好み、年九歳にして正風遠州の松雲齋一里の門に入り居ること七年、明治二十四年師の物故に會するや、直ちに青山御流晴月園の門に學び、研修すること四年、同三十一年祝融の災にかゝり、茶花の相傳書類を悉く烏有に歸せしめた。卽ち氏は幼な心にも深くこの變災に感じて

野に山に道も變らぬ世の中に
一夜に變るわが屋敷かな

と一首を詠じて、感慨を洩らした。これに對して嚴父萬作翁は、直ちに

我物と思ふ器物はかりものの
燒けたあやまち世の人に謝せ

と應じたので、氏は更らに

今日よりは身の過ちを詫ぶる爲
浮世に出でゝ墨染を着む

と返歌し、同年九月七日鄕關を去つて、濃然と旅に出で、當時、八王寺に卜居してゐた晴月園の許を訪れた。然るに旣に晴月園は去つて、其處に居らず、止むなく轉々流遊して、靜岡に至り、石州流の家元吸露軒宗匠の門に遊び、たまたま甲斐古流山口素堂の遺書を手にして大に悟入する處があつた。

角田一忠氏

かくて、同三十三年五月十日、甲斐古流山口素堂の遺跡を求めんことを欲し、山梨縣甲府に赴き、川上不伯の高弟、表千家茶道大家大黑堂小澤蠟遊の門に入つた。而して蠟遊の慫慂によつて、同地に研究所を開設し、甲斐古流としての一流を創設したのであつた。

よしとほめあしといさめて難波江の學びの海に問ひ交はすためといふ心境を根本として、子弟を教養すること十五年、その間利久古流傳書を具さに研究して、華道は正に我國美術の基礎なる所以を知り、草木自然の理を研はめ、更らに『日本古流』の命名を下して、大正三年四月十七日東都に出で、折柄大正博覽會に際し、大にその流名を宣揚する處があつた。更らに、同年日獨開戰のことあり、クーロー中佐以下三百十九名の俘虜淺草に收容されるや、氏は率先して西鄕收容所長の許容を受けて、この武力を失ひたる將士を慰むること、九ケ月間に及び、大にその德行と而して流派の眞髓を認知されるに至つた。爾來、同流の聲威隆々として揚り、ついに今日の盛名を見るに至つたのである。

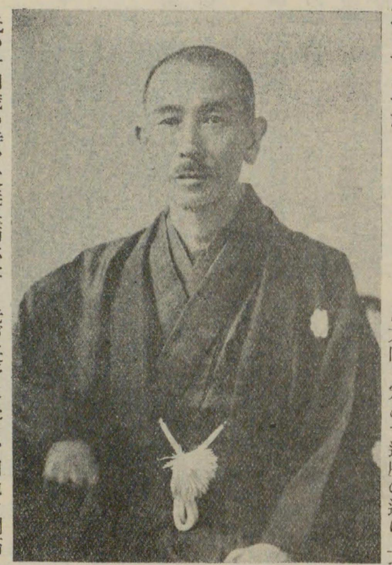
氏が、華道に參し、而してこれが爲めに如何に多くの努力を拂つたかは、以上の經路においてこれを想見することが出來るであらう而して氏は花道に對して、

活花はいつはりなきを道として
己が心をうつすものなり

といふ一首に盡きるものであることを、根本精神としてゐるのである。古實に通じてその身を以つて修道に參せる氏の如きは、現代斯道の至寶として、欽仰されるに足るものがあらう。（東京市牛込築土八幡町三四番地）

宏道流華道家元
梨雲齋 望月義寛氏

師は慶應二年三月先師梨雲齋義泉氏の三男として東京に生れた。長ずるに隨つて花道を好み、常に瓶に向つては寢食をも忘れる程であり、瓶史併に挿花圖會を繙いて倦むことがなかつたのである。人呼んで、開祖梨雲齋義想師の再誕であると賞揚したのも理ありといふべきであつた。



望月義寛氏

氏の廿四歳の時、父義泉師が卒去の悲しみに會ふや、如何にもして、我が流を往昔のやうな繁盛になさうと、私かに宏道流復興の誓を立て、先代の殘した書籍記錄等を調べた結果、全國各地に涉つて多數の門葉あることが判明したので、大いに喜び且つ益々再興の意を固めて、只管花道の研究に精進したのであつた。

然し、各地に於ける門人も古き記錄の事とて、何れも二世又は三世ともなつて居り、家元とも交涉の絕えて居る有樣であつたから、これを一々訪問したる上復古せねばならぬとなし、廿九歳の時漂然と方向も定めず遊歷の途に上つた。

先づ長野に赴き、同地を開拓して後九州へ渡り、熊本地方は古るくより本流の隆昌を極めた地なるため、同地の師範者を尋ね出しては、家元の存在を知らせ、之れを收拾して行つたのである。廣島縣、兵庫縣にも立ちより神奈川縣下においては、秦野町壽德寺に立より、ここで駿豆相の三州大會を開いたのである。

望月義寛氏作（花茗荷）

此の時、馬耳蘭を挿して見せられたのであるが、普通のやうに床に向つて挿したのでは、手口が解らぬとあつて、瓶を見る人々の方へ向け、裏より挿し十九葉を挿しあげた。然も、一度挿し入れた葉は挿直すといふ事なく、一度で挿し上げたので、見て居る人々も非常に驚ろいたといふことである。其の日は五十人の師範者が一度に入門したといふ盛況を呈した。靜岡縣下でも五十人位づゝの入門があり、其後各地から招待を受け、集團としての入門が陸續として相接した。當今では滿州、朝鮮、臺灣へまでも本流が普及されるに至つた。

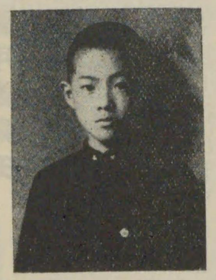
明治四十五年に流内統一機關として大日本群芳會なるものを組織し、機關誌を刊行して連絡、報告等にあてゝ流儀の流布宣揚に努力してゐる。

姿性溫良恭謙、人格高潔にして而も新取的意氣に富み、傳統ある一流の統帥として、あらゆる點で申し分なき人物といふべきであらう。（麻布區飯倉町三ノ一四番地）

青山御流廿七世華道家元
伯爵　希靜園基久氏

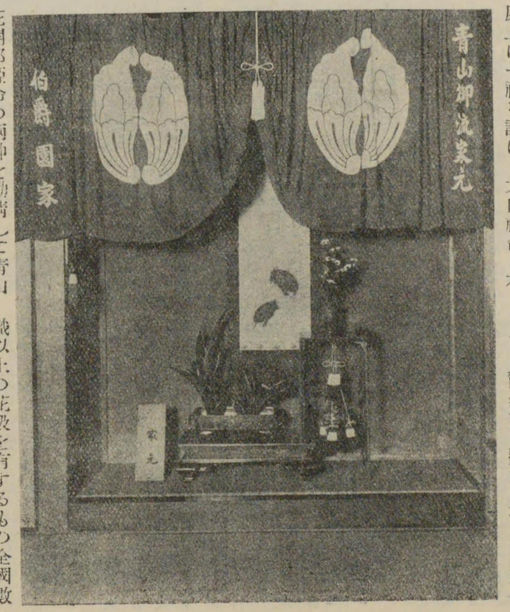
青山流はわが華道中興の祖にして初代宰相中將園基氏卿より連綿二十七世に及び、現家元基久氏は、二十六世希秋基建氏の嗣にして幼弱にして二十七世家元を繼ぎ、今尙ほ學習院に在學中である。

青山流系譜によれば、家祖宰相中將基氏卿は御堂關白道長公七代の孫後堀河院の外戚にして、世間榮耀心のまゝに送つてゐられたが廿四歳にして後堀河院法花堂において入道し、念誦の暇には諸々の花を瓶裏にさして、朝夕弄翫し、古稀の齡を以て世を去り、かくて後この風流を家に傳へ、世々花をもつて神に供へ佛に手向け又は唯瓶裏に挿入るゝこと家のならはしとなりたるのみにて、是ぞこの則と傳ふる程の事もなかつた、然るに後花園院御宇黃門基秀卿公務の餘暇家のならはしとて、活花に親しむ中大に悟る所あり、唯徒らに挿入るゝよりはとて道の大綱を定め、人のいさめにもなればと一人二人に敎へられたのでこの道の始祖と稱せられた。


基久氏

けれども當時は世の混亂に妨げられ普く流布するに至らず、一二の傳も既に絕えんとせしに後水尾院御宇贈左府基音卿殊に斯道に志深く昔を執つて今を加へ常に瓶裏にさして四時の佳趣を賞しつゝ草木の出生、自然の姿をたがえず、神儒佛の道の幽意にもかなひ、終に斯道の至極に至り、言語を離れて妙處に達したので、之を規矩となし秘奧となして、その名世に高く、院の御聞にも達し、家の道と稱するに至つた。そこで卿をこの道の中興の祖と云はれてゐるのである。

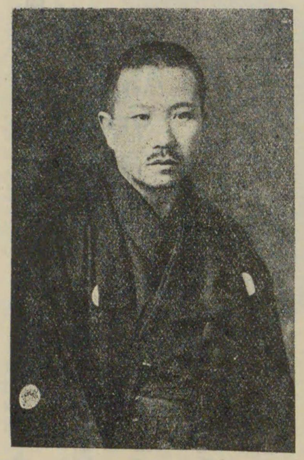
降つて靈元院御宇前亞相基香卿庭上に一祠を設け、大山祇命、木花開耶姫命の兩神を勸請して青山社と號し、この道の祖神と崇むるに至り、花道の流名普く世に聞え、法皇御感ありて御前にて屢々活花して天覽に供へ、いよ／＼道委しくなつたので、以來久しく國家の傳として今日に傳はるに至つたのであるといふ。



斯くて同流は最も格式ある流派として尊重され、今日全國に流布して、鬱然たる勢力を有し、會頭職以上の花級を有するもの全國數十名に及び何れも熱心流派の普及に努力しつゝあり。

（住所東京市赤坂區青山南町六ノ一三四）

青山御流華道教授
家元伯爵園家總會司
家元顧問協議會々員
親松園　森木旭雅氏

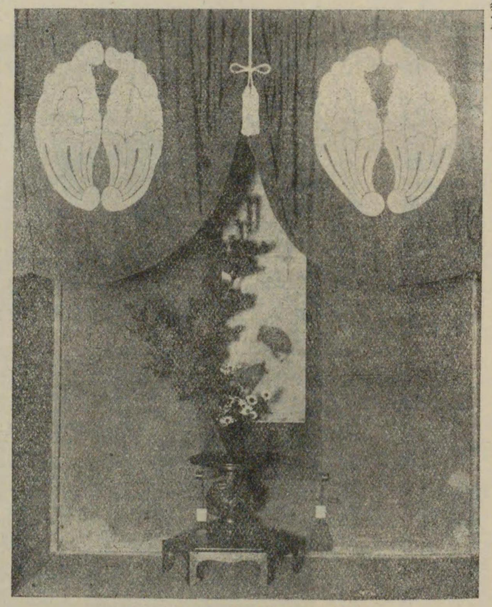

森木旭雅氏

氏は明治二十一年二月三日北海道札幌市において森木久平氏の三男として生まる。本名を久次郎といふ。父君は書畫骨董に趣味深く又石州流の花道に造詣深き人であつた。

氏は明治三十二年三月十二歳にして奮松山藩士青山御流華道教授高田唸松園師の門に入り同四十年四月師範免許を受け同五月敎授となり、四十四年一月上京し、家元新年活花會に出席し、總會頭、園號、幕許を免許され、爾後屢々出京して斯道を研究し、大正四年四月總會頭取締に昇格、大正七年十二月東京に轉居したのであるが、鄕里における門葉四百十七名に達し、頗る優勢であつた。

斯くて居を東京に移し、大正八年二月より再び敎授を開始し、同十一年四月家元敎場主任として招聘せられ、同年十月家元顧問囑託及び總會司の重職に擧げられ、以て今日に及ぶ。

氏が流派の擴張に對する努力に熱心なることは、多大なるものにして大正三年十月樺太において流花を擴めし


森木旭雅氏作（松・菊）

氏は華道の外、石州流茶道を學び又寶生流謠曲に堪能なりといふ。

家庭は夫人銓子との間に一男四女あり、夫人は斯道に趣味深く、頗る圓滿の家庭である。

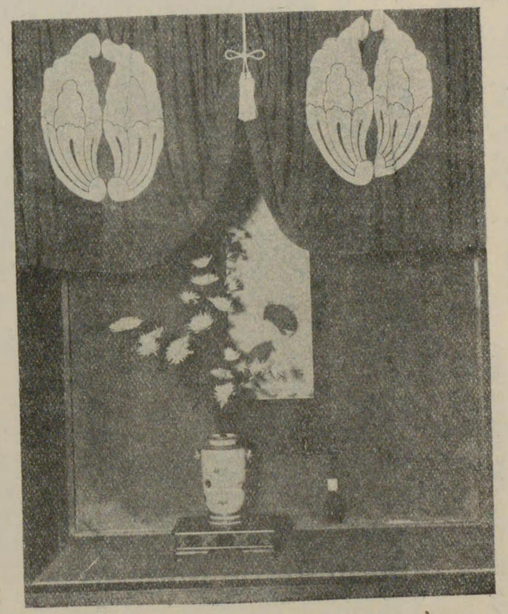
（住所東京市赤坂區青山南町六ノ六一）

青山御流華道教授
家元顧問
松月園 中山晴雅氏

中山晴雅氏

氏は明治二十一年二月二十五日京都市上京區北白川小倉町に生まる。本名を晴二郎といふ。

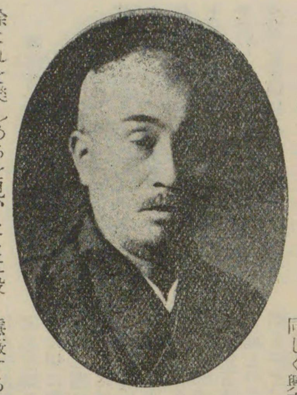
明治四十一年より同四十五年まで青山御流家元について華道を修業し、後再び大正九年より同十五年家元について斯道の蘊奥を極め、松月園晴雅の號を許され、教授職となり、現に家元顧問の要職にありて、流派の普及に努力しつゝあり。



中山晴雅氏作（菊）

（住所滋賀縣膳所町別保）

文人華宗瓶流宗家
羽樂流煎茶式教授
此世庵 渥美宗入氏



渥美宗入氏

氏は文久二年七月濱松市に生まれる。本名を國太郎といふ。父君鋤助氏は彈藥賣捌き及び花火製造を業としてゐたので、氏もまた初め花火製造の目的を以て上京し、兩國のかぎやに入つたが、幾ばくもなく初志を拋擲して、轉々諸種の事業に身を投じ、具さに艱難と闘つた。

明治三十五年四十歳にして初めて華道を志し、後各地を遊歴す、當時關西地方にありて、華道は茶道と共に興隆して、都鄙ともに業念禁する能はず、たゞ〳〵紀州和歌山の人辻信夫翁に會し、その志を述べ、ついて教へを受く。翁は詩文繪畫に堪能にして、華道における造詣の深きその因有する所こゝにあるを察し、氏もまた文人畫の雅趣を味はんと欲し小室翠雲畫伯に親炙し、その開發により、大に會得する所あり、爾來文人華宗瓶流なる一派を創始し、門戸を開きて子弟を教導し以て今日に至つたのである。

華道に入るの動機が既に斯くの如くであるから氏が華道における態度も風雅を以て第一としてゐる。恰も繪畫におけると同じく興來れば花弁を採つて心のおもむくまゝに瓶中に挿すのであつて、毫も規矩に囚はれない。その門弟に教ふる態度も極めて公開的である、徒に奥儀を秘し、又は口傳と稱し、その妙趣を隱蔽するが如きことは氏の排斥する所である。

氏は又茶道においても造詣深く羽樂流煎茶の法を子弟に授け、いはゆる花茶一致の妙境に達し、その秘傳公開主義の教授法により、斯界の一勢力として、多數の門下を養成し、現に業餘尚ほ五十人以上の社中に對し親しく手を取つて教授してゐる。

渥美宗入氏作

氏は從來の華道家が多くは秘傳隱蔽主義を墨守して、斯道の發達を阻止するものあるを悟り、自己の研究せる所を廣く天下同好の士に頒たんと、曩に『現代の華道』一卷を著はし、挿花の原理を詳らかにす。

氏は從來各所の花會に挿花を出瓶して各宮殿下の台覽を仰ぎたること屢々であるが、昭和三年十二月十三日御大禮東京市祝賀會に當り、東京市の命を受けて、上野公園式場便殿に挿花を供獻して兩陛の天覽台覽を忝うしたるは華道家として一大榮譽といふべきである。

餘これを樂しめるを見、ことに投入花の優雅にして趣味の深きに感動し、その本源を究めんとするの趣味として書畫骨董を愛玩し、その鑑賞について一見識を持し、畫壇の方面には交友が多い。

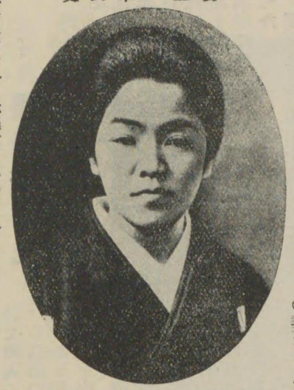
家庭はケン子夫人との間に一女あり、眞榮といふ、蘭奢と號し、華道家として一家の識見を有し父君の代稽古を勤めてゐる。

（住所東京市四谷區三光町一）

月實古流華道第三世家元
裏千家茶道教授
博務齋 榎並一華女史

女史は明治十九年九月仙臺市伊達家邸内において生れ、本名を喜久子といふ、幼くして花を好み、長ずるに及んで華道に志あり、十七歳にして嫁したるも、間もなく夫君に死別し、實家に歸り、豫て志望の華道に入ることとなつた。

二十二歳の時上京、月實古流第二世家元森川一華師の門に入りて刻苦勉勵、具さにその蘊奥を極め、



榎並一華女史

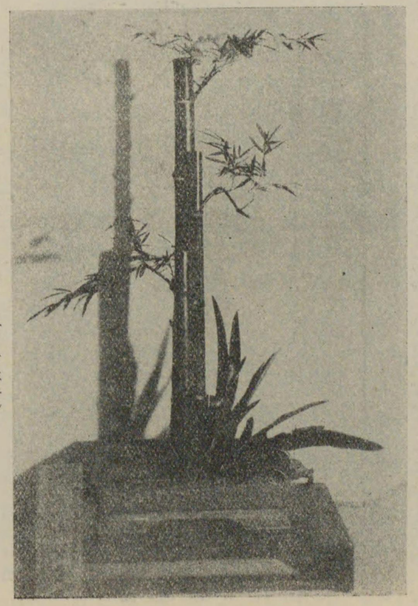
三十歳にして儕輩をぬいて早くも師範として獨立するに至つたが、森川師が若くして逝いたので、大正五年家元幹事のすゝめにより第三世家元を繼承し、越えて三歳、日本橋人形町相互倶樂部において家元披露を擧ぐ。爾來先師の遺言を大切に斯道に精進し、震災前先師の七週忌には、社中三百人に達したるを以て、盛大なる法要を營み、供養花をさゝげて、先師の靈を慰むる所あつた。

抑、月實古流は第一世三重縣の人喜松齋一長氏といひ、初め松月堂古流より出で、後池坊と古流との長所を採りて、その中間をゆき、新たに月實古流なる一派を創むるに至つたもので、その主眼とする所は、あまり深く枝を曲げることをなさず、花の勢ひをそがぬことにありといふ。玆を以て女史は門下を敎ふるに、常に流儀の精神を忘るなと說く。

女史は又茶道を龜山宗月師につきて研修すること十餘年、大正六年家元より引繼敎授を託せられ、華道と共に現在多數の門下を有し、毎月第四日曜日には、社中を集めて月實古流研究會を催し後進の指導啓發に努めてゐる。

昭和二年秋、都新聞社が華道十傑投票を催すや、女史は第三席に當選し、同社より銀屏風一双を贈られた、其他春秋に催さるゝ各所の花會には必ず社中をひきいて得意の挿花を出陳し、常に斯界の人氣をあつめてゐる。又昭和三年十二月十三日御大禮東京市祝賀會に當り東京市の命を受けて上野公園式場便殿に生花を供獻して天覽台覽の光榮に浴し一代の面目を施した。現に華道共愛會、國風會、都木和會同人として、華道發達のために渾身の努力を捧げて倦まざるは、斯道のためまことに多とすべきである。

家庭は令弟直之氏夫妻及び令姪の、閑雅な暮しにて、家族揃つて趣味を同じうし、和氣靄々、常に春氣をあつめてゐる。



榎並一華女史作（竹・万年青）

の如き空氣に滿されてゐるとはめでたき限りである。

（住所東京市外淀橋町柏木九一）

乙女古流第二世家元
乙女庵 淺井松壽女史

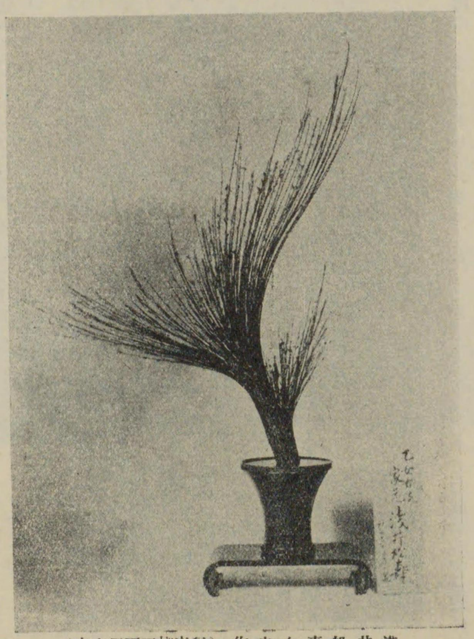
女史は明治十一年東京日本橋區富澤町に生まる。本名をたか子といふ。明治二十五年十五歳にして初代家元千葉壽胡師の門を叩き、勤勉刻苦の功空しからず、同三十年、未だうら若き二十歳の身を以て、同流の奥儀に達し、敎授職の免許を受くるに至つた。

淺井松壽女史

爾來門戸を開きて、子弟敎養の任にあたり、益々技能圓熟の域に進みたる時、家元壽胡師大正二年十月病んで歿するに及び、師の遺言により、女史は二世家元を繼承し乙女古流の花號を襲名するに至つたのである。

抑々乙女古流の起りは、明治二十四年に始まり、初代家元乙女庵千葉壽胡師が初め花の本流家元花の本宗壽の門に遊び、技の蘊奥を極め、師範の職を得たるも、天器は永く一流派の拘束に甘んずるを許さず、遂に母體の長所に自己の創意を加へて、一派を樹立し、乙女古流と稱するに至つたものである。

斯くて家元を繼ぎ、重任を荷つた女史は、よく社中を統轄し、流儀の普及を圖るに寢食を忘れ、内には春秋二季の大會に、月次研究會に、恩師法要の花會等に社中の鞭韃に怠りなく、外には大正七年八月讀賣新聞社主催婦人子供博覽會花席の出陳を始めとし、同八年五月大日本華道清賞會同人として東京奠都五十年祝賀會には玉座に獻花し、同九年清賞會主催の尼港殉難者追悼會の弔花出陳等、その他招待を受けて大小花會の催しには洩れなく出席出瓶に大努力をなし、その間自己創作研究に殆んど寧日なくらぬのである。



淺井松壽女史作（行李柳三百五十本）

又女史は謠曲を觀世流平井庄太郎氏に、茶道盆石を小堀遠州流家元について修業し、いづれも師範として、華道と共に子弟の敎養に病弱の身を顧みず、斯道のため盡瘁奉仕せる努力に至つては、男子も及ばざる氣慨ありといふべく、同流今日の流礎を築きたるは全く女史の獻身的努力の現はれに外なし捧げ來り、從來養成したる門弟は數千人に達するといふ。

（住所東京市神田區東福田町三）

月實古流華道教授
文人華宗瓶流教授
登月齋

岩淵一舟女史

女史は慶應三年十二月、東京市神田區小川町に生まる。本名をトシ子といふ。幼少にして花を好み、明治十一年十二歳にして未生流の某師匠に入門して生花の手ほどきを受く。これ女史が華道に入るの第一歩であつた。學ぶこと五年、後池坊の大鵬軒破雲師の門に入りつぶさに研修をつゞけ、二十三歳にして同流の奥儀を極め、皆傳を受く。爾來師範として立ち、門下の養成に努力し來つたが、大正七年頃、感ずる所あり、月實古流家元榎並一華女史の門に入つたが、當時既に十分の素養ある女史は僅々兩三年にしてその極意を悟得し大正九年同流師範の免許を授與された。爾來門下の養成に餘念なく、流派の發展に專心努力の功は酬いられ、漸次社中の數を增加し、大正十二年には家元補佐職に擧げられ、榎並社中の最有力者として認めらるゝに至つた。現に華道共愛會國風會同人として華道一般のためにも盡瘁するところ少なからず。

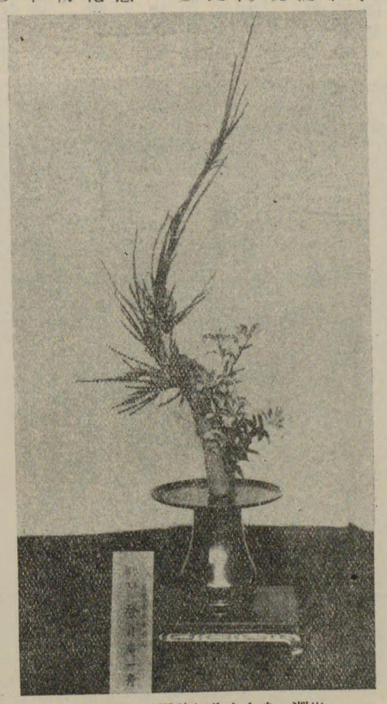
岩淵一舟女史

女史が最も得意とする花は、草物よりも木ものにありて、曾て大禮博に出品したる猿猴杉に百合の挿花は各流師範の投票および審査の結果、技術優秀なりと認められ、博覽會總裁より賞狀および賞牌を受けたることあり、その他數多の博覽會花會等に出陳して常に優れたる技術を示してその手腕を認めらる。

女史は又榎並師に入門したる頃より、文人華宗瓶流宗家渥美宗入氏を師として投入を學び、大正十五年教授職を授與せられ、この方面においても、その才能を縱横に發揮し、師匠をして嘆賞おく能はざらしめたことありといふ。

女史愛孫あり、輝一といふ、醫科醫として立つべく、目下實地修業中なりと、女史は法華宗に歸依し、信仰厚く、溫淑快活なる資質はよく同輩および後進者に敬慕さる。宜なり、女史を慕うて來り入門するもの、年と共に多く、その今日まで手にかけたる子弟數百人の多きに上れることや。

（東京市外代々幡町幡ヶ谷西原四三）



岩淵一舟女史作（猿猴杉●百合）

正派青山流華道
第二世家元
裏千家茶道教授
琴松園

堀榮雅女史

女史は本名を薫といひ、明治二十一年六月先代琴松園堀基雅氏の長女として石川縣金澤市に生まる。少時より父基雅氏について華道を研究し、又父君を助けて自流の發展に力を注き、今日の隆盛を見るに至つた。

元來堀家は代々華道の名家にして、女史の祖父堀蓬松園九雅本名九内氏は儒士として加州藩に仕へ壯年京都に上り、青山流廿四代園基祥卿に伺候し當時の花務職壽松園有雅師の門に入り其の奥儀を學び、歸りて藩内に斯道を普及した人で、先代琴松園基雅氏はその嗣子として生れ、本名を忠道といひ幼より乃父につきて花技を修め又屢々京都に上りて其の秘奥を學び明治十七年擢んでられて青山流全國花道總取締を命ぜられ並に花務職の任を託せらる、十九年東都に出で子弟の養成に努め又全國青山流教導の士を統ぶるに至つた。

然るに明治四十一年感ずる所あり、花務職を辭し、正派青山流の一派を興して之を主宰するに至つたのであるが、大正十年八十四歳の高齡を以て歿するに及び女史は第二世家元を繼ぎ、琴松園を襲名して今日に至つたのである。

因みに當流の特長とする所は、花態の變化に富めることであつて眞行草の三態中、更に三態にわかれてをり、且つ此流の水上は高貴より出て居る事とて自から氣品ある花體を誇りとしてゐる。

右　琴松園百雅氏（系檜葉）　左　琴松園榮雅女史作五葉松）

又趣味として琴曲に通じ、優に一家をなすの造詣ありといふ、以てその趣味の洗練を察すべきである。

尙ほ家庭は夫君故蓬松園逸雅本名直次氏との間に一子元氏あり、花號を春松園百雅と號す。夫君が大正十一年不幸病歿してよりは、子息を勵まして專心斯道のために努力倦まず女史の如きはよく父祖の名を光輝あらしむるものと云ふべきであらう。

（住所東京市赤坂區福吉町一）

女史は亦茶道を裏千家今日庵に就て學び、後東京茶道學會に入り、現に同學會教授の職にあり、華道と共に全國にわたり門下多し。

文人華宗瓶流教授
羽樂流煎茶式教授
華道共愛會幹事
三歳庵　遠藤紫翠女史

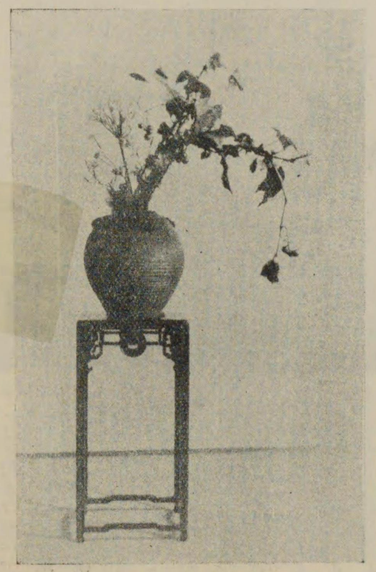
女史は明治八年神戸市葺合町熊内に生れ、本名をすみ子と云ふ。明治三十二年遠藤家に嫁す。その生家に在る頃よりして花を好み、風流の志があつたが、遠藤氏に嫁してより、夫君が書画骨董に深き趣味を有する所から、自然その感化を受けて花卉に對する觀賞も一段の深きを加ふると共に、華道研究の必要を痛切に感じ、大正八年より文人華宗瓶流宗家渥美宗入師の門に入りて、文人華投入花および羽樂流煎茶式の教導を受くるに至つた。

遠藤紫翠女史

斯くて渥美師の教へを受くること數年、技大に進み、幾何もなくして教授の要職を授けられ、三歳庵紫翠の雅號を受く。けれども元來教へるために學んだのでなく、初めは趣味として學び出したのであるから、門下を養成する等の志はなかつたのであるが、親戚知己の教へを乞ふ者あるまゝに、家事の餘暇を以て教授を始むるに至り、現在では數十名の社中を有し、春秋二季の各所の花會には女史の挿花を見ざることなきほど、斯道に熱心である。女史は又、裏千家茶道を榎並一華師につき修業中である。

現に女史は東都における諸流華道家の團體として有力なる華道共愛會の幹事として斯道のため貢献しつゝある、この一事を以ても、女史の華道に對する熱心と、その德望とを察知することが出來る。女史人となり溫雅、圓滿主義を以て日常の標語としてゐる、故を以て先輩後進のすべてに愛慕さる。共愛會幹事として選ばれたることは決して偶然でない。

家庭は夫君定次郎氏との間に子なく今や夫君と共に、靜かに風流の道に悠遊の生活を營んでゐる、遠藤氏の先考は八右衛門保宗といひ、維新前高家の大澤右京大夫基輔に仕へた人であるといふから、當時における門閥家なることが知られる。現在女史の内助のもとに、好める書畫骨董の商賣を經營しつゝあり。（東京牛込市谷八幡町一二）



遠藤紫翠女史作

文人華宗瓶流教授
羽樂流煎茶式教授
此和庵　大野春翠女史

女史は明治六年東京日本橋に生まる。本名をわか子といふ、父君を山田伴吉氏といひ、女史は二十三歳の時、大野傳吉氏に嫁し、家庭の人となつた。

華道は少時より趣味を有し、好んで研究したものであるが、結婚後は、子女の教養のため意の如くならぬので、以來久しくこれを抛つて顧みる暇がなかつたが、子女は何れも成長し、好める風流の道に遊ぶことが出來るようなつたので、大正五年より文人華宗瓶流宗家渥美宗入師につきて投入れおよび羽樂流煎茶を、又榎並一華師につきて裏千家流茶道を學び、修養多年、その奥を極めて、いづれも教授の資格を授與された。

現代華道家列傳

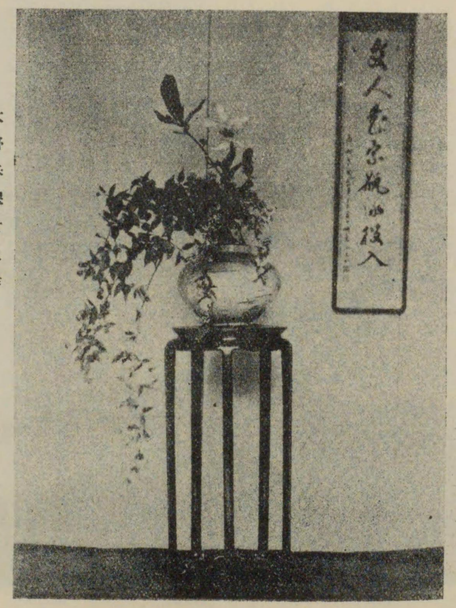
大野春翠女史

しかしながら、女史は華道家たるべくして斯道を志したるにあらずして、趣味として終始すべく學んだのであるから、門弟は一人も取らず、獨りみづから斯道に悠遊するを以て樂みとしてゐる。而して女史が最も得意とする花は草ものより寧ろ木ものにありと云ふ

女史は又常盤津を好み、この道の師匠につき長年月の修業を積み琴にもまた堪能であるといふ。

家庭は夫君傳吉氏と養嗣子繁市氏との三人で、長女シホミ、二女繁子の二子とも既に嫁し、繁市氏は父君を助けて家業に從事してゐる。家は毛織物商を營み、夫君は嘗て東京府會議員、洋服組合長たりしことあり、今尚ほ各種の公職を帶びて、常に公共のために盡瘁してゐる。

（東京市牛込區市谷八幡町一三）



大野春翠女史作

月實古流華道教授
文人華宗瓶流教授
臥月庵　渥美蘭奢女史

女史は明治三十八年十二月廿四日渥美宗入氏の長女として東京市に生まる。本名を眞榮といふ。十八歳のとき日本女子商業學校を卒業し、直ちに月實古流家元榎並一華師に入門し華道を學ぶ。華道家の家に生れ、幼時より父君の影響を受けて、華道家としての素質十分ある女史は、數年を出でずしてその極意を悟り、家元より皆傳を受けた。

又茶道は千家裏鵬山宗月師につき、文人華投入れおよび羽樂流煎茶は父君宗入師につきて學び、現に父君の手助けをなし、又代稽古をなしつゝある。

女史は華道茶道の外、多方面に趣味を有し就中、琴曲、長唄、マンドリン等に巧みにして、何れの方面にもその才能を發露せざるはない。

（東京市四谷區三光町一）

渥美蘭奢女史

渥美蘭奢女史作

月實古流華道教務職
文人華宗瓶流教授
皎月庵　佐藤一笑女史

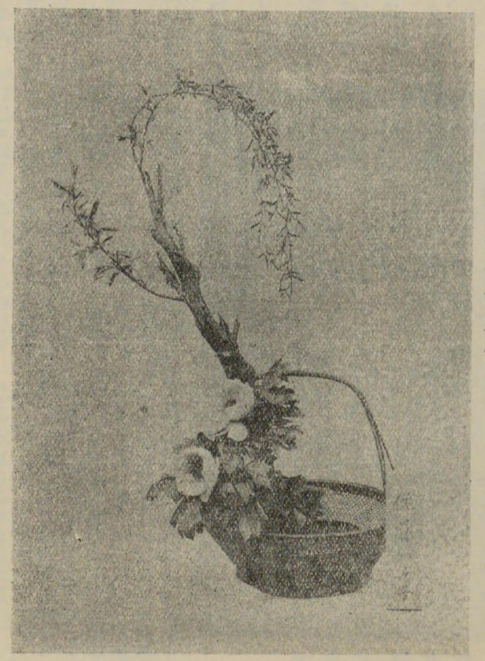
女史は明治十八年五月二十日靜岡縣駿東郡原町に生まる。本名をつる子といふ。

幼少にして華道に趣味を有し、郷里において師につき斯道を修め後、上京して月實古流家元榎並一師につき專心斯道を研究すること數年、家元教務職となり、熱心斯道のために努力して今日に至つた。

女史は性快活、男まさりのきびきびした性格の所有者で、華道以外においても多方面の趣味を有してゐる。

（住所千葉縣松戸町平潟）

佐藤一笑女史



佐藤一笑女史作

現に松戸町に住し、業務の傍ら

古流華道第二世家元
松遊齋　宇田川理翁氏

氏は明治八年一月八日東京市淺草區茅町二丁目四番地に生まる。本名を利八といふ。

氏の父宇田川平藏氏は、古流第四代松盛齋關本理恩に師事して華道を修め、松茂齋理登と號した。理恩嗣なく、晩年淺草茅町の宇田川家において歿したので、理登氏はその遺骸を淺草區南松山町正覺寺に葬りて、ねんごろに菩提を弔ふと共に、その無縁となることを恐れて、師の位牌を宇田川家に祀つて冥福を祈ることとしたので、現に傳へて氏の家にあり、祖先の靈と共に朝夕の禮拜佛事を怠らぬといふ。

第一世松茂齋理登氏歿して後、長子清吉氏があとをつぐこととなつたので、氏は理翁と稱して、夙くより華道を修業し、少壯にして既に一家をなし、古流第二世として、子弟の養成に努め來つたのである。

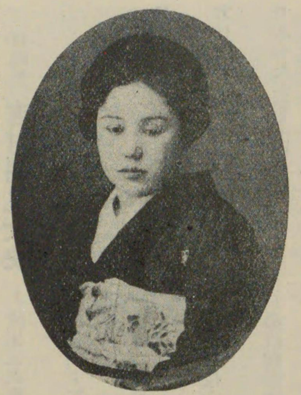
（住所東京市神田區八名川町一）

古流系譜

關本松盛齋理恩――宇田川松茂齋理登――松遊齋理翁

鈴風流華道家元
古流華道教授
表千家茶道教授
瓊芳庵　森　月影女史

女史は明治二十三年七月東京市神田區松枝町喜多呂龜吉氏の三女として生まる。本名を鈴子といふ、女史の遠祖は鎭西八郎爲朝より出で、爲朝より降りて二十餘代目の當主喜多呂龜兵衛門氏は實に氏の祖父に當る。代々名門の地位、貫祿を維持して世に名望を以て知らる。龜兵衛門氏の妻は三條家より嫁せり。女史の父龜吉氏は松枝町素封家にして彫刻家たる加納兵五郎氏の長女である。斯くの如く名門の血と純粋の神田ッ兒的義俠心に加ふるに天才的藝術的の血を多分に享けてゐる女史は、幼時より兩親の訓育その宜しきを得て、茶、花の道に精進し、小學校時代勉學にいそしむの傍ら既に池坊を修得し、更に古流に轉じ又南宗流瓶花を修め、絶えざる努力と長日月の精勵は以て、斯道の上に一新機軸を出し、遂に數年前先輩知己の勸告に從ひ、鈴風流の一派を立て、多數の社中を擁して古流及び盛花投入を教授し以て今日に至つたのである。



森月影女史

又茶道は初め裏千家を多々納師に學び小川流煎茶を修めていづれも其才能を發揮したのであつたが後感ずる所あつて表千家茶道に精進しこれが教授に專心しつゝあり

斯くて女史は性來の才幹と義俠的精神とを以て、專心子弟の養成に努力し、現に多數優秀なる弟子を輩出せしめてゐるといふ。因に女史の今日あるはその師多々納、福田兩先輩の指導に俟つ所大なりといふことで、女史は常にこれを感謝してゐる。

女史は華道について常に曰ふ『花道の眞髓妙諦は藝術の末流にあらずして、心身研磨の奥儀本源に到達するにあり』と又曰ふ『一と度花を採り茶に向ふ時そこに展開するものは唯々藝術の三昧境あるのみ、所謂人間世界の懊惱煩悶の如き微塵だになく、萬般の俗事を忘れ、恍惚として詩境に悠遊するの心地す』と、以て女史の境地を知るべし。

森月影女史作

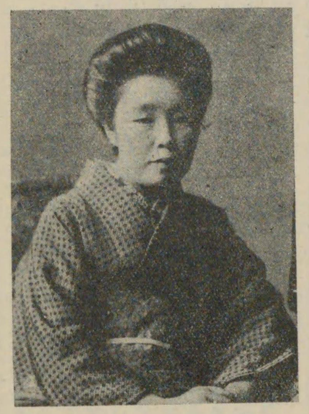
女史は景色盛花を得意とし、餘技として和歌、俳句、清元、長唄等の諸藝に堪能である。その挿花は嘗て化學工業博覽會其他に出陳して感狀賞牌等を受けたことがある

又女史は現に四谷區婦人會幹事四谷有隣婦人會世話役等の公職を奉じ、よくその任をつくしてゐる。女史は子福長者にして夫君との間に六男二女あり、長男靜雄君は早實卒業後帝國生命社員たり、二男要君は早中卒業後美術學校在學中三男正君は早中三年、長女春惠孃は牛込高女二年に四男壽君、五男榮君、二女和代孃は四谷第五小學校にあり、六男明君は末子にして四歳、家門益々繁榮欣快至極といふべし。

（住所東京市四谷區三光町一）

大和古流華道教授
貞曉齋 吉村明晁女史

女史は明治二十二年七月靜岡縣に生まる。本名を將子といふ。父君は吉村一郎氏といひ宮内省官吏であつたが明治四十年病歿した。女史はその長女である。赤坂小學校を經て、三輪田高等女學校に學び、同校第三回の卒業生である。

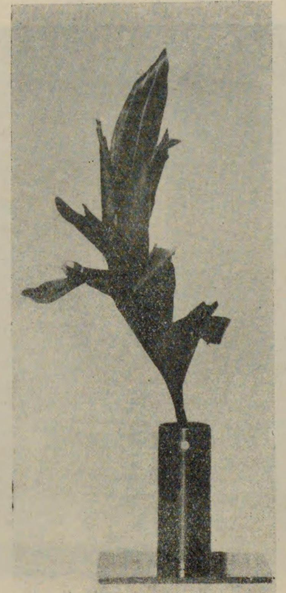

吉村明晁女史

華道は十四歳の頃より、大和古流家元貞曉齋明壽坊氏（當時東京に在住す）について學び、十九歳にして奥傳を許され、二十三歳にして教授となり、門戸を開きて子弟の教導につくし以て今日に至つた。その今日まで指導したるものの數百人に及び、教授職となせるもの凡に數十人に達してゐる。

斯くて自宅及び出教授の外大正十四年より東京府立第八高等女學校華道教授を囑託され、一週三回宛登校女生徒の教導に從事してゐる。現在社中は良家の令嬢のみにて五十人を超ゆるといふ。

家庭は夫君豊三氏との間に一男一女あり、長男鏘一君は帝大工學部に通學中、長女淑子嬢は昭和三年春三輪田高等女學校を卒業し、才媛の譽れ高し。實母けい子刀自は今尚ほ壯健にして和氣藹々春の如き家庭である

（住所東京市外西大久保二五四）


吉村明晁女史作（薬圃）

松月堂古流華道教授
一樂齋 原 花圃女史

女史は明治十六年八月二十四日東京市神田區佐久間町に生まる。父は清水喜三良氏といひ、女史はその二女にして本名を泉といふ。清水家は清和源氏の末裔にして、父君は水戸家に藩士として仕へ、明治四年上京後官吏として終世した。

女史は幼少の頃より生花を好み明治三十三年、松月堂古流關東總會頭一元齋井田幾圓師の門に入り華道を修む、翌三十四年皆傳、三十五年師範役となる。次いで三十八年三月家元植松子爵家内村上正忠氏當職五大坊牧水氏を經、幾圓師の推擧によつて免許會知會典會頭に推選さる。爾來門人の指導に、又研究に沒頭し、關東會支部會頭職にあり、昭和三年二月廿八日幾圓師歿するに及び、女史は本部を繼承することとなつた。

原花圃女史

女史が華道に對する感想の一節に云ふ。『凡て華道を學ぶ者は先づ樹木草花の研究と、定法の熟練と、精神の修養とを三大要義となすべきなり、殊にこの精神的根據が無缺にあらざれば、生花も兒戯に等しきものとなるべきなり、「人の力をからず」此くの如く美なるものあるべからず、四季遂はざるは草木の信なり、故に一花一葉の間にも大宇宙の眞髓を觀味すべきなり人々所作を以て陽陰陽の兼備する花を手すさみ、禮式裝飾賓客饗應の莊嚴となす、是れ假美を離れ僞善を脱したる、心境にして之れ即ち華道の眞精神なり、舌筆の及ばぬ法味なり、又己が眞實をあらはし、花の開くによそほへて感應の理を讃し、心の邪曲自ら去り各々法に則りて授與し、普く世人に眞如の月を眺め得させんと思ふ心常にやま字一と以て、その華道に對する識見の卓越せるを察すべきである。

昭和三年十一月、曠古の御大典に際し、松月堂古流に於ては京都御所内御座所並びに御別殿へ挿花付銀製花瓶へ生けまゐらせて、一代の面目を施した。華道家として一大榮譽といふべし。

女史が得意とする花は、梅、燕子花の一體物にして、生花の外千家流茶道において造詣深く、餘技として琴曲、三絃をよくす。又少時より淺井杏圃の門に入りて書道を學び、和歌、俳句を好み、最も書に巧みである。

原花圃女史謹挿

（現住）東京市芝區芝口二丁目十三
東京市外淀橋町柏木百六

花道古流鳳友派家元
清鳳流瓶華家元
古流鳳友會々長
松鳳齋　志村理捷氏

志村理捷氏

氏は本名志村金太郎、花號の外に清鳳園の別號がある。

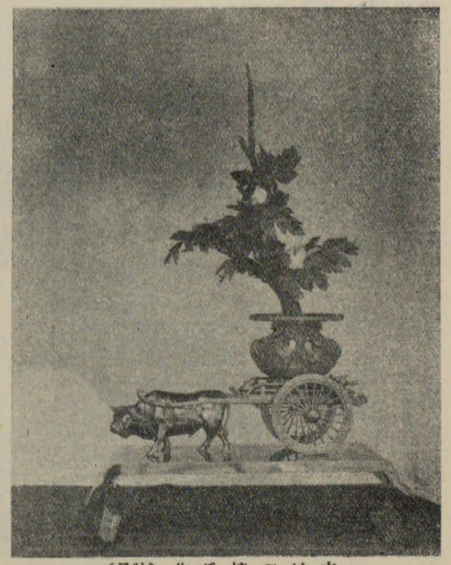
元治元年正月二日日本橋區鹽町に生れたる生粋の江戸つ子である壯年にして風流の志あり好んで生花を爲す、明治三十五年石州流五世家元松州庵一旭の門に入り花技を研修、後古流生花並に瓶花の研鑽に沒頭し、花友會に入り修養すること多年、同好の士と共に古流同志會を設立し、其の頃加州金澤より東上せる家元松盛齋柿谷理閑氏を會長に推擧し明治四十四年十月九日淺草藏前植木屋に於て之が發會式を兼ねたる生花大會を開催せられた。明治四十四年八月家元代師範に昇格、次で同年九月家元會頭に累進、其の後同志會を改めて古流清和會となり依然幹部に在りて盡瘁する所ありしが、門下の希望と先覺者の推薦とにより別派として古流鳳友會を立て鳳友派家元として更に活躍し專心門生の養成に精進を續けられた。

氏は毎月十日芝區虎の門金刀比羅神社例祭に生花を奉獻すること多年、大正十二年九月一日關東大震災に際しその直後は花道も一時地に落ち、また舊の如く復活の見込なき折柄、高井月松氏來りて金刀比羅神社に獻花して之が復興を祈願するやうにとの勸誘あり、翌十三年一月十日より再び舊の如く出瓶奉納せられる

氏資性穩健着實にして圭角なく且邊幅を飾らず、門生を率ゐる極めて眞面目にして且溫情親切を盡す、蓋し今日の隆昌を來す所以が首肯せられる、氏は千家茶道に造詣深くまた謠曲は寶生流宗家寶生重英氏の直門である。

現住　東京市麻布區狸穴町五

稽古日　毎週月曜、金曜日



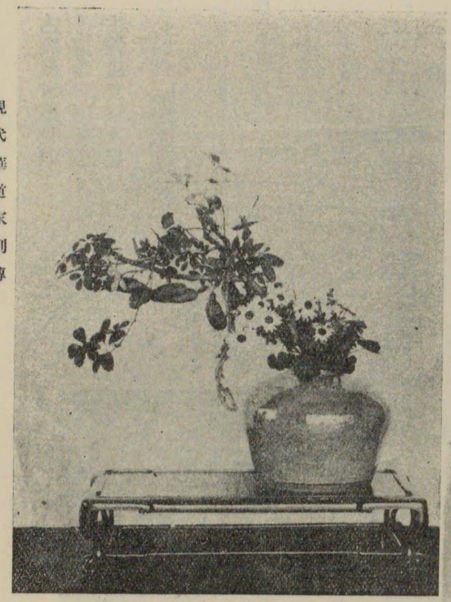
志村理捷氏作（牡丹）

古流鳳友派家元繼嗣
古流鳳友會々員
志村理喜女史

女史名は喜代江、大正五年五月四日東京市麻布區狸穴町に生る。父は古流鳳友派家元松鳳齋志村理捷氏の嗣子にして福治郎氏、母はふさ子。父君は同流家元の繼嗣に擬され花技を松盛齋柿谷理閑氏につき研學大に其の將來を嘱望されたるが不幸にして早世された爾來祖父君理捷氏の養育訓陶を受け目下麻布飯倉小學校六學年在學中である。資性聰明慧智一學年より引續き全甲優秀の成績にて級長に三回副級長にあること二回實に全校の模範とせらるゝ秀才である。

花道の家元に生れ花の中に育まれたる女史は花道にも非常の趣味を有し隨つて花技も天性的に進歩上達し祖父の跡をつぎ二世家元を繼承する自信の下に專心花道に精進して居られる、加ふるに鳳友會諸氏の有力なる後援あり、適れ光輝ある家名を擧ぐる二世家元の出づることは今より期待されると。

（現住東京市麻布區狸穴町五番地）



志村理喜女史作投入

志村理喜女史

古流鳳友派花道
千家今日庵茶道
古流鳳友會々員

松錦齋　松原理鈴女史

女史は大正元年四月東京市神田區和泉町に生る。金屬器商松原太一氏の長女にして本名は鈴江子小學校卒業後神田高等女學校に入學目下四學年在學中。

松原理鈴女史作（菊）

松原理鈴女史

花道は古流鳳友派家元松鳳齋志村理捷氏に茶道は千家今日庵引次志村宗壽女史につき研修中にして天禀の才能に加ふるに極めて熱心で技術の進歩著しく前途大に嘱望されて居る。なほ書道は戸田氏を長唄は杵屋長三郎氏後杵屋六壽氏を師とし何れも非凡なる藝能ある才媛である。

（現住神田區和泉町一番地）

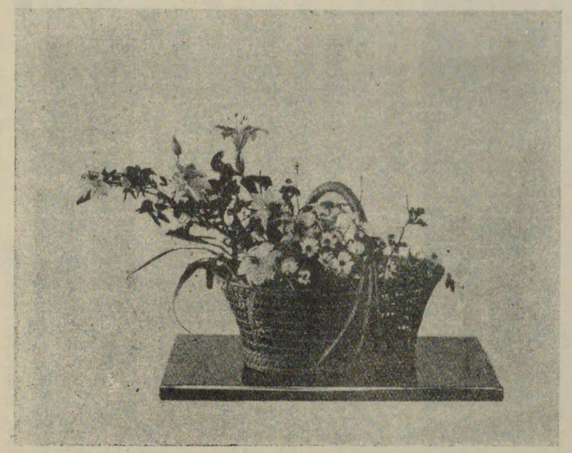
古流鳳友派家元會頭
古流鳳友會幹事

松月齋　尾崎理文女史

女史名は文子。明治二十年七月十七日出生。普通教育を卒へ次で戸板裁縫女學校を卒業、傍ら家庭看病法講習會によりて看護學を修められた淳實の才女である、花道は古流を松鳳齋志村理捷氏に師事して專心研鑽を續けられ其の蘊奥を究め師範より累進して家元會頭の榮位に昇格、且鳳友會の幹事を兼ね鋭意斯道に精進して居られる其の他茶道は利休流を麥曲は山田流を修め共に造詣深く餘裕の綽々たるものありと。

（現住東京市外澁谷町伊達二八番地）

尾崎理文女史作



尾崎理文女史

古流鳳友派家元會頭
古流鳳友會幹事
松溪齋　宮內理喜女史

女史は明治十七年四月十七日神奈川縣小田原町に生る名は美喜子宮內常造氏の三女である幼にして箱根木賀溫泉宮內七兵衞氏に養はれ長じて分家された。普通學を卒へ新名裁縫女學校を卒業し、花道は郷里に於て宏道流を學び出京後志村理捷氏の門に入りて專心古流を研修し花技大に練達し師範、師範代を經て家元會頭の高職に在り同門を糾合し古流鳳友會を組織し現に幹事として斯道に盡瘁せられ多くの門葉を教養しつゝある同流の重鎭である、琴曲手藝等餘技豐富、家庭は夫君次男氏との間に一男一女あり長男肇氏は夭折され長女美枝子孃は目下麻布小學校に在學中である。

（現住東京市麻布區宮下町二十八番地
自宅稽古日　每土曜日）

宮內理喜女史

古流鳳友派家元會頭
古流鳳友會幹事
松榮齋　市川理貞女史

女史は明治三十五年五月十五日東京市芝區松本町に生る名は貞子家元志村松鳳齋理捷氏に師事して花道を習學すること多年、其の蘊奧を究め師範より累進して家元會頭の榮位に昇進せられた。

女史はまた豐富なる趣味の持主にして書道は星野氏に習得堪能其の他茶道、音樂、手藝等に長じ造詣深しと。

（現住東京市芝區松本町一番地）

市川理貞女史

古流鳳友派家元會頭
古流鳳友會幹事
松雪齋　藁品理榮女史

女史名は榮子、明治五年十二月二十八日東京市神田區小川町に生る。東京府士族である。

父君中山幸次郎氏は茶道花道に趣味を持ち蘊蓄あり隨つて女史は年甫五歲にして花技を父君に學び越えて廿四歲再び某氏に就て研學次で志村理捷氏の門に入り研修すること十餘年師範、師範代と累進して現に家元會頭である。書道盆栽は餘技の秀逸であると。

女史は盛花を得意として生けられる『生花は盛花が最も趣味が深いそれは花其のものを美しく生けるので花の自然の美を失はない點とこれあるが故に住む人と其の室とに優しい、そして明るい心持を抱かしめるからである』と言ひ、また『故主人は非常に氣の短い人であつたが如何なる場合でも花を眺めると、すつかり氣分が柔いだ、夫故一層花道に趣味を深く持つ樣になつた』と、女史が花道によつて體得したる偉大さが窺はれる。

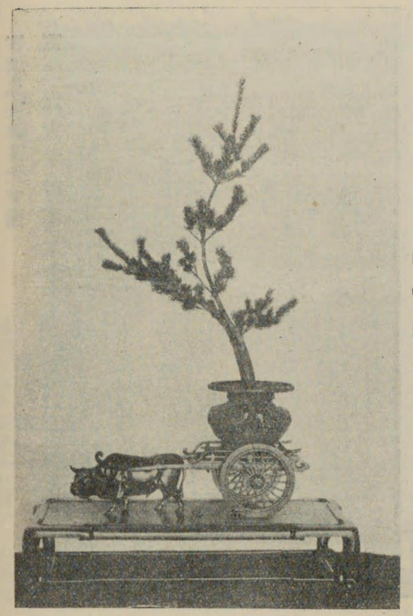
（現住東京市麻布區新網町一丁目三十五番地）

藁品理榮女史作盛花

藁品理榮女史

古流鳳友派家元會頭
古流鳳友會幹事
松美齋 田中理保女史

女史名は美保子、東京の人、生家は茨城縣士族にして有名なる美術工藝品製作家である、日本橋區常盤小學校卒業後神田駿河臺英和女學校に學び、靜岡縣士族陸軍々醫田中氏に嫁して一男を擧げられたが不幸にして夫君を亡ひ、爾後一粒種の令息の養育訓陶に餘念なく傍ら風流の道にいそしみ門下の教養に努めて居られる。令息は保善商業學校に在學中である。



田中理保女史作（松）

田中理保女史

明治三十一年故利休流初世吉田洗心庵の門に入りて花道を研修し如心庵浪月の名あり、同三十五年教授を許され、同年十月日本橋區濱町日本橋倶樂部に於てとが披露の花筵を催された。後松鳳齋志村理捷氏につき古流を研學累進して家元會頭の榮職に在られる。千家茶道にも造詣あり、川住章子氏の門人にて琴曲も堪能である。

（現住東京市外日暮里旭町一丁目二五番地）

古流鳳友派家元會頭
古流鳳友會幹事
松幹齋 戸賀理定女史

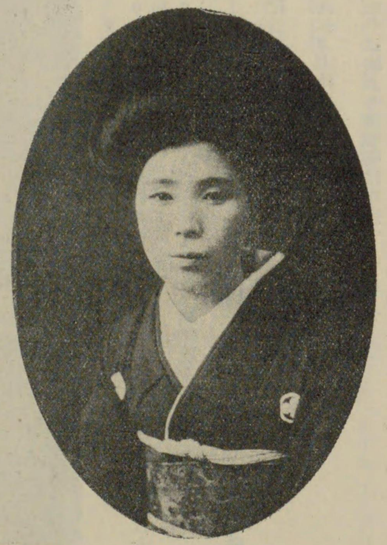
女史名はさだ子、明治廿七年四月の出生にて原籍は福島縣石川郡中谷村中田である。

大正九年三月松鳳齋志村理捷氏の門に入り古流花道を學び研鑽多年その蘊奥を究め師範より順次家元會頭の榮職に進まれ、鳳友會の幹事を兼ねて居られる。

『花道の眞髓を究め精神修養の資とするのは言ふ迄もありませんが、少くとも皆樣と協力一致してこの日に月に惡化しつゝある世相を我が花道の精神即ち古くより傳へられたる美風良俗により善導したいと勵んで居ります』とは女史の談である。

（現住東京市外王子町下十條一五四三番地）

戸賀理定女史作（一葉）



戸賀理定女史

古流鳳友派家元會頭
古流鳳友會幹事
松葉齋　宮田理秀女史

女史の出生地は栃木縣下都賀郡穂積村大字間中にて明治三十四年一月十四日出生、名は秀子。松鳳齋志村理捷氏に師事して古流花道を研究すること多年、花技の熟達著しく師範より順次家元會頭の要位に昇進せられ、且鳳友會の幹事である。

『私は花道に就いては深い趣味を感じて居ります、花道は私共婦女子の修養の爲缺くべからざるものであります、私が家元の御教授を受けます頃は何しろ二人の子供を抱擁しての上でありまして思ふ樣に御教訓を受ける事は出來ませんでしたが、未熟ながら今日に至りましたのは家元の御親切は申迄もなく偏に諸兄姉の御援助による事と深く感謝して居ります』とは女史の感想談である。

（現住埼玉縣大宮町七八一番地鐵道院官舍）

宮田理秀女史作（菊）

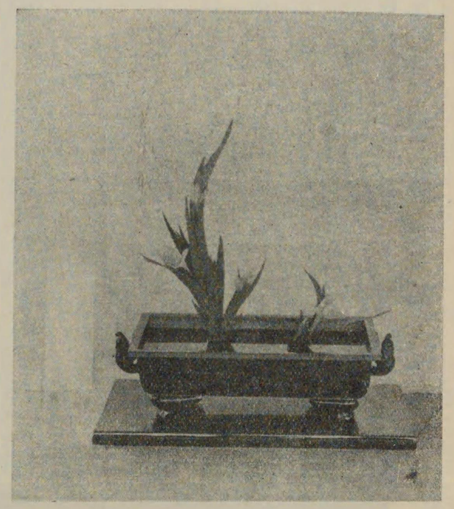
宮田理秀女史

古流鳳友派家元會頭
古流鳳友會幹事
松保齋　鈴木理操女史

女史は明治十九年十一月福島縣田村郡三春町に生る。名はけさ子大正九年五月花道に志し家元松鳳齋志村理捷氏の門に入り古流を學び熱誠研修の結果其の蘊奥を究め師範を許され、次で家元會頭に累進し鳳友會幹事に推擧された。

女史は『花道は實に一生の研究で師の御手を離れても常に怠らず研究を續けて居ります。けれども曾て會心の作を得ません、然しこの技術の鍛練が私共を幸福に導く精神修養の一であると思ひ、尙一層斯道に精進して止まないのである』と語られた。茶道、ミシン裁縫にも堪能である。

（現住東京府下王子町一三三六番地）



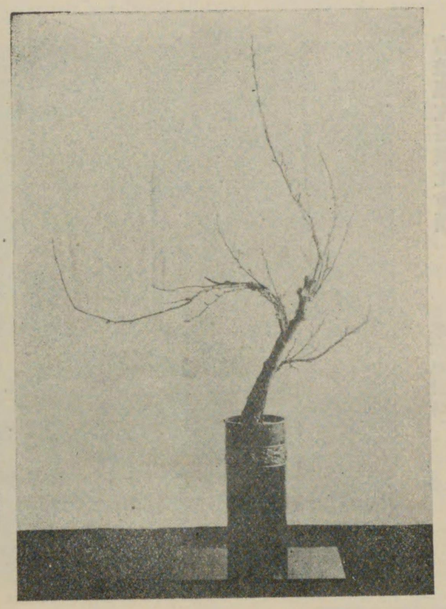
鈴木理操女史作（燕子花）

鈴木理操女史

古流鳳友派家元師範
古流鳳友會々員
松秀齋 戸澤理筆女史

女史名は筆子、明治四十一年五月五日東京市麻布區森元町に生る戸澤八五郎氏の愛嬢である。

普通學を卒へ次で東京府立第五高等女學校に入學、大正十五年三月優秀なる成蹟にて卒業せられた傍ら花道を家元志村松鳳齋理捷氏に師事し熱誠習修花技の進歩著しく家元師範に昇級せられた。



戸澤理筆女史作（挿）

戸澤理筆女史

ピアノ、刺繍、裁縫等は女史が趣味性に相應しいもので隨つて造詣が深い。

古流鳳友派家元師範
古流鳳友會々員
松桂齋 小澤理勝女史

女史名はかつ子群馬縣吾妻郡中之條町伊勢町に生れ、東京市神田區西福田町に原籍をおかれる、家世々農を業とし父君は信濃の國より入籍せられたる士族である、普通教育を卒へ國民中學會終了後大町桂月氏小野鷺堂氏に就て文藝、書道等を研學し世事に長けた才女である。小澤太兵衛氏に嫁して三十餘年、夫君と共に滿洲大連市に於て貿易業に從事し内助の功あり名流と往來し社交繁く、大連市には平和婦人會を設立し國際的和平の爲に大に盡瘁せられた。

花道は美生流に在ること一個年後轉じて松鳳齋志村理捷氏の門に入り古流を研修し奥義を究め家元師範を許された。好んで松と櫻を愛翫せられると。（現住神奈川縣鎌倉町小町通三九五）

小澤理勝女史作（山茶花）

小澤理勝女史

古流鳳友派家元師範
古流鳳友會々員
松壽齋 **高橋理俊女史**

女史名はとし子、明治二十七年五月二十八日秋田縣平鹿郡横手町下根岸に於て生る。

高橋理俊女史作（一葉）

女史は『私は幼少の頃より生花に志して居りましたが、中々その期が參りませんでした、其の中に身は少しばかり社會的事業に從事する事となり、事心と違ひ初志を遂ぐる事を得ませんでした、漸く大正十年六月から志村理捷先生について花道及び茶道を學ぶ事を得ました、併し一方勤務の傍で專心打込んで研究する事を得ませんのが殘念でした、先生の懇篤なる御教導により未熟ながら門下の人達を養成する迄に成りましたのは偏に先生の御高恩と常々感謝して居ります』と謙遜して談された。家元師範に昇進門下の教養に鋭意精進して居られる。（現住東京市本郷區龍岡町三十六番地篠山氏方）

高橋理俊女史

古流鳳友派家元師範
古流鳳友會々員
松壽齋 **山口理家滿女史**

女史名はやま子、明治三十四年十一月四日東京府下王子町大門に生る。

普通學修了の後は數奇な趣味の道に沒頭し花道、茶道、琴曲、音樂等を習修何れも拔群の技能であると、花道は女史の姉れん子の君が志村松風齋理捷氏につきて習學せられたれば女史もまた同氏に師事すること多年熱心研學の功を積み花技の進歩顯著なるものあり家元師範を免許された。

山口理家滿女史作（苅萱・菊）

山口理家滿女史

佐藤理乙女女史作（杜仲）

古流鳳友派家元師範
古流鳳友會々員
松靜齋 佐藤理乙女女史

女史は東京府士族佐藤長吉同房子の愛孃にして明治四十二年一月一日東京市麻布區森元町一丁目廿七番地の邸に生る、本名乙女。

大正十年三月麻布飯倉小學校を卒業し次で虎の門東京女學館に入學、外國語學、音樂等は殊に得意とする所で同十五年三月優秀の成蹟にて卒業し受賞せられたる才媛である。

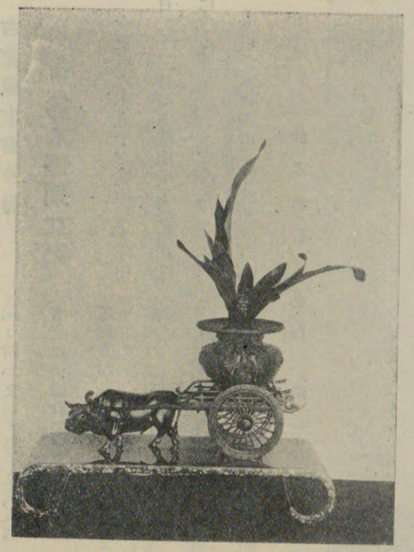
松鳳齋志村理捷氏に就て古流花道を研修し技術の進歩著しく家元師範を免許された同門中の一異彩で將來を囑目されて居る、女史はまた料理、手藝等に堪能である。

（現住東京市麻布區森元町一丁目廿七番地）

佐藤理乙女女史

古流鳳友派家元師範
古流鳳友會々員
松林齋 坂本理福女史

女史名は福子。茨城縣西茨城郡岩間町に生る。原籍地は同縣稻敷郡木原村大字興津。家代々醫家にして名望家である。普通教育を卒へて茨城縣立水戸高等女學校に入學、大正六年三月優秀の成蹟にて卒業、本科第十六回卒業生にして現に秀芳會の會員である。



坂本理福女史作（万年青）

坂本理福女史

大正拾貳年三月より松鳳齋志村理捷氏に師事して古流花道を學び其の奥儀を究め家元師範に昇進せられ門下の教養に勉めて居られる。女史は箏曲の嗜みあり造詣深しと。（現住東京市牛込區若松町一四六番地）

古流鳳友派家元師範
古流鳳友會々員
松正齋 鈴木理菊女史

女史名は木九子、明治三十年三月二十二日埼玉縣南埼玉郡新和村に生る。

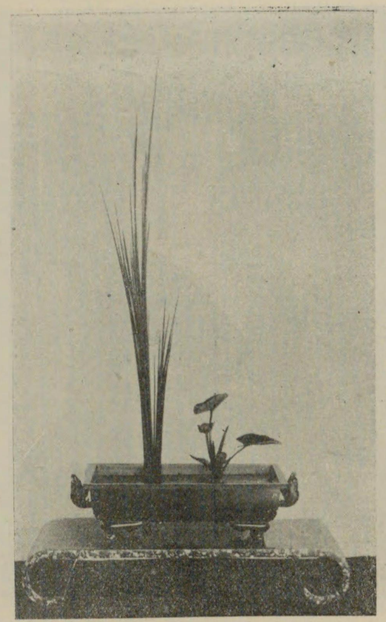
女史が感興談に『私は幼少の頃から花を好み、庭に出でゝは花を採り所かまわず挿したので、いつも父に笑はれて居りました、長ずるに及び花道教授を志望しましたが其の期を得ず、漸く大正九年五月志村理捷先生に師事する事が出來ました、爾來專心研修を續け今日に至りましたのは是皆恩師の賜物と常に肝に銘じて居ります、花技は一生研究に殁頭するも尙仕盡せるものでありませんから今後も倦まず撓まず研修したいと思ひます』と數寄こそ物の上手なれの諺の如く技大に進み現に家元師範に昇級せられた。（現住東京府下王子町一二五五番地）

鈴木理菊女史作（菊）

鈴木理菊女史

古流鳳友派家元師範
古流鳳友會々員
松綠齋 鈴木理明氏

氏名は明史郎、明治三十六年十一月東京市外大島町に生る。天性風流の志あり、幼年の頃より生花を好み、松鳳齋志村理捷氏の門に入りて熱心花技を研學し修養につとむること年あり、技術大に熟達し師範を免許せらる、尙同門の諸氏と協力して鳳友會を起し斯道の普及に努め廣く社會文教の爲に盡力せられる。（現住東京市麻布區新網町二丁目十七番地）



鈴木理明氏作（莞・河骨）

鈴木理明氏

古流鳳友派家元師範
古流鳳友會々員
松光齋 **早川理瀧女史**

女史は明治三十三年九月九日東京府下王子町北宿に生る。名はたき子。普通學の後裁縫手藝を專修し目下多くの門葉ありて裁縫術を教授せられる。花道は家元志村松鳳齋理捷氏に就き研鑽奥義を究め花技上達師範を許された。(現住東京市外王子町北宿一一三八番地)

早川理瀧女史

古流鳳友派家元師範
古流鳳友會々員
松竹齋 **大谷理梅女史**

女史は永年東京府下王子町々長を奉職せられたる大谷氏の愛嬢にて明治三十八年一月二十三日同地に出生せられた、名は梅子、女史の母君が松鳳齋志村理捷氏について花道を修められ次いで女史もまた同家元に師事して熱心研鑽を續け師範に昇進せられた。(現住東京市外王子町王子一三五八番地)

大谷理梅女史

古流鳳友派家元師範
古流鳳友會々員
松柏齋 **高野理富女史**

女史名は登美子、明治二十二年六月十七日埼玉縣北葛豐野村に生る普通學を卒へ裁縫手藝等を修得し傍ら大正十一年より松鳳齋志村理捷氏につき古流花道を研修し花技の熟達著しく忽にして師範を免許せられた。家庭にありて裁縫術を教授し多くの門弟を教養しつゝある。(現住東京市外王子町堀の内六七二番地)

高野理富女史

古流鳳友派家元師範
古流鳳友會々員
松耀齋 **竹島理節女史**

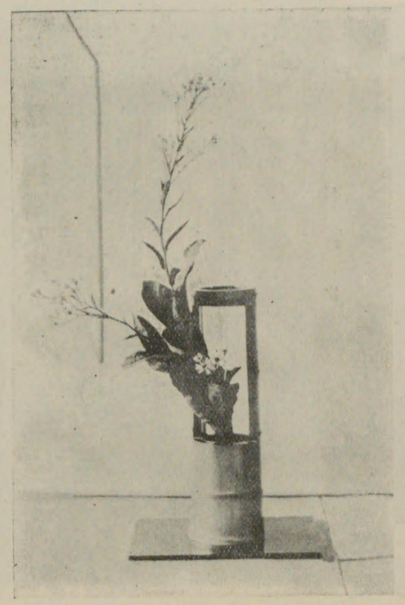
女史は東京堀越女學校の出身にして花道は古流鳳友派家元松鳳齋志村理捷氏に師事して家元師範に昇進。茶道は京都表千家不審庵の直門にして令名あり。名は竹島節子女史。(現住東京府下野方町大字下沼袋一五四四番地の六)

竹島理節女史

古流鳳友派家元師範
古流鳳友會々員
松鶴齋 正田理繁女史

女史名はシゲ子、明治三十六年九月廿八日東京麻布區網代町に生る。

古流鳳友派家元志村理捷氏に師事して花道を研修し、修養怠らず天稟の花才ありて忽ち家元師範に昇格せられた、女史の將來大に嘱目すべきものがあると。（現住東京市麻布區山元町五九番地）



正田理繁女史作（紫苑）

正田理繁女史

關西流盛花
古竹園瓶華教授
花月庵流煎茶教授
千葉桃華女史

女史は明治二十五年十一月三日東京市外大崎町四四四番地に生る本名をまさ子と稱す。夫君は醫師を業とす。

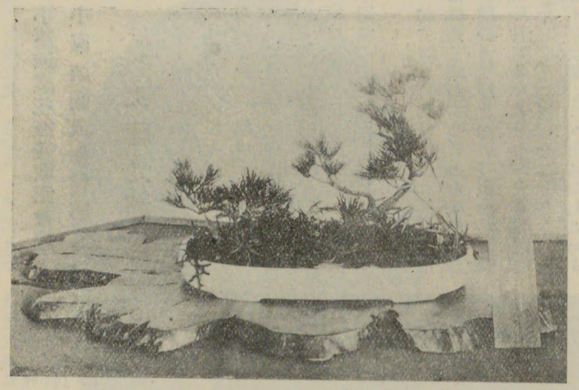
女史は實踐女學校の出身である風雅の道に志あり、未だ鋏の扱も不充分なる十歳の頃より斯の道に親しみ、古流生花、並に千家茶道の教を受けしが女學校在學中師に死別し、爾後自ら研究怠りなかつた。東都にも盛花なる裝飾花の多く知られざりし大正初年關西流の祖夏目松榮氏の上京に遇ひ直に其の門を叩きて教を求め清新なる盛花の研究に怠りなく數年ならずして教授の格に列した。其の後益々師の後援の下に一途に流名の發展と後進の指導とに全力を注ぎ、傍ら師松榮氏と共に師の會心の友古竹園氏の門に入り瓶華盛物の教を受け其の蘊奥を極めた。

松榮氏は震災後の心勞より疾を得て、大正十五年十一月遂に逝去された。師の逝去に遭遇した社中一同悲しみの中にも捨て置けぬ道の發展をと協議の上同門中の光永秀月氏を擧げて第二世家元と仰ぎ亡師の遺風を守り永く此の道の發展に努力を續けて居る。

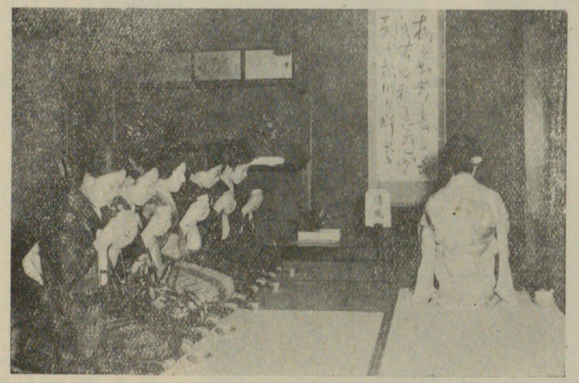
女史の好んで挿す所の作は自然を本意とせる盛花、草物の瀟洒なる瓶華で從つて又大に得意とする所である。

女史は常に曰ふ『花道は尊敬す可き藝術にして人に道を說く者は先づ自己の精神修養に務め、謙讓なる心を花姿の上に現す事に心掛く可きである。』との信條の下に多くの門弟の教養に專ら精進して居る。

女史は多趣味の人で盆石、謠曲、仕舞、鼓、長唄等を習修し共に堪能である。長女光子嬢は府立第六高等女學校在學中であり、各々其の道に精進して平和圓滿なる家庭である。（住所東京市外上大崎町四四四番地）



千葉桃華女史作（盛花）



たかねた女塾煎茶稽古

小原流盛花瓶華家元教授
小原流國風會幹事長
百翠軒　工藤光洲氏

氏は東京赤坂の人、本名正雄、百翠軒と號す。明治三十二年九月七日、横濱市不老町二丁目に生れた。父君は職を日本郵船に奉じ、一家は神戸に居住したので、氏も亦同地に於て人となつた。

幼少より特異の風格を具へ、常に群童と嬉戯することを好まず、一種の人生觀を抱いてゐたが、縣立一中に學ぶに至つてその園藝部を介して花に親しむこと多く、氏の注意は漸く日本花道の上に向けられるの傾向を示して來た。二學年在學當時、たま〳〵一教師の死に際し、園藝部生徒一同にて校園の花卉を以つて花環を作つた時、偶然氏は將來花道に趨ふの動機を見出し、病氣の故を以つて學校を退くに及んで終に意を決して當時神戸市に於て眞華池坊生花及び小原流盛花瓶華を教授しつゝあつた金子靜風氏の門に入り、玆に全く道を花道に求めるに至つた。

後生花を池坊に轉じ、同時に大阪の小原光雲氏に就いて盛花瓶華の外盛物等の教授を受けた。

工藤光洲氏

大正十一年二月横濱市戸部町に居を卜して小原流瓶華盛花教授を開始し、翌十二年三月東京赤坂區田町六丁目に轉居、間もなく彼の大震火災に遭遇し僅かに身を以つて逃れたが、爾後居を府下玉川村に構え、教授所を市内青山に設けて再起し、終に現在の隆盛を贏ちた。

氏は事に處して深謀、一些事として忽せにせず、他に接して常に溫容、されば數百の社中一家の如く、常に洋々として和氣に滿ちてゐる

また氏は他より事を依頼さるゝに當つては、熟慮遠謀、一度びこれを承へば終局まで完全に力を籍すといふ德を備えてゐる。嘗て大震に遇つた時、恰も家に在らず、僅かに隣人が數點の寢具を持ち出し吳れたる外一物も殘さなかつたが氏は毛布一枚を殘して他は悉く人に與え、そのまゝ數日を露宿したといふ逸話を持つてゐる程である。

現在東京小原流國風會幹事長の外、研美會々長、常磐會顧問、東京松櫻會講師、横濱裁縫女學校囑託等を兼ね、また餘技として園藝を好み、玉川村の控家には數百坪の花園を有し花卉三百種を所藏される。花は別に未生流、古流を試み、日本畫は花鳥を、洋畫は風景を好くし、何れも相當の技を有し更らに好んで樂燒及び彫刻をもなすといふ多藝の士である。現在は夫人と共に東京市外澁谷町神宮通り一の一六にあり。外に兩親及び祖父は二子と共に玉川村に居住されるとの事である。

正美古流花道家元
裏千家流茶道教授
山松庵　山下晩翠女史

女史は明治四年五月横濱市に生る。父は鳥山濟平氏母は多美子女史。同市元街小學校を卒へ、明治十五年授眞女學校の前身なる英和女學校を卒業し才媛の譽高く、而も女史は青年にして已に風流の道心に習得し總て免許皆傳を受け斯の道に於ても優に天禀の才能を發揮した。

明治二十三年佐賀縣唐津の藩士醫師山下興治氏に嫁し、夫君また風流の道に造詣深く夙に諒解ありて家事の傍專ら諸流派に亘りて研鑽その蘊奥を究めた。

明治三十七年華道正美古流を解し教鞭をとるの傍花道遠州古流、正福古流、茶道裏千家流を熱心に習得し總て免許皆傳を受け斯の道に於ても優に天禀の才能を發揮した。

明治三十七年華道正美古流を標榜し同市料亭八百政樓に於て斯道大家及び多數の文人墨客を招待し家元樹立の披露會を催したり爾後專心子弟の教養訓陶に任じ公私文運に貢献したる功績多大なりとす。門人實に數千人、師範格數十名を出し多士濟々たりといふべく、女史が圓熟せる技能と社交的才能とは海外までも知られ同流の前途寔に春の海の如く洋々たり本會名譽會員にして顧問を兼ぬ。

女史が斯道に關し公私多方面に活躍盡瘁したる事は枚擧に遑あらず其の一斑を摘記すれば。

先年英國コンノート殿下御渡來の砌同國人の切望により門人數氏と共に「オリエンタル、ホテル」に數十瓶の生花を陳列して御覽に供し禮狀を受く。

明治四十二年東京上野博覽會へ天皇陛下行幸に際し御座所へ生花を奉献し、阿部東京府知事より記念狀を受く。

明治四十三年貿易博覽會へ天皇

山下晩翠女史

山下晩翠女史作（桃・椿）

陛下行幸の當時御座所へ盛花を奉献し小松原英太郎氏より記念狀を受く。

東京帝國大學に於ける京濱花道大家花型表示會へ出席同流獨特の花型式による生花を出陳せり、其他横濱市主催共進會に生花を出陳し時の會長縣知事より記念狀を受けられたる等斯道の爲貢献せられたる事跡枚擧に遑あらず。

女史は我邦の美術文物を外人に紹介するは國家に對する奉公の一端なりと信じ、地勢上社交上に外人に接する機會多かりしかば特に外人を優待せしに在留外人の入門者多く、親光婦人の如きは滞在中のプログラムを變更して花道茶道の實習及び講演を聽くを喜び時に屢々我邦上流社會の家庭を訪問するの便宜を與へたり、殊に米國富豪ミセスバークレ夫人の如きは他の親光を忘れ熱心花道の研究に沒頭し、毎日二時間宛實習約一個月間修得し歸國後「サバーバン、ライフ」てふ雜誌に『外人の觀たる日本の生花と山下先生』と題して數頁を塡めし事あり、其の文章は詩的にして頗る流麗女史の人格を稱揚したるものなりし。

女史はまたピアノに堪能なり家庭にありては二絃琴等豐富なる餘技に寸暇を樂まるゝといふ。

夫君は現に神奈川縣警察部衛生課に勤務中二男一女あり、長男邦雄氏は現住所に於て「耳鼻咽喉科」を次男數衛氏は同市港町に於て「外科花柳病科」を開業し共に堂々門戸を張り、同嬢は日本郵船會社一等運轉士某氏に嫁し孫君男女五人あり、大正三年同市元町より本牧町樞要の地に新築移轉せらる。

（現住所横濱市中區本牧町池田二二六九番地）

正美古流花道教授
家元目代幹事長
翠松庵　山田嘯月女史

山田嘯月女史

女史姓中山名は安子、父は彌左衛門、母はリン子、明治十七年三月横濱市元町に生る、生家は代々米穀問屋にして俗に「石倉」の稱あり、該地は開港當時は未だ一漁村にして最初に壯大なる石庫を建築せられたるを以て此稱ありといふ父君は慈善家を以て聞ゆ。女史は幼時より聰明慧智而も容姿艶麗にして元町小町と稱へられた幼にして兩親を失ひ祖母君の力を得て家政を經營し、令弟妹の教育や家事の整理に努められ、令弟の世に及び家運も大に確立するに至つた。

花道を家元山松庵晩翠先生に學び。明治三十八年會頭の免許を得熱誠家元を補佐して同流の隆盛と和平に盡瘁し目下目代幹事長の榮職に在り、目代中の第一人者である。明治三十九年山田政治氏に嫁す氏はもと銀行家にして經濟に通曉し敏腕にして機智に富んだ名望家である。諸藝に堪能にして就中實生流謠曲、仕舞、鼓、大鼓等は其の蘊奥を究む、二男三女あり家庭圓滿にして同家を訪づる者は樂園に遊ぶが如く其の溫情と愉快の感は永く腦裡に銘すといふ。女史は裁縫、東流二絃琴、和歌、長唄等に堪能である。

正美古流花道教授
家元目代幹事
松嘯庵　佐藤白喜女史

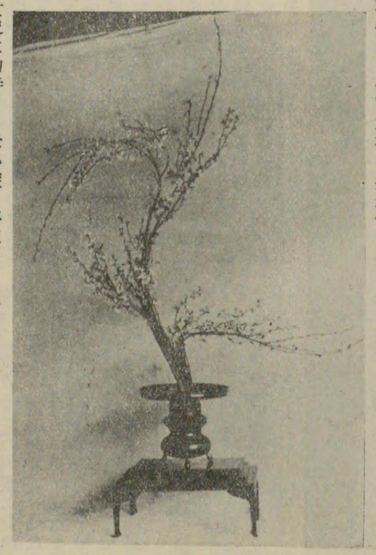
佐藤白喜女史

女史の父は丹澤政吉、母は幸子明治二十五年六月横濱市元町に生る。

元町小學校卒業後同市英和女學校に入學の傍正美古流家元山松庵晩翠先生に師事して花道幷に茶道を研修し熱誠其の奥儀を究め明治四十一年會頭に昇進し教授を免許された、同四十五年目代に昇格家元幹事を兼ね忠實に花務に盡瘁せられる。

明治四十五年佐藤半治氏に嫁し夙に良妻賢母の譽あり、資性溫厚篤實、加ふるに技能老練にして良く門生の教養に努められ從つて其の門に集るもの多しといふ。

正美古流花道教授
家元目代幹事
巖松庵　富井秋月女史



富井秋月女史作（櫻）

女史名は雪子、明治九年横濱市元町に生る。元町小學校卒業後捜眞女學校に學び、花道及び茶道は正美古流家元山松庵晩翠先生に就て研修し目代師範格に昇進せらるされた、就中謠曲、幸流小鼓、長唄等に浸頭し技藝の進歩と共に初一念を貫徹せられたるは輕佻浮薄なる世に於て實に稀に見るの女傑といふべきである。

華道茶道は女史が唯一の慰安と修養法にて好んで松を愛翫するといふ其の花號に因みたる秋月高く清く巖頭に蟠屈せる苔蒸せる松を女史は幼時より孝心深く將來圓滿なる家庭の平和を攪亂せられん事を憂慮し獨身生活を營み母に孝養を盡すを畢生の本務なりと覺悟し、あらゆる誘惑に對抗し固き信念を以て專ら高尚なる趣味に精進照すの風趣は女史が性格を偲ぶに足るのである。

女史は目代職として家元を補佐し幹事として能く其の任を盡せる社中同人の常に敬服稱讃して措かざる所であると。

正美古流花道教授
家元目代幹事
岩松庵 莇 白濱女史

女史名は濱子父は文次郎、母はとら子、明治二十五年一月横濱市松影町に生る。普通教育を卒りて後、明治四十年より正美古流花道家元山松庵先生の門に入り專ら花道及び茶道を研修し技術の進歩著しく其の眞髓を究め家元目代の榮職に昇格し教授として子弟を教導すること多年其の熱心と懇切にして技能の優秀なるは其の門下に集まるもの多きを以て下知すべく、多年一貫して斯道の研鑽に專念精進せるは多く其の匹儔を見ざる所である。

女史の性穩和清楚にして氣品高く好んで水仙を賞翫す、蓋し仙花の香氣高からざるも能く霜雪に耐え諸花に魁け清楚にして犯すべからざるは女史の性格と能く相通ずるものある所以であらう。

明治四十五年夫君を迎へ一男を擧ぐ家庭の圓滿にして多幸なる人の羨望する所である。

女史はまた裁縫、刺繍、編物等にも堪能である。

（現住横濱市保土ヶ谷町宮田町一二〇二番地）

莇 白濱女史

正美古流花道教授
家元目代
峰松庵 石尾翠江女史

女史名は松枝子父は山下吉太郎母はしん子、明治三十七年六月横濱市本牧町に生る。本牧小學校を經て横濱フェリス女學校を卒業し次で同校特科英語商業科を卒業したる新進の才女である。

大正十二年三月石尾家に嫁す。女史は幼時より風流の道を好み正美古流花道家元山松庵先生に就て花道及び茶道を學び免許皆傳を受け累進して家元目代に昇格し、日下鋭意子弟の教養に勉勵しつゝあり女史は同流師範者中の最年少者である、而も其の蘊蓄と頴敏なる手腕とは其の門下に集まるもの屈指の暇なきを以ても窺知される。夫君及び兩親一家擧て風流を好み女史をして今日あらしめたるに與つて力あるものであらう。

女史は英語に精通し而も多年習得せし學業を一朝にして斷念し、專心一意身を斯道の研鑽に委ねしは優美にして精神教育の一端たる我邦獨特の美術を後世に傳ふる婦人に最も相應しい女子教育を畢生の事業とするのが優雅なる女史の性格に適するを自覺したる結果であらう。

女史家富裕にして圓滿和平後顧の憂なく、加ふるに博識多才新進の智識と燃ゆるが如き熱誠ある研究とは必らずや將來一大發展を期待されるのである。

石尾翠江女史

正美古流花道教授
家元目代幹事
松籟庵 淺香幽香女史

女史は相州小田原に生る、舊姓安藤たき子、横濱市へ移住後正美古流花道家元山松庵山下晩翠先生に就て花道及び茶道を研修すること多年、技大に進み大正六年總會頭の免許を受け次いで累進して重要職役家元目代幹事に擧げらる。是より先「耳鼻咽喉科」醫師淺香一忠氏に嫁す。夫君また風流趣味に富み造詣深し、盆栽及び寫眞術は殊に堪能にして其技大に觀るべきものありて名聲同好者間に聞ゆ。

女史また夫君の感化により斯道の發達進歩著しく、殊に好んで投入花を生け自然の花卉に理想の技巧を加へ花器と調和して或は豪壯なる松、颯爽なる紅葉、清楚なる野梅、艶麗なる牡丹、或は深山溪谷澤邊等遠近の風趣を工夫せらゝは即ち夫君の趣味より剛致したる理想の實現ならんか。

女史はまた家政に通曉し家運をして今日あらしめたる功績を賞讃する人あれば常に謙遜してこは自分の力に非ずして花道及び茶道より體得したる賜物なりと答ふ。繁雜多忙なる家庭を主宰調理しても修養怠らず斯道の熱誠なる研鑽者なるは實に稀に見る所なり女史は又長唄に堪能なりと。

淺香幽香女史作（蕚）

正美古流花道教授
家元總會頭
宗松庵 長澤翠澄女史

女史名はスミ子、父は横濱市本町通に舊高野屋と稱する有名なる旅舘を經營せられたる舘主の君、母はテウ子、明治二十七年横濱市本牧町に生る。

大正元年普通教育を卒へ戸板裁縫女學校及び東京技藝女學校を卒業の後正美古流家元山松庵晩翠先生に師事して花道及び茶道を研修の傍裁縫及び技藝家塾を開き熱心と誠意を以て專ら門弟を指導せられる。女史はまた小笠原流宗家より諸禮式の免許を受け、春秋二回生徒の手に成りし裁縫、刺繍、造花生花、盛花等を陳列し父兄知友を招待して展觀に供し諸禮式の溫習をなせし事數年なりしが、大震災後東京府下大森女學校に職を奉じ引續き大森高等女學校に移り教鞭を執り生花をも兼ね教授し大に其蘊蓄を發揮しつゝある。

女史は常にいふ「草木の雨露の惠によりて開花結實するは恰も人の君父師の大恩を受けて生育發達すると等し」と花技の妙神に入る蓋し女史が聰明にして優美なる心鏡の反影といふべきであらう。

長澤翠澄女史

正美古流花道家元總會頭幹事
青松庵 岡本翠甫女史

女史名は喜美子父は松三郎、母は以久子、明治十四年横濱市野毛町に生る。家代々質商を業とす、後居を元町に移し夫君甲子之助氏を迎へ三男四女あり。

大正七年一月夫君死去後孤閨を守りて能く多くの子女幷に使用人を抱擁し家業を繼續經營について苦心奮闘其の本分を全ふし、子弟の教養に專念活動し家業從つて繁榮し子女また出藍の譽ありて長女は既に縣立高等女學校卒業の後良家に嫁し、長男は商科大學出身にて日清製粉會社に勤務中である。女史資性快潤穎敏恰も竹を割りたるが如く事物に拘泥せず果斷決行男子を凌ぐの概がある、知人等常に其勇氣と德を賞する。

正美古流花道家元山松庵先生に就て花道を研修し家元幹事として斯道の爲に盡瘁せらる。其の他謠曲、仕舞、俳句等を修得し行くとして可ならざるはない。

女史は梅花を愛好し殊に其の老木に趣致ありとして季節毎に丹精し早期より愛翫せらる。梅は花の魁として能く風雪を凌ぎ馥郁たる香氣を放つ女史の心情と一點相通ずるものある爲であらう。

大震災後居を同市本牧町十二天に移し子女教養の傍風月を友として悠々自適心身の靜養に努めて居られる。

岡本翠甫女史

正美古流花道教授
家元會頭
友松庵 愛澤翠湖女史

女史名は久子、父は實業家堀江參二氏、明治三十三年横濱市本牧町に生る。横濱共立女學校の出身である。

幼時より好んで琴曲を學び長ずるに及んで花道に趣味を持ち正美古流家元山松庵先生に師事し熱心研學技術の進歩衆を抽き累進して家元會頭に推擧せらる。

女史は草木の出性研究に頗る趣味を持ち多忙の中に園藝に從事し播種より成育開花結實の狀態を實驗して生花の資に供し研究の材料とせるは其技巧を助長すること甚大にして其の樂みもまた他の想像に餘るものあり、その他歌道に造詣深く物に觸れ時に感じてにをはを列ね其の感想を詠するは花道の趣味と良き對照である。女史の祖父君堀江浦太郎氏は歌人海上氏の門人である、其の血統の然らしむる所であらう、父君もまた歌道に堪能なりと。

女史は斯道にありて良師範たるは言ふ迄もなく其の家政を調理して良妻たり朋友に信義厚く、新しい頭腦の持主にして而も國粹を尊重し其の眞諦を究明して怠らざるは蓋し女史が心鏡の反影ともいふべく奥床しき極みである。

愛澤翠湖女史

華道允中流第七世家元
嗜山樓 山田如秋女史

女史は明治三十一年十一月十四日東京府下千住町に生まる。本名を秋子といひ、八歳にして嗜山樓山田如水氏の養女となり、靜岡縣三島高等女學校を卒業す。幼少の頃より父如水氏について華道及び細川流盆石を學び、出藍の譽があつた。如水氏晩年病氣の故を以て女史の母かね子(花號如月)に家元を讓り第六世をつがしむ。昭和二年七月父歿するに及び、遺言により女史は第七世家元を繼承したのである。

女史の父君嗜山樓如水氏は允中流家元第五世にして、姓山田、別號を潭雲齋と稱した、初め東京府八王子宏道流松雲齋梅本洞孝師に入門し、白雲齋如水の號を受け、後五ヶ年奥儀を極め、明治二十一年教授免許、廿二年四月允中流家元を繼承し、其後伊豆に轉住、明治三十六年以來三島高等女學校、駿東高等女學校、沼津女學校、大芝女學校等に前後數十年間華道教授を囑託せられて、子弟の教導に當り又渡井菊坪師について細川流の盆石を學び教授を允許され、華道盆石とも幾多の高弟を出した人で、又伊豆韮山光照寺住職として檀大僧都の位にあり、本名山田友愍と稱した。

後昭和二年再び東京に出で市外幡ケ谷に幽居して老後を養ひつゝあつたが、昭和二年七月病んで歿す。その養成したる門人中、花號を授與したるもの二千餘人に達すといふ。

因に允中流の系譜を按ずるに、流祖梨雲齋望月義想、流師は練雲齋桐谷鳥習、開祖潭雲齋相澤伴主にして、開祖は義想の高弟鳥習の直弟、雅號を潭雲相澤登毛奴之と付囑せられ、其家は武州關戸村に在つて代々醫を業とし、通稱を相澤澤左衛門と稱した。花道に遊ぶこと五十餘年、天保十二年齡七十四歳に至り感ずる所あり、允中流を公稱し、號を改めて嗜山樓と稱した。開祖歿後源三郎、梅三代々相續して晩年如秋女史の父山田如水氏が家元を繼承するに至つたのである。

女史は現今華道の修業が多く上流士女の間に限られてゐるの傾きあるを慨し、これを一般家庭の子女に普く修得せしむるまで普及させなければならぬと主張し、現に自宅を開放して、附近子女のため、花代を負擔して生花を教授しつゝある位である。

女史が興味を感ずる花は、庭木などを切りとつて生けることで、つまり荒木をコナすことに趣味を有つてゐる。花屋の花よりはその方が遙かに面白味があるといつてゐる。

家庭は母堂かね、夫君常順、長女君子の四人暮しで母堂は勿論のこと、夫君も華道に趣味を有し、一家擧つて華道のために精進しつゝある。

(住所東京市外代々幡町幡ケ谷八〇三清岸寺内)

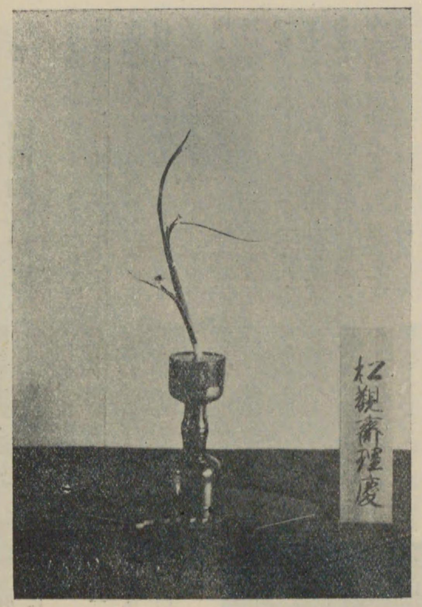
山田如秋女史

山田如秋女史作

古流生花教授
表千家茶道教授
松東流盛花投入教授
松觀齋

杉本理慶女史

女史は明治十七年名古屋市に生まる。幼少の頃より名古屋市にお



杉本理慶女史作（水仙）

いて松月堂古流を學び、茶道は表千家を修め、後東京に出でて古流華道を二世古流家元松茂齋宇田川理登師に學び、師の歿後その高弟松若齋木村理竹師に學び、明治四十五年三月師範免許を得て今日に至つた。

又盛花投入を松東流家元江夏理榮師につきて學び、爾來熱心子弟の養成に努力し、今日までに數多の門弟を出してゐる。

杉本理慶女史

（住所東京市淺草區聖天町五八）

遠州古流華道第三世家元
藤原流盛花投入家元
表千家茶道教授
秋香庵

加藤一英氏

加藤一英氏

氏は元治元年六月四日東京市日本橋區藥研堀に生まる。本名を寅一郎といふ。氏の祖先は豐臣家の家臣加藤縫之助義正より出で、野州唐澤山落城の際より町家となり後十六代相繼ぎて氏の代となつたのである。

氏の父丹三氏は漢學塾を開いて子弟を教養して居たので、氏は幼少より父について和漢の學を修む華道は初め千松庵について遠州流を修め、又如雪庵に就て庸軒流を究む。後第二世秋香庵に就き遠州古流に入り、師歿後暫く師範代として宗家を補佐せるにより、讓られて第三世秋香庵を繼承するに至つたのである。

抑、遠州古流の起祖は、小堀遠州より今井宗晋が分れて一派を起せし際又別に分れたものが遠州古流にして、流名の由來は當時小堀遠州を『新』遠州に對して混同するを恐れ古遠州と稱したので、この外に又一派を創立したのであるから、之等の名稱を區分し得るように遠州古流と稱するに至つたものである。第一世を秋月庵一太坊と稱し、二世より秋香庵一英を相續して氏に至つた。

而して同流花型の特長として說く所を見るに、新遠州流が極端なる曲線美を採用して居つたので、この曲線美を或程度まで古遠州に加味して、從來の小堀遠州に應用したる點にありと云ふにあつて、要するに小堀遠州に今井宗晋の長所と美點とを加味工夫せるものが遠州古流であると、言ひ得るのである。

氏が華道に對する抱負の一端を窺ふに、曰く『由來生花は東洋哲學を土臺として種々の名稱を用いてゐるが遠州古流にては國體觀念を標榜し、相寄る花型は國と家との姿にして、各枝それ〴〵大義名分の下に相倚り相和し、こゝに一の型態が組織されてゐるものとしてゐる。故に何處にも孤立孤存の枝葉が存在して居るものでないと斷言するのみならず、各枝を啻に天地人眞行草とのみ見ずして之を君臣父子夫婦眷族の關係に結びつけ、この觀念に出發しこの見解に卽してこそ眞の生花は活け得らるゝものである。』と以てその透徹せる識見を窺ふべきである。氏又常て『人生須らく生花の如かるべし一度水を揚げて生々發々の意氣天に冲するが如き過程を經れば死すとも亦悔なし』と唱導せしことあり、氏は常に斯くの如き人生觀を抱いてゐる。

加藤一英氏作（金雀花）

氏が得意とする花は豪宕の態に於ては大物活け、又纖細水仙の如き葉蘭の如きにして、特に盛花に於ては一家の見を有し當代未だ盛花を目して異端視せる頃既に堂々兩國伊勢平に於ける華道大會の際之を試みて世の批判を乞うたことがある。現に藤原流家元として氣品ある手法を示してゐる。

其氏は明治大正に亘り各回、博覽會に於て賞を受くること三回、明治聖統御座所の御花は帝東北の野に於て大演習を御覽の砲上野停車場御荷ひ、榮の光榮を皇太后陛下に奉るの御花を二回まで常に謹挿するのおいては二、又女子高等師範に謹挿せる榮を荷つた玉座に供し奉るも謹挿の榮を荷つた

氏は又素行庵古河歸白師につき表千家茶道を究め、現に教授し、又生寫、遠近難

氏が華道に對する抱負の一端を窺ふに、曰く『由來生花は東洋哲學を土臺として種々の名稱を用いてゐるが遠州古流にては國體觀念を標榜し、相寄る花型は國と家との姿にして、各枝それ〴〵大義名分の下に相倚り相和し、こゝに一の型態が組織されてゐるものとしてゐる。故に何處にも孤立孤存の枝葉が存在して居るものでないと斷言するのみならず、各枝を啻に天地人眞行草とのみ見ずして之を君臣父子夫婦眷族の關係に結びつけ、この觀念に出發しこの見解に卽してこそ眞の生花は活け得らるゝものである。』と以てその透徹せる識見を窺ふべきである。氏又常て『人生須らく生花の如かるべし一度水を揚げて生々發々の意氣天に冲するが如き過程を經れば死すとも亦悔なし』と唱導せしことあり、氏は常に斯くの如き人生觀を抱いてゐる。

氏が得意とする花は豪宕の態に於ては大物活け、又纖細水仙の如き葉蘭の如きにして、特に盛花に

加藤一英氏作（金雀花）

女子職業學校補師として御茶ノ水高女師範學校及府立第一高等女子師範學校教授として熱心子弟の華道の養成に努力してゐる。

家庭は夫人喜和子と夫人は現に華道の道に二男三女あり、長男義一は山口高東京齒科醫專に次男英治君は南の補佐に當り、校に在學中である。

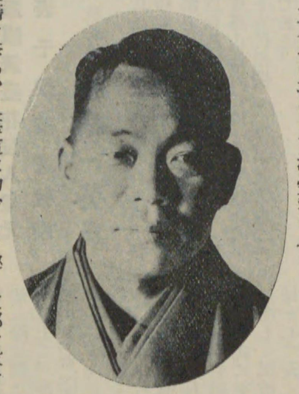
（住所東京市淺草區七軒町四）

遠州古流華道教授
藤原流盛花投入教授

春香庵　北見一貫氏

氏は明治八年九月十七日東京市下谷區南稲荷町に生まる。本名を常吉といふ。祖先は佐渡相川に發し、天保十一年祖父喜代松氏東京に出で、藤細工師を以て身を立て、養嗣子金太郎氏を迎ふ。一貫氏は卽ち金太郎氏の嫡男である。父君金太郎氏は後に入道して覺心と稱し、家務を一貫氏に讓り、悠々閑寂境に修行する所あつたが昭和二年十二月八十二歳を以て寂す。

一貫氏は幼にして漢學塾に入り漢籍を修め、又華道は幼少より趣味を有し、修業の志あり、氏が二十歳の時、父君は氏に自ら欲する道によりて立てと理解ある許しを與へたので、氏は隨芳庵一種師の門に入り父の業を助くる傍ら斯道を勵むこと八年にして、師より芳月亭一常の雅號を受け益々華道に精進、同年夫人はる子を迎へ、その内助を得て玆に華道を以て身を立て、專心斯道を研磨すること四年、而かも氏の熱性は尙ほ充分なりとせず、再び師の家元たる秋香庵加藤一英師の門に入りて更に修業すること四年にして、家元より春香庵一貫の雅號を授けられ、大正十一年家元補佐職に擧げられ大正十五年家元支部を設けらるゝに當り、擢んでられて共東都支部長の重職に擧げらるゝに至つた。



北見一貫氏

氏は專ら師の流風を祖述弘通するに努むることを以て自己の本務とし、殊更ら自己の技術を誇ることを好まず、師の堅實なる流風を持して邁進し、子弟の敎導に專心努力してゐる。その門弟を敎ふるに當つては常に『生花に對する理を究明するの前先づ須らく自然そのものを熟視し、然る後その研究によつて體得せらるゝにおいて眞の生花は始めて生けらるゝ也』と說いてゐる。蓋し出生の研究は生花の本義に入るの道程なりといふにある。

氏は材料の選擇に妙を得、老木生込を得意とし、その社中より敎授を以て立つもの多數輩出せしめ又現に二三の出張所を有して斯道の普及に熱心してゐる。

氏は大正、平和兩度の博覽會には得意の挿花を出陳して會長より賞狀を授與され、大に面目を施した。

家庭はは子夫人との間に一男一女あり長女滕子孃は表千家茶道を唯香庵是好師について學び既に是芳の雅號を受け、又父君の血を享けて華道にも一見識を有してゐる。

（住所東京市下谷區中根岸八八）

北見一貫氏作（驚鵬）

遠州古流華道教授
藤原流盛花投入教授
石州流茶道教授

秋芳庵　堀一桂氏

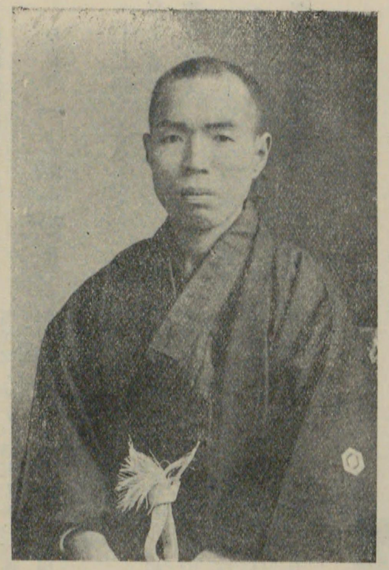
氏は明治二十三年二月十二日東京市麻布區飯倉町六丁目に生まる幼少の頃より名愈昌晴氏の門に入り學び、只管斯道を研究する所あつた。

大正三年、遠州古流家元會頭秋芳庵一弘氏の養嗣子となり、華道及び茶道の極意を授けられ、養父の歿後家元より新潟縣支部長家元目代に補せられ、爾來門下の敎養に熱心努力し、幾多の秀才を輩出せしめ、今日に至つたのである。

抑々堀氏の祖先は寛永年間山城淨甫に始まり、江戸に住居し湯釜、梵鐘の鑄造に堪能であつた。爾來代々鑄金を業とし、天保年間越後國地藏堂に移住し、氏の養父は山城家九代目にして鑄金銘を淨弘として鑄金の業を營んでゐる。

氏が得意とする花はカキツ菖蒲草物投入れ等にして、茶道は石州流を學びて、その薀奧をきはめ、又書畫骨董を愛し、古器物の鑑識に堪能である。

家庭は夫人との間に四男あり、頗る圓滿の評がある。（住所新潟縣西蒲原郡地藏堂町）



堀一桂氏

堀一桂氏作（燕子花）